

ガンダムビルドファイターズF

滝つぼキリコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

快哉が飛び交い、模型が空想の世界で火花を散らす。

国境という垣根を越えて世界中が熱狂し、数多のビルダーとファイターが自分のガンプラで競い合う、戦いの舞台——ガンプラバトル。

その本場・日本で開催される全日本ガンプラバトル選手権では全国の中高生達が集い、その頂点を目指して激戦が繰り広げられている。

そんな熾烈極まる世界に小さな一歩を踏み出した、一人の少女。

英志学園高等部一年生のキンジョウ・ホウカは、幼馴染であるカトー・トモヒサの誘いを受け、チームメンバーとして選手権へ参加することになった。

バトルの中で数奇な出会いを重ね、少女は仲間達と共に大きく成長していく。

青春を謳歌する子供たち。

きらめく粒子が導く先に、何を見出すか。

ガンプラバトルが世に広まって20年。

一つの物語が、花—F—を開く——

※キャラクターイラストはガンプラ編にあります。

目次

1幕・選手権編

Act.	01	『月に叢雲、花に風』	1
Act.	02	『通常のグーンの三倍の速さ』	33
Act.	03	『先陣 — バンガード』	63
Act.	04	『錦上花を添うⅠ』	90
Act.	05	『錦上花を添うⅡ』	108
Act.	06	『朗々、天照す閃光!Ⅰ』	136
Act.	07	『朗々、天照す閃光!Ⅱ』	153
Act.	08	『朗々、天照す閃光!Ⅲ』	170
Act.	09	『スターブロッサム長い一日Ⅰ』	190
Act.	10	『スターブロッサム長い一日Ⅱ』	207
Act.	11	『スターブロッサム長い一日Ⅲ』	224
Act.	12	『画竜点睛Ⅰ』	239
Act.	13	『画竜点睛Ⅱ』	255
Act.	14	『遭逢、睥睨、地区予選Ⅰ』	276
Act.	15	『遭逢、睥睨、地区予選Ⅱ』	295
Act.	16	『遭逢、睥睨、地区予選Ⅲ』	313
Act.	17	『恋は思案の外Ⅰ』	326
Act.	18	『恋は思案の外Ⅱ』	344
Act.	19	『恋は思案の外Ⅲ』	356
Act.	20	『涓滴岩を穿つⅠ』	373
Act.	21	『涓滴岩を穿つⅡ』	391
Act.	22	『涓滴岩を穿つⅢ』	402
Act.	23	『灯台下暗しⅠ』	425

Act. 24 『灯台下暗しⅡ』 | 437

Act. 25 『灯台下暗しⅢ』 | 449

ガン普拉編

Gunpla. 01 【ハルジオン】 | 469

RE:Gunpla. 01 【ハルジオン・フェイク】 | 472

Gunpla. 02 【ガンダムサレナ】 | 475

RE:Gunpla. 02 【ガンダムヘリクリサム】 | 478

Gunpla. 03 【ガンダムラナンキュラス】 | 481

RE:Gunpla. 03 【ガンダムラナンキュラス改】 | 484

Gunpla. 04 【ガンダムAGE―2 バンガード】 | 487

Gunpla. 05 【カバカーリー・ヒノハカマ】 | 490

Gunpla. 06 【イクス・ルシファア―】 | 493

Gunpla. 07 【ツヴァイゼータガンダム】 | 496

Gunpla. 08 【ガンダムクロスエックス】 | 499

1幕・選手権編

Act. 01 『月に叢雲、花に風』

——バシユ！バシユ！

立て続けに発射された黄色い粒子の塊が、荒涼とした岩地を掠めながら空を切る。

その標的たる青いモビルスーツ——アデルと呼称されるモビルスーツは、背部のバーニアを噴かせて巨岩の陰に身を隠した。

直後、幾筋ものビームがアデルのいた岩場に着弾する。その地点が小さな竜巻のように砂を巻き上げ、点々と融解した。

標的を仕留め損ねた紫色のモビルスーツ——ドラドは、細長いアイセンサーを光らせる。そして、テール状のビームライフルを背部に降り畳み、アデルの隠れた岩場へと飛び立った。

掌部のビームバルカン発射口から、粒子変容効果でサーベルとして形成されたビームが飛び出る。

ドラドは、岩場の陰に飛び込んだ。

「ッ!？」

が、その寸前でビームサーベルが投擲される。

危うく、ドラドはそれをサーベルで弾いた。

間髪を入れず、アデルが巨岩の陰から飛び出し、ドラドを押し倒す。右手に構えるドツズライフルがドラドの腹部に宛がわれ、頭部前面を覆う青いカバーの奥から、ツインアイの輝きがドラドを睨みつける。

「させるかー！」

咄嗟に、ドラドがアデルを蹴り上げた。

直後、ドツズライフルのマズルから螺旋状に集束したビームが放たれる。しかし、それは標的を貫通することなく地面を穿った。

機体を横転させてドツズライフルの銃撃を回避したドラドは、翼部のスラスタを噴かしながら立ち上がり、更に地面を蹴って飛び退いた。

蹴り上げられたアデルは空中で体を起こし、バーニアを噴かせてドラドに追い縋ろうとする。

対するドラドも、再びビームサーベルを発生させて地面を蹴り込んだ。

「そこまでー」

突然、声が響き渡る。

アデルは、ドツズライフルの銃口をドラドの頭部に。

ドラドは、ビームサーベルをアデルの脇腹に。

互いに決め手となる寸前の形で凝固した。

『Over the time limit. BATTLE EN D!』

電子音声が入る、バトル終了を告げる。

すると、周囲の岩地と青空が緑色の微細な粒子となって分解していき、硬質なフィールド面が姿を現す。同時に、二人のファイターを囲っていたホログラムの操作コンソールも消滅した。

「ふー…ちよつと本気出し過ぎじゃねえか？」

少年、と呼ぶには大人びた雰囲気の子学生——カトー・トモヒサが、息を吐いてアデルを操作していた相手へと話しかける。

「え？そんなことないと思うけど」

艶やかな黒髪を二房に結び上げ、後頭部で纏めている少女——キンジョウ・ホウカは、トモヒサを見て小首を傾げた。

二人共、紺の生地が白が映える独特の制服に身を包んでいる。

「へえ、言うじゃねえか。悪いけど、オレは手加減したつもりだぜ？」

トモヒサはそう言いながらフィールドに歩み寄り、凝固するドラドをアデルから引き離れた。

「そうだよキンジョウ、スパードと言ったろう。何事も全力なのは良いが、緩急というものを学びな」

赤いジャージに袖を通さず羽織る女性教員——シマ・マリコが、流麗な黒髪を揺らしながら腕を組んでホウカを見遣る。

「ほー」

ホウカは、真っ直ぐにマリコの目を見て返事をした。

「よろしい」

それに対して深く頷くマリコ。

「…時々よお、ガンプラ部だつてことを忘れそうになるぜ」

トモヒサは生徒と教員のやりとりを見て苦笑いを浮かべた。

——ガンプラバトル。

それは、本来動くことのないガンダムのプラモデル——通称“ガン普拉”を、思いのままに動かすことのできる画期的・先進的な競技。

20年前のことである。

PPSE社と言う謎の企業が、プラスチックに反応して流体化するという粒子物質「プラススキー粒子」を発表した。同時に、プラスキー粒子の特性を応用したガンプラバトルも世に打ち出し、この競技は瞬く間に世界中へ普及していった。

これによりガンプラは空前の大ブームを巻き起こし、世界中でガンプラバトルが行われるまでに至る。

小さな企業だったPPSE社は、ガンプラバトルに関する技術の全てを独占することで、世界規模の巨大企業へと成長した。また、社が育成したガンプラを操作する選手「ガンプラファイター」や、数々のパテントを保有することで、その地位を揺るぎないものにしていった。

しかし、10年前に開催された「第7回ガンプラバトル選手権世界大会」において、プラススキー粒子が暴走するという事件が勃発。アニメに登場する「宇宙要塞ア・バオア・クー」を作り出し、会場を半壊させてしまった。

この事件は、参加していた選手達の働きによって終息したが、プラスキー粒子の生成が不可能になるという原因不明の副次被害を生んでしまう。

PPSE社側は頑なに真実を公表しようとはせず、「マシタ」と呼ばれる経営責任者が謎の失踪をするという事態も発生したことで株は暴落、倒産も危ぶまれた。

これを解決へと導いたのが、同世界大会の出場者でもある物理学者「ニルス・ニールセン」だった。

彼は、衛星軌道上のISS内ラボで粒子の独自生成に成功し、これを「新プラフスキー粒子」と名付けて発表した。

そして、件の事件によって事実上の倒産に追い込まれていたPPSE社も、彼のスポンサーである「ヤジマ商事」が技術やパテントなどを引き継ぐことで同商事の傘下となり、倒産の危機は回避される。

ガンダムという作品の魅力だけでなく、こうした紆余曲折を経て、ガン普拉バトルは今日の人気を得ているのだ。

それから10年。

新たな節目の年に、新世代の子供達が、青き粒子の中でその花を咲く――

「具合はどうだい、キンジョウ?」

羽織るジャージの下は白いシャツにタイトなスカートという、いかにも女性教師然としたマリコが、横に立って話す。

「…射撃系はまだ戸惑ってますけど、何とか」

「うん、その内慣れるだろうさ。見込んだ通りならね」

そう言って、その手がホウカの肩を叩いた。

学校法人私立英志学園。

華々しい功績を残してきた、名立たる著名人達の母校として知られる名門である。その創設は古く明治にまで遡り、文明開化の夜明けと時を同じくして、新たな世代の教育に心血を注いできた歴史を持つ。

後に、外国から流入してきた競技スポーツ等の体育系を主眼に置くようになるが、変わらず方々に手を伸ばした教育根幹は揺らいでいない。また、学部も高等部と大学部に分けられ、生徒達の希望によって自由な進路選択ができることも特徴の一つであった。

キンジョウ・ホウカとカトー・トモヒサも、この英志学園で学んでいる生徒である。

この日は、平日の火曜日。ガン普拉部員である二人は、バトルシステムが設置されているログキャビンでマリコの監督の下、模擬戦をしていた。

バトルシステムが狭い部室に収まらないという理由らしく、学園側の配慮として、今は使われていないログキャビンを提供されている（かれこれ三年は使い込んでいる、とトモヒサの談）。

木造の香りが漂う中で模擬戦を終え、三人は部室に戻っていた。

「この間のゼフィランサスは酷かったよなあ、武装全部誤爆して挙げ句にや殴り合いときたもんだ」

先程使用していたドラドを棚のケースへ収納しながら、トモヒサがケラケラと笑う。

「むう……この間の話はもうやめてって言ったでしょ？」

ホウカは頬を膨らませた。

一昨日の醜態を引き合いに出すのは、もうやめてほしいと念を押しただけだった。

彼の愛機が使ったビームサーベルに押し切られ、バズーカやミサイルポッドを装備したゼフィランサスを誤爆させてしまったことを思い出す。

砲撃戦の練習だったが、あれは練習にすらなっていなかった。

「カトー、あんたもだよ。先を予測しないと、さつきみたいに奇襲されてお終いだ」

思い出し笑いか、またくすくす笑い出すトモヒサにマリコが叱責を投げた。

トモヒサは咳払いを一つ、二人に向き直る。

「了解っス。しかしですよ、オレの領分は援護砲撃。ドラドじゃ、そもそも機体特性が違い過ぎなんですよ」

「キンジョウは慣れない機体でかつ徒手を使わずに白兵戦を遵守した上であの動きだったな」

「……返えす言葉もねっス」

マリコの的確な指摘に、トモヒサは二の句が告げないようである。

ふと、マリコが腕時計を確認した。

「じゃあ、私は職員会議があるから。月末の練習試合に備えて、準備しておくんだよ？」

時間を確認したマリコは、二人に念を押しして踵を返す。

「はい、先生」

「ういッス」

「よろしい」

応じる二人へと、腕を組んで頷き返すマリコ。そして赤いジャージの袖を翻し、部室を後にした。

英志学園のガンプラ部は、三年前に設立されたばかりである。

部員は四名。その内訳は、一年生のホウカ、二年生がトモヒサともう一人。そして三年生は居らず、大学部の生徒が一人いるのだ。

しかし、この大学部の部員というのは、現在のところ殆ど部員として活動することはないらしく、実質的な最年長であるトモヒサが部長を勤めている。

今や、世界中を席卷するほどの人気を誇っているガンプラバトルの部活動にしては、極端に部員が少ないとホウカは思っていた。しかし、自分を含めたこの学園の生徒達を考えると、ガンプラ部に入部する人が少ないのも頷けるか。

「アデルはどうだったよ？お前、確か好きだったよな」

収納棚に向かっていたトモヒサが、あちこちからかき集めてきたパーツ類の収納されるケースを持ち出してくる。

テーブルを挟んで、ホウカの正面の椅子に腰かけた。

「うん。色が綺麗だし、シンプルで使いやすいよ」

テーブルに置かれたアデルの頭を、指先で触る。

説明書通りの素組みに、スミ入れと半光沢のトップコートのみで仕上げられた、シンプルなガンプラである。青いカラーリングの、所謂「ディーヴァカラー」版だ。

その右手には、簡素な作りの、故に洗練されたデザインであるショートバレルのビームライフルが握られている。腕に固定されるような大きな台尻が目立つ。

「このドツズライフル、手応えは良いんだけど、ちよつと難しい気もするね」

「まあ、な。確かにお前のスタイルは射撃戦向きじゃねえよな」

トモヒサは言いながら、相槌を打つ。

確かに、アデルの持つドツズライフルと呼ばれるタイプは、他にない手応えがあるのを理解できる。銃身が台尻によって腕に固定されることで射撃が安定し、「DODS^{ドツズ}効果」という独自の設定により貫通力を強化させた特殊なビームは、重みのある語感を裏切らない威力を發揮した。

とは言っても、慣れるにはもう暫くの間と経験を要するだろう。おもむろに、トモヒサはケースを開いてその中をまさぐった。そこからパーツを一つ取り出し、こちらへ差し出す。

「なら、こんなんはどうだ？ダブルオーガンダムの武器なんだが、いわゆるガンブレイドってヤツ」

「あ、何となくわかるかも」

ホウカはそれを受け取ると、手元で動かしてみた。

ダブルオーガンダムは知っている。以前に視聴したアニメの戦闘シーンはとても印象的であり、射撃より実剣とビームサーベル類で接近戦をする戦闘スタイルは興味を唆った。

「これ、使ってみたいな」

「まあ物は試しだ、この辺の武器持って、この後やらねえか？」

親指を立てた拳をクイクイと振って、廊下の方を示すトモヒサ。

ホウカは頷きかけたが、「あつ」と言っただけで立ち上がった。

「ごめん、この後乱取があるんだった」

ばつの悪そうにトモヒサを見て、両手を合わせる。

「あー、そうか。しゃーなしだ。また今度にしようぜ」

しかし、トモヒサは頷いて笑いかけた。

「うん、ほんとにごめんね」

「いいっていいって、お前に合いそうなモン考えといてやるから、部活に専念してこいよ」

手をひらひらさせるトモヒサ。

ホウカは頷くと、白地に青いラインが映えるボストンバッグを肩にかけた。

「じゃあ行ってくるね、トモにい」

「ぶっ……その呼び方はやめろって何度も……！」

思わず噴出するトモヒサ。こちらを見遣ろうとするが、ホウカは既にドアの向こうだった。

「…ったく、もうそんな呼び合いする歳じゃねえだろ」

ホウカはトモヒサの嘆息を耳にしながら、くすくすと笑う。そして部室を後にしながら、その表情を思い浮かべる。

からかわれた、さっきのお返しだ。

.....

白い胴衣に紺の袴を着る生徒達が、それぞれ帰宅の準備を始める。

この道場は、古武道部の活動の場である。ホウカも、周りと同じように帰宅の準備を始めた。

ホウカにとって、本来はこちらがメインの部活動である。

つまり、掛け持ちでガンプラ部に入学しているのだった。

「ふう…」

薄らと額に浮かぶ汗を拭うホウカ。

中学校三年生の時である。小さい頃から習っているとある古武術の経験を活かし、全国古武道演武大会に出場したのが全ての始まりだった。

女子個人戦。披露したのは、主に柔術を中心とした護身技。さらに、習っていた古武術の技も幾つか絡めた。すると、それらが審査員達の興味を大変引いたようであり、流動的な動作の切れや淀みのない体捌きだと評価され、判定に大きく反映されたのだ。

結果、栄えある舞台上で優勝を勝ち取ったのが、去年の夏のことである。

そのニュースは、本来大きな話題として古武道を取り上げることのないスポーツ誌でも、大きなニュースとして一面を飾ることとなった。それまで明確な希望もなく進路に悩んでいたホウカは、不意にその道が明るく照らされたのだ。

それと時を同じくして、古武道を強化し始めていた英志学園にも報が届き、半ばヘッドハンティングのような形で英志学園への進学を果

たした。

人生、何が起こるか分からないものだ。

「どうだ、調子は？シマ先生から聞いたぞ、あっちでも上手いことやっ
てるみたいじゃないか」

スポーツドリンクを飲んでいたホウカに、胴着の上からでもはつき
りと見て取れる筋肉質な顧問教師―イワクニ・ブライアンが話しかけ
てくる。

ドリンクのキャップを閉めて、彼に向き直った。

「はい、何とか。今は色々と教えてもらっているところですよ」

「それは何よりだ。シマ先生は厳しいだろう？あれで社会史なんだか
らなあ」

そう言つて快活に笑うブライアン。幅広の顔面がさらに大きく見
えるようだ。

「でも、的確に助言を下さるので助かってますよ」

「その分、ガードは固いけどな！」

またも声高に笑う。ホウカも思わず笑みを溢した。

「ま、部活に支障がなけりや俺は問題ないと思つてるからな。教頭先
生が小うるさいと思うが、あんま気にするな」

それじゃあな、と残してブライアンは男子学生達の元へ歩いてい
く。

その短く刈り込まれた金髪と広い背中を見ながら、頭を下げた。

この部活には男性と女性、二人の顧問がいる。しかし、女子部員を
担当しているカンベ・アリスが会議に出ているため、男性顧問のブラ
イアンが今日の古武道部全体を監督していた。

部活動を掛け持つ自分へ、二人の顧問はこうして気をかけてくれて
いる。ブライアンの言う通り、教頭先生の視線は痛い部分もあるが、
気にしないように心がけていた。

その後、胴着から制服に着替えたホウカは、道場を後にする。

広大な敷地を保有する英志学園には、10にも及ぶ施設がある。体
育館も第1く第3と分けられており、充実した施設が完備される。

通い詰める道場は高等部校舎に隣接する3号館にあり、こちらでも申し分のない広さだ。ガンプラ部はそこから最も離れている5号館にあり、使われていない空き部屋とログキャビンを利用していた。

3号館と校舎を繋ぐ渡り廊下を、ホウカは歩く。

その中程にあるグラウンドへの出口の柱に、トモヒサが背を預けているのを見付けた。

「よお」

トモヒサも気付いたようで、こちらへ向かって右手を上げる。

「待つててくれたの?」

「待つてて程でもねえよ。どうせオレも、キリのいい所まで終わらせるつもりだったしな」

時計の針は、既に18時を回っていた。

夏至には早いですが、五月の上旬のこの時間はまだ明るい。しかし帰路を歩く内には、日も暮れてしまうだろう。

「まあ、部の先輩としての責任ってやつ?」

ハハ、と軽く笑い飛ばしながら革の鞆を肩に回し、渡り廊下を出てトモヒサが先導する。

「えー?トモにいがー?」

ホウカも笑いながら、トモヒサに続いてグラウンドに出る。

ちよつとした離着陸場ほどもあるグラウンドに、生徒の姿はなかった。運動部が多くある学園だが、この時間になればほとんどの生徒が帰宅している。

「道場に入ればよかったのに」

トモヒサの右側を、少し間を空けて歩く。

校舎は小高い丘に位置するため、遠く霞んだ山々の裾野がグラウンドから見通せた。

「ん?ああ:すぐ出てくるだろうって思ってたな。オレは部外者だから、そう出たり入ったりは良くねえだろ?」

「大丈夫だと思うけどなあ」

「:再確認するようだが、オレは一応ガンプラ部の部長なんだぞ?」

小首を傾げるホウカに、トモヒサが呆れたように言った。

そうしている内にグラウンドの幅広いコンクリートの階段を降り、長い舗道に出る。

何組かの生徒を見かけるが、その数もまばらである。

「そうだ、選手権用の機体なんだけだよ」

「うん」

舗道を歩きながら、トモヒサが話題を振ってくる。

「ファンネル…つまり、遠隔武器みたいなモン。そういうのはどうだ？」

「ファンネル…あ、AGE―FXにもあったよね？」

ホウカは、少しの間考えてから思い出したように人差し指を立てる。

トモヒサも応じて頷いた。

「ああそうだ。ファンネルつつつても細かく分けるとややこしいんだが…まあ、今はそれでいい」

と、トモヒサは断りを入れ、ポケットからスマートフォンを取り出す。

そして、一枚の写真をホウカに見せた。

「これはな、Hi―llガンダムヴレイブって言って、あの三代目メイジンが子供の頃に使っていたガンプラだ」

その写真には、白と青の映える機体が写っていた。

宇宙のフィールドだろう、星が散りばめられた背景を背にして、四枚の板状ユニットが円を描いて本体の周りに滞空している。

ホウカは、スマートフォン画面に映る写真を覗き込んだ。

「綺麗…」

機体の周囲に整列する板――フィン・ファンネルと、炸裂するビームの輝きに思わず魅入る。

その様子を見てか、トモヒサも頷く。

「さすがメイジン・カワグチってとこだよな。俺じゃこんな魅せるよ
うな戦い方はできねえよ」

そうして、トモヒサはスマートフォンを制服の上着のポケットに戻した。

「今見てもらったやつはフィン・ファンネルだ。AGE―FXのとは毛色が違うが、オールレンジ兵器という点じゃ大きな違いはねえ」

「私に使えるかな?」

少々不安げに訊ねる。

まだこの手の武器は扱ったことがないが、遠隔武器という字面だけでも難しそうに感じた。

対して、トモヒサはニヤリと笑い、

「やってみなくちゃ分からない」。お前の座右の銘じゃなかったか?」

即座に返して、悪戯っぽく笑ってみせた。

思わず「うっ」と零してから、恥ずかしげに身を縮こまらせる。

「インタビューの話はやめてってばー」

トモヒサの言う座右の銘とは、ホウカが優勝した時に受けたインタビューのことだ。当時のスポーツ誌に大々的に掲載され、座右の銘を訊かれた時に答えたものだった。

こういうところが、彼の悪い癖だ。

「ハツハ、悪イ悪イ。でも実際やってみなけりや分からねえし、お前の判断力と集中力ならイケると思っただぜ?」

謝って軽く笑い飛ばしながら、しかしトモヒサは称賛の言葉をかけてくる。

こういうところは、彼の良い面だ。

「射撃戦が苦手なら、両腕をフリーにしながら空間戦闘のできるファンネルやビットもアリって思ってたな」

「空間戦闘…」

トモヒサの言葉をしっかりと聞き、自分のバトルフィールドでの立ち回りを思い出す。

「相手してて思っただけだな、もつと動きたい、もつと体を使ったいっつー気持ち伝わってくるな」

「マリコ先生は、私の徒手空拳をしたがる癖を抑えて、白兵戦を練習しろって言ったよ?」

「でも、お前の本心はそうじゃない。違うか?」

トモヒサの指摘に、言葉を継げない。

「勿論、モビルスーツ戦には慣れておいた方がいい。でもな、もつとお前の持ち味を活かすべきだとオレは思うぜ。ガンプラバトルはそれができる競技なんだからな」

「…うん」

頼もしくも優しい言葉に、ホウカも自信に満ちた笑顔で返した。

.....

校舎のある丘から舗道を通じて少し降りた場所に、英志学園の学生寄宿舎「翠風寮」はある。

南棟、中棟、西棟からなる学生棟、そして食堂棟と管理棟で構成される木造の建物である。

自然の豊かな土地に合わせ、木々に囲まれた古式ゆかしい学生寮だ。

「…あれ、ちよつと違うかな?」

女子寮の自室で、取扱説明書とにらめっこをするホウカ。

パーツを図と照らし合わせながら、ようやく反対に取り付けていることに気付いた。足を左右反対で股関節に取り付けていたのだ。根本から引っこ抜き、改めて差し替えてみると図の通りになった。

最後に武器パーツを組み上げ、腰のマウントラッチに嵌め込む。

「うん、これで完成。…多分」

完成したガンプラ「HGガンダムAGE―1スパー」を机に立たせ、再度説明書を確認する。作り残しはないようだ。

初めて自分で作ったガンプラを前にして、小さな感動に胸が高揚するのをホウカは感じた。

実のところ、ガンダム作品についてはそれ程造詣は深くない。小学生の頃に再放送されていた「機動戦士ガンダムAGE」を見ていたくらいだ。ガンプラバトル自体は、師と仰ぐ人物からの指示によって稽古の一貫として経験しているが、当のガンプラは作ったことがなかった。

しかし、選手権に出場することになり、操縦だけでなくガンプラそのものの理解を深めたいと思ったのが購入のきっかけである。

(トモには、作ったら飾るだけじゃなくて動かしてみるといい、って言ってたっけ)

模型店に同行してくれたトモヒサのアドバイスを思い出し、スパローを手に取る。

曰く、実際に動かしてみると関節構造や可動範囲が理解できるらしい。ガンプラを動かさず、ディスプレイで楽しむのも一つの趣向だが、ホウカの場合はガンプラバトルという目的があるため、動かしてみるのが最適であると言う。

実際、このガンダムAGEーースパローはホウカも好みのモバイルスーツであった。再放送当時、スリムなスタイルとシグルブレイド一刀のみで戦う姿に惚れ込んだ記憶が、今も薄れていない。

「あ、すごい。こんなに動くんだ…」

腕を曲げてみたり、腰を捻ってみたり、少し慎重気味に動かしてみる。次第に扱いにこなれていき、大胆なポーズをさせて満足げに微笑んだ。

まだ他にも色々できるのではないかと、新たなポーズをさせようとした時。

『〜♪』

スマートフォンからメールの着信音が鳴った。

画面をタップし、メールボックスを開く。送り主はトモヒサだった。

『よ。まだ起きてるか？寝てたら悪い。帰りの時に言ってたファンネルのことなんだが、ピツタリのガンプラを用意できそうだ。明日そのことで改めて話す。じゃ、おやすみ』

と、飾り気のない文面がメールに打ち込まれていた。

「えっ、もうそんな時間…」

時計を見ると、既に22時を回っていた。

早朝のランニングが日課となっているため、この時間になったら就寝するつもりだった。しかし、つい熱中しすぎてしまい時間を忘れて

いたらしい。

トモヒサに返信するため、メールを打ち込む。

『まだ起きてたから大丈夫だよ。ガンプラの件、了解。おやすみなさい』

簡素な文面で返信した。

級友に対してなら顔文字など使い、もう少し気を利かせるのだが、トモヒサがそういう性格ではないことを承知している。彼に合わせ、メールの内容をさっぱりしたものにしていった。

「あ、片付けないと…」

机の上に取り扱説明書を広げたままで、工具やランナーなどそのままだ。残しておけない性格から、就寝前に後片付けを始めた。

やがて片付けが終わり、スパローを鉛筆立ての横に立たせておく。妙に愛らしい姿にくすりと笑った。

そしてパジャマに着替えたホウカは、ランニングのためにスマートフォンが目覚ましを6時に設定して、ベッドに潜り込む。

消灯して布団を被ったホウカは、バトルへ想いを馳せながら目を閉じた。

.....

この日の放課後は、マリコの指示でガンプラ部の活動を優先していた。

トモヒサが、ホウカにファンネルを使うガンプラを作ると伝えたところ、マリコがそれを聞きつけたのだ。それならばプラススキー粒子を理解することだと、こうしてマリコの講義が始まったのである。

「以上がプラススキー粒子の概要だ。理解したかい？」

マリコが部室に置いている本「新訳プラススキー粒子論／著：ヤジマ・ニルス」を教材に、ホウカとトモヒサは講義を受けている。

この本は、新プラススキー粒子を独自に生成することに成功したヤジマ・ニルスによる著書だ。旧姓は「ニールセン」だが、彼がヤジマ商事の専務であるヤジマ・キャロラインと結婚して婿入りしたため、

現姓で執筆したものである。

出版されたその年のベストセラーでもあった。

「…大丈夫、だと思えます」

ホウカは本のページを捲りながら、難しい顔をして返事をした。

ダークブラウンのドレッドヘアをうなじでひと束に結う、若き天才物理学者の写真が目に入る。テレビなどで何度も見たことのある姿だが、今の自分より若い時期には既に博士号を授与されていたというのだから、天才の存在というのも架空上ばかりではないと思いが知らされる。

「お前、こういう科学の話は苦手だもんな」

隣の席で、頬杖をつきながらパラパラとページを繰るトモヒサが言う。

マリコは頷いて語を次ぐ。

「ガンプラがどのような仕組みで動いているのかを理解すればいい。ファンネルを使う予定なら、なおのことさ。まあ、やっていく内に分かるだろう。経験に勝るものはないからね」

「…はい」

ホウカは頷きながらも、ふう、と息を吐いて本を閉じた。

——コンコン

それと同時に、部室のドアをノックする音が聞こえた。

そのままこちらの反応を待たずにドアが開かれ、部室に入ってきたのは、黒い手提げ鞆を持った中年太りが目立つアサクラ教頭だった。

「これは教頭先生、何か御用で？」

マリコが真っ先に声をかける。その声音はどこかトゲのあるものだ。

ホウカは、内心で身構えた。トモヒサも警戒しているようで、何も言わずにアサクラの言葉を待つ。

「シマ先生、ご苦勞様ですな。こんな部の顧問を務めるのはさぞ大変でしょう」

そんな部の空気を察してか、アサクラも挑発的な態度で言った。

学園の運営や各種大会などの敏腕が光る教頭であるが、高圧的な態

度と融通の利かない性格も有名であり、生徒から頼りにされる反面好まれる存在ではない。ホウカがガンプラ部に入部した時も、アサクラによる反発が強かった。

マリコが何かを言い返そうとすると、トモヒサが席を立って苛立ちを隠そうともせずに言い放つ。

「教頭先生、まさかそんな世間話をするために来たワケじゃないですよね?」

アサクラはハツと笑った。

「相変わらずだねカトー君は。確かにそんな話をするために来たわけでも、君に用があるわけでもない」

明らかな逆撫でにトモヒサは言い返そうとするが、その厚ぼったい瞼の奥の目がホウカに注がれた。

「キンジョウ君、そろそろ演武大会が控えてるんじゃないかね?こんな所で油を売ってないで、部へ行ったらどうなんだね?」

険しい視線をホウカに送るアサクラ。

様々な分野を学ぶ生徒を指導する側として、彼の言い分は尤もである。部を掛け持つことの難しさをよく分かっているホウカは、上手く言い返す言葉を見付けられなかった。

トモヒサが見かねて前に出ようとするが、それをマリコが腕を横に出して制する。

「教頭先生の仰る通り、教員として同意することではありません。では、こうしましょう」

「ほう?」

アサクラは言ってみるとばかりに分厚い胸を反らす。

「簡単なことです、ガンプラバトルでキンジョウの実力を証明させます。勿論、教頭先生が相手で」

「なっ!?!」

「ッ!」

堂々と宣言したマリコに、トモヒサとアサクラは驚愕する。

トモヒサは慌てて、マリコに言い寄った。

「先生、そんなの教頭が受けるわけ…」

「教頭先生、今日も持つてますよね？」

しかしマリコは、それを無視して涼しい顔で言った。

アサクラは、暫し目を泳がせて何かを言おうと口を開いていたが、やがて観念したように項垂れ、手提げ鞆を開いた。

そして、取り出されたのは黒と紫に塗装されたガンプラが一つ。肩とコクピットハッチが赤いことから、主にガンダム0083などに登場する「ドム・トローペン」のようだと分かった。

「……ええ!？」

それを見たホウカとトモヒサは、目を丸くして驚く。

「シ、シマ先生、いつから私がこれを持ち歩いていると…?」

アサクラも、先程までの態度が嘘のようにおどおどする。

「分かりますよ、同じガンダムバカならそのくらい。で、如何です?」
ぐっ、と押し黙るアサクラ。

しばらく黙っていたが、やがて鞆を放り捨てた。

「そ、そうだ!ここには灸を据えるために来たのだ!この私が、若造に戦いの厳しさを教えてやろう!」

ドム・トローペンを片手に持ちながら、アサクラはホウカを指差し、演技臭く宣言した。少し必死な様子で、マリコに見抜かれていた恥ずかしさからか顔が紅潮している。

「あの教頭が…」

トモヒサは笑っているのか呆れているのか、微妙な表情をする。ホウカも、アサクラ教頭のこんな姿を見たのは初めてだった。

困った状況になってしまい、マリコに救いを求めようと視線を送る。

マリコは、微笑みながら頷いた。

「存分に暴れな、ルーキー」

その言葉を聞き、ホウカは目を閉じた。

ガンプラ部に入部して、一ヶ月。その間に練習したことが、ここで試されるということになる。

背中を押してくれる人達のためにも、確かな姿を示さなければなら
ない。トモヒサとマリコ、そして眼前の教頭先生にもだ。

丹田に力を込め、ふー、と深く息を吐く。

常のように、精神統一。

「はいー」

気合充分、精一杯の声で応えた。

.....

小屋へ移動し、マリコがバトルシステムを起動させた。

『GUNPLA BATTLE. Combat mode, st
art up』

静かな起動音と共に、妙に抑揚のある電子音声が発せられる。

『Mode damage level, set to "C".
Please, set your Gpbase』

ホウカはそれに従い、ユニットにGPベースを接続した。

『Beginning, "PLAVSKY PARTICLE"
dispersal』

液晶にライトブルーの文字が表示され、プラフスキー粒子が散布さ
れる。

『Field, "SPACE"』

粒子がシステムの指示を受けて変容し、宇宙空間を形成。戦艦やモ
ビルスーツの残骸など、宇宙ゴミが無数に漂うデブリ帯だ。

そして、青く輝くヘックス型の盤面に向かうホウカの周囲を、ホロ
グラムの操作コンソールが取り囲む。

『Please, set your GUNPLA』

続いて電子音声がガンプラの用意を促し、ホウカはそれに従って花
のような後ろ姿が印象的な白いガンプラ——GP03ステイメンを、
GPベースの接続されているユニット台に置いた。

プラフスキー粒子が機体へ浸透し、ステイメンが顔を上げてツイン
アイが輝く。その周囲にも、アニメのようなカタパルトデッキが再現

される。

『BATTLE START!』

そして、電子音声が開戦を告げた。

「キンジョウ・ホウカ、GPO3ステイメン、行きますー!」

出撃を宣言するとカタパルトが滑走し、ステイメンが射出された。

腰部背面に備えるテールバインダーのバーニアを噴かし、勢いよくフィールドに躍り出る。

武装はビームライフルと、肘のアーム及びハードポイントの二点で保持するフォールディングシールドを携帯している。

ステイメンは、トモヒサの制作によるガンプラだ。彼から「機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY」を勧められ、視聴したところすつかり魅了されてしまったのだ。

その時に気に入った機体が、このステイメンである。

「アサクラ・ミツオミ、ドム・トローパー、出るぞー!」

対するアサクラも、宣言と共に機体を発進させた。

宙域を進みながら、ホウカは索敵を行う。マリコから指導された白兵戦の基本を思い出し、まずは敵機を確認しようとする。しかし、宇宙世紀のフィールドらしく、アニメでミノフスキー粒子が散布された時と同様の効果が起こっている。レーダーの利きが悪い。

公式の選手権などでは、基本的にミノフスキー粒子などの設定はOFFにされており、細かな索敵は専用の改造をガンプラに施さない限り、適用はされないと聞かされている。

だが、このバトルではアニメさながらの実戦仕様がON設定となっている。マリコが設定したのだろう。

「目視でも確認…」

ステイメンのツインアイを介して、フィールドを注視する。

そして、不鮮明だがレーダーが反応。アサクラもこちらを捉えているらしく、2 kmほど先から真っ直ぐに向かってきていた。

それならば、とビームライフルを両手持ちにする。

初撃に備えようとフォールディングシールドを開いた途端、アラート音が鳴り響き攻撃を報せた。

「ッ！」

ムサイ級らしき巡洋艦の残骸の向こうから、弾丸が二つ飛び出してきた。ドム・トローパーンが携帯しているラケーテン・バズのものだ。ホウカは焦らず反応し、開いたフォールディングシールドでそれを受ける。着弾の衝撃でステイメンが後退するが、スラスターの噴射で留まった。

さすがはトモヒサ製のシールドだ。バズーカの直撃を受けても傷一つ付いていない。

「見つけたぞーガンダム！」

アサクラの通信が届いた。

しかしそれには返さず、迫る機影に向かってビームライフルを二射、放つ。

それを難なく交わしたドム・トローパーンは、ラケーテン・バズを構えた。

「小癩な。だが当てられなければッ！」

アサクラは言いながら弾丸を放ち、機体を横に滑らせる。

ホウカも同じようにステイメンを横滑りさせ、モビルスーツの残骸の影に隠れてラケーテン・バズの砲撃をやり過ぎた。そして爆煙に紛れながら飛び出し、デブリの間を縫うように飛び抜ける。

アサクラは反応が遅れたようで、機影を探していた。ドム・トローパーンのモノアイが縦横に動き回る。

ホウカはラケーテン・バズを構えるその右肩に、ビームライフルの照準を合わせてトリガーを引いた。

「上かッ!？」

直後、アサクラがこちらの所在に気付くと同時にビームが直撃し、ドム・トローパーンが爆発に煽られる。重モビルスーツはすぐに下へ回避し、二次被害は免れたようだった。

一先ず、上方からの狙撃は成功だ。

アサクラは「ちい！」と舌打ちしながら、グリップを投げ捨てて機体を発進させる。

「シマ先生の指導のお陰か、カトー君の技術か…それとも君自身の実

力とでも言うのか？ いずれにせよ、伊達でガンプラ部に入ったわけではないと言うことだな」

アスクラがドム・トローペンを横に滑らせながら、長い口上を喋った。いかにもアニメの敵勢力らしい台詞がとても似合っている。

追走するホウカは、しかし深追いせずに隙を窺いながら返す。

「ありがとうございます…？」

「ふん、だが私を甘く見ないで欲しいものだ…：ね！」

そうアスクラが言った瞬間、ドム・トローペンの胸部装甲が開いてマイクロミサイルが発射された。

ホウカは驚き、ステイメンに制動をかける。不揃いな軌道で迫ってくるミサイルに対して、ビームライフルでの応戦を試みたが、数発を撃ち落としただけだった。逃れようとステイメンを発進させる。

それを見ていたトモヒサが、驚愕の声を上げた。

「ミサイルを仕込んでた!？」

「やるね、教頭先生」

同じく観戦するマリコも、思わず唸る。

アスクラのドム・トローペンは、一見するとセオリー通りのガンプラに見えるが、バトル用にオリジナルの改造が施されているものだった。

胸部に内蔵されたマイクロミサイルだけでなく、本来は砂漠・熱帯用の機体であるが宇宙空間にも対応できるよう、推進器も強化されているようだ。ミサイルの命中精度も高めてあるらしく、残骸を器用に交わしながらステイメンを狙っている。

いい腕を持つビルダーが手塩にかけて作ったガンプラを使うという図式は、単純ながら、故に驚異的。

「ッ、…だったらー！」

だからと言って、負けてはいられない。

ホウカは避けきれないと判断し、巨大なスペースデブリの前でステイメンに急制動をかけた。

「ホウカ!？」

声をかけるトモヒサを無視して、コントロールスフィアを動かす。

急制動をかけながら眼前のデブリに両脚をつけさせ、テールバインダーと足裏バーニアを同時に噴射。それに追従し、デブリを強く蹴って跳ね上がった。

直後に、軌道を変更できなかつたミサイル群が直撃し、デブリを爆発させる。

「よし……」

策が功を奏し、ホウカは静かに頷いた。

無茶な策ではあつたが、トモヒサ制作であるこのステイメンの運動性能ならば実現できると確信していた。どの道、被弾は避けられなかつただろう。

フル・フロンタルの真似事とトモヒサに揶揄されたこともあつた（教えられるまで誰のことか知らなかつた）が、無重力空間でどう動くかと考えた時に、オブジェクトを蹴るという方法を思い付いたのだ。

ホウカはステイメンの体勢を直し、デブリを蹴ってドム・トロープンに向かおうとする。

「どっ！……」

しかし、漂流物や遠く星の光る宇宙が見えるだけで、ドム・トロープンの姿がなくなつていた。

慌てずに、索敵を行う。ぼんやりと赤い点が浮かび上がった。どうやら、ドム・トロープンは漂流する戦艦の影に隠れているようだ。

ホウカは隠れた戦艦へと機体を動かす。レーダーは機影を捉えているが、隠れた場所から動く様子はなかつた。

次の手を考えながら、慎重に戦艦に近づく。

が、ボン、ボンと、数回何かが炸裂したかと思つた瞬間。

戦艦が爆発した。

「ッ!？」

ステイメンがそれに巻き込まれ、爆煙を被る。

咄嗟にフォールディングシールドで機体を守りながら後退するが、煙と破片にまみれて視界を奪われてしまった。

間髪入れず、分裂していく戦艦の奥からドム・トロープンが煙を裂

いて飛び出してくる。

「もらったア!!」

アサクラが雄叫びながら、赤熱したヒート・サーベルでステイメンに斬りかかってきた。

「っ…まだー!」

気圧されまいと視線を逸らさず、ホウカは素早く武器スロットを操作する。

「BEAM JUTTE」と表示されている項目を選択し、ビームライフルの銃身からビームジュツテを発生させた。

振り下ろされるヒート・サーベルを、ジュツテで受け止める。

「ジュツテか!?!」

防がれたアサクラは驚愕の声を上げた。

数秒、罅迫り合いの攻防をしていたが、ホウカはジュツテを斬り払いてヒート・サーベルを弾く。体勢の崩れたドム・トローペンにかさず、テールバインダーを噴射させながら機体を捻り、その横腹に回し蹴りを見舞った。

噴射の推力を乗せた回し蹴りを食らい、吹っ飛んだドム・トローペンがデブリに突っ込む。

「あぐッ!」

まともに右腕を打ち付け、肘関節が逆に折れ曲がった。その手に握られていたヒート・サーベルが放り出される。

関節内部のポリパーツが複雑骨折のように外へ露出し、アサクラのコンソールではアラート音が鳴り響いている。

「…これなら!」

ホウカは、直様ステイメンを飛ばした。

対するアサクラも、モノアイカメラを動かしてステイメンを補足する。

「舐めるなアツ!!」

アサクラは雄叫び、ステイメンへ向かって残る左腕を突き出した。

だが、ホウカはテールバインダーを直下に向けて噴射し、その拳を上方へ回避する。

「避けたッ!?!」

ドム・トローペンの頭上を捉えたステイメンは、脳天へビームライフルを向ける。

「これで!」

だが、

「舐めるなど…言ったッ!」

即座にドム・トローペンがデブリを蹴りながらバーニアを噴射させ、その射撃を寸で回避した。と同時に、胸部装甲が開いてマイクロミサイルが再び発射される。

ホウカは回避行動への切り替わりの早さに驚き、一瞬動きが遅れる。

近距離で放たれたミサイルの雨を、咄嗟に構えたフォールディングシールドで受け切った。しかし、その内の二発がシールドを逸れ、ビームライフルに直撃する。

誘爆を避け、咄嗟にビームライフルを捨てた。大きく後退してデブリに着地する。

「機体の損傷は…、大丈夫」

コンソールの画面を見てダメージを確認する。本体は無事のようにだ。

「おのれ、右腕がこうでは…」

同じくドム・トローペンを後退させたアサクラも、機体をチェックしているようだ。アラート音が報せる損傷の激しい右腕は動かず、だらりと垂れ下がっている。このままではデッドウェイトになると判断してか、胴体から右腕がパージされた。

互いに、100mほどの間隔を置いて睨み合う。

ホウカは思った。

このバトル、負けたくない。

そして何よりも、楽しいと感じている。

「教頭先生、強いんですね」

「最初は驚かされたが、伊達にガンプラを40年やってはいないよ」

ホウカの声に、アサクラは鼻を鳴らしながら返した。

様子を見ながら、ホウカは攻撃を仕掛けるタイミングを計る。

あちらは右腕を損失しているが、すぐにでもヒート・サーベルを残った左腕で拾って攻撃にも防衛にも対処できる。その上、胸部装甲内にはまだ残弾があるはずだ。

一方、こちらは五体満足ではあるが射撃武器がない。ビームサーベルはバックパックにマウントされているが、距離を取られては意味がなかった。

ドム・トロローペンのモノアイが動く。その赤い単眼は、宙を漂うヒート・サーベルを見ているのだろう。同じようにタイミングを計っているようだ。

ここが正念場。

しかし、ホウカは思った。

これではダメだ。教頭先生に見せなくてはならない。

”自分のガンプラバトル”を。

観戦しているマリコへ言葉を向けた。

「先生：勝負を、かけます」

赤いジャージを羽織るマリコは、一瞬意外というような顔して、しかしすぐに笑みを浮かべた。

「言っただろう、存分にやれとね」

「一体何をしようと言うのかは知らんが、ほぼ丸腰のその機体で…」

アサクラはそこで言葉を切り、ステイメンの挙動を見る。

ホウカは、フォールディングシールドを捨てた。コントロールスフィアの動きに追従し、ステイメンが動く。掌を開いた右腕が、ゆったりと顔の位置に上げられ、左手は胸元へ寄せられる。続いて両脚を肩幅に開かせ、僅か前傾させながら体を左側へと半身を取らせた。

合気道に近い、が、異なる構え。

これがホウカの答えだった。

「…それは何のつもりだ」

アサクラが、額に青筋を立てる。

流派、”花鳥風月”。

ホウカが幼少の頃から習い、修練を重ねてきた古武術の一派。

ある事情から、ガンプラバトルを交えてこの武術を師事しており、嘗て同門だったトモヒサもこの流派を身に付けている。

学園新聞などでは天才と持て囃されたホウカだが、そうではない。連綿と続けてきた稽古で培ったこの技こそが、今のホウカの全て。これでアサクラと戦わなければ、意味がないと思った。

「私を甘く見るなど言っただはまず…」

「いいえ」

怒りを顔にするアサクラに、静かな声で返すホウカ。

「これが私の、ガンプラバトルです」

——プツ

アサクラの中で、張り詰めていた何かが切れた。

むかつ腹が立つ。

待て、相手は生徒だ。

…それは本心か？

いや違う。

相手はガンプラファイターだ。

ここではお互い、只の戦士だ。

むかついて何が悪い。

そう意識した途端、もう抑えられなかった。

「叩き潰してくれろッ!!!」

轟と吼え、ドム・トローペンのバーニアを最大出力で噴射させる。

ヒート・サーベルも、まだ残弾のあるマイクロミサイルさえも思考から消え失せ、型も何もない突進を仕掛けた。

ブチ切れてしまった。

「…ッ!!」

叫んだアサクラがドム・トローペンを突っ込ませてくる。

その気迫に一瞬戦いたが、脇目も振らずに飛びかかってくるドム・トローペンの真っ赤なモノアイを、ホウカは真っ直ぐに見据え返した。

——相手の目を見て。その目を通して、心を知るんだ。

師匠の言葉が、語り掛けるように胸中で反響する。

申し訳ありません、怒らせてしまいました。

——大丈夫。本気で返すんだ。それが誠意というものだから。

はい、師匠。

「このオオオー!!!」

怒号の如く叫びながら、アサクラがドム・トローペンに残った左腕で殴りかかる。

避けない。避けてはいけない。

真正面から、その拳に乗った怒りに返す。

淀みない拳動で、掲げた右手を鳥の羽のように鋭く、そしてふわりと。

その拳を、ステイメンは弾いた。

「んな!？」

僅か腰を落とし、あらぬ方向へ逸れた太い左腕を、胸元に寄せていた左手で掴み上げる。

同時、バックパックのアフターバーナーと腰のテールバインダーを噴射させながら上体を捻り、後方へと半回転。

風のように、流れに乗せて。

無重力の宇宙に、白き花はその身を翻す。

ホウカは、気合の一声を叫んだ。

「…はアッ!!」

その遠心力を乗せ、足場のデブリへ向かってドム・トローペンを叩き付けた。

「ぐおウッ!!」

渾身の強打。

重モビルスーツが頭から叩き付けられ、脳天から股関節へ真っ直ぐに

駆け抜ける衝撃。足場のデブリすらひび割れた。

ドム・トローペンの頭部が砕け、装甲の隙間からミシミシと音が漏れる。

内部フレームが、粉碎されていく音だ。

それらは一瞬のこと。だが、アサクラにはゆっくりとした体感で伝わっていた。

コンソールではアラート音が鳴り響き、表示されているドム・トローペンのフレームが暗転し、機能停止を告げた。

「技あり、です」

デブリに突っ込んで倒立するドム・トローペンに、サーベルの切先が突き付けられる。ステイメンのビームサーベルだった。

次第に、ドム・トローペンのモノアイカメラが光を失っていき、爆発することなく、沈黙した。

アサクラは唖然とし、声が出せないでいる。

『BATTLE END!』

そして、電子音声がホウカの勝利を告げた。

「ヒヤヒヤさせやがって…」

勝利を収めたステイメンを、労を労うかのように大事に抱える。

バトルが終了した途端駆け寄ってきたトモヒサが、ホツと胸を撫で下ろした。

「上出来だ。だが、行動予測は今後の課題だよ」

マリコも歩み寄り、監督としての助言が送られる。

「…はい。頑張ります」

ホウカも真摯にマリコに向き直い、気を引き締め直した。

「み、認めんぞ！あんな戦い方はガンプラバトルとは認めん！」

アサクラが激昂して、ホウカへ詰め寄って来る。

彼に対しても、誠心誠意応えたつもりだ。

ちゃんと伝わっているかは、甚だ疑問だが。

しかし、彼もまたドム・トローペンを大事そうに掌に乗せており、自分のガンプラを愛しているのだと感じる。それは、ガンプラの出来栄

え、手の入れ込みを思えばすぐに分かることだった。

故に、感謝の言葉を送る。

「教頭先生、手合わせ、ありがとうございます」

「ぬ、ぬう…!？」

頭を下げるホウカの挙動に、アサクラは口籠もった。

マリコがアサクラへと言う。

「教頭先生、お分かりになったでしょう。キンジョウなら大丈夫です」

「ぬ…ですが、しかし…」

「何より、生徒の自由にやらせてあげようじゃないですか。私が責任を持って、このガンプラ部を指導します」

マリコの有無を言わせぬ堂々とした態度に、アサクラは困ったように顔をしかめて唸った。

ホウカの誠意が伝わったのか、それとも諦めたのか（マリコの態度に気圧されたのか）、アサクラは踵を返して小屋の出口に向かう。

「…なら、見せてみるがいい。その可能性とやらをな」

アサクラはそれだけ言い残し、小屋を後にした。

ドアが閉まり、元の平穏を取り戻したように静かになる。

（…これで、よかったのかな）

勝利を得たが、それでも胸中にはモヤモヤが残った。

勿論、ガンプラバトルを甘く見ているわけではない。好きなものには変わりないし、選手権に向けて練習も重ねている。

それでも…いや、だからこそ、教頭先生のようなガンプラへの情熱が自分にはあるのかと思わされてしまうのだ。

「…何だい、その顔は。勝ったんだから、もっと喜びな」

「マリコ先生…」

マリコが腕を組みながら、嘆息した。

「もし不安があるなら、そんなものはガンプラで押し返すんだよ。それがガンプラバトルってやつさ」

厳しくも、その美貌の奥に覗く優しきを感じ取る。

まだ完全にモヤモヤは消えないが、それでも前へ進む勇氣は確かに受け取った。アサクラ教頭の言う「可能性とやら」を、はつきり示す

ためにも。

”月に叢雲、花に風”か…」

ぼそりと、マリコが口を開く。

「え?」

ホウカは、マリコを見る。

「事を成すには、必ず邪魔が入ってどうにも上手くいかないという意味だよ」

「ああ、そういうことですか」

トモヒサが、納得した顔で頷く。

しかし、マリコはかぶりを振った。

「いや…キンジョウなら、”月にかかる雲を払い除ける、風である花”という意味が、似合うかい?」

そう言つて、いつになく優しい微笑を浮かべてこちらを見る。

ホウカは、なんだか気恥ずかしく思いながらも強く頷いた。

.....

自動販売機に小銭を入れ、オレンジジュースのボタンを押す。

ガコン、と缶が排出され、それを取り上げてタブをカリカリと爪で引き上げようとする。

「んー?」

しかし、中々爪が引つかからない。段々と腕に力が入ってくる。

「…んもう!」

と、苛立つ。

そこへ、外の施設へと続く廊下の向こうから太った男性が歩いてきた。英志学園に入学して一ヶ月近くだが、既に見慣れたそのジオン製量産型のような体型はよく覚えている。

明るいマゼンタに映える長いサイドテールを揺らしながら、男性へと駆け寄る。

”キョートー”せんせー、丁度よかった。これ空けてくれない?”

声をかけると、キョートー先生が怖い目つきでこつちを見た。一体

どうしたのだろう？

「ああ、ラインアリス君か。どうしたのかね？」

と思つたら、いつも通りのすぐ退場しそうなムサイ級軽巡の艦長の
ような声で答えた。

タブの空かないオレンジジュースの缶を差し出す。

「だから、これ空けてくれないかなあつて」

「そんなことかね…」

呆れたように溜息を吐きながら、缶を受け取つてタブを難なく空け
る。

さすが先生、頼りになる。

「はい」

「ありがつとー！」

渡される缶を受け取つて、ぐいっと一口を飲む。

「うくん、美味しいー！」

やはり、日本のオレンジジュースは美味しい。アメリカのものは、
無駄に味が濃い上に添加物たっぷりな味がするのだ。

「では、私は失礼するよ」

妙に無表情な顔で言いながら、キョートー先生が校舎の奥へと去つ
ていく。

「どうしたんだろ？」

ちよつと気になるが、乾いた喉に優しいジュースの味に浸ろうと、
再び缶を煽る。

「…んっ…ぷはー！」

大袈裟なくらいに味わつて、私―ジニア・ラインアリスは西日が差
し込む学園の廊下を歩き出した。

Act. 01 『月に叢雲、花に風』 END

Act. 02 『通常のグーンの三倍の速さ』

一閃。ビームザンバーが横薙ぎに振り抜かれた。

真つ二つに切り裂かれたラジエーターシールドが、都会の交差点に落下してコンクリートの道路を陥没させる。

その上空を、フレキシブル・スラスタ―バインダーを噴射させ、漆を塗ったような光沢を放つ黒いモビルスーツ――ガンダムサレナが飛び抜けた。

迫る敵機に向かい、ガンダムサレナはサイドアーマーのサーベルを引き出し、ライトグリーンに光るビーム刃を発生させて振り抜く。相対する茜色のモビルスーツが、背部の骨十字を思わせる飛行スラスタ―を可動させて斬撃を躲した。

その機体はシザーアンカーを射出し、ガンダムサレナの腕をくわえ込む。甲殻類の鋏のようにながちり捕らえ、そのまま骨十字スラスタ―を横に噴射して機体を回転させた。

身動きの取れないガンダムサレナは、されるがまま振り回され、都会の中心に屹立する高層ビルへと激突した。

崩れる積み木のように高層ビルが中程から折れ、倒壊する。鉄骨やコンクリートに埋もれながら、ガンダムサレナは何とか体勢を立て直そうとする。

が、見上げた時には茜色の機体―クロスボーンガンダム・クロザーが、陽光を骨十字に遮って落下してきていた。ビームザンバーを逆さに突き出し、着地と同時にガンダムサレナの腹部を刺し貫く。

クロスボーンガンダム・クロザーは、フェイスマスクを開いて排熱した。顎あごを開いた野獣が獲物を仕留める悦びに歓喜しているかのように、ツインアイを輝かせる。

その顔が、ガンダムサレナの傷だらけの顔にぐいっと近付いた。相手のファイターが、口を開く。

「カトーよお、テメエ……弱エなあ」

「ッ!!」

トモヒサは目覚めた。

布団を払い、天井を見上げる。額を触ると酷く汗をかいていた。最悪の夢だ。

「くっそ…」

ベッドから起き上がり、寝癖の立つ頭をくしゃくしゃと揉む。

時計を見ると、まだ5時半だった。こんなに汗をかいていては二度寝もできないため、トモヒサは立ち上がって体操服に着替えた。この時間ならシャワー室は空いているだろう。タオルと下着の着替えを持って部屋を出た。

翠風寮には共同浴場もある。運動部が多いため、シャワー室も幾つか用意されており、ランニングを終えた生徒で登校前は賑わう。トモヒサは運動部ではなく、ランニングもしていないためあまり利用しないが、夏場は重宝している。

浴場の前に来ると、やはり人はいなかった。男子浴場の暖簾を潜り、誰もいないため、気にせず体操服を脱ぐ。

シャワー室に入り、暖かいお湯を被った。

汗をシャワーで流し終え、まだ早いだが、制服に着替えて食堂棟に向かう。

渡り廊下を歩いていると、

「あれ、トモにい?」

体操服姿のキンジョウ・ホウカが声をかけてきた。

「はよっす、これからランニングか?」

「おはよう。うん、そうなんだけど、珍しいね。トモにいがこんな早い時間に起きてるなんて」

それでは俺が寝坊魔みたいな言い種だ、とトモヒサは思った。だが否定はできない。

会話をしながら、ホウカは準備運動を始める。

「久しぶりに、一緒に走ろうよ…っ」

屈伸しながら話すホウカ。同じくランニングを始める生徒の邪魔

にならないよう、トモヒサは柱に寄りかかりながら話す。

「さつきシャワー浴びたばかりだからなあ…お前を送るだけにしとく」

「えー」

準備運動を終えて、立ち上がる。

ホウカは小柄で、並び立つと見下ろす形になり旋毛が見えるくらいである。

(まあ、俺が無駄に高身長なだけかもしれないねえけどな…)

むしろこの身長で、昔からホウカに投げ技で敵わなかったのを思い出す。

「じゃ、行つてきます」

「おう、頑張れ。俺は先に朝飯食つてるな」

走り出したホウカが、振り向きながら手を振った。木々に囲まれる道走り、ランニングルートに逸れる。

姿が見えなくなったのを確認して、食堂棟へ向かうトモヒサ。

既に夢のことは、忘れていた。

食堂棟へ入って、トモヒサは給仕のおばさんと挨拶を交わす。まだ早いので、準備が終わるまで雑誌を読もうと本棚に向かった。

「ん？リクヤか」

先客がいた。

本棚の前に立っているのは、短く整えられた髪型で後ろ姿だけでも分かる。

昔からの腐れ縁の幼馴染、同級生のカネダ・リクヤだ。

「お、トモヒサ。お前にしちや早いな」

「さつきも似たようなこと言われたぞ…」

その横に立って互いに挨拶を交わす。

「何のことだ？」

「いや、ランニング前のホウカに会ってな」

「ああ」

納得して小さく笑うリクヤ。

「今頃、妹と一緒に走ってるだろうな」

「同じ古武道部だしなあ」

去年、英志学園のガンプラ部はチーム「スターブレイカーズ」として初の選手権参加を果たしていた。

その時は自分とカネダ・リクヤ、そして大学部に進級した人物を加えた三人が出場したのだ（というより、三人しか部員がいなかった）。
だった。

しかし、結果は予選敗退。全国大会の場・ヤジマスタジアムの舞台上がることはなかったが、初出場にして地区予選の決勝まで勝ち進む功績を残せた。これもあって、三人だけで部が存続できているのだ。

ところが、今年の選手権は三人目が大学部に進学したことで中高生の部に参加できないということになった。そこで、確かなセンスを持っているホウカをガンプラ部へ誘い、チームメンバーとして推薦したのである。

ちなみに、リクヤの言う妹とはホウカと同じ古武道部に所属する一年生のことだ。

「それはそうと、週末にでも大会のエントリーを済ませようと思う」
ふとトモヒサは思い出して、リクヤに言う。

「ああ…そっか」

リクヤはそれだけを言って、口を嚙む。

「どうした？」

「あ、いや…：…すまん、もうちよつとだけ待ってくれないか？」

トモヒサは疑問に思った。

既にトモヒサ、リクヤ、そしてホウカと三人揃っている。ホウカが入部していなかった当初なら、当然エントリーはまだ見送っていただろうが、何故リクヤは今になってそんなことを言うのだろうか。

「どうしたんだ？もうこの三人で決まりだろ」

「すまん、上手く言えないんだ」

リクヤはそれだけを言って、雑誌に目を落とす。

「まあ、お前がそう言うんなら、もう少し待つけどよ」

とはいえ、腐れ縁と言っても過言ではないリクヤである。何か考えがあつてのことだろう。

二人は、給仕のおばさんが声をかけるまで、他愛もない言葉を交わして時間を潰した。

.....

ホウカは、同級生と一緒に談笑しながら校舎を出る。

高等部の合同体育があるため、陸上競技場へ向かう。大勢の生徒が同じように校舎から溢れて、道を埋め尽くしていた。

同級生と一緒にその中を歩いていると、剪定されたツゲの木の茂みに誰かが踞っているのが見えた。

「ごめん、先に行つてて」

そう同級生に断つて、その人物に向かう。

気分でも悪いのだろうか、立ち上がる気配がない。

「大丈夫ですか？どこか具合でも…」

茂みに入ると、その人物は明るいピンク色（マゼンタという色だった気がする）の髪をサイドテールに結っている女子生徒だった。声をかけると、こちらを見ずに手招きしてくる。

一体何かと、同じくしゃがみ込む。

「わっ…」

そこには、猫がいた。

真っ白な毛色で、ふさふさの首元の毛がライオンのように逆巻いている。雄々しい風貌に反して、かわいらしい大きめの目がホウカに向けられた。

誰かの飼いだらうか。

「かわいいでしょお〜」

足を投げ出して座る猫の顎を撫でる女子生徒。

ホウカも頭を撫でてあげると、猫が喉を鳴らした。とてつもなくかわい。思わず顔が綻んでしまうのが分かった。

ふと、女子生徒の横顔を見る。

色白で睫毛が長く、外国人だと一目で分かる顔立ちだ。

ホウカは、見覚えがある顔だと気付いた。

「ラインアリスさん？」

声をかけると、大きな目をぱちくりさせてこちらを見た。

「ん？そだよ？」

しかし、猫を撫でる手は止めない。

すると女子生徒―ジニア・ラインアリスはホウカの顔を見て、何かを考えるように顎に手を添えて唸り始める。

ややあつて、パツと表情を輝かせた。

「あーキンジョーホーカ！でしょ!？」

ぐいっ、と顔を寄せてくるジニア。

思わず身を引いた。

「う、うん、そうだよ…？」

「やっぱりー!」

ジニアは弾けるような笑顔をしながら、「Yes!」と言って何故か拳を握る。

「てゆーか、何で名前知ってるの？」

と思うと、頭の上にはてなマークが見えるかのように、腕を組んで思案顔をする。

「ほら、ヒロインの役をもらった留学生の天才少女って、学園新聞に載ってたから」

つい先週発行された学園新聞に、このジニア・ラインアリスの写真が大きく掲載されていた。今夏に開催される総合文化祭で演じられる舞台のヒロイン枠として選ばれた、とのことだった。

「あー、あれかー」

なるほど、と頷くジニア。

「と言うか、私の名前も…」

「学園新聞で読んだもん。古武道に咲く天才少女!ってね」

ジニアは、さも当たり前のような顔をして答えた。

トモヒサのそれとは違ってからかっている様子ではないが、それでもすごく恥ずかしい。

「お互い天才少女はないよねー」

「分かる…」

妙なシンパシーを感じ、苦笑いを交わす。

「おーまーえーらー」

背後から、突然声をかけられた。

「次は合同体育だつてのに何やってんだこんなところで！」

振り返ると、浅黒い肌と纏められたビリジアンの髪が目立つ教師カ
ンベ・アリサが、怖い顔で立っていた。古武道部の女子顧問でもある
先生だ。

「す、すみません！」

ホウカは慌てて立ち上がり、アリサに頭を下げる。

ジニアも立ち上がって「ごめーん」と軽い返事をした。

「変な組み合わせだな…お前ら面識あったのか」

アリサが、こちらを交互に見て意外と言うような顔をする。

「あのねセンサー、猫がいるんだよー」

それに構わず、ジニアが澆刺とした声で言った。

アリサが、がくつと肩を落とす。

「猫だあ…？何もないじゃないか」

二人の背後の茂みを見遣って、アリサは顔をしかめた。

ホウカも後ろを向くが、いつの間にか猫はどこかへ消えていた。ジ

ニアも辺りをキョロキョロと見回すが、影も形もない。

「あれー？いたんだけどなあ…」

「んーなことはいいから、さっさと行った行った！」

アリサは二人の背中を押して、競技場へ急かした。

その日の昼休み。合同体育が終わって制服に着替えたホウカは、い
つものように同級生と昼食を食べようと食堂に向かおうとした。

「あ、いたいた！」

と、教室を出ようとしたところに、長いマゼンタ色のサイドテール
を揺らしながら制服姿のジニアが駆け寄ってきた。

「あれ、どうしたの？」

「このクラスだつて聞いたから！一緒に昼食べない？」
あまりにも唐突だった。

彼女の大きな黄金色の瞳が、キラキラと輝くようだ。
ホウカは少し考える。

「うん、いいよ」

とはいえ、同級生と約束をしているわけではないため、断る理由もなかった。

「やったー！」

ジニアは喜んだようで、オーバーアクションで両手を上げる。
そしてホウカはジニアを連れ立ち、食堂へ向かった。

その間、すれ違う生徒たちの視線が集中してくるのを感じる。確かに、学園新聞で取り上げられた人物の中でも特に接点がなさそうな二人が、こうして仲の良さそうにして歩いているのだ。

周囲の興味が寄せられるのも分かるのだが…。

入学して早一ヶ月とちよつと。時々感じる視線には、未だに慣れずにいた。それは、隣を歩く彼女も同じだ（と思う）。

やがて食堂へ到着し、それぞれ注文する。

ホウカは、端末にクレジットカードを翳して清算。大勢の生徒の食事を賄うため、クレジットでの清算がこの学園の基本だ。すぐに、注文したハンバーグ定食が割烹着を着るおばさんから渡され、それをトレーに置く。

ホウカは空いている席につき、ジニアも向かいの席についた。彼女も同じくハンバーグ定食であり、今にも涎が垂れそうにやけ口をしながら目を輝かせている。そしてフォークとナイフを握る。

「いったきます!!」

小学生でも負けそうな声量だ。周囲の生徒達が何事かと見る。

「いただきます」

ホウカも做って（声は小さめに）、昼食へと感謝の言葉を送りながら合掌する。少し視線が気になるが。

ハンバーグをナイフで切りながら、ジニアを見た。

同じくナイフで切り分けているが、箸は使えないのだろうか、ハン

バグをフォークで刺している。そのまま口に運んで味わい、「パアア」と漫画みたいな擬音が聞こえてくるかのように笑顔になった。

かわいらしい子だ。

「お前から目立ち過ぎだ…」

と、声をかけられる。

振り向くと、トモヒサがトレーを持って立っていた。

高身長なために、見上げる形になる。

「あ、トモにい」

「…この観衆の中でよく呼べるな」

トモヒサはそう言つて、「どこいいか？」と訊ねてきた。

頷くと、トモヒサが隣の席に座る。

「どのツラ様？」

「初対面で酷いな!？」

開口一番、ジニアの言葉だった。トモヒサが即座に言い返す。

ジニアは「あ、”どちら様”だった」と口を覆い、しまったという顔をした。

「…カトー・トモヒサだ。下の名前で構わないぜ」

妙に疲れた顔で挨拶をするトモヒサ。

ジニアはうんうん、と頷いた。

「私はジニア、ジニア・ラインアリス。二人共ジニーって呼んでいいよ」

「うん、改めてよろしくね。私もホウカでいいよ」

応じて、こちらも言いそびれていた挨拶をする。

トモヒサは、生姜焼きをご飯に乗せながら返した。

「よろしくな。てか、この学園でお前達を知らない生徒はいないだろう」

「困っちゃうよねー、ホーカ」

「う、うん…」

言葉を振ってくるジニアへ、恥ずかしげに頷き返す。

そんな自分達を交互に見ながら、トモヒサが不思議がるように言った。

「それだよそれ。いつの間に関わり合いになったんだ」

「うーん、猫のおかげ？」

「ジニアはそう言って、ハンバーグにフォークを刺す。」

「…結論から言いやがったな」

トモヒサが項垂れる。

ホウカは、小さく笑って補足する。

「合同体育の時に、えと…ジニーが猫を触っててね。蹲ってるから、具合が悪いのかなって話しかけたのがきっかけ」

「はあん…それで猫ねえ」

トモヒサは納得したようだ。

「あ、そうだそうだ。ホーカはガンプラ部にも入ってるんだってね？」
ハンバーグを食べながらにこにこしていたジニアが、ころつと表情を瞬時に変えて話しかけてくる。

その変化に一瞬驚きつつ、ホウカは箸を止めて返す。

「うん、そうだよ。ジニーもガンプラ好きなの？」

「モチロン！」

「俺も部員…っーか部長だ」

「それでね、バトルしてみたいなっーって」

「無視か！」

「あつははは！トモヒサ面白い！」

「ジニアがトモヒサを指差して笑った。「くっ…！」と何かを堪えながら、トモヒサが拳を握る。」

ホウカはくすくすと笑いながら、そうだと提案した。

「それなら、今日も放課後やる予定だし、丁度いいんじゃないかな？トモに、どう？」

「トモにー！」

「それやめろー…まあ、どうせ全員来たところで三人しか集まらねえからな、いいんじゃないか？」

トモヒサは疲れた顔をしながらも、ホウカの提案に同意した。

彼の言う通り、例えば部員が集まっても基本的に三人だけだ。マリコもいれば少しは賑やかになるが、監督をしているだけでバトルをする

姿は未だに見たことがなかった。

ふと、放課後に古武道部の活動があることを思い出した。

「あ…でも私、古武道部の後になると思う」

「ダイジョブダイジョブ。私も演劇部に顔出してから行くよ」

ジニアが言う。彼女も演劇部の活動があるのだろう。

英志学園の演劇部は、比較的新しい部だ。文化面での教育にも力を入れ始めたことで、大学部に演劇学科が出来たと教師の一人から聞いている。その一環として演劇部が設立され、部員の募集も勢力的に行われているらしい。

そして、更なる発展としてアメリカの芸能学校と交換留学が行われたのが、自分が入学したのと同じ一ヶ月前のこと。

その留学生こそ、ジニア・ラインアリスだった。

「決まったな。シーマ様には俺から言っとく」

トモヒサは頷いて、生姜焼きを乗せたご飯を大口で食らう。

今年入学した話題の生徒達の中でも、自分とジニアの入学は特にピックアップされ、学園新聞を大いに賑わせた。

方や、古武道界に吹き抜けた一陣の風キンジョウ・ホウカ。

方や、大胆な表現力で魅了する演劇界の新星ジニア・ラインアリス。

これでもかと誇張された表現で書かれており、学園内で知らない人間はいないほどの有名人になって（しまつて）いた。

そんな彼女、ジニアがガン普拉バトルを持ちかけてくるとは。

ハンバーグを口に運ぶ満面の笑みからは、その内心が読めなかった。

.....

GPベースへセットされたステイメンが、プラフスキー粒子の供給を得て顔を上げる。握るのは、シンプルにビームライフルのみだ。フォールディングシールドは取り回し辛いと感じており、頼らない戦闘を練習していた。

そして同じく、相手側のGPベースにもガンプラが置かれる。まる

でエイを彷彿とさせるような、独特の形状である。

プラフスキー粒子が浸透し、その大きなモノアイカメラが独特な効果音と共に点灯した。

『BATTLE START!』

電子音声で、バトルの開始を告げる。

「キンジョウ・ホウカ、GPO3ステイメン、行きます!」

「ジニア・ラインアリス!スーパージェーン!いつきまあーす!」

それぞれのガンプラがカタパルトを滑走し、青空へと飛び出した。

選択されたフィールドは、港湾都市と森林地帯で別れ、青い海も広がっている地形である。

ピンと来ないホウカは、ウィンドウ端に表示されているフィールド名を読んだ。

「ONOGORO ISLAND」と表示されている。

「オノゴロ島か…どんな戦いを見せてくれるのか楽しみだな」

声の主は、カネダ・リクヤである。

あのジニア・ラインアリスが、ホウカとガンプラバトルを行うとトモヒサから聞き及んだようで、こうしてバトルを観戦している。

「つーか、すげえ名前が聞こえたような…」

トモヒサは、ジニアが出撃時に名乗ったガンプラに戦々恐々としたような声を漏らした。

ホウカは、バトルシステムを挟んで相対するジニアに意識を向ける。

予定通りお互いに部活動を終え、5号館のガンプラ部に集合したのだ。

事前にトモヒサからマリコに連絡されており、部外者であるジニアでも好きにしたいと許可が下りている。部が保有するガンプラを使っても構わないとまで言われていたらしいが、ジニアはそれには及ばないと言ってピンク色のガンプラケースを持参してきた。

どんなガンプラなのか訊ねたところ、いたずらっ子のような顔で「ピ・ミ・ツ（はあと）」と返された。

明るく賑やかな彼女だが、親しみ易さを感じる。出会ったばかりに

も関わらず、何だか随分と前から知り合っているような、そんな人物だった。

気を取り直し、バトルフィールドに傾注する。

ホウカは、ステイメンを飛ばしながら索敵を行った。

コズミック・イラのフィールドであるため、ミノフスキー粒子による妨害はなくクリアにレーダーが映り、機影が赤い点となって表示された。

「あれは…」

目視でも確認できる。

遮蔽するものが上空になく、真昼の陽光が平たいそのシルエットを照らし出す。

横に張り出したエイのような形状、そしてその装甲から露出した下半身。

「ス、スーパーグリーン…っておい！」

鋭く、トモヒサのツツコミが切り込まれた。

その「スーパーグリーン」と呼ばれるガンプラは、特徴的な機体がピンクとレッドに塗装されている鮮やかなものだった。ガンダム的に表現するならば「シヤア専用」と呼べるような色をしている。

そして、それだけではなかった。

「よーし、やろうよホーカー！ガンプラバトル！」

ジニアが澁刺と言いながら、スーパーグリーンに背部の長剣を構えさせた。

それはホウカも見覚えがある。「機動戦士ガンダムSEED」の主人公機である「ストライクガンダム」の武装の一つ、「グランドスラム」だった。

「なんだそりゃあ!？」

トモヒサとリクヤが目をひん剥いて驚嘆する。

大声を上げる二人に少しびくつとし、

「な、何か変なの…?？」

きよとん、とする。

「そりゃおま…あーそうか、SEEDは分かんねえか」

トモヒサが言う通り、ホウカはガンダムSEEDに馴染みがなかった。

一応、主役機や登場人物など大まかなことは知っているが、本編自体は見たことがない。オノゴロ島のこともグリーンというモビルスーツも、聞いた事がある程度だった。

「例えるならズゴックとか、AGEのウロツゾやゴメルが大剣持つてるのと同じだ」

「……あ」

その様をイメージして、そのおかしさに気付いた。

ガンダムシリーズには、水陸両用と呼ばれる種類のモビルスーツが多く登場する。そのほとんどが水中戦に特化した流線型、長い手足、そしてモノアイカメラを有している。ずんぐりしたかわいい外見から根強いファンが多いらしく、確かにそう思う。

それは、一番理解しているガンダムAGEにおいても例に漏れず、ヴェイガン系の量産型に水陸両用モビルスーツが登場していることを思い出した（こちらはやや恐竜やドラゴンのような外見だが）。

そう思うと、途端にスーパーグリーンが違和感の塊に見えてくる。

「もー、ナニナニ。いいでしょ水陸りよーよー！」

対するジニアは、ドヤ顔しながらスーパーグリーンにターンを決めさせる。

「それより、もうバトルは始まってんだからね！ じっくりよー！」

そう言うと、スーパーグリーンを勢い良く発進させた。

ホウカも集中し直し、ステイメンを発進させる。

まずは牽制。ビームライフルのフォアグリップを起こし、両手持ちにする。さらに射角を固定して、照準を向かってくるスーパーグリーンに合わせた。

トリガーを引き、射撃。

しかし、避けられる。

続けて二射を連続。

またも回避。

不規則に連射を繰り返してみる。

が、まるで水中を泳ぐように避けられてしまう。

「当たらない…!?!」

何れも、最小限の回避行動だけで動き、ビームは掠りもしなかった。海洋生物のような寸胴な機体とは思えない運動。あまつさえ、大型のブースターがその背部には増設されているのだ。さらにバックパックからは、航空機のようなウイングまで伸びる。

そんな形状の機体が、どんな改造をしたらあんな機動力を得るといえるのか

これでも、射撃にはそれなりに慣れてきていると感じる。ドツズライフルのような安定感があれば、射角を固定させられることも理解してきた。そのための両手持ちだったのだが…意味を成していない。

「ガンプラに限界はない」。その名言をホウカは思い出した。

そして、そんな思考を巡らすような暇はなかった。

スーパーグリーンは、思いの外素早く接近してくる。射撃武器を持っているような様子もなく、真正面からグランドスラムで挑んでくるらしい。

それならば、こちらも領分である。

ステイメンはビームライフルを左手に持ち替え、バックパックのサーベルラックを開いて柄を取り出し、握り込む。

下段に構えた柄からビームが飛び出て、疾駆するステイメンの背後でピンク色の粒子刃が尾を引く。

そして、両機共、間合いに入った。

「そりゃあー!」

「はあー!」

スーパーグリーンがグランドスラムを大きく振り被り、大上段から斬り下ろす。

それを、逆袈裟にビームサーベルを斬り上げて弾いた。

——ズイン!

SEED特有の斬撃音が響く。

弾かれたスーパーグリーンは、しかし狼狽えずに直様機体を回転させる。

水平にグラウンドスラムを寝かせ、横に薙ぎ払うように振り抜いた。ステイメンは咄嗟にテールバインダーを噴射させて後退、間合いから出る。

拳一つ分程の間を置き、グラウンドスラムの刃先が胸部の前を通り過ぎた。

冷や汗が浮かぶのを感じる。

「むっ、うまいねー」

対して、驚嘆するジニア。

すかさずステイメンはビームサーベルを握り込み、今度はこちらが前になる。小さい動作で右腕を振り上げ、その懐（どこまでが懐なのか）に潜り込みながら斬り付けようとする。

が、空振りに終わった。

器用にもウイングの可動とブースターの噴射を併用し、最低限、且つ素早い動作で後退したスーパーグリーン。

刹那斬り結んだ両者は、互いに離れて港湾都市の道路に着地した。

「…強いね、ジニー」

ほんの一瞬刃を交えただけで、ホウカは直感する。

「ホーカもやるねー!」

ジニアは嬉々として言い、ピンク色の機体が音を鳴らしてモノアイカメラを輝かせる。

時間にして、ほんの五秒程度の剣戟。

しかし、互いの力量を見定めるには十分な時間。

そして、完全に拮抗していた。

その一連の戦闘を見ていたトモヒサが、コンソールの外で口を開く。

「冗談…。いや機体性能だけじゃねえ、あの動きは」

「ああ、キンジョウのサーベル使いを易々と避けたな」

彼の横に立って同じように静観していたリクヤも、頷いた。

ホウカはその様子をちらりと見、リクヤが常の飄然とした態度ではないことに気付く。

意識は道路上で軽快なステップを踏んでいるスーパーグリーンに向

けながらも、彼の様子も気掛かりになった。

ダン、と強く踏み込んで、スーパーグリーンがグランドスラムを構える。

慌て、右手のビームサーベルを握り直し、やや下段に構えて体を左側へ斜めに向けた。

「今のはドロローかな？それじゃ次のラウンド行こ！」

「待った！」

ジニアが再び戦闘を開始しようとした瞬間、コンソールの外から静止の声が飛んできた。

リクヤであった。

「なーに？」

ジニアが小首を傾げてリクヤを見る。

ホウカも何事かと思いい、ホログラムコンソールの外にいるリクヤを見た。

その表情は、先程気に掛かったような態度を映している。

何かを深く考えているような、難しい表情。

「悪い、キンジョウ。俺と変わってくれないか」

「え？」

思っても寄らぬ言葉だった。

ホウカはどうしようかと思いい、ジニアに訊く。

「ジニー、いいかな？」

「うーん…いいけど？」

ジニアは首を傾げたまま頷いた。

「悪いな、邪魔して。ちょっとやっておきたいことがある」

リクヤはそう断りを入れると、鞆の中からケースを取り出す。

そのケースが開かれ、彼の愛機であるガンプラが姿を現した。

.....

「カナダ・リクヤ、ガイアガンダム・ロア、出る！」

カタパルトが滑走し、濃紺のモビルスーツが射出される。海岸林に

着地し、陽光にその身を映し出した。

「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に登場する「ガイアガンダム」、その改造機である。

元の黒いカラーリングが濃紺に改められ、オーソドックスなガンダム然としたスタイルの中に、フロントアーマーのない特徴的な股関節と細長い脚部が目立つ。航空機の機首のようなバックパックを備え、キャノンとウイングが太陽光を受けて輝いた。

リクヤは強く頷いて、愛機の調子確かめる。

「さすがリクヤの奴、いい出来栄だぜ」

トモヒサが感嘆の声を漏らした。

このガイアガンダム・ロアは、去年のガン普拉バトル選手権に出場した際に投入したガンプラである。その完成度に磨きをかけており、ウイングの若干の大型化や全体的なスタイリングの向上に手を加えている。

「ガイアガンダムだ！ かつこいいい！」

ジニアが、ガイアガンダム・ロアを見て嬉々としていた。

その快活な様子からは、あの戦い慣れしたような動きはとても想像はできないが、現にキンジョウ・ホウカと互角の剣戟をしていたのは事実だ。

「ありがとよ。けど、こいつの真価はバトルの中にあるぜ」

とはいえ、素直に愛機を賞賛してくれているのは嬉しい。ガイアガンダム・ロアの高エネルギービームライフルを、シヤア専用ゲルググのような色のスーパーグリーンに向けて掲げる。

「いっちょ、手合わせ頼む」

「おっけー！」

答えるように、スーパーグリーンがグラウンドスラムを横振りに一閃する。

キンジョウには悪いが、ここは譲らせていただく。

ジニア・ラインアリス、その実力を見極めるために。

.....

「リクヤ先輩、いきなりどうしたんだろう」

リクヤと交代したハウカは、トモヒサの横で観戦している。

「分からん。まあ、あいつにはあいつなりの考えがあるんだろ」

トモヒサは腕を組んで、バトルの成り行きを見守っていた。

ふと、今朝のリクヤの態度が脳裏を過り、見守る視線に真剣さが籠められる。

あの様子は、自分の知る限り、何か思い詰めた時や悩みを抱えている時のものに近い。

腐れ縁と言っても過言ではない仲だ。少しの変化でもお互いに気付くものだが、今朝の様子、そして今のものは唐突だった。

それもガンプラが絡んでいるとなると、事は切迫してくる。

もう直に選手権の予選が開催される上、練習試合も組まれている。ここで何か問題が発覚したとしても、それを解決しさえすればいいのだが…。

しかし、この自分にまで隠しているのだ。只事ではない。

コントロールスフィアを握って盤面に向かう彼に視線を向けた。

その表情は、去年の選手権地区予選で見せたようなものだ。明確に言葉にできないが、あの時と似た覚悟を感じる。

一体、譲ってもらってまで行うバトルで、何をしようというのだろうか。

今は只、その成り行きを見守るしかない自分が歯痒い。

.....

ガイアガンダム・ロアの放ったビームライフルの射撃を、細かい軌道で避けながら接近するスーパーグリーン。

「ならこれだ！」

リクヤは射撃では対処し切れないと判断し、コントロールスフィアを操作して可変コマンドを選択した。

濃紺のモビルスーツが瞬時に変形し、モビルアーマー形態である四

足獣のような姿になる。バックパックの機首が頭部となり、モノアイカメラが点灯する。

「そこなくっちゃー!」

スーパーグリーンは構わず接近し、グランドスラムで斬りかかった。素早くスロットを滑らせ、武器を選択。横に展開させた姿勢制御ウイングの前面に、グリフォン2ビームブレイドを発生させる。

回避行動は間に合わない。四つん這いの低姿勢で、その斬撃を受けた。

刃をビームブレイドで受け止めた左翼が、ミシミシと嫌な音を立てる。

「もろったー!」

しかし、狙い通り。

左の肩口から砲口を覗かせるビーム突撃砲が、斬撃を見舞ったスーパーグーンの顔面を補足している。

砲口に粒子が集束し、スーパーグーンのモノアイがレールを滑走してこちらを見る。

直後、砲撃音が轟き、ピンク色のビームが迸った。

至近、ゼロ距離。避けられるものなら避けてみる。

「ッ?!」

そう、スーパーグリーンは避けられなかった。

だが、直撃は、しなかった。

スーパーグリーンは冗談のようなステップを踏み、こちらから向かって左へと横っ飛びに張り出した機体を踊らせたのだ。

とはいえ回避し切れるはずもなく、その機体の背中から伸びる左翼にビーム砲が掠れた。

が、威力は確かで、狙いは外れたがウイングのど真ん中を撃ち抜く。

「あアッ!」

小さく悲鳴を上げるジニア。

しかし、スーパーグリーンは爆発に煽られながらもその場で踏ん張り、左腕をガイアガンダム・ロアに向けてきた。その袖口に空いている7連装魚雷発射管から、ロケット推進の魚雷が飛び出る。

「ぎよ、魚雷!？」

「ここは陸だぞ！」

うっかり手を滑らせてしまい、回避が遅れたガイアガンダム・ロアの左側のウイングに魚雷の二発が直撃した。爆発で機体が煽られる。ウイングが中程から折れ、海岸林の大地に突き立った。

「すごい！すごいねそのガンプリアー！」

ジニアが喜びに声を上げる。

被弾を受けて左翼を失いながらも、スーパーグリーンは樹木を踏み台に蹴って再び斬りかかった。

思わずこちらも笑いを抑えられなくなる。

「あんたもなァー！」

左のウイングから煙を昇らせながら、右肩に固定されているビームライフルを三連射する。

しかし、スーパーグリーンが上空へとジャンプしたことで回避された。

「ツリヤー！」

その頭上から、スーパーグリーンがグランドスラムの縦斬りを振り下ろす。

ガイアガンダム・ロアの四つ足をバネのように使い、機体をバックステップさせた。獲物を失ったグランドスラムが大地を抉る。

そのままモビルアーマー形態の姿で後退し、バーニアを噴射させてその場から離れた。

スーパーグリーンは逃がすまいと、ブースターを噴かせて追ってくる。

「接近戦は不利だ……このまま中距離から牽制しつつ……」

ホップステップジャンプとばかりに跳ねる謎のシャアピンクの水陸両用機。

一撃でも食らったら即真つ二つのグランドスラム。

陸だろうが関係なく発射される魚雷。

全く、冗談じゃない。

グリーンは本来、水陸両用かつ、より水中戦向きのモビルスーツだ。

例え、ロケット推進で発射される魚雷が陸上で使えるとしても、その威力は知れている。

しかし、スーパーグーンの魚雷は二発命中しただけで、リクヤが丹精込めて作り上げたガイアガンダム・ロアのウイングを破壊してみせたのだ。

「俺と同じか、それ以上の作り込みってワケか……!」

ガンプラバトルにおいて、ガンプラ自体の作り込みがそのまま性能としてシステムに反映される。同等か、或いはより高度な加工がスーパーグーンに施されていることは容易に想像できた。

とはいえ、こちらと同じくウイングを破壊している。相手の得意とする接近戦（再三言うようだが、グーンは水中戦向きだ）に持ち込まなければ、十分勝ち目はある。

——ぞくり。

突如、背後にプレッシャーのような何かを感じた。

気のせい、などでは断じてなかった。

メツサーラに遭遇したカミーユの気分を味わう。

「鬼ごっこも悪くないけどー!」

「何イ!?!」

スーパーグーンが信じられない程の推力で、高機動型であるガイアガンダム、それもモビルアーマー形態に追い付かんばかりの勢いで迫っていた。

いや、もう追い付かれている。

”通常のグーンの三倍の速さ”……!

「赤い彗星かよ!?!」

「かも、ね!」

ジニアは冗談（笑えない）に冗談を返しながら、グランドスラムを横に一閃させた。

「くツ……そお!」

乱暴にコントロールスフィアを振って急旋回。

——ブオン！

ギリギリで回避。

まだまだ、気張れ！

スロットを選択、可変コマンド。

挫けそうになる心を無理矢理に奮い立たせ、ガイアガンダム・ロアをモビルスーツ形態へと変形させる。

そして、返す刀が再び襲ってきた。

その斬撃を、構えた機動防盾で受け止める。

だが、

「……い、いッ!?!」

自信のある出来”だった”はずの機動防盾が、無残にもスツパリと切り裂かれてしまった。

恐るべき斬れ味のグラントスラムと、我が目を疑うほどの高機動。さらに、自慢の武装があつさり切り裂かれたことに震駭して、反応が鈍る。

「リクヤア!!」

トモヒサの叫びが、聞こえた。

スーパージーンは一際強くモノアイカメラを光らせ、加速が弱まったガイアガンダム・ロアの隙を逃さない。

ブースターの推進力任せに一回転し、グラントスラムを叩き付ける。

「う……りゃあああー!!!!」

ガイアガンダム・ロアの胴へ刀身が食らいつき、牽制も虚しく火花を撒き散らしながら一気に斬り裂かれた。

機体が上下に分裂し、爆裂音を数回弾けさせて、爆発する。

決着だ。

『BATTLE END!』

.....

設定されていたダメージレベルはC。このため、戦闘による損壊がない二つのガンプラが、半透明のユニット上に残される。

ジニアの使っていた、スーパーグリーン。

そして、リクヤの使っていた、ガイアガンダム・ロア。

全く想像していなかった結末に、ホウカは啞然としていた。

「イエーイー・アイムウィナー！」

スーパーグリーンを持ち上げ、ジニアがピースしながら満面の笑顔になる。

その笑顔がこちらへ向けられ、ホウカは小さく拍手を返した。

「……」

ふと、リクヤに視線を移す。

愛機たるガイアガンダム・ロアを持ち上げて、じつと見つめたまま黙り込んでいる。

そこへ、トモヒサが歩み寄った。

彼に感じた一抹の不安が、さつきから気に掛かっている。それはトモヒサも気付いていた様子で、親友である彼なら、何か行動を起こしてくれるに違いない。

ポンと、リクヤの肩に手を置くトモヒサ。

「…なんだ、その…そういう時もあるさ」

何とも頼りない言葉。

しかし、トモヒサもどう接するべきなのか考えあぐねているようで、その表情には焦りの色が見える。

「そ、そうだ。もつと改良して、次勝ちや…」

と、トモヒサがめげずに励まそうと声をかけた瞬間、リクヤが跳ねるように顔を上げた。

そして、ずんずんとジニアの前へと歩を進める。

スーパーグリーンを抱えてくるくるしていたジニアが、何事かと動きを止めた。

まさか…。

トモヒサも気付いた。慌てて駆け寄ろうとする。

が、突然にリクヤが土下座の姿勢を取った。
そのまま、声を張り上げる。

「ファイターと見込んで頼む！ガンプラ部に入部してくれ！そして、選手権に出場してほしい！」

思わぬ懇願に、全員が静かになった。

土下座の姿勢のまま動かないリクヤへ、トモヒサが駆け寄る。

「リクヤ、お前何言ってる…」

「トモヒサ、エントリーを待ってくれと言ったのは、新しいメンバーを見付けるためなんだ」

「新しい、メンバー…？」

予想外のリクヤの言葉を聞き、怪訝な顔をするトモヒサ。
リクヤが立ち上がる。

「…去年の選手権が終わった後に気付いたんだ。俺は、バトルよりガンプラ制作がしたいんだって」

そしてトモヒサに向き直る。

「今まで言わなくて悪かった。でも、こんなに見つかるまで時間がかかるとは思わなくてな…」

「お前、そんなこと考えてたのかよ……」

親友の告白に驚いたようで、トモヒサはそれっきり黙り込んだ。

ホウカも見たことがない、弱気な顔になるリクヤ。

そんなことを考えていたとは。

以前バトルをした時に、彼の腕は確かだと思った。あの時は勝利を収めることができたが、状況が違えば結果は違っていただろう。さすがは選手権に出場したファイターと言える。

しかし、内心の複雑な感情は読み取ることができなかった。

正直、自分がかけるべき言葉が見付からない。やはり、トモヒサに任せるべきだろう。

そう思っていると、トモヒサが動いた。

ぐつと拳を握ったかと思うと、竦ませているリクヤの肩を小突く。

「そういうことなら、一緒に探してやるのによ。水臭すぎるぜ」
そうして、強く笑いかけた。

彼がよくする、勇気をくれるような笑顔だ。

ホウカはホツと胸を撫で下ろす。

それでこそ、トモヒサだ。

「でもよ、その前に…お前がやつと見付けたガンプファイターに確認しないといけねえんじゃねえか？」

ジニアのことだ。まだ全ては解決していない。

それを聞き、リクヤがハツとしてジニアに向き直った。

「だから、頼む！ガンプラ部に入部してくれ！」

腰を折って、先輩という立場を捨てて頼み込むリクヤ。

彼女の返答を、固唾を飲んで待…

「おっけー、いいよ！」

あっさり！。

三人は思いつきりずっこけた。

場の重い空気をメガ粒子砲か何かで薙ぎ払ったジニアに、トモヒサが抗議の声を上げる。

「い、いや、少しは迷えよ！お前だって演劇部とか諸々あるだろ！」

「ダイジョーブだよー。選手権予選と全国大会の日に総文祭やらないし。リハは上手く都合つけるし」

などと、涼しい顔でジニアは軽い返事を返す。

「詳しいんだな…」

「全日本選手権は毎年ネットで見てたもん！」

ぱつと笑顔になった。

トモヒサは、目眩を起こしたようにふらふらとバトルシステムに寄りかかる。

そして、入れ替わるようにリクヤがよろよろと歩み寄った。

なんだろう、この光景…。

「じゃあ、頼んでもいいんだな…?」

「だからいいってばー」

何度言わせるの？と表情に書かれているかとばかりに、細い眉毛を

八の字にしてムスつとするジニア。

「…ということらしいが、ホウカ。お前はいいか？」

立ち直ったトモヒサが、こちらへ歩み寄る。

その問いに対して、ホウカは頷いた。

「私はいいいと思います。先輩が、決めたことですし」

「済まないな、キンジョウ。ありがとう」

頭を下げるリクヤ。

「じゃあ、チーム名も新しくしようよ！」

その後ろから、ジニアがひよこつと出てくる。黄金色の瞳がキラキラ輝いているように見えた。

トモヒサは溜息を一つ、腰に手を当ててジニアに促す。

「その顔は言いたくてしようがないって顔だな。言ってみろ」

ジニアはぶんぶん頭を縦に振って、右手を上げた。

「はい閣下！チーム『スターブロッサム』がいいと思います！」

選手宣誓をするかのように威勢の良い声と姿勢で、ジニアが宣言する。

自信満々のドヤ顔で、選手宣誓ポーズのままムフーと鼻息を漏らす。

ホウカは、そのチーム名を反芻した。

「スター、ブロッサム…」

「キラキラしたネーミングな…いや誰が閣下だ！」

「えっとね、由来はホーカの花のイメージと、『スターブレイカーズ』からスターを取って『スターブロッサム』！綺麗でかっこいいでしょ？」

トモヒサのツッコミを受け流し、眉をV字にしながら自信に満ちた顔で力説するジニア。

ホウカは、頷いた。

「私はいいいと思うな、『スターブロッサム』」

「俺も賛成だ。女子が二人になって、チーム名にも華があっただけじゃないか」

リクヤも、同じように頷く。

「…俺には眩しいが、まあ確かに案があるわけでもないしな…」
トモヒサは、今ひとつ煮え切らないように唸る。

「…ま、賛成多数か。よし、いいだろう。それで行こう」
だが、一同を見渡して納得した。

ジニアの表情が花のように咲き誇る。

「やったー！チーム『スターブロッサム』！結成だね!!」

「ジ、ジニー!？」

「ちよ、おい!」

そして、こちらへ飛びかかってきて抱き着いた。

「当たってる！お前、当たってるから!」

ジニアの胸が、抱き抱えられている自分達の腕にぐいぐいと押し当てられていた。

ホウカは、騒ぐこちらを見るリクヤの、呆れつつも笑みを零す姿を横目で見ると。

「ロア、お疲れ様」

そして、右手に持っている愛機たるガイアガンダム・ロアに視線を落とす。

彼は優しげな表情で笑っていた。

.....

円筒状のスペースコロニーの空を飛び抜ける、赤黒い機体。

それは、巡航形態のストライダーモードから変形した。両肩に大きなバインダーを備え、胸に髑髏の意匠が刻まれたモビルスーツが隻眼を光らせる。

「うん、いい仕上がりだ。ガンダムAGE―2バンガード…私の愛機」
黒と赤に塗装されたガンプラ―ガンダムAGE―2バンガードは、右手に備えるドッズソードの具合を確かめるように振って、刀身を隻眼で一瞥した。

突然、アラート音が鳴り響く。

前方から、演習用の機体であるハイモックが向かってきていた。長

い尾と翼が生えており、ガンダムAGEに登場するヴェイガン系モビルスーツを彷彿とさせた。

「面白い、ダークハウンドを元にしてこのバンガードの相手に、相応しいと言わべきかな」

バンガードのファイターである女生徒が、ホログラムコンソールの青い照り返しを受ける口元をにやつかせる。コントロールスフィアを操作し、ストライダーモードへ再び変形したバンガードを飛び出させた。

ハイモックはCPUながらに遅れず反応し、恐らくヴェイガン系を意識しているであろう両手のビームバルカンを発射した。

ばら撒かれる黄色いビームの弾丸に、バンガードは追従を許さない。コロニーの空を切り裂くように飛び、一瞬の内にハイモックの頭上を捉える。

ハイモックは牽制しようと、頭上へビームバルカンの砲口を向けて撃ち込む。

「そんなものでは……！」

バンガードは再度モビルスーツ形態に変形し、弾幕の最中へ落下した。

四肢やバインダーの動きによる遠心を器用に駆使し、重力下にも関わらず空中で姿勢制御。下からの弾幕を器用に掻い潜る。

そしてドッズソードの切先を、次の行動に移ろうとしたハイモックのヘルメット状頭部に突き刺した。そして、片足でハイモックを抑えてドッズソードを引き抜く。

爆発するハイモックを背にして、赤黒いガンダムは隻眼を輝かせた。

「この機体なら……今年こそは」

董色の長いポニーテールを揺らしながら女生徒——カンザキ・ツツジは、バトルの終了したフィールドに歩み寄り、ガンダムAGE—2バンガードを持ち上げる。

右目にかかるかと言う程に長い前髪の隙間から、強い眼光が覗いた。

A c t . 0 2 『通常のダインの三倍の速さ』 E N D

Act. 03 『先陣 ― バンガード』

週が明け、日曜日。

三人は、新生英志学園チーム「スターブロッサム」のエントリーのため、学園から車で15分ほどの場所にあるプラモデルショップ「ビッグリング」をマリコの引率で訪れていた。

この新生チームの噂は瞬く間に学園中を駆け巡り、去年からメンバーが変わってキンジョウ・ホウカとジニア・ラインアリスが加わったことで、一大ニュースになっている。

リクヤの一件に関しても、学園のガンプラ仲間の界限で大きな事件として取り上げられ、当の本人は連日の質問攻めを食らっていた（どうやら学園新聞でも取り上げるらしい）。

そんな経緯を経ながら、チーム「スターブロッサム」は選手権のエントリーを迎えた。

「はい、これでエントリーは終わったよ」

爽やか、かつ深みのある声をかけるのは、ふわりと軽そうな金髪を七三分ける、優しい顔立ちの好青年である。背もすらりと高く、ファッション雑誌のモデルのような印象を受ける。

ただし首からかけるエプロンと、それにプリントされている「燃え上がれガンプラ!」という達筆さえなければ、である。

ホウカは、ホビーショップという場所に馴染みがないため、少し警戒しながらトモヒサ達の後を着いていた。普通のデパートなどで見かける玩具販売スペースとは違い、幼児用玩具特有のカラフルさはここにはない。

大量に積み重ねられたプラモデルの箱、ショーケースに並ぶ豪華な作例、さらに工具や塗料など、まさに専門店らしい店内である。

そんな、いかにも趣味人のテリトリーと呼ぶべき場所に、雑誌やテレビで見るかのような爽やかな青年がいたことでホウカは思わず緊張してしまった。

「店長、今日は新人二人を連れてきたよ。挨拶してやっておくれ」

マリコが、後ろにいるホウカとジニアの背中を押した。押し出された二人に、青年の視線が注がれる。

「お、君達がトモヒサくんの言っていたホウカさんとジニアさんだね？」

「は、はじめまして」

「オイツー！」

ホウカは挨拶をして、軽く会釈をした。ジニアは元気よく右手を上げる。

「はい、初めまして。ぼくはフルデ・アルト。このプラモデルショップ『ビッグリング』の店長をやらせてもらってるよ」

対する青年——フルデ・アルトは、挨拶と共に二人へ笑いかけた。

「こんなかわいらしいお嬢さん達だとは聞いてなかったよ、トモヒサ君。人が悪いなあ」

「そんな情報はガンプラバトルにや関係ねえっすからね」

そう言い合いながら、アルトとトモヒサはふざけ合う。その姿は、まるで大学の先輩と後輩のようである。二人の歳はそれなりに離れていそうだが、トモヒサが大学生のような外見ということもあって違和感のなさを助長していた。

「君達のようなお嬢さんが来てくれるなんて、ぼくは嬉しいよ」

再び笑いかけるアルト。

ホウカは「あ、ありがとうございます…」と言いながら恥ずかしそうに顔を赤らめ、ジニアは照れたようにサイドテールを弄ぶ。

「店長、二人の可愛らしさには概ね同意するが、そろそろ登録を願うよ」

「おっと、そうでした」

そうマリコに諭され、思い出したようにアルトは奥へと一同を招く。

マリコにまで茶化され、ホウカは真っ赤に茹で上がった。

「なんだ、トランザムか？」

「ッ！」

ホウカは声にならない声を出しながら、からかうトモヒサの背中を

叩いた。

案内された場所は、ガン普拉バトル専用のスペースだった。バトルシステムの核を担う、ヘックス型のユニットが幾つも並んでいる。スペースの入口にある立て看板には、「ガン普拉バトルレートマッチ開催！」と賑やかなレイアウトで書かれた貼り紙が貼ってあった。

ガン普拉バトルレートマッチとは、毎週日曜日に開催される特殊なバトル方式である。

登録者はクラスで分別され、下から「エレメンタリークラス」、「インターミドルクラス」、そして「アドバンスドクラス」となる。このクラスを参照し、ランダムにマッチングするのだ。勝ち星が七つずつ揃うことで、クラスアップするシステムである。

三年前に実装され、実力に見合ったファイター同士で互いに切磋琢磨できるとして、好評を博している。ガン普拉バトル初心者の登竜門に最適とされ、こちらにおいても非常に有用だ。

バトルスペースにある綺麗に整頓されたカウンターの上に、コンビニのレジなどにあるような電子端末に似た機器が設置されていた。

「レートマッチの登録はここだよ」

アルトがカウンターに設えてあるコンソールを叩く。それを合図としたかのように、トモヒサがホウカとジニアに説明を始めた。

「登録は簡単だ。こうしてGPベースを翳して…」

トモヒサはGPベースを電子端末に翳す。すると効果音が鳴った。

「はい、終わり」

登録が完了する。

ガン普拉バトルに必要な不可欠の端末であるGPベースには、レートマッチでの成績も蓄積されているのだ。ホウカとジニアは、今日がレートマッチ初参戦となるため、エレメンタリークラスからのスタートである。

二人もトモヒサに倣い、自分のGPベースを端末に翳して登録を終えた。

「それじゃあ、時間までガンプラの調整しながら待っててね」

三人分の登録を済ませたアルトが言う。

辺りを見渡すと、既に相当な人数が登録を済ませているようだ。それぞれ自分のガンプラの様子を確認したり、談笑したりしている。

ホウカ達もそれに倣い、空いている机へ移動した。

「できたよ見て見て〜！選手権用のガンプラ！」

席に着くやいなや、ジニアがケースから取り出したガンプラが作業机に置かれ、一同へ初の御披露目となる。

置かれたそのガンプラに視線を注ぐ一同。

「その名も『ハルジオン』！私が好きな花の名前なんだよ〜！」

自信満々なドヤ顔をしながら、ジニアは豊かな胸を仰げ反らせる。

「わ、ジニーもうできたの？すごいね」

「スーパーグリーンじゃなかったんだな…」

ホウカとトモヒサは、置かれたガンプラ——ハルジオンを見る。

「実はちよつと前から作ってたんだ〜」

えへへ、と笑いながら頭をかくジニア。

ハルジオンはガンダム0083に登場するガーベラ・テトラに酷似しているが、そのスタイルは全く異なっていた。

曲線的な脚部とフレア状に広がった頭部は確かにガーベラ・テトラのものだが、股関節から胴体、腕にかけては直線的な形状をしている。腕部からは大きなウイングのようなパーツが袖のように伸びており、右手には大きなライフルが握られていた。

とりわけ特徴的なのがバックパックであり、可動域を有するバーニアノズルが突き出している。

どこかで見たことがあるとホウカは思いながら、出かかっているそのの正体を記憶から探す。

「これは…ガーベラ・テトラと克蘭シエのミキシングか？」

「あつたり〜！」

指摘するトモヒサに、指をパチンと鳴らしながらジニアはウインクを飛ばした。

「あ、克蘭シエ！AGEに出てくるモバイルスーツだよね？」

ホウカもようやく記憶と結び付く。

「ホーカも正解！」

「この機体色は…弄ってないだろ？ガーベラ・テトラと克蘭シエの成形色が同じことを利用したのか。それにこのバックパック、ガーベラ・テトラの余りパーツでできてるよな」

トモヒサが言うように、ハルジオンの機体色はガーベラ・テトラと克蘭シエの成形色そのままのようだ。克蘭シエのホワイトこそ明るめにリペイントされているが、ピンク部分は元のカラーリングそのままである。下地をそのままに、トップコートとスミ入れて仕上げられているようだ。

そしてトモヒサが指摘したように、バックパックはガーベラ・テトラの腕部と肩部バーニアが巧みに組み合わさっているものだった。

「ガンプラ作る時間もそんなにないからねー。余ったので組み合わせたらできちゃった！」

ぶい、とジニアは右手でピースをする。

「ハルジオン、キク科の花だね。花言葉は『追想の愛』」

ジニアの隣の席に脚を組んで座るのは、シマ・マリコ教師である。

「シーマ様くつわしー」

「趣味でかじってるだけだよ」

と、小さく笑うマリコ。

後から聞かされたことだが、マリコはジニアが留学してくる前から既に面識があつたらしい。一体どういう関係なのかは言っていないが、ガンプラ関係であることはホウカにも察しができる。マリコの謎がまた増えた気がした。

「追想の愛…なんか素敵かも」

「よくわかんないけどねー」

「俺もよく分かん」

ホウカの言葉とは裏腹に、難色を示すトモヒサとジニア。

「…あなた達は分かんんでもよろしい」

マリコは少し呆れていた。

「そうだ、俺もホウカに渡すもんがあつたな」

トモヒサは思い出したようにポストンバッグを開け、小さな黒いキャリングケースを取り出す。丁度HGスケールのガンプラが収ま

りそんな大ききで、メカニカルなモールドが表面に刻まれている。トモヒサは、それをホウカに差し出した。

ホウカは受け取り、ロックを外してケースを開く。その中には、内装スポンジに包まれて固定されるGPO3ステイメンがあつた。そしてその傍らには、ステイメンのバックパックと板状のパーツも収められている。

ホウカはそれらを持ち上げ、その出来栄えに見惚れる。

「いきなりの実戦で悪い。バックパックの加工に時間がかかっちゃまってな…急拵えだが、ファンネル試験機として改造した」

「ううん…すごく綺麗」

バックパックを本体に嵌め込み、板状のパーツ・フィン・ファンネルに似たそれを、バックパックに増設されているマウント基部へ取り付けた。上向きで斜めに並ぶ二枚のファンネルが、ホウカにレガンダムのシルエットを思い起こさせる。

トモヒサの向かいに座るジニアも、ホウカの持つステイメンを覗き込んだ。

「ヒューー！連邦の精神が形になったようだね！」

「デラーズが白眼剥きそうなセリフだな！」

最早条件反射の域である。トモヒサのツツコミが鋭く冴え渡った。

「キンジョウ、確かにガンプラの出来栄えはバトルに反映される。でも、それ以上に大事なのは、あんた自身だつてことを忘れるんじゃないよ」

「はい」

正面に座るマリコが、見惚れるホウカに念を押す。

「オレの腕は褒めてくれないんですね」

「今更わざわざ言うまでもないだろ」

若干拗ねたように文句を言うトモヒサに、マリコが返した。

マリコがトモヒサのガンプラ制作技術を認めていることは周知のことである。事実、トモヒサの作るガンプラはどれも高い完成度を誇り、彼がガンプラ部の部長を任されるのも当然の成り行きだったと言えた。

そんなやりとりをしながら、レートマッチの開催まであと15分となる。

.....

巨大な小惑星の表面を、単射モードに切り替わったビームライフルの光軸が掠めた。

「ちよこまかと!」

続けて二発。ビームが堆積層^{レゴリス}を巻き上げながら表面を穿つ。

無数のクレーターが刻まれる小惑星の表面を滑りながら、絶え間ないギラ・ドーガの射撃を交わすステイメン。

ホウカは、コントロールスフィアを操作してファンネルを選択した。

「行つて、ファンネル!」

ステイメンのバックパックから、二枚のファンネルが射出される。「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」に登場するレガンダムのフィン・ファンネルに似ているが、より薄く、より鋭い。裏側には、砲口を覗かせるビーム発振装置のようなものを取り付けられている。

ステイメンが左手を払うと、それに倣うかのように、ファンネルが滑らかな軌道を描いて飛んで行つた。

瞬く間にギラ・ドーガに迫り、相手のファイターが慌てて操作する。「ファンネルだと...!は、早い!?!」

速射モードに切り替えられたビームライフルが、撃ち落とさんどばかりに周囲を飛ぶファンネルに弾幕を見舞つた。だが、無窮の闇を裂くかのように飛ぶファンネルに掠りもしない。

ファンネル一基に釘付けになっているギラ・ドーガの背後を、もう一基が捉える。ビーム発振装置の砲口に粒子の輝きが灯つた。

——ビシュッ!

放たれる細く鋭いビーム。それはギラ・ドーガの左肩を貫いた。

「ツぐう!?!」

その衝撃に煽られ、濃緑の機体が体勢を崩す。すかさず二基目の

ファンネルがビームを撃つ。

しかし、ギラ・ドーガは踝のバーニアを噴射させて、その射撃をギリギリで回避した。そのまま全身のバーニアも使い、ファンネルの攻撃圏内を脱する。そして、リアアーマーにマウントされているビームソードアックスを手に取り、飛び出た黄色いビームが粒子変容効果を存分に発揮し、アックスの形状を取る。

「牽制がダメなら、こっちから行くまで！」

ビームライフルを投げ捨て、ビームアックスを両手持ちにする。翻弄していたファンネルが、今度はギラ・ドーガの攻撃対象となった。「ッ!？」

ホウカは動揺した。既にレートマッチは四戦を経験し、このファンネルの扱いにも慣れてきていた。しかし、自らファンネルを近接で破壊しに来たのはこのギラ・ドーガ、そして相手の男性ファイターが初めてだった。

だが、ホウカは気を持ち直す。

ギラ・ドーガはビームアックスを振り回し、見た目から想像できないような機動性を見せてファンネルに斬りかかっている。

「獲ったッ！」

そして、ファンネルが軌道を変更しようとした、その一瞬の隙に狙いをつけた。

しかし、

「な、にイ!？」

ギラ・ドーガがビームアックスを振り被った下から、ステイメンが躍り出てきた。ファンネルを破壊することに集中する余り、ステイメン自体の行動に意識が向いていなかったのだろう。相手のファイターが驚愕する。

ステイメンは、右手に握るビームサーベルを斬り上げ、その光斧を弾き飛ばした。

「アックスが!？」

そしてステイメンは、左手を上へと掲げる。二基のファンネルが、得物を失ったギラ・ドーガの上下を捉えた。薄く成形されたファンネ

ルが妖しくぎらつく。

ホウカは、ステイメンの左手を振り下ろさせた。それを受け、ファンネルがギラ・ドーガの体を縦横に駆け抜ける。

「…なっ…」

そして、細切れにされるギラ・ドーガ。

ステイメンの背部にファンネルが収まると、まるで特撮番組のように時間差を空けてギラ・ドーガが爆発した。

『BATTLE END!』

決着がつき、プラフスキー粒子が分解していく。青い輝きがバトルシステムへ消えた。

レートマッチでのダメージレベルはCに設定されている。一日に多くのバトルをローテーションするため、ガンプラへの反動は抑えられているのだ。

ホウカは、盤面に立つGPO3ステイメン―ファンネル試験機を持ち上げ、相手のファイターに一礼を送る。

「ありがとうございます」

「お、あ、ありがとうございます」

大学生らしき男性ファイターが、ギラ・ドーガを手に取りながら慌てて礼を返した。そして顔を上げ、一瞬ホウカの持つステイメンに熱意の籠った視線を投げてから、去っていった。

「お、終わったようだな」

トモヒサが声をかけてきた。

その手には、彼の愛機であるガンダムサレナがある。漆を上塗り塗つたような光沢の黒い機体色が、室内灯を反射した。

MLRS仕様に換装されており、常には携行しないビームライフル（ステイメンのものと同型）も握られている。トモヒサ曰く、基本に立ち返ってみたとのことだ。

その戦績は好調らしく、さらにホウカより一足早く決着がついていた。

トモヒサはアドバンスドクラスであるため、これ以上クラスアップはしないが、最高クラスになってもレートマッチに参加する意義はあ

る。

バトルで獲得できる「BP」バトルポイント」と呼ばれる、ポイント制度の存在だ。

レートマッチと同時に実装された制度であり、フリーバトルや、各地で行われる大会などでも獲得できる。一定値のBPを消費することで様々なサービスを受けることができ、資金がかかってしまうガンプラ制作の助けとなるよう、ヤジマ商事が考案したものだった。

事前にマリコから受けたレートマッチ関連の説明を、ホウカは思い出す。

トモヒサもこれを活用しており、ほぼ毎週レートマッチに参加しているとのことだった。ちなみに、レートマッチでは通常より多めにBPを得ることができると、これも理由らしい。

「どうだ、ファンネルの具合は」

「うん、いい感じだよ。この子達」

「この子達って…ファンネルのことか？」

トモヒサが驚いたような顔をして、訝しむ。

「あ…う、うん。ダメ、かな？」

「ダメってことはないけどよ…なんつーか、お前らしい？」

つい自然と出てしまった言葉に、ホウカは慌てる。

自分の思うように動いてくれる二基のファンネルは、武器としての認識を薄れさせていた。体の一部のような、漠然としたイメージを感じている。

「おうおう、お二人さん楽しそうだねー」

ずい、と二人の間にジニアが割って入ってきた。

「どっから出てきたんだお前！」

その手にはハルジオンが握られている。

「ジニーも終わったの？」

「丁度さっきね！」

「結果はどうだったんだ？」

「もうバッチリ！今なら人の心の光を見せられる気がする！」

「ほーお？なら、たかが石ころ一つ、そのハルジオンで押し返してみる

か？」

ピースをするジニアと、聞いたことのある台詞を言うトモヒサ。その会話を聞きながら、ジニアがバトルをしていたユニットにホウカは目を移した。

休日の会社員らしき男性が、茫然自失といった様子で未だにユニット前で立ち尽くしている。彼がジニアのマッチング相手だったのだろうか、一体どんなバトルが繰り広げられていたのか。巨大なガトリングを持つザクラしきガンプラが、俯せで盤面に倒れている。

「まあ、ともあれ二人とも調子いいみたいだな。もしかしたら、今日中にインターミドルに上がれるんじゃないか？」

トモヒサが二人へと励ましの言葉をかけた。

「まっかせてよ！」

「が、がんばる」

ジニアはふんすと鼻を鳴らし、ホウカは小さくガッツポーズをする。

とはいえ、トモヒサの激励は気休め程度だろう。事実、ホウカは午前の部を終えてその戦績は二勝である。決して悪い成績ではなく、むしろ初参加にしての結果としては上々だ。しかし、一日で七勝を上げるのは途轍無理な話である。

他の参加者も、それぞれの指標を胸にレートマッチに参加しているだろう。インターミドルクラスへは、その立ち塞がる壁を突破せねばならないのだ。

ホウカ自身もよく理解しているつもりであり、それはどんな競技とも変わらないことである。トモヒサは、そういった気負いを緩めようとしてくれているのだと察した。

「午前で4V！午後も頑張ろうねハルジオン！」

∴ジニアは本気で七勝するつもりなのだろうか。

その後、三人は昼食を摂るためビッグリングを出た。午後の開催まで一時間ほどの余裕があり、その間に昼食を済ませてガンプラの調整も行うことになっている。

外ではマリコが待っており、三人を連れ立って歩く。事前に予約を

していたファミリーストランへ向かった。

.....

董色のポニーテールが、風を孕んで広がった。

晩春に差し掛かった暖かい風が吹き抜け、菱^{ひしあ}亜学園の深紅に彩られる制服を揺らす。

「今日は暖かいな」

背筋が伸びた姿勢で歩くカンザキ・ツツジは、ボストンバッグを担ぎ直しながら独りごちた。

駅からしばらく歩き、街中に出る。やがて、小ぢんまりとした構えの店の前に到着した。壁面看板には「プラモデル造形専門店 ミヤモト工房」と、筆字を再現した文字が彫られている。

今時珍しい押し戸の入口を潜る。カラコロと、これも今時珍しい入店音が鳴った。

塗料で汚れた箱や、作業机に雑に置かれた工具類。お世辞にも整頓されているとは言えない店内が、ツツジを迎える。

しかし、ツツジはそれに不満を述べはしなかった。

「いらっしやーい、ちよつと待っててくれー」

店の奥から男性の音がする。ドタドタと慌ただしい音を立てながら、男性が姿を現した。床に置かれたMGらしきガンプラの箱に躓く。

「おつととと…、誰だこんなどこにネモの箱置いた奴は」

と、犯人である自分へ苦言を呈した。

いつも通りの騒々しさに、ツツジはくすりと笑う。

「ミヤモトさん、私だ」

「おお、ツツジか。品は用意できてるぜ。そこの封がしてある箱だ、持ってけ」

ミヤモト工房の店主―ミヤモト・ロウは、足元を片付けながら（箱を重ねているだけだが）出入り口の脇に置かれているダンボール箱を顎で示した。

バンダナを頭に巻き、汚れた緑色の作業服を着るロウ。プラモデル店の店主というより自動車修理屋の若手、と言った方がしっくりくるようだ。

小脇に抱えられる大ききのダンボール箱を足元から持ち上げ、「菱亜学園様」と油性ペンで書かれた筆記をツツジは確認する。

「確かに、受領した」

「よろしくー」

ツツジは、ダンボール箱をボストンバッグに仕舞い込む。

箱を積み上げ終えたロウが、「あ、そうだ」と言つて立ち上がった。

「さつき、ビツグリングのアルト店長から連絡があつてな。今日のレートマッチに英志の新顔が参加してるらしいぞ」

「新顔？」

ツツジが、怪訝そうに目を細めた。

「もう少しでレートマッチの午後の部も終わる頃だし、ちよつと顔を出してみたらどうだ？」

店内に掛けられている時計を見ると、丁度午後の三時半に針が向いている。

顎に手を添えて、ツツジは少し思案してから言葉を返す。

「ありがとうミヤモトさん、行つてみることにするよ」

「そうか、トモヒサによろしく言つておいてくれ」

「承知した」

そう言葉を交わし、ツツジはミヤモト工房を後にした。

.....

「やっぱりダメだったよ」

どういうカラクリか、口から白煙を昇らせながらジニアが気の抜けた顔をする。

「驕ったな。油断大敵だぜ？」

トモヒサは言わんこつちやないと表情に映した。

午後四時。レートマッチは午後の部を終え、参加していたファイ

ター達が帰宅の準備をする中、ホウカ達は机を囲んでいる。

「だが、初陣にしては中々の戦績じゃないか」

マリコがジニアの肩を叩く。

「そうだよジニー。私も五勝だったんだもん」

レートマツチを終えて、二人の勝ち星は五つだった。

とは言え、午後の部だけで見ればホウカは三勝、ジニアは一勝という結果である。息巻いていたジニアにとっては、残念な結果となったようだ。

一方、トモヒサは六勝であり、意外にも午後の部では二勝だけとなった。しかし、内容は決して悪いものではない。今回のアドバンスドクラスは、その名に違わぬ強豪揃いだったとマリコ共々語る。

ホウカとしては、勝ち星五つという結果を好意的に捉えている。インターミドルクラスへは進級できなかったが、ファンネル運用の感覚を掴むには十分だった。

ホウカは、右手をぐっと握り、ゆっくりと開く。

(この、感覚なんだ…)

漠然とした何かが、ファンネルを指示する時のイメージをホウカに与える。ビームライフルやバズーカとは明らかに違う使用感。手足の延長、といった表現が最も適っているかもしれない。

「手首、どうかしたのか?」

隣に座るトモヒサが、思慮に沈みかけるホウカを呼び止めた。その手を覗き込んでいる。

思わず取り繕うホウカ。

「あ、ううん、何でもないよ」

「そうか?何かあったら、ちゃんと言えよ?三年前の選手権でも、怪我を黙ってて後に響いたファイターがいたからな」

「あ、知ってる!『アドウ・サガ』って、ガンプラ学園のファイターでしょ?」

落ち込んでいたのかと思っていたが、ジニアがいつも通りの元気のGを丸写したような表情で身を乗り出してきた。

トモヒサはげんなりした顔になる。

「お前は何なんだ…」

「あのガンプラ、『ガンダムジエンド』だったっけ？ かつこよかったなあ」

「俺の話は聞かねえし…」

恍惚とした表情で夢の世界へ旅立つジニア。トモヒサは深く溜息をつき、ホウカはあははと笑う。マリコは腕を組んだまま黙っていた。

各者各様、それぞれが表情を見せる中、カウンターでコンソールを叩くフルデ・アルトに、一人の来店者が声をかけた。

「どうも、フルデさん」

アルトが顔を上げる。

「ん？ やあ、ツツジさんか、いらっしやい。もうレートマッチは終わってしまったよ？」

対し、来店者の女生徒はかぶりを振った。董色のポニーテールが小さく揺れる。

「ああ、いや。今日は別件で立ち寄らせてもらった」

そして店内を見回し、ホウカ達の座る机を見付けて歩を進める。

その深紅に彩られた制服姿を逸早く確認したマリコが、女生徒に話しかけた。

「おや、”キャプテン・アゼリア”じゃないかい」

「シマさん、その渾名は辞めてくださいと言ったはずですよ？」

マリコの艶やか且つ不敵な視線に、伸びた前髪の奥から返す鋭い眼光。

女生徒―カンザキ・ツツジは、背筋の伸びた秀麗な長身を、堂々たる佇まいで四人の前に立った。

「…菱亜か。そのエースが何の用だ？」

トモヒサが、声音を落としてツツジを見遣る。

ツツジは、ふふ、と微笑を浮かべた。

「英志の”黒い悪夢”の遺恨は深いね。私も、彼には手を焼いている」

「…悪い、あんたに当たってもしょうがねえ」

「いい、気にしていないよ」

そう、互いに言葉を交わす。

少し緊張した空気を感じながらジニアと静観していたホウカは、ツツジを見て思った。

(綺麗な人だな…)

場を弁えていないことは承知しているが、そう思わずにはいられなかった。

何よりもホウカの興味を引いたのが、学生らしからぬ鋭い眼力を持つ青眼である。以前、ある流派の男性と軽く組手を行った際に、今の彼女と似たものを彼の目に感じたことがあるのを思い出す。

(何か武道を習ってる人かな)

しかしその佇まいは、空手等の体術を扱う者のそれとは異なっているように感じる。

その彼女の目が、うっかり見詰めてしまっていたホウカに向けられた。

「君達か、英志の新顔というのは」

「え？」

鋭さはそのままに、視線が優しげなものへと変わる。

「少々、耳にしたものでな。菱亜学園チーム『ハウンドクロス』のリーダー、カンザキ・ツツジという者だ。以後、見知り置き…」

「あああ?!ハウンドクロスって、去年の全国大会出場チームだ!!」

ツツジが名乗りを終えようとした寸前で、ジニアがガタツと椅子から立ち上がってそれを遮った。殴りかかるカミーユ・ビダンの如き疾走でツツジに駆け寄り、キラキラした黄金色の両目が向けられる。

「去年の全国大会観たよ!惜しかったけど、とつてもかつこよかった!」

「ああ、それは光栄だ。ありがとう」

「本物のキャプテンだあ〜」

メガ粒子でも混ざっているかと思う眼差しに一瞬たじろぎながら、ツツジは誇らしげに笑いかけた。ジニアは握手を求め、快諾したツツジの手をがっしり掴む。

「その元気なのがジニア・ラインアリスで、こつちに座ってるのがキン

ジヨウ・ホウカ」

トモヒサの紹介を受け、ホウカは軽く頭を下げた。

そして、にっと口角を上げるトモヒサ。

「うちの新しいエースだ」

「……………えっ?」

初耳だった。

「ト、トモにい? どういう…」

「ま、そういうこった」

「おおう! すごいねホーカ!」

「なんだ、まだ言ってなかったのかい」

ジニアは驚いてぴよんと跳ね、マリコはくつくつと笑いを堪える。

突然の宣言をしたトモヒサは、腕を組んでふんぞり返った。

ツツジの視線が、一際強まる。

「それは興味深い。シンイチの席を継ぐ新たなエースの実力、見てみ

たいものだ」

「トモにいく…」

助けを請うようにトモヒサを見るが、年上の幼馴染はケラケラと

笑っている。またからかわれたと、ホウカはぷっくりと膨れ上がった。

「いい機会だ、キンジヨウ。試合をするには、これ以上ない程の相手だ

よ」

と、マリコが提案する。

そういう大事なことは事前に、今日はもう疲れた、などと色々な不

平を頭に浮かべるホウカ。だが、確かにカンザキ・ツツジという目の

前のファイターが如何なる実力を持つのか、純然たる興味を抱いてい

るのも否定できなかった。

ツツジは既にその気らしい。ボストンバッグを開き、ケースを取り

出す。

「ふふ、顔を出した甲斐があったというものだ」

「はーい! じゃあバトルシステム起動しちゃうよー!」

いつの間にも移動したのか、奥のスペースにあるヘックスユニットを

出す。

起動させるジニア。

ホウカが答える前に、済し崩し的に話が進んでいく。

しかし、事ここに及んで、答えは決まっていた。

「…手合わせ、宜しくお願いします」

.....

「カンザキ・ツツジ、ガンダムAGE-2バンガード、斬り込む！」

カタパルトを滑走して空に躍り出る。ストライダーモードに変形したバンガードが、鬱蒼と生い茂る熱帯林の空を飛んだ。

眼下に広がる密林は宇宙世紀のジャブローを思わせるが、フィールドのほぼ中心に存在する巨大なカルデラがそれを否定した。

「なるほど、ロストロウランか」

ジャブローをオマーージュとした、地球連邦軍最大の拠点であるガンダムAGEに登場する地下秘密基地。総司令部ビッグリング基地がデイグマゼノン砲によつて壊滅した後、連邦軍の新たな司令部として機能する場所だ。

システムがランダムに選定したフィールドとはいえ、趣向の凝つたものだとツツジは思う。近年は、そういった部分での”遊び”もヤマ商事は積極的に行っているらしい。

と、索敵を行うセンサーが反応した。映像を拡大し、大まかなガンブラのパラメータが表示される。

「ステイメンのファンネル試験機…。こちらも小粋なものだ」

敬服すべきはカトー・トモヒサの制作技術である。パラメータ上の総合性能の高さと、ファンネルをステイメンに組み込むという発想は、やはり舌を巻かざるを得ない。

しかし、今、最も興味があるのは、キンジョウ・ホウカのファイターとしての技量だ。

「試させてもらおうぞ」

ツツジは、コントロールスフィアを握り込んだ。

機首になっているドツズソードの根元両側から、螺旋状のビームが

二つ並列発射される。それと同時にバーニアの推力を上げ、熱帯の空を切り裂くように飛び抜ける。

ステイメンはその二射を難なく避け、同じようにビームライフルでの応戦を仕掛けてきた。速度を落とさず、エルロンロール曲技飛行でビームを交わす。

更にビームバルカンを撃ちながら、距離を一気に詰めるバンガード。相手に対応する前に急接近し、こちらの動きを理解させる前に間合いへと入る。

これこそ、チーム「ハウンドクロス」のエース、そして一番槍の真髓だ。

ステイメンを前に変形し、右手に持ったドッズソードを左脇へと押し込む。

鍛え抜いた瞬発力を持って、見えぬ鞘から抜刀された剣先が、前へと振り抜かれた。

必殺の、居合。

しかし、

——ギイン！

それを、

「なッ…」

ビームサーベルが受け止めていた。

(これを…止めるか！)

”キャプテン・アゼリア”の必殺の居合。

斬り抜けないファイターは、片手で数える程しかない。

故の勝負。この一撃で倒せてしまう相手なら、それまでと思っていた。

が、それどころかステイメンは受け止めてみせる。

(否が応でも……燃えさせてくれるな！)

一つ、思い違いをしていた。

ドッズソードの居合をビームサーベル一本で受け止めたことは、確

かに衝撃に足るものだ。

しかしそれ以上に、自身が鍛えた瞬発力から繰り出す居合に対応し切る、その鋭敏な反応力を発揮したファイターの存在。

何と言う、面白さか。

「ファンネル！」

「ッ！」

キンジョウ・ホウカが、ファンネルを射出した。

バンガードを後退させ、再度ストライダーモードへ可変させてその場を離脱する。

無論、居合だけで終わるつもりはなかったが、遠隔武器が相手ではそう言ってもいられない。

「ファンネルの対処は、やはりこれに尽きる！」

モビルスーツ形態へ変形し、ドッズソードを振る。滑らかな軌道で迫る二基のファンネルが、陽光を反射してぎらついた。

バンガードは回避行動を取らず、ファンネルと相対す。

初撃が始まった。二基が同時に鋭いビームを放ち、直後にフォーメーションを崩して別の角度を取ろうとする。驚く程に流麗な動きだ。

バンガードは粒子攪乱塗料を施したバインダーの表面で二射を受け、ファンネルの軌道を注視しながらバーニアを噴かす。

そして、先を読んでドッズソードを手前に引く。

「ッ!？」

しかし、アラート音が攻撃を報せた。

寸前、ツツジは機全体でブレーキをかけた。眼前をメガ粒子の奔流が通り過ぎる。

続け様、ファンネルの射撃。

「——やアッ！」

機体を回転させ、素早くバインダーを振って防ぎ切る。

バンガードは袖を払うようにバインダーを下ろし、隻眼で敵機を睨んだ。

「ほう、面白いファンネルの使い方だ」

「はい。この方が、この子達と連携が取れるので」

カルデラの外縁、白い岩肌を露出させる山腹に着地する二機。

ステイメンが左手を横に開く。それに従うかのように、二基のファンネルが背部に戻った。

その動作は本人が意識しているのか、それとも無意識なのかは分からない。ファンネルにしても、直角的に動くフィン・ファンネルと言うより、その滑らかな動きはCファンネルを彷彿とさせる。薄く刃のように成形された部分は、恐らく斬撃用の加工だろう。

(然もキオ・アスノのような動き：それにファンネルをこの子とは。ますます小粋なものだ)

ダークハウンドからそのまま継いだ隻眼の奥から、鋭い輝きがステイメンを刺す。

.....

古武術。即ち、古くから日本に存在する戦闘技術の体系である。

柔術や剣術、棒術等、武芸十八般とも言われる技を内包する。その一派である「花鳥風月流」にも、刀法を用いたものがあつた。

ホウカが小学四年生になった頃。拙いながらも型を覚えつつあつた彼女は、師から竹刀による立会い稽古を一通り教えられた。しかし、元来体が小さい上に筋肉が付きにくい事から、危険だとして実際では早々に見切りをつけていたのだ。

それでも意欲を示したホウカの希望を汲み、バトルシステム上でのみ稽古を続けた。

実演ではないにしても、ある程度の剣術の心得は身に付けているつもりだ。

(あれは、居合術……！)

あの赤黒いダークハウンド——バンガードと言っただろうか——の驚異的な運動性能と加速による接敵、そして繰り出される居合は、心得がなかったらホウカは受け止められなかっただろう。実際、反応できたのは奇跡だった。

ガンプラ自体の完成度も、業物と言える出来だとホウカの目でも分かる。カンザキ・ツツジ本人の剣技と、ガンダムAGE―2バンガードの機体性能に裏打ちされた実力（ガンダム的に言えばプレッシャー）がひしひしと伝わってきた。

しかし、ホウカとて一人のガンプラファイター。マリコの教えを実行に移しながら、密林の只中を飛ぶ。

「オブジェクトを活用したマニューバ…いい動きだ」

バンガードのビーム攻撃を避けつつ、時に樹木を縦にして爪牙を掻い潜る。アサクラ教頭とのバトルの際にデブリを盾にした経験を、重力下でも活用できないかと考えた。その結果、こうして接敵されにくい状況を作り出すことに成功している。

しかし、長くは続かない。

「あつ!？」

先刻の、白い岩肌の山腹に飛び出してしまった。

「いい動きだが、攻勢に転じなければ何れこうなろう!」

予測したのか、ストライダーモードのバンガードが密林の空に飛び出して弾幕を見舞った。

直線的な射撃だが、ステイメンの逃げ道を的確に穿つ。

「うっ…くっ!」

必死にそれを避けるが、ファンネルを射出する暇どころかビームライフルで応戦さえできない。何とか体の捌きで被弾を免れてはいるが、この攻撃は直接のダメージを狙ったものではないと直感する。

瞬間、ハツとして見上げた先、頭上から落ちてくるバンガードが人型を取る。

「そアツ!!」

ドッズソードを低く上段に構え、機体重量ごと斬撃に乗せる。

咄嗟に半身を取ったステイメンは、腰部バインダーを噴射させた。ギリギリで避け、機体の胸元のすぐ前を剣先が通り過ぎ、岩肌を砕く。

「フーン!」

「ッ!!」

からの、回し蹴り。

腹部へまともに打ち込まれ、ステイメンが吹っ飛ぶ。

しかし勢いには逆らわず、バーニアの噴射と共に機体を側転させて着地した。

ズザザザ、と山肌を削りながら留まる。

「見事な体捌き、だが！」

バンガードはリアアーマーのサーベル柄を掴み、ビームを発生させたまま投擲した。

それが、深々とステイメンの右腕に突き刺さる。

「——ッ!？」

虚を衝かれた。

ドツズソードから発射されたドツズガンを受け、右腕がビームライフル諸共爆発する。大きく後退し、ステイメンがカルデラの頂に足を取られる。

そのまま仰向けに倒れ、カルデラの中へと転がり落ちた。

ホログラムコンソールが赤い警告色に変わり、けたたましいアラート音がホウカの耳朵を叩く。失態を犯した自分を叱るのは後にし、コントロールスフィアを大振りに動かす。

バーニアの噴射と共に、蹴り上げるように宙返りするステイメン。水飛沫を上げながら湖に着地し、頭から没することだけは回避した。

しかし、呼吸を整える間もなく、赤黒い鏃やじりと化したバンガードが突進してくる。

その先端は、ドツズソード。

咄嗟にファンネルが射出され、ステイメンの盾となる。

構わず、突つ込むバンガードの機首が、盾となったファンネルを弾き飛ばす。

——至近距離、接敵。

「獲ったッ！」

串刺しにされる——

「——ハアッ！」

パアン、と、小気味のいい音。

胸部を、黄色いダクトをドツズソードの鋒きつさきに挟つかまれながら、半身を取るステイメン。

そして残された左腕、その掌底が、ドツズソードを叩いた音だ。僅かに傾ぐ、赤黒い鏃。

「——な」

さらに、弾き飛ばされていた二基のファンネルが、生じた僅かな間隙を狙ってその刃を閃かせる。

狙うは胴体、ストライダーモードとなっている機体の中央。

ステイメンが、左腕を横に振る。

「はああッ！」

だが、それでも。

「——せいやッ！」

刹那、変形した赤黒い鏃は、先陣パを名乗る戦士ガになって、回る。回って、ファンネルを二つ、斬り伏せた。

ザザン、と湖に着地し、爆発を背にして隻眼を輝かせる。

深く腰を落とした姿勢。

膂力を限界まで込めた両足。

見えぬ鞘に納められた、ドツズソード。

(この構え——！)

必殺の、居合。

そして理解する。

密林の中を飛びながら翻弄していたのは、カンザキ・ツツジの方。右腕を狙ったのはカルデラに落とすためではなく、この瞬間、この一撃のため。

そう気付いた時には、既に刃は振り抜かれた後だった。

.....

その日の午後、18時。

ホウカは、広い浴場の湯に浸かりながら思い返していた。

まったく、歯が立たなかった…。

この一ヶ月間、みんなの期待に応えようと最大限の努力はしてきたつもりだったのだが、それでも報いることすらできなかった。

素直に、悔しいと思う。

古武道部と両立しながらだが、それなりの自信も付いてきた。それに、トモヒサが用意してくれたGPO3ステイメンも大きな力となって支えてくれる。

そして、その裏に潜む気の緩み、はつきりと言えば倨傲には気付いていなかった。

ホウカは、湯に顔を半分沈めながら膝を抱える。

(…あの人、強かった)

それをホウカに気付かせてくれた、彼女。

大きな刃が叱咤となって叩き込まれ、ホウカの自惚れを斬り伏せた。

かつて授かった、師の教えが胸中に響く。

——叩き込まれる悉くを糧とし、己が力とせよ。

この教えを実感したことは今までなかったが、まさかガンプラバトルという異なる場で思い知らされるとは。

師匠が説く、花鳥風月の教え…。自然界を体現するような、有り体を有りの俣に映し出すという流派。

その本質を、ようやく理解できた気がした。

「わあ、アツガイがいる。ここジャブローだっけ？」

ザバザバと子供みたいな足取りで寄って来るのは、ジニアだった。長いマゼンタの髪を、タオルでターバン状に纏め上げている。

ジニアは、ホウカの隣に腰を下ろした。

「ツツコミしてくれないのー？」

「え…？えつと…」

「トモヒサかもくん！」

悩み出すホウカに対し、祈るように胸の前で両手を握り締めるジニア。

「とうか、女子浴場でトモヒサを呼ぶなんて…。」

「ホーカ、ちよつと」

「ちよいちよいと、手招きするジニア。」

「何かと顔を向けると、」

「ていつ」

「あうっ」

「デコピンされた。なんで…?」

「まだ落ち込んでるかなーって」

心配そうなジニアの顔。知り合ってから一週間と経っていないが、部室や学園で行動を共にする中で、彼女の人となりは概ね理解しているつもりだった。

しかし、こんな騒がしくも優しい面があるのは知らなかった。

ホウカは微笑みを浮かべながら、かぶりを振る。

「ありがとう、ジニア。でも、そうじゃないの」

「うん?」

「ちよつと、憧れるなって。あの人が」

「ふふーん?なーんだ、ホーカもらびゅーんしちゃったんだね!」

「らびゅ…?」

ジニアの言葉を分かりかねるホウカは、そういえば以前に読んだ本に「ラビューン∥LOVEのすごいヤツ」という意味だと載っていたのを思い出した。

途端に赤くなり、あたふたと手を泳がせる。

「そ、そういうのじゃなくて!ええつと、素敵だなって…」

「おーけーおーけー。」キャプテン・アゼリア”の魅力なら、男も女もカンケーないもんね!」

「そ、そういえば、そのキャプテン・アゼリアって何なの?」

「たまらず話題を変えようとするホウカ。」

「きよとんとしてから、ジニアは説明を始めた。」

「えーつとね…本名はツツジ、英語でアゼリア。使ってるガンプラが

ダークハウンド…あ、今はバンガードって呼んでたっけ？あれ、宇宙海賊ビンディアンのモビルスーツでしょ？それで”キャプテン・アゼリア”ってワケ」

「ああ…なるほど」

宇宙海賊ビンディアン。

キャプテン・アツシユと名乗る首領が東ねる、反地球連邦組織のことである。ガンダムAGEのキオ編に現れ、その正体とビジュアル、更に黒いガンダムAGE―2といういかにも海賊らしい設定が魅力的であり、キャラクターとガンプラ双方に根強いファンも多いらしい。

ホウカも非常に印象的だったのを思い出し、アニメでの活躍ぶりがカンザキ・ツツジに重なった。

「去年の選手権は凄かったなあ。優勝は逃したけど、全国大会参加チームのベスト10入りだったんだから！」

とんでもなく強いファイターと手合わせをしたのだと、今更になって実感するホウカ。初太刀こそ運良く読めたものの、その後のバトルはまるで歯が立たなかった。バンガードの鮮やかな剣捌きのように、いっそ清々しいまでの敗北だ。

(これが、ガンプラバトルなんだ…。でも、もっと強い人達が、きつと沢山いるんだ)

膝を抱える手をぎゅっと握る。

トモヒサに託されたエースの席。

倦まず弛まず、もっと前へ踏み込む。

それがトモヒサに、そしてカンザキ・ツツジに対する最大限の応え方。

改めてホウカは、古武道部で着る袴をイメージして、その帯を締め直した。

そして長湯をしてみ、ちよつと逆上せた。

Act. 04 『錦上花を添うI』

『この間の件、引き受けては頂けませんか』

今や骨董品レベルの存在である折り畳み式の携帯電話から、若い男の声が聞こえる。

仕事柄、目を保護するためにかけているゴーグルを、額に上げて返す。

「…まだ勤務中だ」

『これは失礼を。私としたことが、失念していました』

男は丁寧に謝罪を述べた。今や頂点という名を恣にしているが、その律儀な態度は昔から変わっていないかった。普段は決して見せない、グラスを片手に穏やかに笑う彼の顔が脳裏に浮かぶ。

「…まあいい。他にはどれくらい声をかけた？」

『七名ほど。今の所芳しい返答があったのは、イブキ君とレジーナ女史だけですわね』

それはそうだろうな。そもそもの話が突拍子もない上に、規模が大きすぎるのだ。

「スペインのカリナはどうした？」

『彼女は今、臨月を迎えているそうぞ』

「何人目だ？ワシが末の子供に会ったのは三年前だったと記憶しているぞ」

『七人目の三女らしいです』

校門前を掃除する手を止め、竹箒を壁に立掛けた。

子供達に囲まれる女丈夫の、朗らかな笑い声が脳内で木霊する。

また出産祝いを考えねばな…。

「チャウ・フェイロンならば、いい返事が来ると思うが？」

『勿論、お誘いはしましたが…。どういう訳か、現在連絡が付かないらしく』

「大方、また山籠りでもしているのだろう。あれの考えることは理解できん」

瞑想に耽る現代のブルース・リーの、他者には推し量れない無表情を思い出す。

少し苦手な男だ。

——キーンコーンカーンコーン

四限の終業を告げるチャイムの音が聞こえた。

頭を振り、思い出に浸ろうとする自分を払い除ける。

「…それよりもだ。もう直、選手権の予選だろう。お前も忙しい時期ではないのか？」

電話の向こうの男は、コントロールスファイアを握り込んだ時のような不敵な笑みを零した。

何かのスイッチを押ししてしまったようだ。

『だからこそ、ですよ。ガン普拉バトル20周年というこの年に、我々とヤジマ商事がただ傍観しているとでも？』

「思えんな」

『三倍早い受け答え、さすがです。還暦を迎えても衰えないその姿勢。改めて、”殲滅のアズマ”のお力添えを賜りたく』

思わず、フツと笑う。この男はいつまで経っても少年のように、燃える炎のような情熱（業界では『通常の三倍の情熱』と形容していたか）を胸に宿している。

自分も、老いた体が思わず武者震いを起こしそうなほどだ。

晴れ渡ったセルリアンブルーの空を見上げる。

「…考えておこう、三代目」

『私は確信しています。あなたの中に眠る獣が、未だバトルを欲しているのを』

「見込み違いかもしれんぞ」

『自分の目は確かだと信じていますので。ともあれ、席は空けておきますよ。またご連絡致します』

では、と言葉を置いて、通話が切れる。

三代目メイジン・カワグチ、食えない男だ。

携帯電話を畳み、くたびれたジャケットのポケットに仕舞った。壁に立掛けた竹箒を持ち、ゴミを集めてから校舎の中へと歩を進める。ふと、このジャケットとも長い付き合いだと感じた。かれこれ十年は着古しているだろうか、あちこち修繕した痕が目立ち、妻からも買い替えなさいと言われ続けている。

だが、このジャケットには生徒と共にガン普拉バトルに明け暮れた日々の思い出がどっさり詰まっているのだ。そう簡単にゴミには出せない。

『あなたの中に眠る獣が、未だバトルを欲しているのを』

否定はできない。一昨年還暦を迎えて教師を定年退職し、後は妻や子供達と悠々自適な余生を過ごすそうとも思っていたが、またも子供達に寄り添う仕事をこうして選んでいる。ジャケットを手放さないでいるのも、そうした未練があるからかもしれない。

この学園の用務員職を志望したのも、設立したばかりというあのガン普拉部の行く末に興味があったからだ。それは自覚しているし、否定するつもりもない。

三代目め、ワシの心を見透かした上で狙撃したか。相も変わらない彗星だ。

「おい聞いたか？ガン普拉部が面白いモン作ったらしいぜ」

「あのキンジョウ・ホウカの専用機ってほんとか？」

「カトー・トモヒサはどこだ！確保しろ！」

渡り廊下を数人の男子生徒が走り抜けていく。

元気なものだ、若さを持って余しているのが分かる。

だが、元教師としては捨て置けない。

「お前たち、渡り廊下だけは走っていいなんて規則はないぞ」

「げえ！ウェイガン絶対殺すマン！」

「高性能じいちゃんだ！プラズマダイバーミサイル撃たれる前に逃げろ！」

悪ガキどもめ。

「お前たちよりウェイガンの方が数倍は可愛いわ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎながら男子生徒達が食堂へと消えていく。

不本意なことに、この英志学園のガンダム好き達から「ヴェイガン絶対殺すマン」だの「高性能じいちゃん」だの「マップ兵器」だのという渾名でよく呼ばれる。そもそも「殲滅のアズマ」という物騒な異名を貰っているのだが、こっちはいい。語感が悪くない。

とはいえ、古びたジャケットにゴーグルという出立ちは、確かにフリット・アスノを思い起こさせるというのは自分でも分かっているのだが。

そんなことより、先ほどの生徒達の会話が気になった。

「ふむ…。キンジョウ・ホウカ、か…」

新たにガンプラ部に入部したという女子生徒だ。一時期スポーツ誌を賑わせたことで知っているが、古武道部とガンプラ部を掛け持つとは何を考えているのだろうか。その上、カネダ・リクヤが選手権を辞退し、ジニア・ラインアリスという女子生徒まで入部して二人揃ってチームメンバーになったという話だ。カトー・トモヒサが、それを良しとした理由は気になる。

自分は顧問でもなく、まして今は教師でもないため校舎内への出入りは自重しているが、一度ガンプラ部へ顔を出してもいいかもしれない。

長年連れ添った愛機の重みを想像しながら、キツと視線を鋭くする。

必要とあれば、粒子の中で聞くまでだ。

.....

昼休み、生徒会室の重厚な引き戸の前に立つ。

「失礼します」

ホウカは、ごくりと生唾を飲み込みながら、それを引いた。

バトルシステムにも似た六角形の独特な形状をした机が三つ、繋がって生徒会室の中央を占拠している。円滑に情報を交換するため職員室のすぐ隣にあり、中は真新しい白に塗り潰されていた。

その窓際に、一人の男子学生が立っている。グラウンドを一望でき

る開放的な広い窓の向こうに、切れ長の両目から視線を投じている。筋の通った鼻梁、肩まで伸びた癖のない銀髪。美男子、という表現がピッタリと当て嵌る人物。襟の広い赤いコートと白いズボンが鮮烈であり、まるで映画の一場面を切り取ったかのような情景を映していた。

線の細すぎない力強さのある顔が、ホウカに向けられる。

「来たか。君を待っていた」

滔々と語られるかのような声で言う。

初めて対面する元生徒会長を前に、緊張して身が強張る。トモヒサから聞いた話では、そんな気構えしなくてもいい相手らしいが、一体この人の何処を見てそう思ったのだろう。とてつもないオーラが全身から溢れているのが分かる。

しかし、とりあえず用向きを訊こうと気を持ち直した。

「テライ・シンイチ先輩、ですよ？私に話があると聞いたのですが……」

「そうだ。とにかく、かけるといい」

元生徒会長―テライ・シンイチはそう言い、二つ椅子を引いて着席を促す。

ホウカは手前の椅子に腰掛け、スカートを畳んで居住まいを正した。シンイチも座り、すらりと長い足を組む。

「ホウカさん。君は、私が去年の選手権に出場していたことは知っているかな？」

「はい、トモに……カトー先輩から大体のことは」

「うん、それならば話は早い」

と言って、シンイチは小さく頷いた。

英志学園ガンプラ部は、去年の全日本ガンプラバトル選手権に初出場を果たしている。その際に選手だったのがカトー・トモヒサとカネダ・リクヤ、そして三人目のチームリーダーだったのがテライ・シンイチ、この人である。

彼は現在、英志学園大学部の一年生に進学している。昨年度の高等部生徒会長を担っていたことから、大学部では生徒自治会に加名して

おり、早くもその手腕が学園中で話題になっている。三年前のガン普拉部創設にも深く関わっているらしく、トモヒサとも交流が深いと言う。今もガン普拉部員ではあるが、自治会の活動が多忙を極めているらしく、部には顔を出さなくなっていた。これらの複雑な事情を、ホウカはトモヒサから聞かされていた。

先代のエースである彼が一体何の話をしようとしているのか、ホウカはそのことで緊張しているのだ。

訝っていると、シンイチが言葉を繋ぎ始めた。

「あれは、地区予選大会決勝戦のことだ」

その視線が、遠くを見るように細められる。

妙な違和感、というか、彼から醸し出される謎の雰囲気、ホウカは感じた。

しかし、それはすぐに霧散する。

「君も知っての通り、英志学園チーム『スターブレイカーズ』は初出場にして地区予選の決勝まで勝ち残った。いよいよ全国への切符を掴もうという時、私たちの前に立ち塞がったのは、美しき海賊達だった。彼女達と苛烈な戦いを繰り広げ、あと一步というところまで漕ぎ着けた。しかし——」

シンイチは一呼吸置き、目を伏せる。

「我々は、彼女達に屈してしまった。全国大会の場、ヤジマスタジアムの舞台上上がる夢は、絶たれてしまったのだ」

「……………」

知ってますけど…と、喉から出かかった言葉を押し殺すホウカ。

先日のカンザキ・ツツジとのガン普拉バトル後に、去年の決勝戦で敗北を喫した相手こそ菱亜学園チーム「ハウンドクロス」だと、マリコから既に教えられている。

とはいえ、シンイチは知らないかもしれないだろうと思っただけに、教えてくれているはずだ。ホウカは大人しく耳を傾けることにした。

「それ以降、チーム『ハウンドクロス』のある菱亜学園と交流を持つことになった。今も、色々と助けてもらっている」

「…そうだったんですか」

それは意外な話だった。あの人と、この英志学園の生徒自治会員が縁を持っている（どんな縁なのかは不明だが）というのは。

「そのリーダー、カンザキ・ツツジら連絡があった。そう、君のことについてだ」

「私の…？」

ようやく状況が飲み込めた。

詰まる所、カンザキ・ツツジとの関係を説明した上で、本題に入ろうとしているのだろう。非常に失礼で、そして雰囲気壊してしまうのは重々承知しているのだが、ホウカは思ってしまう。

なんて回りくどい話し方なんだろう…。

再び、シンイチの視線がホウカを向く。小さく咳払いして、彼の言葉を待った。

「ツツジとバトルをしたそうだな」

「あ…はい。負けてしまいましたけど…」

「それは残念だ。とはいえ、全国大会を押し通る程の相手だ。気に入らない方がいい」

「はい。それは、自分でもよく分かっています」

脳裏に、圧倒的なまでの強さで屹立するガンダムAGE-2バンガードと、董色のポニーテールを揺らす美しい長身の姿が浮かぶ。

「いい心構えだ。そのツツジから言伝を預かっている」

「言伝…はい」

やたら古風な言い方である。

シンイチは目を閉じて、思い返すように一言一句をしつかりと紡ぎ出した。

『いいバトルだった。君の腕には驚かされたが、もつと上を目指せると思う。次に相対する時には、更に腕を磨いていることを期待しているよ。私の好敵手、キンジョウ・ホウカ殿』……だそうだ」

「あの人が、そんなことを…」

自分はその時、確かに叩きのめされた。何一つ報いることは叶わなかったが、今ではその強さに憧れすら抱いている。そんな彼女が、自分を好敵手と呼んでくれていると言うのだ。

ホウカは嬉しさに、思わず頬が緩んだ。

「嬉しいか？」

「え、あ……はい」

シンイチが優しく微笑む。変な人（認めてしまった）だが、やはり挙動の一つ一つがとても画になっていた。彼が人望を集める理由が分かる気がする。

そうしてホウカは、トモヒサの言っていたことを理解した。喋り方が妙に浮世離れしていると言うか、演技がかかっているように感じるが、それが彼の自然な姿なのかもしれない。すつと耳に入ってくる声と彼の毅然とした態度は、先程まで感じていた緊張感を優しく解してくれていた（変な人だから構えなくてもいい、という意味も含まれていそうだ）。

——コンコン

と、生徒会室の引き戸がノックされる。

「いるよ。誰だ？」

「ナラサキです。テライさんですか？こちらにいらつしやると聞きましたので」

「ああ、フウランか。私だよ、入りたまえ」

「失礼します」

入ってきたのは、黒いワンピースと白いタイツを着る、ツインテールが可愛らしい女学生だ（ややコスプレじみている気もした）。

切り揃えられた前髪の奥から、意外と眼力のある吊目がホウカ達を見る。

「その方は？高等部の生徒のようですが」

「君も知っているだろう、高等部一年生のキンジョウ・ホウカさんだ」
「あなたが……」

その両目が、さらに鋭くなった。ニュータイプの音……が聞こえた気がする。

ホウカは直感した、明らかに敵意のある眼差しだ。

立ち上がった、礼をしながら挨拶をする。

「はじめまして、キンジョウ・ホウカです」

「……ナラサキ・フウランです」

やや声音を落として礼を返した。

珍しい名前だ。漢字で書くと「櫛崎風蘭」、といったところだろうか。

シンイチも立ち上がり、二人の間に立つ。

「少し話があつてね、私から出向いていた」

「テライさん、どのような関係で？」

キツと、フウランの鋭い視線がシンイチに向く。

「そうだな、私の後を任せる次代のエース、と言っておこうか」

「……そうですか」

フウランは目を閉じて、ホツとしたように息を吐いた。

もしかして、あらぬ誤解を与えてしまっているのでは…。

「それで、何かあったのかフウラン」

「はい、学園長がお呼びとのことですよ」

「そうか、分かった。行こう」

シンイチはそう言つて頷いた。フウランを連れ立ち、生徒会室から出ようとする。

ふと、足を止めてホウカを見た。

「ホウカさん、部活動を掛け持つのは大変だろうと察する。私も似たようなものだったからな。何か協力できることがあったら、遠慮なく言つてほしい。トモヒサ達にも、よろしく頼む」

「はい、分かりました。ありがとうございます」

「うん、では」

そう言い残して引き戸を出る。

その後ろを着いていくフウランが、ちらりとホウカを見た。

『テライさんは、渡しません』

言葉はなかったが、口がそう動いていた……気がする。

そうして、引き戸が閉まった。

何だか、最近会った人達の中でも群を抜いて印象的な二人だと、ホ

ウカは思う。

そして、はたと気付く。一緒に生徒会室を出ればよかったのでは、と。脚本通りのような雰囲気の流れられるまま二人を見送ったが、このあとも午後の授業が控えているのだ。

テライ・シンイチとナラサキ・フウラン、そしてカンザキ・ツツジの伝言を思い返す。

今後の選手権や学園生活に不安（主にフウランのこと）と期待を抱きながら、ホウカは生徒会室を出た。

.....

トモヒサは部室の机に頬を押し付け、ぐったりしていた。

週明けと共に届いたHGガンダムAGE—FXを使い、部員の力を結集させること一週間。ようやくホウカ専用のガンプラが完成した。

そして翌日、つまり今日の昼休み、心地いい疲労感に満たされていたトモヒサは、昼食後に軽く昼寝をしようと教室に戻ったところ、待ち受ける大勢の男子生徒に取り押さえられたのだ。新しいガンプラを見せろ、両手に花とは許せん、などと散々振り回された。

一体いつの間に情報が広まったのか。新聞部の敏腕、恐るべし。

ぐり：と、顔を前に向けて氷上のアザラシみたいな格好になるトモヒサ。その視線の先には、完成したばかりの真新しい白いガンプラが立っている。

型式番号「RFX—AGE03R」。

称して、「ガンダムランキユラス」。

一ヶ月かけてステイメンから収集したデータを元に、関節強度や動作のクセを調整し、ホウカ自身の要望などを汲み取ったガンプラ。そしてトモヒサ、リクヤ、ジニアの三人が持ち得る技術を惜しみなく投入させた。

そしてこの日、念願のロールアウトを迎えたのだ。

だがこの日は生憎と、当のホウカは古武道部の活動に専念している。ジニアも同じく演劇部だった。リクヤも用事があると言って、今

日は部に顔を出していない。顧問であるマリコはと言えば、職員会議ときている。

一人ぼっちの静かな部室。遠くから運動部らの声が聞こえる。

「……静かなロールアウトだな、ランキンキュラスよ」

ポツリと、トモヒサはガンダムランキンキュラスに話しかけた。自分一人だったら、このような見目美しい機体には仕上がらなかつただろう。最後の仕上げ前に仮組みした時の、キラキラとした目で見つめるホウカの無邪気な姿が思い返された。

ベースとなったのは、言うまでもなくガンダムAGE―FXだ。しかし、各部に大幅な改造を施し、立たせた姿は別物になっている。

頭部は、フェイスのみAGE―FXのままにしたステイメンのもの。同様に両腕も肩から丸ごと交換し、同じく腰部にもテールバインダーを移植している。細かいリペイントまで準拠し、言うなれば、ガンダムAGE風に解釈したステイメンである。

しかし、最大の特徴は背面に広がる、巨大な花卉型ウイングユニットだ。コアファイター機構は撤去し、代わりにファンネルラックを兼ねた推進ユニットにアームを増築。そこに、ウイングユニットを接続している。

このユニットが持つ能力、それは――

――ガチャ

突然、部室のドアが開いた。

うっかり寝かけてしまっていたトモヒサだが、その音で船を漕ぎ出した意識を戻す。

ぐり…と首を動かし、アザラシ状態のままドアの方を見遣る。

「……む」

「……お？」

ドアを開いた格好のまま、硬直する人物と目が合った。

くたびれたジャケット、首にかけて特徴的なゴーグル。見覚えがあるが…寝惚けているのだろうか、思い出せない。

「すまん、気配を感じなかったから誰もいないと思った」

「お：おお」

「入っても構わんか」

「：構わないぜ」

ガチャリと、ドアが閉められる。その男はジャケットのポケットに右手を突っ込みながら、ゆつくりと歩を進めた。左手には独特の形状の―例えるならAGEデバイスのような―ケースを提げている。

そして、窓際に立った。

年齢を感じさせない真っ直ぐとした背筋に、フリット・アスノ老齢期によく似た面立ちと服装。そして、仕事柄の必須アイテムであるゴーグル。

思い出した、用務員のアズマだ。

「アズマさんじゃないですか」

「なんだ、今頃気付いたのか」

皺の刻まれた彫りの深い両目が向けられる。優しげな、しかし何処となく厳格さをも湛えた眼差しだ。

「ほう：それが噂に聞くガンプラか」

その眼差しが逸れ、机に置かれているガンダムラナンキュラスに注ぐ。

トモヒサは、机に張り付く体を引き剥がして上半身を起こし、アザラシからヒトの姿に回帰する。腕を上げてぐぐぐ：と伸びをした。

「アズマさんにまで情報が行ってたのか：」

「学園のガンダム界限じゃあ、ちよつとしたお祭り騒ぎだぞ」

「そのせいでクタクタなんですよ：：いい迷惑だ」

ハハハ、と老齡らしい渋味のある声で笑うアズマ。

再び視線を戻し、白いガンプラを見る。

「何という名のガンプラだ？」

「RX―AGE03―FX、ガンダムラナンキュラス」

「お前にしては、随分と華のある命名だな」

トモヒサは腕枕をしながら返す。

「名付けたのはオレじゃないですよ」

「なるほど、シマか」

「と、ジニアです」

「ほう…」

スツ…と、アズマが目線を鋭くした。その眼光に、先程までの優しげな光はない。

トモヒサは、その変化を鋭敏に察知する。

「…カトー。少しお前に訊ねておきたいことがある」

突然、アズマを取り巻く空気が変わる。それはトモヒサの記憶を呼び起こし、彼がガン普拉バトルで見せるようなそれと重なった。

この底知れない覇気…あの”殲滅のアズマ”のものだ。

「新しいチームメンバーという例の女学生二人のことだ。お前の腹の底が知りたい」

…そういうことか。何故いきなり部室にやってきたのかと思っただが、彼の目的はホウカかジニア、或いはその二人のようだ。

トモヒサは飄々とした態度で答える。

「別に、腹の底なんてなんもないですよ。重力の井戸くらいまっ逆さまに落っこちるくらいだ」

「降下中に撃墜される恐れは？」

「ないです。第一、メンバー不足で俺からホウカを勧誘したんだし、ジニアの奴に関してもリクヤが頼んだくらいですよ」

「…そうか」

「まさかアズマさん、女がいきなり二人もチームメンバーになったことに文句があるって言うんですか？」

アズマはかぶりを振る。

「そんな考えの古い地球人でいたつもりはない。ワシが教えたファイター達にも勇敢な女性は大勢いる。お前も分かっているだろう？」

「冗談ですよ。でも、安心しました」

「生意気にもワシを試したとでも？」

「そんな恐れ多いこと」

暫し、沈黙。

やがて、どちらからともなく笑い出した。

部室の空気が和らぎ、アズマの雰囲気も砕けたものになる。その目も優しげな好々爺の光を取り戻した。

「よく分かった。危惧するようないのだな」

「ま、あいつらの腕を見たら納得するはずですよ。この後、しばらくしたら部室に顔を出すって言ってたんで」

「わざわざこれを持ち込んだ意味はありそうだな」

ゴト、と机にケースが置かれる。

トモヒサはその中に仕舞われているガンプラを想像し、心の中で拳を鳴らした。

「久し振りに、一戦付き合いませんか？」

「ワシも言おうとした所だ。箒とちりとりばかり握っていて、腕が鈍ってしまいそうだ」

右肩を回すアズマ。その姿は、とても60過ぎとは思えない。

「殲滅のアズマ」に箒は似合わないですねえ。やっぱ、コントロールスフィアでない」と

「お前達くらいのもんだ、ワシを変な渾名で呼ばないのはな」

「うちの学園の用務員の正体を知ったら、みんなミネバを乗せたネエル・アーガマの乗員みたいな顔して驚くでしょうね」

トモヒサはそう言いながら、ガンダムランタンキュラスを棚のガンプラ保管用ケースに収納した。出しっぱなしにしているは、後で誰かに怒られるかもしれない。

そして、年齢差およそ40歳という二人のガンプラファイターは、まるで友人のように互いに言葉を交わしながら部室の外にある小屋へ向かう。

傾いた陽が、人のいなくなった部室を柔らかく照らし出した。

.....

買い置きしておいたオレンジジュースの蓋を空けて、ぐびっと煽る。

第一部の通しリハーサルを終えたカラカラの喉に、甘みと酸っぱみ

の調和が取れた絶妙な味が染み入る。

「ふっはあく…」

アメイジング・ジャパニーズ・ジュース。

日本に来て良かったと最初に感じたのは、このオレンジジュースとの邂逅だ。胸いっぱい広がる爽快感をジニアは感じながら、リハールの終えた動きやすいシャツとジャージ姿の演劇部員達に視線を向ける。

台本のページを捲る真面目そうな男子、友人と談笑を始める数人のグループ、顧問教師に相談を持ちかける女子等、それぞれがそれぞれらしく振舞っている。総合文化祭の出演を賭けたオーディションでは他校共々競い合う関係だったが、今では共に練習を重ねる良き仲間達になっていた。

ふと、ガンプラ部のことを思い返す。カネダ・リクヤ：自分に全日本ガンプラバトル選手権の出場メンバーの席を譲り渡した先輩だ。

彼の挑戦を受けて気付いたが、ガンプラを大事にする想いとバトルの腕はかなりのものだった。勝利を得ることができたのは、寸分の差。まさに紙一重の差を乗り越えることができたから。そして彼の決意、選手権への熱意も伝わってきた。

『ファイターと見込んで頼む！ガンプラ部に入部してくれ！そして、選手権に出場してほしい！』

仮に自分が負けたとしても、彼は席を譲ろうとしただろう。

演劇の舞台で役者という夢を追う自分は、そういった強い意志を持つ多くの人たちと台詞を交わしてきた。サイコフレームではないが、色んな感情を総身に受けてきたのだ。

だからだろうか、この一週間、ガンダムラナンキュラスの制作に携わる彼の晴れ晴れとした姿を見て、幾ばくかの後悔の念を抱いた。自覚しているが、どうしても軽い性格のために受け答えも浮ついたものになってしまう。彼の懇願を受けたとき、もっとしっかりと向き合うべきだったのではないか。

ジニアは、パンパンと両頬を叩いた。

らしくもない。そんなのは、ガンプラバトルで応えればいい。

そこまで考えて、ふと時計を見る。

17時30分。

「——いつけない、そろそろ行かないと！」

トモヒサに、後で顔を出すと伝えていたことを思い出した。

傍らで台本を見ながら振りの練習をしていた女子が、話しかけてくる。

「ジニー、この場面の動作なんだけど……」

「うわわわーごめん、これからガンプラ部に行かないと！」

両手をパン！と、音を鳴らして合掌する。何かを錬成できそうな音だ。

「あ、そっか。そういえば言ってたよね、新しいガンプラのロールアウト日なんだって」

「後でちゃんと聞くから！」

「おっけー、行ってきなよ」

「ごめくん、ありがと！」

にこやかに笑う心優しい仲間らに全身で感謝しながら、稽古場として使っている7号館の多目的教室を出る。そして女子更衣室に飛び込んで、E-X-SガンダムのGクルーザー変形もかくやというスピードで制服に着替えた。最後に、教室に忘れていたオレンジジュースの缶を回収して、屋外に出る。

ガンプラ部の部室がある5号館へ続くコンクリートの道、そこに出ると、見慣れた人物に鉢合わせた。

「ありや？・ホーカ？」

「ジニー？」

キンジョウ・ホウカだ。二房に結い上げた黒髪を後頭部で留めるという特徴的な髪を揺らし、青白いボストンバッグを肩にかけている。彼女も古武道部の活動を終えてからガンプラ部に行くと言っていた。偶然にも、ほぼ同じタイミングで部活動を終えたのか。

駆け寄って、声をかける。

「オイッスー！奇遇だねー」

「うん。ジニーも今終わったところ？」

「忘れるトコだったよ」

たははと笑う。そして横に並び、一緒に5号館を目指した。沈みかける夕陽に照らされるその横顔を、ちらりと見る。今更ながら、ホウカと一緒に行動するのが当たり前になっていないことに気付いた。

実際に出会うまで、キンジョウ・ホウカがどういう人物なのか知らなかったが、自分と同じタイミングで学園新聞に取り上げられた彼女のことを、ずっと知りたいたいと思っていた。そんな彼女とひよんなことから知り合い、そしてガンプラ部と一緒に活動をしている。

こんなことってあるんだなあ…と、しみじみ思う。

「そーいえば、トモヒサは一人で部室にいるのかな？」

「誰かと一緒にみたいだよ。さつき連絡があつて、二人で待ってるって」

「シーマ様でもリクヤセンパイでもないのお？」

「そうみたい」

一体誰だろう？

わざわざ言い含めるということは、それなりの考えがあるのだろうか。今日はガンダムラナンキュラスのロールアウト日だから、もしかしたら面白いサプライズを用意しているのかもしれない。トモヒサがそんなエンターテイナーだとは思えないが、案外そういう部分があつたりして。

そんなことを考えていると、5号館が見えてきた。丘になっている校舎側から一段ほど下にある施設であるため、小さな階段をホウカと降りる。

「あ、小屋に灯りが点いてるね」

ホウカの言葉を聞いて、庭にある木造の小屋を見た。確かに、灯りが点っている。

ということとは、もうトモヒサと誰かが待ち構えているということか。

面白いじゃないの。何をしようとしているのか分からないけど、突撃あるのみ。

「よーし、ホーカ行くよー！つっこめー！」

「ちよ、ちよっとお！」

ホウカの手を握って、小屋にカミカゼアタックを仕掛ける。
「花と散る」とは、よく言ったものだ。

A c t . 0 5 『錦上花を添うⅡ』へ続く

Act. 05 『錦上花を添うⅡ』

かつて、ガン普拉バトル黎明期に、あるファイターが存在した。
曰く、鬼神。

曰く、旧世代の悪魔。

曰く、リアルXラウンダー。

ジョン・エアーズ・マツケンジと珍庵をして、最強の老兵とまで称された。

ガン普拉ファイターの名は、アズマ・ハルト。

付いた二つ名は、”殲滅のアズマ”。

愛機たるガンダムAGE―1を駆り、数々の大会で名を残した伝説の一角である。

そのガン普拉にも逸話があり、素体であるガンダムAGE―1ノーマル自体が底知れない性能を発揮することから、AGEシステムのブックボックスを積んでいたのではないかと実しやかに噂されている。

しかし、PPSE社主催当時の「第5回ガン普拉バトル選手権世界大会」での敗北を最後に、忽然と表舞台から姿を消したのである。

年齢を考えての引退、実生活の問題、ガン普拉バトルに飽きた：など様々な憶測が当時は飛び交っていた。しかし、イオリ・セイ&レイジ組に端を発したその後のガン普拉バトル隆盛の波が押し寄せたことで、いつしか”殲滅のアズマ”の名は若者達の記憶から薄れていき、過去のものとなっていった。

一部では、未だに彼が何処かでその腕を振るっていると伝わっていたが、本人が姿を現さないが故に確かめる術はなかった。

その、生ける伝説であるアズマ・ハルト本人が、目の前にいる。当時より幾分か皺の増えた厳格な面立ち、だが当時から変わらぬジャケツトとゴーグルと、溢れる覇気。

まさか、気まぐれで入学した英志学園の、用務員をしているなんて。しかし、その正体を知っている者は学園にほとんどいなかった。

それを知るのはテライ・シンイチと顧問シマ・マリコ、この二人のみ。

さらにその二人までもが、彼に師事を仰いでいたという実力者だと言う。

とんでもない所に来てしまったと、腰を抜かさんばかりの衝撃を受けたのが、新一年生になったばかりのカトー・トモヒサ15歳。去年の春のことだった。

.....

あまりの衝撃に、ホウカは声を出せずに硬直する。

まるで雲を掴むような、俄かには信じ難い話。

トモヒサの口から語られた、目の前に立つ用務員の正体だ。

時々、校庭などで掃除をする姿を見掛けていただけで、挨拶すらしたことがなかったが、そんな伝説の人物だったなんて…。

「あ…あ…」

一緒に（ほとんど引つ張られる形で）室内灯の点るログキャビンに突撃したジニアが、隣でカタカタと震えながらカ●ナシのように声を漏らしている。

「あの…アズマ・ハルト…?」

ゆっくりと一歩ずつを踏み出しながら、本当に蛙でも食らってしまったかのように両腕を幽鬼のように掲げる。

ゆら…と、前のめりになった瞬間、今度は質量でもありそうな残像を残してアズマの前に走り寄った。

「ずっ——とファンでした!!!」

その笑顔が撒き散らすのは、サイコファイルドかGNファイルドか。物理的干渉を及ぼしかねない笑顔が、ジニアに咲き誇っていた。

アズマは狼狽の色を隠せず、といった様子でその笑顔・レイに晒される。

火星圏のような変な病気になるなければいいのだが…。

「…カトーよ。この子は、いつもこうなのか?」

「大体こんな感じですよ」

他人事のように言うトモヒサ。

「あ、握手してください!!」

「構わんが…」

ジャケットのポケットに突っ込んでいた右手を、アズマが控えめに
出す。

ジニアはその手を両手でがっしりと握り、何を言うでもなく、ただ
ひたすらに笑顔だった。

「ジニー、そんなにファンだったんだ…」

そう呟くと、バツとジニアが顔を向け、こちらに視線を移す。

「うん!!」

そして、派手にマゼンタのサイドテールを揺らして頷いた。

トモヒサが「子供か…」と、呆れ顔で独り言を呟く。

きつと、彼女にとって”殲滅のアズマ”という存在は、憧れのヒー
ローそのものなのだろう。自分だって、もし小さい時に見ていたヒロ
インに直に出会ってしまったら、平静を保っていられる自信はない。
熱烈なアプローチを受けるアズマは、困惑した表情を浮かべて頭を
かいた。

そしてふう、と短く息を吐く。

「…こんな老いぼれに会って喜んでくれるのは嬉しいが、ワシがここ
に来た理由は巡業ではないぞ」

ふと、アズマの態度が変わる。

ジニアもさすがにそれには気付いたようで、握り締めていた手を離
した。

再び、右手をポケットに突っ込んで続ける。

「キンジョウ・ホウカと、ジニア・ラインアリスよ」

名前を呼ばれて、ホウカは身が強張った。ジニアがしやきつと背筋
を伸ばす。

彫りの深い両目に宿るのは、戦う者の光。

しかし危うさのない、達観した兵の目。

「ワシとカトー、そしてお前達とで戦ってもらおう」

「2 on 2 ってことだ」

その横に、トモヒサが立つ。

そして、抱えているケースをヘックスユニットの上に置き、ロックを外して収納されていたそれを取り出した。

その姿は、見間違うはずもない。

自分の名前に似た和名の花を冠する、その名を呼んだ。

「ガンダムラナンキュラス…」

この日、ロールアウトを迎えたばかりの、新たなガンプラ。

みんなの力が注がれた、私の機体。

白くて綺麗なガンダム。

「初陣の相手が”殲滅”と”悪夢”たあ、難儀だよなこいつも」

そう言つて、トモヒサはガンダムラナンキュラスをホウカの手前に置いた。

「安心しろ、初陣で壊すようなことはしねえよ。ダメージC設定だ」

「ワシもそこまで鬼ではないからな」

アズマが微笑を浮かべる。

そして、木目の壁に設えてある棚から白いケース—AGEデバイスに似たそれ—を持ち上げ、その鍵を外す。

ガチャ、と。強めのロックが外れる音が鳴り、ケースが開かれた。

内装スポンジに包まれて、戦いの時を待つ重装甲フルアーマーのガンプラ。

往年の、ヴェイガンとの戦争を戦い抜いた歴戦の勇姿。

「……ガンダムAGE—フルグランサ」

思わず、その名が口を衝いて出た。

圧倒的なまでの存在感を放つそのガンプラを、アズマは硬質なユニットの上に置く。

ヘックスユニットを挟んで立つアズマのことをホウカは知らなかったが、そのどこか余裕のある、しかし隙を見せない悠然たる居住まいは只者ではないと感じ取れた。勿論、其処にあるガンプラもだ。

その横に、もう一体のガンプラが並び立つ。

「伝説のガンプラとタッグを組めるなんてな」

トモヒサの愛機。ガンダムサレナ。

漆のような光沢を放つ黒いガンプラには、圧倒的な存在感のフルグランサにも負けない威圧感がある。G P O 2サイサリス特有のシルエットは、それだけで見る者を圧倒するのだ。

勝てる気が、しない…。

と、足が竦みそうになる自分の肩を叩く手が。

「どーしたのホーカ。不安？」

拳の甲で肩を叩いたのは、ジニアだ。

「…うん」

心の内に生まれる不安感を、隠さずに頷く。

アズマと、その愛機フルグランサの圧力は元より、トモヒサに対しても。

軽い模擬戦などでは戦ったことがあっても、本気のバトルは、これが初めて。

その二人と二体を前に、不安は嫌でも湧いてくる。

「私はワクワクしちゃうな。だって——」

するとジニアは、常にはない野性的な笑みを浮かべた。

「——めちやくちや強そうだもん」

2オクターブくらい声音を下げて、その大きな両目がアズマとトモヒサに向けられる。

そうだ、ジニアの言う通りだ。

強そう。勝てる気がしない。

でも、だからこそ、立ち向かう価値がある。

そのための力を貸してくれる存在もいる。

ガンダムラナンキュラス。

その初陣がこんな強い相手だなんて、願ってもないことではないか。

「…うん、そうだね。強そう」

ジニアと顔を合わせる。

精一杯の、この子に負けなくらいの強い笑顔を作る。

「勝とう、ジニー」

.....

『GUNPLA BATTLE. Combat mode, start up』

四人が囲む二構成のヘックスユニットが、静かな起動音を響かせる。

一説には人工知能が搭載されているのではと、あなが強ち冗談とも思えないような噂のある抑揚の利いた電子音声。

その声が、戦士達へと戦いの舞台を開錠する。

『Mode damage level, set to "C". Please, set your Gpbese』

促され、GPベースをユニットへ接続させる。その大きな液晶画面に、ヤジマ商事の特徴的なロゴマークが浮かび上がった。

『Beginning, PLAVSKY PARTICLE disperse』

ガンプラバトルの森羅万象を司る青き粒子が、舞台の上に散布される。

『Fieldg. "SKY"』

設定上にしかない無相の全てが、粒子変容技術によって実相に変わる。

青空が誕生し、濃霧のような雲が浮遊する大陸や岩塊群を包み込んだ。それは、過去にチーム「ソレスタルスファイア」とチーム「フォン・ブラウン」が繰り広げた、ガンプラバトル史に残る一戦の舞台。

そして、舞台の幕が上がっていく様を見るホウカ達を、ホログラムコンソールが取り囲んだ。

『Please, set your GUNPLA』

各々が、ガンプラをユニットへと置く。

魂無きプラスチック塊の偶像へとプラフスキー粒子が浸透し、命が吹き込まれる。

顔を上げる四体のガンプラ。個々で異なる目を輝かせ、己の産声たる音を鳴らした。その周囲にも、カタパルトデッキが再現される。

コントロールスファイアを握り、戦いへの意識を高めた。

『BATTLE START!』

戦士たちが、戦いの巷へと躍り出る。

「キンジョウ・ホウカ、ガンダムラナンキュラス、行きます!」

「ジニア・ラインアリス、ハルジオン、いつきまあーす!」

「カトー・トモヒサ、ガンダムサレナ、行くぜえ!」

「ガンダムAGEー1フルグランサは、アズマ・ハルトで出る」

全員の宣言を耳にしながら、ガンダムラナンキュラスがカタパルトを滑走して青空の下に飛び出した。

奇妙な浮遊感。宇宙空間とは違った重力感覚が機体を軽くする。大陸が空に浮く、という非現実的なフィールドの特殊作用だろうか、例えるなら水中にいるような感じを覚える。

ともかく、ホウカはすぐに近場の浮遊岩塊に着地し、武器スロットを動かして各武装をチェックした。

右手のドツズライフル、両足の脛部に備えたビームサーベル。

そして、Cファンネルを元にスクラッチされた四基の「Pファンネル」。

シンプル、多くの武装は持たない構成だ。

しかし、このガンダムラナンキュラス最大の武器は別にある。

チェックを終えると、クローズチャンネルを通じて通信ウィンドウが表示された。ラナンキュラスのすぐ隣に、ピンク色の機体が着地する。

「ラナンキュラスはどう?」

ジニアだ。ハルジオンがガーベラ・テトラの頭部をこちらに向け、緑色のモノアイを光らせた。

タッグバトルのチーム分けは自分とジニア、そしてトモヒサとアズマである。二つのユニットで構成されたフィールドは広く、相手側二機との接触前に通信する時間は充分にある。

「いい感じだよ。反応もステイメンと同じで」

「徹底的に合わせたもんねえ。ま、とりあえず作戦なんだけど」

「うん」

「なーんにも浮かばないや」

「うん。……ええ!？」

モニター越しにジニアが「てへっ?」と言い、舌をちよろりと出しながら頭を小突いた。

「じゃあさ、ホーカは何か浮かぶ?」

一応、考えてみる。

重装甲の防御力がウリの二体のモビルスーツ。勉強した知識を記憶から引っ張り出した。

一方は、機動性に優れた「フレキシブル・スラスタ・バインダー」を備え、極大の破壊力を有する核兵器、もしくはビームバズーカを主武装とする機体。

アナハイム社のジオン派開発チームがデザインしたとされる”悪役ガンダム”の雛形を築いた頭部を持ち、アナベル・ガトーに悪魔の象徴であるガンダムにも関わらず「いいモビルスーツ」と言わしめた名機。その上、それを現実に作り上げるほどのトモヒサの技術だ。その実力は計り知れない。

そしてもう一方、ただそこにいるだけで他を圧倒する伝説の機体。フリット・アスノが年老いたことで近接武器を抑え、遠く中距離と防御に重きを置いたモビルスーツと言われる。だが、そんなものは建前と言わんばかりにシールドライフルにはビームサーベル機能を備え、推進ユニットとビームランチャーが組み合わさった真紅の複合兵装「グラストロランチャー」は驚異の一言。二つ名の由来は間違いなくこれだろう。

そんな二体を相手に、どんな作戦を思いつけば良いと言うのか?

「……とにかく、分断して対処する?」

「だよなー」

と、それぞれに動き出そうとした瞬間。

けたたましいアラート音。

直後、閃光。

——ギョオオオオオオ!!

彼方で炸裂した光が、怒濤の奔流となり飛来する。

極太の粒子の塊が小さな岩塊を吹き飛ばし、雲海を突き破って襲いかかった。

ラナンキユラスとハルジオンは咄嗟に跳ね飛び、その砲撃を逃れる。

「ひえー！ デタラメだつてー！」

ジニアが喫驚の声を上げた。

先程まで立っていた岩塊が、まるで巨大なドリルで掘削されたかのようにぽっかりと大穴を空けている。融解した岩盤が急激に冷やされていき、冷え固まった溶岩のように破壊の残滓が凝固する。

さらに、射線上に在ったオブジェクトが悉く蒸発しており、不自然な痕跡を宙に残していた。

まさに、出鱈目な破壊力。

『出鱈目でも何でも、落とせりゃいいんだよー！』

トモヒサの声だ。

砲撃が来た方向に首を動かし、機影を捉える。

映像を拡大すると、鈍く光る黒い機体のはつきりと見えた。

ガンダムサレナだ。右肩に担いでいるのは、移動ビーム砲台「スキウレ」が流用されているという設定の大型ビームバズーカである。先刻の砲撃の正体はこれだ。ラジエーターシールドは装備しておらず、核攻撃は想定していないようだ。

咄嗟、ホウカはハツとして周囲を確認する。

「そうだ、フルグランサは何処に……！」

ガンダムサレナは確認したが、タッグを組んでいるはずのガンダムAGE-1フルグランサの姿が見当たらない。

映像とレーダーを交互に見るが、その姿を捉えられなかった。

「ジニーー！ フルグランサがない！」

「こつちでも探してるんだけど、見つから……！」

『オラオラア！ 余所見してんなよ！』

慌てふためくこちらを他所に、トモヒサの荒々しい声。

50メートルほどまで接近したガンダムサレナが、再びビームバズーカを構えてその砲口に破壊の輝きを集束させていた。

チャージは短く、二射目をぶっ放つ。

「危ない！」

「勘弁してよお！」

『避けるよ、でないと死ぬぞ！』

一発目より弱めの砲撃が襲う。しかし、否、故にこそ狙いの精度が高い。

掠れただけでも大ダメージを見舞うそれが、ハルジオンを狙った。

「こっちい!？」

『逃がすか、よお！』

ハルジオンは慌てて回避行動を取り、背部に突き出るブーストポッドを唸らせてその砲撃から逃れようとする。

が、ガンダムサレナは足場を浮遊岩塊に固定しており、無理矢理に砲身を動かし、ぶっ放したまま射線の軌道を変えた。

「大丈夫!？」

「つつー…何とか、ね。でも、あつちはその気だよ！ガンダムサレナは私が引き付けるから、ホーカはフルグランサを…」

『初めからそのつもりだ』

突如の声。

それに反応すると同時に、攻撃を報せるアラート音。それは背後を示しており、ホウカは直感的に白い機体を翻した。

ピンク色の粒子の奔流。ガンダムサレナのビームバズーカほどではないが、それでも十二分な威力を誇る二軸の光芒。

シグマシスキャノンの一種とされるビーム兵器を備えた、ゼフルドランチャーの発展型装備。

…グラストロランチャー！

いつの間に回り込まれたのか。

いや、これは作戦だ。トモヒサの砲撃に気を取られている内に、どういう経路を取ったのかは分からないが回り込まれている。

最初から分断する気だったらしい。

遙か彼方を基点に迸ったビーム砲撃が終わる。続け様、休み無く次の攻撃が襲い掛かった。

小さなミサイル群の応酬。

ホウカは、アサクラ教頭の使うドム・トローペンを思い出した。

そして、経験しているからこそ対処も可能であり、そのための「Pファンネル」の実装である。スロットを滑らせ、「P—Funnel」のコマンドを選択した。

「行って、Pファンネル！」

ガンダムラナンキュラスの背中。巨大な花を思わせる外観の中心にあるファンネルラックから、四枚の花弁^{Petal}が射出される。

ラナンキュラスが左手を広げた。その動きに追従し、機体の前にPファンネルが並列する。

すう…と。呼吸を一つ。

「今ッ！」

大型Cファンネルと同じ形状をした白い花卉の先端から、鋭いビームが奔る。

マルチロック機能によってミサイル群を確実に撃ち落としていき、後方に続くミサイルをも巻き込んで誘爆させた。部員のみんな、そして自分も制作に携わって作り出したPファンネル達が、期待値以上の性能を見せていることに嬉しくなった。

しかし、息つく間はない。

Pファンネルを帰投させると同時に、連続して鳴り響く警報。

ミサイルを撃ち落としたことで発生した煙幕の向こうから、圧倒的なプレッシャーを伴って迫ってくる。

「…来た！」

グラストロランチャーではない、DODS^{ドズ}効果のある細いビームを撃ち込みながら煙を突き破った重装甲^{フルアーマー}。

ガンダムAGE—1フルグランサ。

両腕のシールドライフルを前に掲げ、ろくに狙いもせず乱射している。

しかし、分かっている。それが訴えるもの。

”逃げるなよ”、と。

鬼のような気迫に圧されかけけるが、怖気付いてなどいられない。

腰部に移植したテールバインダーを小刻みに噴射、同時に細かな岩塊を蹴って弾幕の中を駆け抜ける。さらに間隙を狙い、ドッズライフルの応射。

二、三射と撃ち込むが、重装甲のモビルスーツは事も無げに回避していく。

互いに撃ち合いながら、次第に縮まっていく距離。

クロスレンジ近接戦闘に持ち込む気なのか。

(…だったらー！)

スロットを滑らせ、ビームサーベルを選択した。

ドッズライフルを左手に持ち替えつつ、脛部から迫り出したサーベル柄を掴む。フルグランサも応じ、射撃を止めてシールドライフルの砲口からビーム刃を発生させた。

瞬間、交錯。

互いのビームサーベルが閃光を散らす。

一撃をまみえたフルグランサはそのまま通り過ぎ、浮遊岩塊を蹴って急転する。重装甲に不釣り合いな運動で、ランキユラスの背後を取った。

薙ぎ払われるビームサーベル。

「ッ！！」

上体の捻りと共にテールバインダーを噴射させ、機体を回転させる。

振り向き様にサーベルの牽制。

搗かち合ったビーム刃が交叉部で炸裂し、鏢迫り合いになった。

AGE-1の初代ガンダムを意識した顔面と、AGE-FXのフェイスを移植したステイメンの頭部が、額をぶつけんばかりに近付く。

『いい反応だな』

アズマの声が聞こえた。

老境らしく落ち着いた、微塵も狼狽の色を見せない声音。バトルを始める前と同じ声だった。

しかし、こちらは必死である。

「ありがとうございます、ございます…！」

『だが、今ひとつだ』

突然、下からの衝撃。

フルグランサが膝蹴りを仕掛けたのだ。濃紺の装甲に守られた膝の蹴撃がランキュラスの右腕を打ち上げ、ビームサーベルが高く宙を舞う。

「しまっ…！」

その一瞬の隙に、フルグランサが左のシールドライフルを懐に潜り込ませた。

まさに、卓越した絶技。二枚板バレルに粒子の光が集束する。

ゼロ距離――！

「――っ！」

天啓が降りる。

ホウカは無心のままに、弾かれた右腕のフォールディングアームを展開させた。一気に腕のリーチが三倍に伸び、宙に放られたビームサーベルをクローアームで挟む。

そして、一息に振り下ろした。

『何ッ!?!』

フルグランサは咄嗟に機体を翻し、その斬撃を避ける。シールドライフルのビームが明後日の方向へ飛んでいった。

が、機体を翻したまま即座に右のシールドライフルが向けられる。至近距離での銃撃など経験したことがないが、ホウカはバックステップで後退させて体を捌く。

撃ち込まれたドツズライフルをギリギリ、掠れる寸前で脇に逸らして躲した。額から冷や汗が滲み出る。

（――そうか）

そして、ハッと気付いた。

これが、“殲滅のアズマ”の真髄。接近戦の威圧と絶技の応酬で、息つく暇も与えない。加えて、遠く中距離戦も怠らず、一瞬でも気を抜けば接近戦に持ち込まれる前に落とされる。

そう、カンザキ・ツツジにも通じるような…。

そして、対応できたことでの一瞬の安堵が、心と機体に隙を生む。フルグランサがラストロランチャーの長い銃身を両腰から覗かせるのを、ホウカは目にした。さらに両腕を突き出し、シールドライフルの銃口を向ける。

絶対殲滅、四門同時砲撃。

回避行動は——間に合わない。

集束した粒子の塊が吐き出される。

『——斉射ッ！』

ガンダムラナンキュラスが、光に包まれた——

.....

圧倒的な破壊の光が、雲海を渡る。

塵一つ残さず、という常ならふざけて言うような台詞が、全く冗談ではなくその威力にはぴたりと合致した。

一歩間違えばその塵の仲間入りだったハルジオンが、浮遊大陸の下にある地層の隙間に機体を隠す。

「どうなってるの、あの粒子量…！」

ジニアは、コンソールに表示される測定値を見て驚愕に目を見開いた。

幸い、機体への被弾は今のところない。大出力のビーム兵器を避けるには、このハルジオンの機動性が有利に働いていた。

しかし、接近できない状態に追い込まれているのも、事実だった。「ドツズライフルも、近付かなきゃ意味ないし…！」

ハルジオンの武器は、基本的にくる近距離でのみ効果を発揮するものばかり。クランシエ譲りの可変を活かした飛行形態を駆使すれば、接近することも可能だが、その契機を未だ掴めていない。ホウカに任せると宣った反面、何か対抗しないと体裁が悪いというものだ。

接近できれば、或いは…。

思案していると、アラート音が攻撃を報せた。

「ど、どこから!？」

『こつちだ!』

隠れている場所の更に下、崩落の痕跡を見せる突き出た岩盤(無論、そういう設定で再現されたオブジェクト)から、漆黒の機体・ガンダムサレナが飛び出し始める。ビームバズーカは構えておらず、フォルディングバズーカのように折り畳んで背部にマウントされていた。ガンダムサレナは腰からビームサーベルを抜き出し、緑色の粒子刃を発生させる。

「やってみる価値は…」

ハルジオンのドッズライフルでの応射。

しかし、AMBAAC可動肢としての作用を持つ両肩のバインダーを、文字通りフレキシブルに動かし、黒い重モビルスーツは躲しながら接近してくる。

ジニアはスロットを操作し、ビームサーベルを選択した。

「ありますぜってね!」

明朗に叫び、ハルジオンの左手首から黄色いビーム刃を発生させる。

フルバーニアのユニバーサルブーストポッドを意識した背部のバーニアを噴かし、ガンダムサレナに飛び掛った。

黒と桃色のモビルスーツが剣戟する。

『真っ向勝負かよ、面白え!』

「トモヒサこそ、わざわざ接近してくるなんて!」

『いつまでもビームバカスカ撃ってりや、粒子が勿体ねえからな!』

トモヒサはそう言うが、ガンダムサレナの近接戦における純粹なパワーも凄まじかった。粒子が勿体無いと言いつつ、威圧感のあるモビルスーツがビームサーベルを叩きつけてくる。

『相手がアズマさんじゃなくて、残念がつてんじゃねえのか?』

「そんなこと…!」

少し、ギクツとする。

思っていないと言えば嘘になるが、トモヒサと本気でバトルできる喜びも感じているのだ。これから先の選手権を共に戦い抜くために、

彼我の実力は知っておくべきだし、いい機会だとも思う。

何よりも、リクヤの席を担う自分が、彼と肩を並べるに足る実力かどうかを見極める機会でもある。

そんなことを考えていても、容赦のない斬撃がハルジオンを襲っている。今は、眼前の”ソロモンの悪夢”を黒く塗り潰したガンダムから、勝利を得ることだけに集中すべきだ。

(でも、何このハイパワーのゴリ押し…！)

サーベルの出力と純粋なパワー。”黒い悪夢”という異名は、確かに言い得て妙。

正直、押し負けているのが目に見えていた。コンソールが左腕破損の危険を報せ、実際にもハルジオンの関節が悲鳴を上げているのが分かる。

しかし、形勢を変える絶好のチャンスこそ、今。

ここが契機と見た。

「ちよつとだけ…ね！」

先の言葉に返事をしながら、腕のサーベルで弾いて後退する。

ハルジオンは胴体を反るように折り曲げ、ドツズライフルを胸部に接続して飛行形態に変形した。克蘭シエから引き継いだ可変機能だ。

推進器が全て後ろを向く形になり、一気に離脱する。

『おう、逃げるのかよ！』

「——ところがぎつちよん！」

ガンダムサレナに、ビームバズーカを撃たせる時間は与えない。

すぐに旋回し、機首となったドツズライフルを撃ち込んで再び接近した。

『っ、危ねえ！』

ガンダムサレナはバインダーを噴射させ、その攻撃を躲しながら飛び上がる。ここぞとばかりに攻撃を仕掛け、撃ち落としにかかった。

ハルジオンが、初めてガンダムサレナの後ろを取る。ビームバズーカを懸架するためか、MLRSコンテナが左側の三基のみ装備されていることを確認した。

狙いを絞ってドツズライフルを撃ち込む。しかし、重モビルスーツは核兵器運用によって齎された機動性を活かし、後方からの射撃を器用に躲し続けている。やはり、そのフォームはともジオンらしくて美しい。アナハイム社のジオニックス系技術者諸氏に敬意を表したい。ふと、シャアピンクのザフト水泳部機を思い出した。

「なんて機動性、私のスーパーグリーンみたいな……！」

『アレと一緒にすんな！』

トモヒサがツツコミを返ししながら、ガンダムサレナの空路を直角に曲げる。

バインダーの可動性を存分に発揮した機動に驚くが、すぐにその後を追おうと操舵を切る。だが、飛行形態の直線的な加速では対応し切れなかった。

機体をモビルスーツ形態に変形させようとスロットを滑らす。

と同時に、ロックオン警報。

「――！」

変形をしながら視線を移し、浮遊する巨岩の壁面を幅広の両足でしっかりと踏み込むガンダムサレナが、見上げるようにこちらを見るのを確認する。

その背にあるのは、三基のMLRSコンテナ。

その内の二基が、ガコンと音を立てて開き、弾頭を二つ覗かせた。

『こいつをくれてやる！』

変形を終え、ドツズライフルを握るとタイミングが重なってロケットランチャーが発射される。

ほとんど反射的、左のビームサーベルを発生させながら、ドツズライフルを一発のロケット弾に向けた。

「ジオンの春は――」

正確な射撃修正は行わず、直感のみの狙撃。

弾頭を正面から撃ち抜き、爆破させた。その爆煙を弾道として空中に描きながら、残る二発目が迫る。

狙撃は間に合わない。

「――伊達じゃないんだからア!!」

故に、ブーストポッドの機敏な動きによる回避運動をしながら、発
生させていた左腕のビームサーベルを弾頭に突き立てた。

そのままロケット弾が二枚に捌かれ、二つの爆発を空に咲かせる。

(ロケランはあと一個！それさえ何とかすれば…)

ジニアは思いながら、警報が鳴るより早く感じた。

集中によって先鋭化された第六感が、危険信号を発するのを。

ハルジオンのモノアイが滑り、ガンダムサレナを捉える。

その右肩が構えるビームバズーカが、既にエネルギーを集束し終え
ているのも。

(…ロケランはデコイ!?)

いや、当たれば御の字、そうでなくともビームバズーカを展開・発
射までの――ハルジオンがロケット弾を迎撃した、時間にして僅か六、
七秒程度の――時間を稼げれば良いと、それくらいの気構えだったのだ
ろう。

しかし、そう気付いても後の祭り、もう遅い。

――ゴウツ!!

破壊のエネルギーが、瀑布の如く大筒からぶっ放された。

(避け――)

ハルジオンの短い胴が、ハイメガ並の奔流でごっそりと掻き消え
る。

撃墜、というのも生温い、無慈悲な潰滅。

あまりに呆気無い、決着だった。

最後にハルジオンのモノアイが映したのは、ガンダムサレナの爛々
と輝く両目だった。

.....

粒子変容。ガンプラに革命を起こした技術。

それが齎す恩恵は、オブジェクトの構築やビーム類に留まらない。

「プラフスキー粒子を制する者はガン普拉バトルを制する」、とまで形容される言葉が存在するように、その特性を理解し、ガン普拉に相応の加工を施すことで無限大の可能性を生み出すのだ。

かのヤジマ・ニルスの愛刀「戦国アストレイ頑駄無」が第七回世界大会で見せた、サムライソードによるビーム切断と「粒子発勁」。

同大会の優勝者である、イオリ・セイの「スタービルドストライク」が初出とされる「アブソープ／デイスチャージ／RGシステム」など、その他多くの粒子変容を応用した能力が、いずれも音に聞こえるほどの結果を残している。

無論、本来のガン普拉が持つ機能も例外ではない。

圧縮粒子領域「GNフィールド」や、宇宙世紀シリーズの「Iフィールド・バリア」。どちらも無加工のままでは不安定な機能だが、作り込むことで高出力の防御領域を得ることは可能だ。

詰まる所、”ガン普拉に愛情を籠める程、それらも高次元に完成させ得る”、ということである。

以前、部室でマリコの講義を受けていた時の、教材の一つから読んだそれらの記述を思い出す。改めて、粒子変容の強力さをホウカは実感していた。

『!?!』

相対しているガンダムAGE-1フルグランサ、その操縦者であるアズマ・ハルトが、不可解な現象に驚く様子が分かった。

発射された四門同時砲撃の光軸が機体には着弾せず、その眼前で悉く”消滅”したのだ。

『粒子変容の力場…Iフィールドか!』

即座に、その現象の解を口にする。

ガンダムラナンキュラスに実装された、粒子変容フィールドの代表格「Iフィールド・バリア」。

背面に広がる花卉型ウイングユニット、「フラワーリングジェネレータ」によって制御されるそれは、チーム「スターブロッサム」の心の形だった。

しかし、その出力と利便性において未だ課題を残している。元々、

別の機能として用意されたものだったが、トライアル時に発生した力場を防御に転用できることが分かったのだ。しかし、実戦に投入するには問題が多いため、バトルの中でデータを取って調整すればいいとトモヒサが判断したのだ。

とは言え、こんなにも早く使うことになるとは、ホウカは思っていなかった。

『しかし、出力は安定していないと見た』

アズマの言う通りだ。

粒子変容フィールドは、ビーム兵器類に対して絶対的な防御力を発揮する。だが、それを統御することは、そう容易なことではないのも事実だった。

とりわけ、高出力を誇るガンダムヴァーチェのGNフィールドや、クロスボーン・ガンダムX3の「Iフィールド・ハンド」などは特に御し難いじゃじゃ馬として知られる。強力が故に、安定した出力を発揮できるほどの加工技術は、高いものを要求されている。

しかし、だからこそ、ガンプラバトルというものは奥が深いのだった。

(何とか、上手く展開できたけど…)

バリア領域の範囲、出力、共に高い水準だ。ビーム攻撃を無効化できているが、即時対応に難有り、かつ高出力のためにコンソールで手動制御する必要もあった。

そうは言っても、今はこれを駆使して戦わねばならない。

じりじりと、互いに様子を伺いながら機体に慎重な足運びをさせる。

『カトーめ、厄介なものを』

「…でも、接近戦だとIフィールドは対処し切れません」

『そうだな。結果論に過ぎないが、仕掛けて正解だったと言える』

アズマが含み笑いを零した。

次にどう仕掛けてくるのか。また至近距離か、それともこちらの動きが止まることを狙ってのビーム攻撃か。歴戦のファイターなら、思いもつかないような手段で攻めてきても不思議はない。

『攻めて来ないのなら……こちらから行くぞ!』

そして、やはりフルグランサが先に動いた。

両肩と両膝の装甲が開き、ミサイルランチャーの射出口が露出する。

ホウカはドツズライフルを右手に持ち替え、刃を発生させずにサーベル柄を左手で握り直した。

「Pファンネル!」

ミサイルランチャーが発射されると同時に、Pファンネルを射出する。

ドツズライフルの射撃と、Pファンネルのマルチロック機能による応射で、再びミサイル群を撃ち落としにかかった。

(Iフィールドの弱点を……!)

Iフィールドが物理衝撃に対しては無力であることを、アズマはすぐに看破したようだ。劇中においてビッグ・ザムやデンドロビウムも、物理衝撃によって突破されている。

実弾兵器が弱点であることなど、至極明白なことだった。

「落とし切った……!」

コンソールが、全弾を撃墜したことを報せる。しかし、大量のミサイルを撃墜したことで煙幕が立ち籠め、視界を塞いだ。

ホウカはスロットを操作し、フラワリングジェネレータ本来の機能を選択する。畳まれていたウイングが横に開かれ、その真価を発揮するために花を開く。

足下の粒子帯に反発し、大型ジェネレータが見えざる力場を生み出す。バーニアも噴かずに、機体が浮き上がった。

即ち、“プラススキークラフト”である。

Pファンネルを射出したまま、サーベル柄から刃を発生させて上へ飛ぶ。

『逃がさん!』

やはり仕掛けてきた。

両機共に煙幕を突き破り、空中で刃を交える。フルグランサの右のサーベルを弾きつつ、至近距離で撃ち込まれる左のライフルをテール

バインダーの可動によって躲した。

「ツッ」

応じて、こちらもドツズライフルを撃つ。

しかし、ボクサーのガード体勢のように前面へ掲げられたシールドライフルによって阻まれ、フルグランサはそのままバーニアを噴射させて距離を詰めてきた。

絶え間ない攻撃の応酬で、感覚が研ぎ澄まされていく。

思考が理解するよりも早く体が反応し、フラワリングジェネレータに力場を展開させる。最早、出力を調整する暇もなく、出すが俣にした。

ガード体勢のまま接近するフルグランサ。その両脇から伸びてくるのは、真紅の砲身・グラストロランチャー。

先の直感的中した。撃ち出された粒子の塊がIフィールド・バリアに阻まれ、ピンクの輝きが凄惨な美しさを持って眼前で弾け飛ぶ。視界が桃一色に染まった。

短い砲撃が止んだ直後、タイタスやザクのように、フルグランサが左肩を突き出して突進してきた。

重装甲に任せた、ボディタツクル。

——ゴッ!!

正面からそれを受けてしまい、ランキュラスが吹っ飛ぶ。パーツの幾つかがひしゃげる音がした。

…だが、それも既に見通している。

Pファンネルは、その為に帰投させずにおいたのだ。

然りとて、Iフィールド・バリアを再度展開する暇など、アズマは与えてはくれない。ランキュラスの体勢を直す間に、二門のランチャーに再び粒子が集束する。

同時に、Pファンネルがフルグランサの四方を取り囲んだ。

（——そっ！）

一斉射撃。四つの光が、Pファンネルの先端から奔る。

瞬間、フルグランサが左を振り向いた。

『ぬウン!!』

グラストロランチャーから迸った砲撃を、振り向いた動きのまま滑らせる。それがPファンネルの二射を薙ぎ払って掻き消し、背後の二射も、広げた左腕のシールドライフルによつて叩き落とすように受け切られた。

豪快にして、精確。

あまりの神業に我を忘れそうになるが、これこそ好機。

フルグランサのブーストが切れる、この瞬間。

バーニアの推力によつて飛んでいたため、フルグランサがゆっくりと落下を始めた。フィールド効果によつて軽減された重力で、急な落下は起こらない。

方やランキュラスは、プラススキークラフトによる浮遊のため、対空を保っていられる。

(ファンネル、お願い!)

最大の好機に、Pファンネルが閃いた。

『オオ!!』

恐らく、アズマもランキュラスが対空していられる理由を考えていることだろう。聡い彼なら、すぐに気付くはずだ。

その答えが導き出される前に、決める!

ランキュラスがサーベルを握る左手を前に掲げ、その腕を払う。いつからか慣習となっているこの挙動に応え、Pファンネルがフルグランサに迫った。

『ぐう!!』

二基のPファンネルが、左右のランチャーを斬り落とした。

続けてもう二基が、その本体に突貫を仕掛ける。

勝った、と思った。

油断や傲慢などではない、確信として。

しかし、歴戦のファイターは、その確信をも打ち砕く。

「——!?!」

一瞬、機体が弾けたのかと思った。

否、そうではない。

フルグランサが、ガンダムが装甲をパージした!

胸部を覆っていた装甲に、二基のPファンネルが突き刺さる。

さらに両足を開脚させて腰を捻り、空中で機体を転身。両腕についたままのシールドライフルからビームを発射し、さらにもう二基のPファンネルを撃ち落とした。

何者をも屈服せしめる、圧倒的な絶技だった。

グラストロランチャーが分離したことで独特の形状をした背面が露出し、その背にあるAGE-1ノーマル本体のバーニアが唸りを上げる。

『このワシに——』

ガンダムAGE-1の胸に、「A」のマークが光った。

『——装甲を外させるとはア!!』

黄色だった両目が緑へ変わる。

そのツインアイが一際強く輝き、ガンダムラナンキュラスへと迫った。

ホウカは、上昇を始めた救世主ガンダムに向かってドツズライフルを撃ち込む。Pファンネルを二基落とされ、残る二基も装甲に突き刺さったまま落下していき、帰投させることもできない。

最後の交錯と、ホウカは察した。

元より、ドツズライフルの応射など当たるとは思っていない。浮遊岩塊を蹴り、常識を逸する回避運動と速度を伴って、鬼神となったガンダムが来る。

両腕のシールドライフルから粒子の刃を発生させ、一直線に接近してきた。

ホウカも覚悟を決め、ドツズライフルを捨てる。右足のサーベル柄を掴み、ビームサーベル式が両手持ち流になった。

『ゆくぞ！我がガンダムよ！』

「いくよ！」私たちが”のガンダム！”

^{A G E}世代を超えた両者が、克と気合を叫んでぶつかり合った。

.....

残る生徒達を校門の外に追い出し、高等部校舎の施錠をかける。

贅沢なもので、この学園は高等部と大学部で校門が二つある。昼に掃除をした校門はその甲斐もなく、空き缶や包装袋などがちらほらと見えた。これらのゴミを捨てたのが、英志学園の生徒ではないことを願う。

この施錠は、本来用務員がやるような仕事ではないのだが、生徒達に信頼を寄せられているという理由で学園側から頼まれている。

信頼があるのかどうかはともかく、特別早く帰る予定もない場合は引き受けることにしていた。生徒達と与太話などを交わすのは、老いた身を潤してくれる。帰り際に不本意な渾名で呼ぶのもいるが、いつものことだ。

高等部校舎に入り、職員室を目指す。昼間ならば生徒達の活気に溢れている校舎も、今はしんと静まり返っている。長い職員歴で幾度と味わった寂寥にも似た空気感が、妙に心地いい。

自分の足音のみが響く物静かな階段を登って二階に上がると、職員室から煌々と明かりが漏れているのを目にする。

生徒会室の前を過ぎ、その引き戸を叩く。

「用務員のアズマです。鍵を返却に……」

「ああ、先生か。入っておくれ」

この声は……シマ・マリコか。

この学園に、自分を”先生”などと呼ぶ人間は一人しかいない。

「……失礼する」

うっかり、ぶっきらぼうな口調になってしまった。

引き戸を引いて職員室の中へ入ると、マリコが椅子に座って書類に目を通しているのを見る。そして、もう一人の人物が窓際に立っ

るのも確認した。

肩まで届く銀髪に、秀麗な面立ちと赤と白の派手な衣服―ゼクス・マーキスとゼハート・ガレットを足して二で割ったような衣服―という、浮世離れした出で立ちの大学の生徒。

「テライ・シンイチ、何故お前がここにいる」

「フ：久し振りだと言うのに、あんまりなご挨拶ですね。この三人が集結するなど、ほぼ一年ぶりですよ、アズマさん？」

こちらを向き、不敵な笑みを浮かべる。この妙に演技臭い仕草は、シンイチの以前からの癖だ。

どうも、ガンダム作品に感化されすぎた幼少時代を過ごしたようであり、聞く話に困ると、彼が日本語を覚えたのも、これの賜物らしい。英志学園に留学したのは三年前だが、それにしても日本語が流暢だと去年の今頃は思ったものだ。

「話は聞いています。キンジョウ・ホウカとまみえたそうですね」

「耳が早いな…いや、シマ。お前だな？」

事の成り行きを愉しんでいるであろう、昔の教え子を見遣る。

マリコは、書類に通していた切れ長の目をこちらに向け、袖を通さない赤ジャージの下で腕を組みながら、椅子を回転させた。

「なんだって、キンジョウは後継者ですよ。先代に教えないわけにはいかないでしょう？」

「何の因果でしょうか…私も今日、彼女に面会したばかりで。しかし面白いものです。こうして血脈は受け継がれていく…全く、面白い」
クセの強い教え子達を持ったものだ…。

しかし、シンイチの言う通りでもある。去年の選手権出場の際に彼らに手解きしたのも、丁度同じ頃だったか。

「先生から見ても、二人はどうです？」

「シマよ、先生はよせと…まあいい」

鍵を返却しながら、マリコへ返す。一時間半ほど前のガンプラバトルを思い出し、率直な意見を述べた。

「まだ粗削りだ。が、キンジョウ・ホウカはワシにAGE―1ノーマルを使わせた」

言うと、シンイチが反応する。

「それは、興味深い話ですね」

「去年の今頃、お前はワシに手も足も出なかったのを忘れたか？」

「若さ故の、浅はかさ…あの頃は弱輩者だったのですよ」

全く、口の減らない教え子だ。

「して、勝敗は？」

マリコが椅子から身を乗り出す。

最後の戦闘を開始した直後に鳴り響いた電子音声、未だに耳に残っている。何とも不完全燃焼な結果に終わった。肩を竦ませて、端的に告げる。

「時間切れ、だ」

「では、決着がつかなかったと？」

「いや…あれはワシの負けだ。そもそも、駆け出し同然のファイター相手に本気を出した時点で、認めざるを得ん」

確かに、結果自体は時間切れで互いにドロートとなった。射撃戦では未だ粗い部分が目立ったが、こと近接戦闘に及ぶと、キンジョウは驚くべきマニユーバを見せる。とある教え子の姿が脳裏に浮かぶが、彼女とはまた違ったスタイルだ。

長く感じていなかった高揚感、それをキンジョウ・ホウカは思い出させてくれたのだ。勝利を与えてやっても、罰は当たるまい。

「それにカトーの奴、フィールドなんてあのガンプラに仕込んでおったわ」

「フィールド？粒子変容フィールドですか」

シンイチが反応する。

「ああ。出力調整はまだできていないようだが、厄介なものだったぞ」
「トモヒサらしい改造だ」

そう言つて、今度は自然な笑みを浮かべた。

シンイチとトモヒサの間柄は、先輩と後輩を超えた強い信頼関係と呼べるものだ。カナダ・リクヤも、トモヒサと同じようにシンイチと強く結び合っていたのを思い出す。

そうでなければ、初出場にして地区予選の決勝まで勝ち上がれな

かっただろう。

ともかく、今日のことであつたことがあつた。

第一に、二人の女子生徒に懸念する様なことはない、ということ。寧ろ、あれ程までガン普拉バトルに長けた女子は珍しい。

今まで自分が教えを授けた女性の中でも、彼女らほど適性が高い者はいないだろう。或いは、シマ・マリコやヨーロツパレディースチャンピオンのレジーナ・ディオソ以上かもしれない。

そして第二に、トモヒサの様子が変わつていたこと。去年の選手権では酷く荒れていたのだが（ガンダムサレナのアトミックバズーカを開始早々に敵陣へぶつ放つことから、”黒い悪夢”の異名を得ていたのだつた）、今年は女子二人の影響なのか、堅実かつ相手を尊重する素振りも見せているのだ。

チーム「スターブレイカーズ」から「スターブロッサム」への変化。それは、新世代へのバトンタッチのような、新しい”風”を感じさせる。

（ガン普拉バトル20周年の節目、か…）

昼に電話を介し、言葉を交わした男を思い返す。

先見に長ける彼―三代目メイジン・カワグチは、やはり名にし負う男か。

面目を一新する、キンジョウ・ホウカとジニア・ラインアリス。

”錦上に花を添える”かのような二人の行く末、それを見守ることが、馬齢を重ねた己にできる精一杯の助力というものだろう。

A c t . 0 5 『錦上、花を添うⅡ』 E N D

Act. 06 『朗々、天照す閃光！I』

アメリカの芸能アカデミーにいた、六年ほど前のとき。

両親に言われるがまま入った学校での生活は、正直言つて、あまり気が進まなかった。演技のレッスン自体は嫌いではなかったが、何処か満たされないような、心の中を風が通るような空虚感。そんな日々を過ごしていた。

そして、アカデミー小学生最後の5学年になったとき。

彼女と出会った。

きっかけは、“彼”の存在。

両親に連れられて訪れた、大手デパートの屋上広場での出会いだった。

毎日、同じ時間にここに寄るらしい彼に会うため、彼女と一緒にほとんど毎日デパートを訪れた。一緒に食事をし、一緒に遊び、共にいる時間は心に空いた穴を優しく埋めていった。

そんな充実した毎日は、アカデミーの生活にも大きな影響を与えた。身振りや表情が以前に増して豊かになったと先生や同期生達から言われ、次第に学校生活も楽しくなっていたものだった。

それも全て、彼女と彼のお陰だ。

しかし、そう感謝の言葉を述べても、彼女はつんとした態度を取るのだ。

一つ年上の彼女は自信家であり、普段から突慳貪な態度なのはよく知っている。それでいて、時折見せる可愛らしさとリーダーシップは、人を惹き付ける魅力があった。

彼女は今、元気であるだろうか。出会ってから半年後、両親の都合で彼女は日本へ帰ったのだが、こちらも舞台や進学のことなど色々あったので、あまり連絡を取り合わなくなっていた。

彼女は本名がコンプレックスと言ひ、呼ぶととても怒っていたのだが、自分はそうは思わない。日本人らしい、いい名前だと思った。「ガンドムGのレコンギスタ」に登場するマニィ・アンバサダに似た長い

黒髪も、綺麗だと思う。

時々やるガン普拉バトルも、彼女には敵わなかった。

アンドウ・サダコ。それが彼女の名前だ。

.....

ガンダムラナンキュラスがロールアウトしたあの日から、5日後。

週末の土曜日に、予てから予定されていた他校との練習試合の日を迎えている。

「♪」

ホウカは、チョコレートなど豪華なトッピングが盛られた、「ジャブローの風」なるパフェにスプーンを突き刺した。

ホウカ達は今、ガン普拉喫茶「メガファウナ」で昼食を摂っている。

英志学園が校を構える自然豊かな土地とは違い、車で一時間ほど離れたこの街は、県内一の都会である。関東平野を北に貫く交通の要所として発展したこの街には、多くのビルディングが立ち並び、こぞつて様々な店舗が軒を連ねる。このガン普拉喫茶メガファウナも、その一つだった。

店内には席を仕切るようにガラスケースが並んでおり、その中には著名なビルダー達による数々の完成品ガンプラが、出入る来客達へとその身の絢爛豪華さを見せている。

その中には、「ガン普拉心形流鉄機派 テツキ イブキ・アラタ」と銘打たれた「BB戦士 鉄機武者真星勢多 マスタートゼータ」もあつた。

ガン普拉心形流と言えば、かの珍庵を開祖とするヤサカ・マオとサカイ・ミナトで有名な工作流派であるが、その門弟であるイブキ・アラタは、昨年に初の派閥を打ち立てたビルダーである。ホビーホビー誌でも特集が組まれるなど（心形流のビルダーによくある物凄い自己主張まで継承していた）、何かと話題になっていたのだった。

ホウカは作品達を眺めて、最近得たそれらの知識を掘り起こす。

五日前に激戦を繰り広げたあのバトル以降、アズマは積極的に協力をするようになっていた。曰く、あくまで用務員だから部室に出入り

するのは今年から控えていたそうだが、テライ・シンイチの進言によってコーチという形で特別な認可が下りたそうだ。

そういう経緯もあって、参考にしろとアズマが持参した模型誌を読んだホウカは、ガンプラ自体ではない、それに纏わる知識も覚えたのだった。

「セント榎葉女子学園って、どんなチームなの？」

食後に追加注文した「ジャブローの風」チョコレートパフェを頬張りながら、これから向かう学園のことをトモヒサに訊ねた。隣の席では、イチゴなど赤い果実がトッピングされた「情熱のアメイジング・ザ・パフェ（許諾済み）」なるパフェをジニアが啄いている。

向かいの席には、引率で車を出してくれたマリコとトモヒサが並んで座っていた。

トモヒサはこちらを見て、「うわ…」と声を漏らす。

「お前ら、そのナリして結構食うよな…」
むっ。

「あー、トモにいまたそういうこと言う！」

「私達は動く部活やってるから、エネルギー効率が違うの！常時トランザムなの！マイクロウェーブなの！ね、ホーカ！」
「そうー！」

支援を送るジニアと一緒に、トモヒサを弾劾する。後ろの方は同意するべきか微妙だったが、とりあえず攻撃材料として同意する。

ジニアはスプーンを口から離し、手元でふりふりした。

「トモヒサはねー、女子に対する優しさが足りないんだよねー。こないだだって、こんなか弱い女の子達にビームバズーカぶっ放つんだもん」

「お、お前、あれは…！…ってか、何処が弱いんだ！」

「トモにい、そういう所だよ」

ムスツとした声で追い打ちをかける。

トモヒサは「うっ」と口籠もった。それきり言い返さず、いじけたようにストローでコーラを啜る。ちよつと可哀想だが、女子に「結構食う」なんて直接言う方が悪いのだ。うん。

「…つてそうじゃねえだろ！話を逸らすな！」

二人してスプーンを咥えながら、顔を見合わせる。

年長者は後輩二人に批難の視線を送りながら、ずぞぞ…とコーラを強めに吸引した。

「ごめんなさい」

「ぶつ…アツハハハ！愉快だねえあんた達は！」

いつものように白いシャツとタイトなスカートに身を包むマリコが、珍しく噴出した。

学園での常の出で立ちに加えて、目の冴えるような赤いカーディガンを羽織っている。詳しいことはホウカも知らないが、これが彼女のパーソナルカラーでもあるらしい。シーマ・ガラハウ似なのは、外見だけではないようだ（機体の色で言えば、シーマ本人はゲルググマリネの印象が強いが）。

トモヒサが溜息を吐きながら、ストローを回してグラスの氷をカラカラと鳴らす。

「先生まで…」

「いや、あんたが面白くて笑ったわけじゃないよ。まあ、それもあるけど…、鬼コーチの洗礼を受けた割には随分と前向きだねえって、思っただけさ」

マリコがコーヒーグラスを右手で揺らしながら、頬杖を突いた。

向かいのジニアは苺をスプーンで掬いながら、得意げに胸を反らす。

「フン、そんなことで凹んだりしないもんね！寧ろ、あのアズマ・ハルトと同じフィールドに立てたってだけで、幸せなんだからあ」

そうして、苺を口に放り込みながら幸福を表情に貼り付けた。

この四日間というもの、アズマとトモヒサのテストによって判明した改善点を、二人は自覚して直すことに集中した。

ホウカは、主に対応能力。アズマ曰く、近接戦闘の反応は申し分ないが、それに傾倒しすぎるクセがあると言う。フルグランサのような瞬発の打撃力がある相手に対して、しっかりと予見して危険を察知し、ある程度距離を取ることも必要、というのが一つ。

そしてもう一つ。Pファンネルの操作やIフィールド・バリアから、武装の扱いに関しては他者にはない感覚を持っていることも指摘された。

これは、何となくホウカも掴んでいる。元々、古武術という、体だけではなく得物を扱う稽古もしていた経験が、ガンプラバトルに活かされているのだろう（ビームサーベルを好む傾向にあるのも、剣術の経験からだと言おう）。

これらを踏まえ、目下の課題は「状況対応力と空間把握力の研鑽」、ということになった。

そしてジニアは、ガンプラ自体の強化。トモヒサが見たところ、基本的な部分で問題は見つからなかったらしい。高機動であるハルジオンの運動に追従し、近接でも引き際を見極めている。その上、第六感も鋭敏ときていた。

トモヒサは安易にこの表現を使わないが、はっきり言って、センスと技能においては「天才」と言える。

強いて問題を挙げるとすれば、ハルジオンである。基本的な総合性能は並の水準をクリアしているが、やはり”並”である。ガンダムサレナのビームバズーカを躲せなかったのも（少々意地悪な戦法だったが）、性能面から来るレスポンスが足りていなかったからだ。

ガイアガンダム・ロアが担っていた一番槍としての要求はこの時点で備えているが、機体が追いついていないという結論になった。要するに、「ハルジオンのブラッシュアップ」という課題が、ジニアに課せられたのだ。

そしてこの日、その四日間の結果が試される、というわけである。ホウカは、隣でニコニコするジニアを横目に、マリコへ言う。

「二人のお陰で、自分では気付かないようなことが分かかって助かりました。ジニーと同じで、凹んでる暇なんてありません」

「そうかい。ま、心配なんてしちゃいけないけどね。私が見込んだんだ、この目に狂いがあっちゃ困るってもんさ」

「…樞葉についての話はしなくていいんですか…」

じと…とした視線を三人に向けるトモヒサ。

「おっと、度々すまないね」

そうトモヒサに謝り、マリコが切れ長の目から妖艶とも言える鋭い視線を向けてきた。

時々見せてくるマリコの眼光は、得も言われぬ気持ちをごちらに抱かせる。懐刀を忍ばせているような、しかし恐怖感ではなく、思わず姿勢を正してしまうような威圧感だ。

ふと、同級生から聞いた噂を思い出した。「シマ先生の実家はカタギではない」という内容のもの。わざわざ言い回しているのは、自衛のためだろうか。

(いやいや、まさか…)

ちらり。

トモヒサが「檉葉女子学園つてのは…」と解説を始めるのを聞きながら、目を閉じてグラスに艶やかな唇を宛がうマリコを盗み見る。

そういえば、どこか育ちのよさも感じるような。

いやいや、まさか…。

.....

女の力。「ガンダムGのレコンギスタ」で登場人物が放った、気合の一声。

ガン普拉バトル業界でも、この“女の力”というものは大きな潮流を生んだ。

記憶に残る女性ファイターと言えば、三年前に激戦を繰り広げた「ホシノ・フミナ」と「キジマ・シア」。そして、昨年話題になった菱亜学園の“キャプテン・アゼリア”こと「カンザキ・ツツジ」らである。

今や女性界限と言えど、ガンプラ人気は隆盛の一途を辿っていた。

二年前にヨーロッパで初のレイリースチャンプとなった「レジーナ・ディオ」は、ヨーロッパジュニアチャンプの「ルーカス・ネメシス」に次ぐ実力者と言われる。かの“メイジン”を襲名した初の女流ファイター「レディ・カワグチ」に続き、若い世代に一大センセー

シヨンを巻き起こした人物だ。

もう一人、伝説の一角である「アイラ・ユルキアイネン」がいる。彼女は、プラフスキー粒子を語る上で決して欠かせず、10年来その姿を見せていないことから、本当の意味で”伝説”となっていた。

かつては男性向けと言われたガンプラバトルだが、現実での基礎的な体力や筋肉量は必要としないため、性別による決定的な差は皆無と言える。「加工技術」と「操縦技能」、この二点に集約されるこの分野は、彼女達の”内なる可能性”を大いに引き出すことに繋がっていた。

強力な女性ファイターが台頭するのは、当然の帰結と言える。

そして、それを体現する実績を誇るのが、セント榎葉女子学園。

東京の「聖オデッサ女子学園」に比肩すると言われる程の、北関東における女子名門校である。

英志学園にも引けを取らない歴史と実績を誇り『その先にある、未来という閃光』をスローガンとして掲げる。決して縛ることのない伸び伸びとした教育方針が人気であり、これこそが名門たる所以だった。

この学園にあるガンプラ部も、高い名声を誇っている。

チームメンバーが交代する際に盛大な儀式を行い、非常に格式のあるチームだと言われている。そして使用するガンプラも、Gのレコンギスタに登場する機体に統一されているのも、特徴の一つだ。

そのチーム名も、日本神話の太陽神であり女神である「天照大神」とスローガンをかけあわせた——GのレコンギスタのEDテーマにもかけた——ものとなっている。

その名も、チーム「天照す閃光」。

待ち遠しくても、待て！

.....

森の木々を、薙ぎ払われた赤いビーム刃が伐採していく。

フォトン・バッテリーの機能を持つ背部のクリアパーツから、高濃

度に凝縮された粒子エネルギーが供給ケーブルを伝う。それは、両手に持つ超大型ビームサーベルから放出され、機体全長の倍に及ぶ粒子刃を発生させている。

その”G系統”モビルスーツ中でも随一、接近戦に特化した「ジャステイマ」による豪快な斬撃を、奇特な意匠を身に纏う紅白のモビルスーツが迎え撃つ。

「中々の出力…ですが、私を落とすには足りませんわ」

劇中において「ジツト団」の先兵であるナイトを担う機体の攻撃は、その名に違わぬ確かな威力を持っていた。

たったひと振りですぐに樹木の四、五本を刈り取った超高出力の真っ赤なビームサーベル越しに、前方に突出した二本角が目立つ狐のような頭部が覗く。吊り上がった鋭いツインアイが輝いた。

その斬撃を、和装の袖口のような装甲から発生させたビーム・バリアで受ける、紅白のモビルスーツ。粒子刃を受け止めつつ、同時に軽やかに流してエネルギーの消費を最小限にしていた。

元の機体が判別できないほどに色が反転した胴体は、清純なる白。それに彩を添えるかのように紅が塗られ、足元まで覆う長いフロントアーマーの姿は、白衣に緋袴の”巫女”を思わせた。

仮面のように顔面を覆うバイザーの奥から、ツインアイの光がジャステイマを睨む。

「舞台は整いましたよ」

徐ら、紅白のモビルスーツは右手に握っている先太りの三叉戟をくると回転させた。鈍色の芯から左右に伸びる、炎を象ったクリアオレンジの刃先が、ビームサーベルを振り抜いたジャステイマの股下に迫る。

——ザッ！

それが跳ねるように振り上げられ、ドラム缶のような巨大な肩装甲ごとジャステイマの左腕を斬り飛ばした。

「あっ!？」

あまりに華美なる一撃を受け、ジャステイマを操縦しているファイターが狼狽の色を見せる。しかし、バランスを崩しながらも倒れ込むことなく、力強い両足でその場に踏み止まった。

直様、残る右腕のビームサーベルを、がら空きの胴体へと叩き——込もうとして、しかしそれは虚しく空を切った。

舞でも踊るかのように、紅白の機体は裾を思わせる幅広の両足からホバースラスターを噴射し、跳ね上がって回避したのだった。

森林というフィールドにありながらも、長いリーチを持つビームサーベルを難なく躲せる、その理由はオブジェクトの変化にある。

つまり、斬撃を阻む障害だと、ジャステイマが伐採した木々。

跳梁を自由にする空間を得たことで、紅白の機体が大胆に宙返りした。

ジャステイマの上を翻りながら、三叉戟——フォトン・トライデント「緋ノ三叉」の波打つクリア刃が赤熱する。

「フィールドの特性は——」

神楽（少々奔放に過ぎるが）を舞うように跳ね上がった紅白のモビルスーツ——「カバカーリー・ヒノハカマ」が、ジャステイマの背後に着地した。

「——有効に活用するべきですわ」

赤熱した緋ノ三叉の刃がたおやかな挙措で突き出され、それがジャステイマの腹部を後ろから抉り飛ばす。

カバカーリー・ヒノハカマは、ホバリングによる滑らかな動きで半回転した。背を向け、三叉戟の石突を地面に突いて舞を締め括る。

直後、ジャステイマは爆発した。

『BATTLE END!』

決着の宣告。

フィールドが分解され、ヘックスユニットにプラススキー粒子が回収される。バトルを終えた二人の女子生徒が、互いに辞儀を交わした。

癖毛が目立つ生徒が、ユニット上からジャステイマを拾い上げる。相手をしていて、所謂「姫カット」と呼ばれる清楚な黒髪の生徒に駆

け寄った。

「ありがとうございます、アンドウ部長」

「ええ、こちらこそですわ。貴女のジャステイマも良い仕上がりでしたわよ、ニトウ・チカさん」

ニトウ・チカと呼ばれた癖毛の生徒が、嬉々とした表情を浮かべる。

「ありがとうございます！」

「ですが、攻撃一辺倒な部分は改善する必要がありますよ。ビーム・バリアやファンネル・ミサイルなど、ジャステイマにも多彩な武装があるのを留意してくださいませね？」

「は、はい！分かりました！」

最後にもう一度礼をし、チカが部室の奥へ去っていった。

ユニット上に立つカバカーリー・ヒノハカマを回収した黒髪の女子生徒——アンドウ・サダコは、外国製と思しき部室の時計を見遣る。

「そろそろ、刻限ですわね」

と、長い黒髪を翻し、金縁が豪華な部室のドアに手をかけようとした。

「あ、アンドウさん。丁度いいところに」

が、先にドアが開かれ、一人の生徒が入ってきた。ユヅキ・ララー——編み込んだ明るい白髪はくはつが特徴的であり、アンドウも信頼を置くチームメンバーの生徒である。

「そろそろ英志学園のチームが来る頃ですよ。ええっと、チーム名は……」

『『スターブロッサム』』でしたわね。私もそう思って、出向こうとしたところですよ」

「そうでしたか。では、ご一緒に」

「ええ」

ララが横に立って道を開け、廊下に出る。そんなことはしなくていいと以前に申し立てたつもりだが、その都度、人懐こそうな笑顔で流されるので諦めていた。

「去年、地区予選に出場したのは『スターブレイカーズ』でしたわよね。今年はチームリーダーが変わった、とのことでしたけれど」

「去年の”黒い悪夢”がリーダーになったらしいです」

やや後ろを着いて歩くララ。アンドウは廊下を歩きながら、ハアと嘆息する。

「あの砲撃魔ですか…彼の戦い方、あまり好ましくありませんわ」

砲撃魔。アンドウは彼をこう呼んでいた。

去年の地区予選に出場したチームの中で、とりわけ話題をかつ攫ったのが英志学園チーム「スターブレイカーズ」だった。トーナメントでは当たらなかったが、その戦いぶりは忘れもしない。

何しろ、初出場校が破竹の勢いで決勝戦まで勝ち登ったのだ。話題にならない方がおかしいというもの。チームリーダーであるテライ・シンイチの「ガンダムAGE―1トールギス（トールギスをジャケツトシステムのように着込むAGE―1という色物機体）」と、カネダ・リクヤの「ガイアガンダム・ロア」は中々にエレガントかつスマートな活躍で、こちらはウケが良かった。

しかし、問題は”黒い悪夢”ことカトー・トモヒサと、その愛機「ガンダムサレナ」だ。傍目で見ても、その完成度は学生作品としては一級と言ってもいい。塗装のフィニッシングがダイレクトに浮き出る黒というカラーリングを、漆のような光沢で仕上げる腕は賞賛に値した。

だが、アンドウの感性を逆撫でするのは、その戦い方にある。

バトルスタートと同時にアトミックバズーカを構え、初撃でフィールドと相手チームを滅茶苦茶に掻き乱すのだ。頭では、それが作戦であり両翼が機敏に動ける要因でもあったが、理性が受け付けない。

「クラオカさんは結構好きみたいですよ？」

「彼女は彼女なりの理念に基づいてましてよ」

「ふふ、ご友人には甘いんですから」

斜め後ろから小さな笑い声が聞こえる。

「貴女は、そうやってまた私をからかって…」

「あと、『顔はいい』だなんて言っていたじゃないですか」

「なっ、あっ、あれはっ」

言い返せない。

確かに、英志学園の三人はビジュアル面のポイントも高かった。

特に、テライ・シンイチは絵画から飛び出してきたような人物で、宛転たる物腰と不敵な笑みで多くの女性を射止めてきたことは、想像に難くない。カネダ・リクヤも取り立てたビジュアルはないものの、やや中性的な顔立ちという魅力がある。カトー・トモヒサにしても、運動部のような高身長と人の良さそうな硬派なハンサム顔は、雑誌に載っても通用しそうだ。

女性ガン普拉バトル界限では、去年の「スターブレイカーズ」を「ガン普拉界のジャ●ーズ」などとも形容しているのだ。

と、思わず女子校という環境からくる考察をしまい、頭を振った。

「そんなことはいいですわ！それより、新メンバーと言う二人の情報はありますか？」

「勿論、ありますよ」

ララは学生服のポケットからスマートフォンを取り出し、とあるインターネットのページを見せた。

階段を降りる前に、その画面を注視する。「ココネ印」と刻印された赤い判が押されている記事だ。

「英志学園新聞？」

「英志の新聞部による、学園のサイトにも掲載されている記事です。ここに、その二人のことが載っています」

スマートフォンを拝借し、その内容を読む。

映し出された写真には、黒髪を二房に結び上げた髪型の、大人しそうな女子生徒が写っている。

「古武道界に吹き抜けた一陣の風、キンジョウ・ハウカ…。古武道部、ですの？」

「クラオカさんみたいに、掛け持っているようですね」

そういえば、その名前は聞いたことがある。去年のスポーツ誌にも掲載されたらしく、同県ということもあって、風の噂でその女子生徒が英志学園に入学したことも聞いている。

そんな有名人がガン普拉バトルをし、英志のチームに入るとは。

「これはまた、腕が鳴るといふものですわね」

「もう一人、注目すべきなのが下の記事に載っている三人目です。あのカナダ・リクヤにバトルで勝利し、彼自ら身を引いたことでチームメンバーに抜擢された、とのことですよ」

「なんですの？そのウルフ・エニアクルのような人物は」

画面を指先でスクロールし、二枚目の記事で止める。

「…大胆な表現力で魅了する、演劇界の、新生…」

我が目を疑い、思わず目を擦った。

読み終える前に、もう一度その名前を頭から読む。

ジニア・ラインアリス。

「——ラインアリスさん!?!」

読み間違い…ではない。ジニア・ラインアリスと、しつかり書かれている。

思い浮かべる人物を裏付けるように、写真にはマゼンタ色のサイドテールが眩しい、対話をする前にELSも匙を投げそうな笑顔が写っていた。

彼女が、日本に…日本の学校に在籍している!?!

「アンドウさん?」

ララが心配そうにこちらを覗き込んできた。

六年前、自分がアメリカに住んでいた頃に知り合った彼女。

お互い慌ただしい時期だったこともあって、いつの間にか連絡を取り合わなくなっていった彼女。

下の名前で呼ぶなど言っても聞かない彼女。

私よりも”ルイン”に好かれ、嫉妬を煽る彼女。

込み上げてくる感情の正体に気付かないまま、アンドウは階段を駆け下りた。

.....

日本らしからぬ荘厳な屋敷のような門扉を潜り、敷地内へと踏み入る。

これもまた日本らしからぬ庭園が、四人を迎えた。有名な彫刻家の手によるものであろう豪華な噴水が、庭園の中央で絶えず水を噴き出している。その周囲にも、まるで運河を跨ぐように橋が渡される池や教会の建物など、別世界の様相を見せていた。

さながら、”キャピタル・テリトリー”のようである。

「…Gレコの世界かよ…」

例に漏れず唾然としていたトモヒサが、ぼそりとツツコミを入れる。

同じく口をあんどりと開いて呆然としながら、ジニアはこくりと頷いた。

「桎梏…カシーバ…えっ、そういうこと？」

「ぐ、偶然だろ…」

トモヒサのツツコミも歯切れが悪い。

物珍しそうに庭園を見るホウカも、何処か心が躍っているようだった。このように豪華な庭園など早々お目にかかれないので、その気持ちもよく分かる。

「見物は帰りに幾らでもできるじゃないか、早く挨拶に向かうよ」

マリコが先導を切る。この庭園には差して興味がなさそうだが、少しくらい驚いてもいいはずだ。それとも、この学園には来たことがあるのだろうか。

「シーマ様、ここ来たことあるの？」

「ん？まあ、ちよつとした縁ってやつだよ」

御約束とばかりにあしらわれる。この人にはどれだけの秘密があるのか…。

庭園の見物も程々に、その向こうに見える校舎（議事堂か何かと見紛うばかりの異次元の建築様式である）へと向かった。

どんなチームなんだろうと、ジニアが想像していると、

「うん？」

高貴な香りでも漂ってくるような、レンガ造りの校舎玄関の前に、女子生徒が二人立っているのを確認した。

落ち着いた黒茶色と朽葉色の制服に身を包んでおり、周囲の景色と

合わせると、視界の端々にエレガントな蔦模様でも飾られるかのようだった。

その内の一人は、腕を組んで仁王立ちしている。近づくに連れ、その容貌が次第にはつきりしてきた。

丈の短い黒茶色のスカートから、膝上まで隠すブーツのようなソックスを履いたすらりと長い両足。何か不機嫌なことでもあったのか、黄色のネクタイを胸に埋ませてがっちり腕を組んでいる。

そして、日本人らしい——マニイ・アンバサダによく似た——美しい黒髪がそよ風に揺れていた。

記憶の中の人物と、その容姿が一致する。

突然目の前に現れた古い友人を目の当たりにし、思わず立ち止まった。

「……サダコ？」

間違いない、アンドウ・サダコだ。

身長はかなり伸びたが、六年前と変わっていない。

「——下の名前で……」

すると、彼女は腕を解き、ずんずんと力強い足取りでこちらへ早歩きしてきた。

「……呼ばないでって言っているでしょう!？」

有無を言わさぬ勢いで接近し、自分の両手をがっしりと握る。

「お久しぶりですわね! ラインアリスさん!」

怒っているのか笑っているのか、サダコは何とも言えない表情だった。

感情豊かで、そして淑やかで美しい旧友のあの頃と変わりない姿に、ジニアは心底から喜び、再会の感激が込み上げてくる。

握られた両手を力いっぱい握り返し、ぶんぶん縦に振った。

「ほんとにサダコ!? わあサダコだ! サダコー!!」

「くっ! 辞めてくださいまして言っても、相も変わらず貴女は……!」

声は怒っているが、彼女も再会を喜んでいるのだろう。隠せぬ感激の色が、ありありと麗しい容貌に浮かんでいた。

「アンドウさんとお知り合いなんですか？」

彼女の横に立っていた生徒が、ひよっこりとその後ろから現れる。陽の光を反射して煌く、編み込まれた白髪が綺麗だ。

「あ、失礼しました。私はチーム『天照す閃光』のメンバーが一人、ユツキ・ララと申します」

そして居住まいを但し、胸元に手を添えて恭しく挨拶をする。

握ったままの手をお互いに離し、改めてチームとしての挨拶を交わそうとそれぞれに並んだ。後ろで呆然と立ち尽くす、完全に置いてけぼりを食らった三人を招く。

「…先程は失礼致しましたわ。改めまして、お初にお目にかかりますわ、英志学園の皆様。先に紹介に上がったチームのリーダーを務めさせて頂いております、アンドウ・サダコと申しますわ。気軽に、”アンドウ”と呼んでくださいませいませね」

ララ以上の丁寧さと可憐さで、サダコは腰を折って挨拶をする。親愛を表すような表情を浮かべながら、やたらと”アンドウ”の部分を強調していた。

「あら？そういえば、クラオカさんはまだ華道部ですか？」

「…あの、います、私…」

サダコの後ろから声が出た。

全員がそちらを向くと、縮こまっている女子生徒が顔を上げ、また伏せた。大きな丸眼鏡が陽光を反射して表情が読み取れない。ややぼさぼさの長い紺色の髪は、適当な感じで二房に結われていた。

「ク、クラオカ・オリハです…丁度、さつき部室の掃除が、終わって…」

「クラオカさん、挨拶ははつきりと丁寧に、でしてよ？」

「あ…ご、ごめんなさい…」

サダコに指摘され、彼女——クラオカ・オリハは、更に小さくなった。

しかし、ジニアはオリハの最大の特徴を見逃さない。

「おお…見事なツインドライヴ…」

「ツインドライヴ？」

ぼそりと呟いたのを、ホウカが拾った。

「うん。ほら、ツインドライブ」

ホウカには、ジェスチャーで表現する。

自分もそこそこ自信のある大きさだが、それを二回りほど大きく、たわわと両手で包んだ。

「ぶふえっ!?!」

こちらを見たトモヒサが、口を隠しながら盛大に噴出する。

女子校の敷地内で分かりやすいリアクションを取るとは、中々の勇者というか、意外とスケベだ。サダコとララとマリコの白い目が、某光の国の戦士達の如くトモヒサに集中光線を浴びせる。

ホウカは、最初こそ「？」と疑問符を浮かべていたが、顔を真っ赤にするオリハのそれを見て理解したようで、薄らと頬を染めた。

「あー！トモにい、それでさつき……！」

「し、仕方ねえだろ！ただでさえ女子校で、しかも男一人なんだからよ！」

「周りが女子だけだったら何なの!?!」

「べ、別に何もしねえよ！」

「トモにいのえっち!!」

「はあっ!?!」

「痴話喧嘩かい……」

珍しくマリコがツツコミに回った。

サダコも口元に手を添え、くすくすと二人の遣り取りを見て笑っている。

やっぱり、あの頃のままだ。アメリカで一緒に遊んだ、当時の空気を感じた気がした。

こうして、チーム「スターブロッサム」とチーム「天照す閃光」の初顔合わせが、賑やかに終わった。

Act. 07 『朗々、天照す閃光！Ⅱ』へ続く

騒々しい挨拶を交わし、校舎内へと足を踏み入れる。

まるで外国のお城にでも招待されたかのような学園の中を、物珍しげに見ながらアンドウ（無言の圧力を察して苗字で呼ぶことにした）に案内されたハウカ達。マリコは野暮用がある、と言い残して別行動を取っている。

練習試合は多目的ホールで行われるらしく、これもまた豪奢な宮殿のような内装が、煌びやかに視界に飛び込んでくる場所だった。

その絢爛豪華さに打ちのめされ、ハウカは一瞬ふらつとする。

「あつ、何だか目眩がしたような…」

「目が痛え…」

トモヒサも険しい表情で目元を抑えていた。

先導していたララが、こちらを振り返り柔和な笑顔でくすりと笑った。

「その気持ち、分かります。檜葉に入学してもう二年ですが、私も時々目が眩むようです」

「歴代の学園長がヨーロッパの貴族の出、らしいですわよ。悪くない趣向ですけども、日本…と言うより、現代では浮いてしまいますわね」

少し呆れたような顔でアンドウが補足する。

「…あの方は、そうでもないみたい、ですよ…？」

オリハが指し示す先にいるのは、ホール（と呼ぶには華美に過ぎる、宮殿の回廊のような部屋）の端から端を輝く笑顔で眺めるジニアである。練習試合の予定が広まっているのか、割と集まっているギャラリーへと挨拶も送っている。これから舞踏会が始まるうという場所に迷い込んだ、一般市民のようである。

見れば、ホールの中央に大型のヘックスユニットが三基設置されているのが見えた。一基だけでも英志学園にあるそれより一回り程大きく、学校が保有するバトルシステムとしては規模の大きい、贅沢な

代物だ。それが三基もあることに、ホウカは英志学園とはまた異なるスケールの大きさを感じ取った。

「サダコー……ここすごいね！」

ジニアがぐるりとこちらに向き直り、手を降ってくる。

「ア・ン・ド・ウ！ですわ！」

アンドウとジニアは、既に何度目かの遣り取りを交わした。

詳しいことは分からないが、どうやら二人は旧知の間柄らしかった。ジニアが言うには、留学前にアメリカで知り合った友人だとか。複雑な事情を経て、巡り巡って現在に至るらしい。

「…では、五分後に試合を開始しますので、各種ミーティングなどお済ませくださいまし」

それでは、と言葉を残し、三人がホールの反対側へ去っていった。

三人と入れ違いにジニアが戻り、各々のポストンバッグからガンブラケースを取り出す。

黒く重々しいケースからガンダムサレナを取り出し、各関節などの最終チェックを行うトモヒサが話を切り出した。

「練習試合でも、試合は試合だ。選手権本戦の気持ちで臨んでいけ。

四日間の……いや、これまでの成果を精一杯出し切れよ」

ガンダムラナンキュラスにフラワリングジェネレータを接続しながら、ホウカは胸に刻んだ教えを心中で反芻する。

「そうだね……私もアズマさんに言われたこと、しっかりとやり切るつもり」

『「スターブロッサム」の初バトルだもんね！がんばるよ！』

自分が命名したチーム名をなぞり、笑顔を咲かせるジニア。

リペイントと仕上げのトップコート、さらにスジ彫りや細部ディテールが新たに施されたハルジオンをジニアは手にする。久しぶりに再会した友人とのガンバトルをチームの初陣で飾ることができ、その感動は如何ばかりだろうか。

その後、意見を交わしながらガンプラの調整を終え、広大なヘックスユニットの前へ並んだ。

対面の真ん中で腰に手を当てて立っているアンドウが、こちらを見

遣る。

「気合充分、と言った顔ですわね」

「新チームの初陣だからな、そうでなきや困る。さっさと始めようぜ、冷めない内によろ」

「ふふ、言われなくとも」

チームリーダーである両者が、口頭で鏢迫り合いをする。

バトルの前の挨拶代わりの会話だ。既に戦闘は始まっている、といった雰囲気、互いのチームに漂い始めた。

「そうだ、提案なんだがな」

「何か？」

「ダメージレベル、Aで頼む」

トモヒサが、口角をニヤリと釣り上げて言った。

「ちよちよ…トモヒサ本気!?!」

すかさずジニアが横槍を入れる。

ダメージレベルA。ヤジマ商事がガンプラバトルをPPSE社から引き継いだ際、新たに導入したシステムが、このダメージレベルだ。Aは、即ちバトルで受けたダメージがガンプラに100%フィードバックされ、バトル終了後にそのまま残る、上級者向けの設定である。公式の大会でも、全国大会などにおいて設定されるものだった。

ホウカにとっては、未だかつて経験したことのない未開の領域である。

「本気だ。俺のサレナはともかく、お前らのガンプラには”練度”が足りてない。それに、一回こういうバトルを経験しておくで後々役に立つんだぜ？」

「う、うーん…でも…」

ジニアが尻込みする気持ちはよく分かる。

映像でダメージレベルAの試合を見たことはあるが、ガンプラが見るも無残な姿になるのは正直言って心苦しかった。それに、ジニアはハルジオンを仕上げたばかりである。

しかし、トモヒサの言う”練度”は、ホウカにも理解が通じた。

「ジニー、やってみよう。新しい何かが見えてくるかも」

不安そうにハルジオンを見るジニアに、力強く笑いかける。あえて優しく接しないのは、彼女の向上心を知っているからだ。

三秒ほど目を閉じたジニアは、大きく頷いた。

「…わかった。これも経験だよね」

大きな金色の両目が鋭くなり、幼さの残る童顔に力強さを滲えさせる。

対面に在るアンドウが、ふふ、と笑った。

「いいですよ、そうでなくては練習試合の意味がありませんもの。ユヅキさんとクラオカさん、異論はありまして？」

「いいえ、望むところです」

「…私も、大丈夫です…」

「結構」

アンドウが静かに頷く。そして、バトルシステムの起動スイッチを押してコンソールを叩いた。三基のヘックスユニットが静かに唸り始める。

ふとホウカが横に視線を移すと、いつの間にかマリコが立っているのを目にした。小さく右手を上げて微笑を浮かべてくる。

『GUNPLA BATTLE. Combat mode, Start up』

頷き返すと同時に、電子音声の爽やかな男性の声を響かせた。

『Mode damage level, Set to "A"』

「よし、お前ら。気合入れてくぞ」

「モチ！気合入れ過ぎてはち切れそうだよ！」

『Please, set your Gpbase』

「うん。全力を出して、ベストを尽くそう」

『Beginning, "PLAVSKY PARTICLE" dispense』

「ハハ、お前が言うのとそれっぽいな。アレ、任せませ」

「や、やっぱり言わなきゃダメかな…?」

『トライフアイターズ』みたいにカツコイイよ、きつと！」

「うう…」

『Fieldl, "SPACE". Please, set your GUNPLA』

両チーム共に、GPベースへとガンプラをセッティングする。

予め取り決めておいた出撃時の掛け声を思い出し、少し恥ずかしく感じた。リーダーであるトモヒサが宣言するものとはばかり思っていたため、まさか自分が言うことになるとは…。

しかし、中々気に入っている台詞ではある。チームの初陣を華々しく飾るため、一呼吸をしっかりと吐いて精神統一をする。

『BATTLE START!』

「キンジョウ・ホウカ、ガンダムラナンキュラス!」

「ジニア・ラインアリス、ハルジオン!」

「カトー・トモヒサ、ガンダムサレナ!」

三機が宣言に合わせ、発進体勢を取った。

機動戦士ガンダム0083と鮮やかな三機をイメージした、三人で考えた台詞。

「チーム『スターブロッサム』——」

それを、高らかに。

「——百花斉放、吹き荒れます!」

.....

”宇宙に提灯が浮いていた”。

月の裏側にあるスペースコロニー群——「トワサンガ」の巨大構造物、「シラノー5」のことである。小惑星採掘基地として設置された居住施設を兼ねる五つの金環によって構成されており、直径3kmに及ぶ中央のリングを、ノースリングとサウスリングが上下に挟む。

この、大小五つの金環が縦に重なっているシラノー5の形状は、ベリリ・ゼナムが次回予告で”提灯”などと、ストレートすぎる表現をしていたのをジニアは思い出していた。

「うひゃー、トワサンガまで飛んできちゃった…!」

プラフスキー粒子が忠実に再現するその前に、三機のモビルスー

ツが並んでこちらを待ち構えている。

旧世紀技術の遺産でもなく、ヘルメスの薔薇の設計図でもない、三人のビルダーによるガンプラ達。

袖や緋袴、神託を得る巫かんなきの意匠を拵えた紅白の機体——カバカーリー・ヒノハカマを中心に、守護するようにもう二機が有る。

右に有るのは、“袖付き”とも取れる金縁の装甲と、二つの円盤ユニットから広がるクリアウイングが印象的な「イクス・ルシファー」。大きな盾と剣を持つ、荘厳なる剣士である。

対して左に有るのは、ネイビーブルーに身を包んだ「グリモア・マギテック」。一丁のフェダーインライフルを杖のように持ち、平たい頭部をスパイクシールドで保護する姿は、その名の通り、機械仕掛けテックの魔法使いマジック。

チーム「天照す閃光」という器を織り成す、美しき三つ鼎であった。

『アトミック・バズーカを装備してこないとは、どういう風の吹き回しですか？英志学園チームの構成にしても、随分と様変わりしたものですわね、”黒い悪夢”？』

クンタラカーの神の宣告を聞けそうなカバカーリー・ヒノハカマが、バィザーの奥の両目を光らせる。その操り主であるアンドウ・サダコが、通信を交わしてきた。

言葉を投げかけられたカトー・トモヒサが応え、ガンダムサレナの強面が持ち上がる。

「そういうアンタらも、去年のGセルフ乗りは引退かよ？」

『其方そちらの”ライトニング・エデン”と同じ理由ですわ。アイダさんが抜けた空席は、こちらのクラオカさんが引き継いでくださいましてよ』

『えっ、あう…その…』

グリモア・マギテックが、帽子に見立てたスパイクシールドに隠れる三眼を泳がせた。どう返事をしたものか慌てている様子で、クラオカ・オリハが言葉に詰まっている。

『さて、お話はこれくらいに試合を開始しますわよ。…よろしいですわね、ラインアリスさん？』

カバカーリー・ヒノハカマが、三叉戟の鋒をハルジオンに向けてきた。

俄かに戦闘の萌芽を感じ、ジニアはコントロールスファイアを握り込む。六年ぶりにプラフスキー粒子の中で相對する彼女の姿は、あの頃と変わらぬ自信に溢れた姿勢だった。

ジニアは郷愁に似た懐かしい気持ちを覚え、嬉しくなる。

「ジニアでいいってばーサダコー」

『ア・ン・ド・ウ、ですわ!!』

今にもEXAMでも発動しそうなくらいに、ヒノハカマがバイザーを真つ赤に燃やす。名前を呼んでは訂正される、昔から変わらない予定調和のような遣り取りだ。

別に名前をからかっているわけではない。理由は分からないが、サダコは自分の名前にコンプレックスを抱いている。自分は、日本人らしい綺麗な響きで好きなのだが、一度として彼女が下の名前で呼ぶのを許したことはなかった。

：名前を呼ぶ度、立ち居振る舞いにそぐわない反応が帰ってくるのが面白い、というのもあるが。

『ガンダムラナンキュラス：綺麗なガンプラですね。お手合せ、よろしくお願いします』

「こちらこそ、よろしくお願いします」

オープンチャンネルでの通信が、こちらにも届く。

イクス・ルシファーがラナンキュラスへとモノアイから視線を送り、それを駆るユツキ・ララがキンジョウ・ホウカに挨拶を送った。二人共、礼節を重んじるアスリートのような精神が通じているようだ。もう二機も、互いに言葉を交わす。

『：今日は、バズーカじゃ、ないんですね…』

「ん？お、おう。せつかくの練習試合だ、色々試してみようと思つてな」

トモヒサは、ガンダムサレナに新たなカスタムバリエーションとして、ガンダムAGE―2ダブルバレットを取り入れていた。両肩のフレキシブル・スラスター・バインダーにツインドッズキャノンを移植

し、加工を施している。

そのシルエットは、”四枚羽”のようであった。

『…でも、ダブルバレットも、素敵だと思います…』

「…ほ、褒められているのか、俺…？」

こちらは微妙な空気感だ。

この四日間、それぞれに目標を自分に課してその改善に努めてきた。ジニアも演劇部の傍ら、ハルジオンにどう改造を施せば性能の向上に繋がるのかを考え、この日に備えてきたのだ。

(まさか、サダコが相手になるなんて神様仏様トミノ様でも、思いもしないだろうなあ…)

運命の悪戯、因果の巡り合わせ。最近は、そういう滅多に経験できないような奇跡が連続している気がする。これから干戈を交えようという、カバカーリー(六年前から随分と見た目が変わったが)とアンドウ・サダコにしてもだ。

「そんじゃま、いっちょ派手にいくぜー！」

戦火の口火を切ったのは、トモヒサのガンダムサレナ。両肩のツインドツズキャノンを前方に向け、太い二軸のビーム砲を撃ち放った。

『やはり”黒い悪夢”は健在、というところですね！』

それぞれに散開する『天照す閃光』の三機。ツインドツズキャノンから放たれた砲撃は標的を撃破することなく、シラノー5の採掘施設の岩盤を穿った。

散開した相手に対し、トモヒサから指示が飛ぶ。

「ホウカ、お前は赤い奴に…」

『申し訳ありませんけど、そうはいきません』

「——っ!？」

トモヒサはセオリー通りの、相手のタイプに合わせた機体配置を促そうとしたのだろうが、それは真正面から接敵してきた二機によって阻まれてしまった。

ガンダムラナンキュラスに接近したのは、イクス・ルシファード。荘厳な意匠が目を引く盾を掲げ、一直線に飛びかかる。

そして、指示を送ろうとした、トモヒサのガンダムサレナにも。

「な、に…!？」

グリモア・マギテックだ。両手持ちにしたフェダーインライフルと、バックパックから伸びるサブアームに接続されている二門のビームガトリングによる弾幕を、ガンダムサレナへ浴びせかけていた。

全くセオリー通りではない、タイプが被った機体同士の戦闘へ持ち込もうとしているようだ。

「ホーカー・トモヒサー…ということとは…」

『ええ、私が相手ですわよ、ラインアリスさん』

サダコからの通信が届く。

ハルジオンのモノアイを介して正面を見、紅白の機体が滑るように急接近してくるのを視界に捉えた。

宇宙空間らしからぬ滑走に驚き、ドッズライフルの二枚板バレルを向けて牽制射撃をする。しかし、カバカーリー・ヒノハカマは足場があるかのように横滑りしながらその射撃を躲していた。

前にテレビで見た…そう、その動きは巫女さんが舞う”神楽”のようだ。

「何ソレエ!？」

それは素早い動きで、実際の舞とは随分と違う気がするが、巫女のような機体はその印象を決定付けている。

などと考えている内に、あつと言う間に距離が詰まった。

『六年ぶりの貴女とのバトル…』

慌てて背部のブーストポッドを噴かし、距離を置こうとする。だが、ヒノハカマがステップを踏んだかと思った瞬間、急速に回避方向へ回り込まれた。

「速ッ…!」

『楽ませてくださいませね』

そして、右手に握られる三叉戟が、まるでバトンを振るうように逆袈裟に薙ぎ払われる。

——ブオン!

赤熱したクリアパーツの刃先が、縦一閃に赤い残光を刻む。

間一髪、ギリギリの拳動でハルジオンは身を翻し、同時に左腕の手

甲部分から黄色いビーム刃を発生させた。

斬撃の躲し際、大振りの攻撃で無防備になったヒノハカマの胴体へ突き出す。

「そいやあっ—」

『あら—』

元機体の色から反転した白い胴を、刺し貫——ぬけなかった。

これもまた、無反動の横滑りで避けられたのだ。

「まだ…—」

しかし、この程度では終わらせない。突き出した姿勢のまま、ガーベラ・テトラと克蘭シエから継承した各部スラストによって身を捻り、ホウカよろしく長い脚部からの回し蹴りを見舞う。

『はアツ!!』

サダコも同じことを考えていたのか、それとも鋭敏に察知したのか。ヒノハカマも半回転しながら右脚を打ち上げてきた。

——ガイン!!

互いの右脚がぶつかり、装甲表面に衝撃が奔る。

「さっすがサダコ、やるウ—」

伝播することはないが、コントロールスファイアからビリビリと重い振動が伝わってくるように錯覚した。

半秒硬直した後、それぞれの後退方法で距離を置いた。彼我の力量を理解したことによる、一時の撤退である。

『…どうやら、六年という時間はそれなりに成長させるようですね』

「サダコも、めっちゃやくちや強くなってるよね—」

『お褒めに預かり光栄ですわ。と、どうか…』

ヒノハカマの三叉戟——フォトン・トライアセント緋ノ三叉のクリア刃が、再び赤く赤熱を始めた。

バトンのようにくるりと回転させて下段に構え、腰を落とす。

『ア・ン・ド・ウ、ですわ!!』

サダコは声に気迫を込め、再びヒノハカマが仕掛ける。

最高に楽しい時間は、まだまだこれからだ。

.....

「行って、Pファンネル！」

イクス・ルシファアの斬撃を掻い潜って牽制しつつ、戦域をシラノ―5のサウスリング側に移したホウカ。大型の三基構成フィールドは上下にも広大なスペースを誇っており、特徴的なスペースコロニーを収め切っている（さすがにある程度縮尺は小さくなっているだろうが）。

ホウカの操作を受け、背部から四枚のPファンネルが射出された。プラフスキー粒子を噴射して緑の軌跡を引き、花卉達がルシファアへと迫る。

『ファンネル：！でしたらー！』

ルシファアが右手のクリアパープル刃を、戦場に立つ戦女神のように前へ掲げた。

『スピン・ファンネルです！』

宣言と同時に、背部に広がる二基の円盤ユニットが分離する。そして回転を始め、クリアパープルの翼が残像となった。

「あっちもファンネル!？」

高速回転するスピン・ファンネルが射出され、Pファンネルに襲いかかる。ホウカは左のコントロールスファイアで指示を射撃に変更し、ドツズライフルをルシファアへと撃ち込んだ。

『ドツズは、この盾に通用しませんよー！』

荘厳な防盾で機体を覆い、ドツズライフルの射撃を真正面から受けつつ、先程から繰り返していた突進を敢行する。Pファンネルの砲撃も、スピン・ファンネルの高速回転の前に掻き消えてしまっていた。後退しようとして機体を動かした瞬間、アラート音が鳴った。何事かとコンソールに視線を移すと、サウスリングの宇宙港を背にしていることにホウカは気付く。

「これじゃあ……！」

『逃がしません！』

さらにブーストをかけ、ララがルシファアに尚も突進をさせた。

ホウカはPファンネルの指示を再度変更する。アズマから提案された機能を専用アプリで構築し、GPベースにインストールさせておいたものだ（トモヒサに手伝ってもらったのは余談である）。

「プラフスキー、パワーゲート！」

ランキュラスの前へ放射状に並んだPファンネル四基が、互いを粒子で繋いで緑に発光する”膜”を形成する。『スタービルドストライクガンダム』がこの機能を全世界に披露して以降、多くのファイター達が独自の解釈で実装に挑んできたものだ。

このノウハウはアズマから移譲され、トモヒサ達とアプリを前ににらめっこして唸りながら完成させたのだ。

その膜へ、ホウカはドツズライフルを撃ち込む。

『ッ!?!』

螺旋状に旋回するビームがフィールドを通過し、その威力を何倍にも増幅させた。その威力の測定結果は、シグマスライフルに匹敵する。

ルシファアの盾に直撃し、貫通こそできなかったものの、堅牢な表面にはドツズの痕跡が刻まれた。

思わぬ高威力を受けたルシファアは勢いを殺されて減速する。しかし…

『いただきです！』

尚も、尚も加速を続けた。

背面にスピン・ファンネルが接続され、円盤ユニットからバーニアを噴射して更なる加速を重ねる。こちらのPファンネルも貯蓄粒子が底を尽きたため、ランキュラスの背部へ帰投した。

「ぐうッ!!」

ホウカは回避行動が間に合わず、加速を伴った防盾がランキュラスに激突した。咄嗟に両腕を胸の前で交差し、本体への衝撃を最小限に抑えようとする。が、両腕のフォールディングアームが破損したことを、コンソールが報せた。

そのまま押し込められ、サウスリングの宇宙港内部へと進入する。

（くっ…何とか、しないと！）

壁面へ激突するのも時間の問題。このままぶつけて動きが止まったところを攻撃するつもりだろう、未来予知のようなビジョンがホウカの脳裏に過ぎった。

しかし、こんなことで負けてなどいられない。

ホウカはランキユラスの体を折り曲げ、両足を上げて盾を踏みつけさせた。そして盾の上部を左手で掴み、その体勢のまま脛内部の大型バーニアを噴射させる。

左手を起点とし、勢いに乗って跳ね上がった。

『なっ……！』

港の最奥に到達する寸前で、ホウカはその加速から逃れる。

急制動をかけるルシファーが身を反転させ、何年も掃除されていないような寂れた港の最奥に着地した。

その隙にコンソール上の地図を確認したホウカは、上にサウスリング内部への進入口があることを見付けた。

「みんなとは離れちゃうけど、とりあえず……！」

フラワリングジェネレータを広げ、プラフスキークラフトを起動させる。バーニアの噴射より格段に燃費が良かったため、積極的に使っていたけど、これもアズマに言われたことだった。

機体が浮き上がり、追撃される前に内部へと進入する。

一瞬、眩しい閃光が視界を覆う。薄暗い宇宙港からコロニー内の人工太陽の下に出たことよる、ホワイトアウトだ。

すぐに視界が回復し、青いツインアイを通してホウカの目に広がったのは、テレビなどで見たヨーロッパ郊外のような、林と低い民家が立ち並ぶ景色だった。

「すげえ……」

『モライの林、という田舎です』

本当にプラフスキー粒子でできているのかと疑いたくなるような景色に見入っていると、ララの通信が届いた。

ルシファーが通用口から飛び出、林のぬかるんだ地面に着地する。

『Gのレコンギスタで、主人公達が訪れる場所なんですよ』

「ごめんなさい、私、まだ見てなくて……」

『いえいえ、お気になさらず』

会話は普通に、しかし臨戦体勢を解くことなくガンダムラナンキュラスとイクス・ルシファアが相対する。ホウカはプラフスキークラフトを解除し、重力下のために林の中へと着地した。

『プラフスキー粒子つて本当にすごいですね。まるでジオラマみたいですよ』

漫然と会話をしているように見えて、恐らくコンソール上で機体の状態をチェックしているのだろう。ホウカも、破損した両腕のフォルディングアームのアイコンが暗転していることを確認し、実際に動かして腕自体の状態も見る。

アームカバーがひしゃげ、内部からパリパリと音が漏れ出しているが、関節やマニピュレータは問題なく動く。

よかった、腕自体は無事のようにだ。

「原理とかはよく分かりませんが、本当に」

『ふふ、そうですね』

ララが優しく笑う。

そして、イクス・ルシファアが盾を持ち上げ、剣を構え直した。

『さて。では改めて、お手合せを』

「…はい」

まるで剣闘士のような。そのくせ、敬意をはらいつつ正々堂々と戦いに向かう姿は武道家のようなでもある。

こんな人と組手ができたら…などとホウカは思った。

その姿勢に因應するため、ホウカは脛部からビームサーベルを取り出し、左手で握り込む。右のドズライフルはやや胸元に寄せ、ビーム刃を下段に構えた。

そして、疾駆。

互いに肉薄し、イクス・ルシファアは剣を突き出し、ガンダムラナンキュラスは下からビームサーベルを斬り上げた。

真っ向、剣戟。

クリアパープルの刃が弾かれ、一瞬その腕が脱力する。

ホウカは、そこにすかさず胸元に寄せていたドズライフルを突き

出してルシファアの胸部を狙う。

アズマとの戦闘から学んだ、至近距離での銃撃である。

『……ッ！』

しかし、その間に滑り込んだ防盾が射撃を受け止めた。先程の増幅されたドツズライフルによる深いダメージの傷跡が、その表面に見える。

ルシファアも間髪入れずに、弾かれた剣を懐に向かって振り下ろした。ホウカはテールバインダーを噴射させ、後退して回避すると同時にドツズライフルを向ける。

やはり、それをまた防がんと盾が構えられた。

(……！)

しかし、それでよかった。僅かに射撃を修正し、盾のど真ん中——深く抉られたドツズの痕——に撃ち込むホウカ。

確かな手応え。確実にダメージを蓄積させていた。

後退しながら林の柔らかい地面を踏み込みつつ、Pファンネルを選択。攻撃の手を緩めずに、集中放火を浴びせにかかった。

『やります、ね！』

ララは言いながら、スピン・ファンネルを射出しつつ前に踏み込み、ルシファアを一足飛びに跳躍させる。

ホウカは前に出ず、それを待ち構えた。

「——っ！」

掲げられた盾の横から、突き出される剣。

また同じようにビームサーベルで受けつつ、ドツズライフルを至近から撃ちにかかった。

『そのような繰り返しでは……』

そして例によって、その攻撃の糸口を盾で絶つイクス・ルシファア。
ここだ！

——ゴン！

鈍い音を立て、ドツズライフルの銃口が盾の傷口にぶつかった。

一射、二射……三連射！

『……えッ!?!』

ついにその堅牢な防盾に、風穴が空いた。ララの動揺がはつきりと目に見える。

その穴に、更にドツズライフルを挿じ込んで、ゼロ距離。

「もらいます!!」

『——ですが!!』

ホウカは、快哉を叫ぶと同時にトリガーを引いた。

と、同時。突然ドツズライフルの銃身がルシファアの右手に掴まれる。撃ち放った射撃は、咄嗟に身を振られたことで林の中に銃痕を刻んだ。

『ええーい!!』

そして次の瞬間、ラナンキュラスの機体が不自然に浮き、両足が地面から離れる。

「あつ…これ、は?」

イクス・ルシファア

剣士が、その銃身を掴みながら盾ごと振り上げた!

ホウカは咄嗟、ドツズライフルを手放してラナンキュラスの下半身を捻りつつ、空中で体勢を直そうとする。

『今度こそ!!』

その隙を狙い、ルシファアはドツズライフルが突き刺さった盾を放り捨てた。地面に突き立てていた剣を再び掴み上げ、下から素早い突き上げが襲いかかる。

「はぁあッ!!」

ラナンキュラスが空中で機体を捻りつつ左手のビームサーベルを振ると、クリアパープルの刃がその腰部を斬り付けるタイミングが、寸分変わらず合致した。

ビームサーベルが、イクス・ルシファアの首を刎ねる。

剣士の刃が、ガンダムラナンキュラスの腰部をぶった斬る。

相討ち——!

——ヒュヒュン!

何かが高速回転する風切り音が聞こえた。

倒れるイクス・ルシファアと、地面に落ちるガンダムラナンキュラス。その頭上で牽制し合っていた、Pファンネルとスピン・ファンネ

ルだ。

四枚の花弁が落下し、地面に突き立っていく。その後を、高速回転しながら同じく落下する円盤が、ランンキュラスの上に落ちてきた。

——ダメージレベルA。

「ッ!!!」

ホウカは脳裏に過ぎった設定を思い出し、林の地面に仰向けになっている、上半身だけとなったランンキュラスを何とか動かそうとした。

が、もう間に合わなかった。

スピン・ファンネルが、見事にクリアウイングを下にしてガンダムランンキュラスの両腕に突き立つ。

それをトドメとしたかのように、ガンダムAGE—FXから受け継いだ青いツインアイが光を失っていった。

シラノ—5の中で、一つの戦いがここに決着する。

Act. 08 『朗々、天照す閃光!Ⅲ』に続く

ツインドツズキャノンから、穿孔する大火力のビーム砲撃が迸る。ゼイドラ・クロノスとの交戦経験から、AGEシステムによって新解釈／設計、そしてガンダムAGE―2に導入されたそれは、トモヒサの腕によく馴染んでいた。

ガンダムサレナの持つ武装の互換性は、その都度新設計し、様々な局面に対応するウェアアシステムに通じるものがある。今年に入ってからこれに着目したトモヒサは、あらゆる武装パターンを愛機に提案していた。

(つつつても、そう簡単に落とせやしねえよな…！)

バインダーの可動を存分に駆使しつつ、闇の宇宙で対するグリモア・マギテックを撃滅にかかる。しかし、童話に出てくる魔法使いのような姿をしたアメリカ軍の傑作量産機は、遅れを取らず的確に砲撃を躲し続けていた。

その手に持つフェダーインライフル(ストック部分に改造が施されているように見える)を両手持ちにし、戦艦の残骸を消滅させるとまて言われる粒子量のビームが応射される。

「…っ！ティターンズ所属のグリモアかよ！」

即座に横滑りし、その砲撃を回避しながら思わず突っ込む。ジニアと知り合ってからというもの、ツッコミスキルが鰻登りに上がっている気がした。

『…そう、ですよ…』

「えっ、マジ?」

マジだった。

クラオカ・オリハが操るグリモア・マギテックは、ネイビーブルーを基調とし、黄色のアクセントやムーバブルフレームを思わせるガンメタルの関節など、「ティターンズカラー」とでも形容できる塗装になっていた。

その上、ガブスレイやマラサイなどのモビルスーツが持つフェダー

インライフルまで装備している。よく考えなくても、意識しているのは間違いない。

「また尖った改造するんだな」

『…好きなんです、この色。ティターンズカラーって…』

「まあ分かるが…」

自分も、自機に暗色を施す傾向があるため、概ね理解できた。

口下手かと思いきや、彼女は意外と饒舌らしい（趣味に生きる人間に多い性格だ）。戦闘中にガンプラの話で盛り上がる遣り取りも、またガンプラバトルの醍醐味である。

とはいえ、油断は禁物である。それほどこのこだわりを込めたガンプラと、それを形にするファイターならば、相応の実力を持っているだろう。それなりに積み重ねてきたガンプラバトル歴で、そういった人間との交戦経験はこの腕が覚えている。

（状況が変わらない…ここはいつちよ、近接に持ち込んでみるか）

クラオカ・オリハは、今のところ遠距離タイプと見るしかない。何のつもりか分からないが、「天照す閃光」は同スタイル同士で戦いを仕掛けてきた。ホウカやジニアのスタイルならまだしも、中々遠距離戦同士なら状況が堂々巡りになるのも当然だ。

スロットを滑らせ、ビームサーベルを選択する。両サイドアーマーから柄が飛び出、それを両手で掴んで引き抜いた。

蛍光黄緑ライトグリーンの粒子刃が発生し、ダブルバレットらしくアセム式の両手持ちとなる。

「いくぜー」

持ち前の出力でガンダムサレナが飛び出す。

『…撃ち合いは、終わりですか…？』

「ああ、悪いな！」

オリハは落胆の色を声に滲ませた。言いつつ、両肩から銃口を覗かせるビームガトリングが折り畳まれ、フェダーインライフルを逆手に持ち替える。

（フェダーインライフルなら、そう来るよな！）

ストックの先にあるビーム発振器から、黄色のサーベルが飛び出

た。遠近に対応できるフェダーインライフルの、最大の特徴である。一気に間合いを詰めて、ビームサーベルを横に薙ぐ。グリモア・マギテックは慌てる様子もなく、下からフェダーインライフルのサーベルを斬り上げてこちらの斬撃を受け止めた。

「もういつちよー！」

バインダーを噴かし、推力の勢いを乗せて逆からも攻める。

グリモアは瞬時に後退し、ビームサーベルを躲した。

「オマケの——」

休憩を置かず、バインダーのツインドツズキャノンが前方へその砲口を向ける。

「——こいつだ！」

ネイビーブルーの魔法使いを捕捉し、大火力が一気に吐き出された。

『うう……い！』

回避行動が間に合わず、グリモアがその砲撃に晒される。ピンク色の粒子の光が着弾して回転しながら弾け、暗い宇宙に凄惨な光を咲かせた。

しかし、砲撃が止んだ後に姿を現したのは、頭部を覆うスパイクシールドからバリアを展開している無傷の機体だった。

「頭にビームシールドオ！」

ただでさえ奇妙な風貌をしている上に、魔法使いの帽子のようなシールドがドツズキャノンを防ぎ切ったことに、思わず素っ頓狂な声を上げる。

そんなこちらの様子など意に介さず、グリモアはおもむろにシールドの裏側に左手を突っ込んだ。

取り出されたのは、ハンドグレネード手榴弾。

「うううええええ!?!」

『お返し、です……い！』

それを、やや大振りな投法で放り投げた。それと同時にビームガトリングが展開され、こちらをロックオンする。

反応が遅れ、慌てて回避行動を取った。

それを見計らったように、ガトリングが弾幕を見舞ってくる。投げられたグレネードがその最中で爆発し、視界を塞いだ。

「くっそ…なんだってんだ！」

次の瞬間、アラート音。

爆煙とビームガトリングの雨を掻き消すように、太い光軸が襲いかかってきた。フェダーインライフルだ。

自ら起こした煙幕で満足に狙撃できないはずだが、元よりする気はないのだろう。ギリギリのところ回避し、こちらも再びツインドツズキャノンを構える。

と思えば、今度はガトリングを乱射したまま、グリモアが突っ込んできた。

意外と好戦的なのか、次々に起こる予想外の攻撃に、トモヒサは思わず笑みが零れる。射撃一辺倒ではない辺りも、自分のスタイルとここまで似るものか。

「悪くねえな、こういうバトルも！」

『…そう、思います…！』

控えめでいて、何処か高揚している声。オレンジ色のGセルフを使っていた、昨年までのチームリーダーの後継という彼女。どういったファイターなのか気になっていたが、アンドウが自信を持って紹介するのも頷ける。

今度はグリモアの方から接敵し、サーベルを発生させているフェダーインライフルとガンダムサレナの蛍光緑のビーム刃が交錯した。

一進一退。斬り合って後退しつつ互いに砲撃。それを繰り返しながら、トモヒサは僚機の状態を確認する。

(ホウカは…サウスリングか。ジニアの奴は上の小惑星部…)

上手く誘導され、それぞれ完全に分断されていた。これが最初のチーム戦のため不慣れとはいえ、良くない状況である。ジニアはともかく、ホウカはまだ経験が浅い。孤立させてしまったのは、リーダーである自分の采配のミスだ。

チームリーダーという重圧がこれほどとは、”ライトニング・エデン” (仰々しい二つ名だと思う) ことテライ・シンイチの器の大きさ

を再確認する。

そして自分のバトルを楽しんでしまっていたことに気付き、内心で叱咤した。

（頑張れよ……！）

グリモア・マギテックを幅広の右脚で蹴り、ツインドツズキャノン
を撃ち込む。

この状況を覆すのは難しいだろう。ニュータイプではないが、二人
へと心でエールを送った。

.....

「サダコ、そんな昔のことなんて……！」

『昔のことでも、大事なことですわ！』

カバカーリー・ヒノハカマの左手甲から伸びるビーム・セイバーが、
手首のスナップを利かせて鮮やかに振り抜かれる。

ハルジオンは採掘施設のゴツゴツとした岩場を蹴りつつ、それを躲
した。

『それと……アンドウですわ！』

ビームセイバーと併用して、フォトン・トライデント 緋ノ三叉のクリア刃も襲いかかる。

ブーストポッドを唸らせ、くると回転しながら薙ぎ払われるそれを
跳ね上がって避けた。攻め立てられるだけに終わらず、こちらも
ドツズライフルを向けての牽制射撃を行う。

ビーム・セイバーが引つ込み、今度は袖口からビーム・バリアが広
がった。

「かったいなあ、もう……！」

射撃がバリアに掻き消える。

もう幾度と繰り返した攻防戦に、さすがに疲労感が増してきた。そ
の上にサダコときたら、昔の話を持ち出してきている。

今更”ルイン”のことを……

『貴女ばかりが、ルインに好かれて……』

「そんなことなかったよ……？」

『くっ！』

ヒノハカマが、彼女の感情を汲んだかのようにバイザーを真っ赤に燃やす。

サダコと知り合うきっかけにもなったルインは、互いにとって、とても大切な記憶なのだ。

しかし、そんな風に嫉妬されるような覚えは全くないのだが。

「ちよ、ちよつとサダコ、とりあえず落ち着こうよ？今はバトル中でしょう？」

そう呼びかけると、休みなく舞い続けていたヒノハカマが、三叉戟の石突を岩場に突いて動きを止める。

サダコは、ふー、と呼吸を一つ。

『…分かりましたわ。とりあえず、今はこの話をしないことにしますわ』

そう冷静に言うのと、ヒノハカマが再び三叉戟をくるりと回して構える。

『…けれど、ここからは本気で参りますわよ？』

「まだ本気じゃなかったんだあ…」

まずかったかなあ。

思わず身構えた瞬間、カバカーリー・ヒノハカマの裾のような両足が唸りを上げた。たちまち謎の力場が足元に発生し、紅白の機体が黒い岩場から僅かに浮き上がる。

(なに、あれ…プラフスキークラフト?)

にしては控えめで、それにジェネレーターらしきパーツ類も、よく見ると意外にシンプルな機体には見当たらなかった。飛行、というより、ドムやガンダムAGE-3フォートレスのようなホバー滑走にも見える。あの「Gポータント」に近い粒子制御能力、といったところか。

推察を重ねつつ、再び接近してきたヒノハカマにドズライフルを撃ち込もうとした時。

『——え!? ユツキさんが!』

急制動をかけてヒノハカマが留まった。ジニアのコンソールにも

それが表示される。

『ユヅキ・ララLOSE』、とある。

そうか、ホーカが勝ったんだ！

「あれ、ホーカ…？」

しかし、僚機のステータスを示すウィンドウに視線を移すと、ガンダムランキユラスが非常に危険な状態であることを告げていた。

撃墜されてはいないようだが、今のままでは通信も届かず確認する術がない。

(…トモヒサと合流した方がいいかもね)

このまま個人戦を続けるよりは、合流して体勢を整えた方が得策か。ランキユラスが戦線に復帰できるのであれば、数で優位に立つこともできる。せつかくのチャンスを不意にはしたくない。

サダコが困惑しているのを窺いつつ、スロットを滑らせて可変コマンドを選択した。克蘭シエと同様の形態へ瞬時に変形し、この場を離脱する。

『——あつ、ラインアリスさん!?!』

こういうのを、日本語で「スタコラサツサ」と表現しただろうか。面白い語感のワードだが、逃げる時は思いつきり逃げる戦略的撤退も、時として大事だ。

ガンダムサレナの所在は探すまでもない、粒子の輝きがバチバチしているところだ。

かなり激しい戦闘なのか、ザザ…と雑音が混じりつつ通信が繋がる。

「いた！トモヒサ！」

「ジニアか!?!ホウカが…つく！」

見遣る先、シラノー5から少し離れた宙域で粒子の輝きが炸裂した。

ガンダムサレナが、ネイビーブルーの機体が持つフェダーインライフルの砲撃を躲している姿が見える。

「一旦体勢を立て直そうよ！」

「そうしたいのは、山々だけだよ…！」

『私から逃げるとは、いい度胸ですわね!』

続けて回線に混入する、サダコの声。

慌て、モビルスーツ形態へと変形させる。さらに、ブーストポッドの可動性でハルジオンを反転させた。視界にヒノハカマを捉えると同時に、赤熱する緋ノ三叉のクリア刃が更に強く発光するのを見る。

それが逆袈裟に振り上げられ、真つ赤な斬撃がビームアックスのよ
うな形になって放出された。

「粒子変容っ…!?!」

かつて、戦国アストレイ頑駄無やトランジエントガンダムが放つた、高度な粒子変容能力によって発揮される”空飛ぶ斬撃”。まさしく、幾度と見た映像と同じ光景である。

自分の知らない六年間、彼女が如何に練磨を自分と愛機に重ねてきたのか。それは、今となっては自分に経験できないことだ。それでも、こうしてガン普拉バトルを介して見ることが出来る。

然りとて、こちらもただのうのうと過ごしてきたわけではない。演技レツスンだつてガン普拉バトルだつて、同じくらいに練習を重ねてきた。

色々な想いが籠った戦いが、今ここにあるのだ。

「ひゅー、あつぶない!」

全身に配置されたスラスター類によって躲し、ドツズライフルを数発お見舞いする。やはり紅白の機体は容易く避け、宇宙空間を滑走してきた。

——バシユ!バシユン!

突然、後方から二軸のビームがヒノハカマ目掛けて発射される。

「大丈夫か!」

ガンダムサレナによる援護射撃だつた。トモヒサの声と共に、ダブルバレットを引つ提げた漆黒のモビルスーツが近付く。

「うん、へーき。グリモアは?」

「ちよつくら無理してきた」

よく見ると、フレキシブル・スラスタ・バインダーや被爆からコクピットを守る分厚い胸部装甲の表面が、少し焼け焦げて漆黒の塗膜が剥離している。

「ま、こんくらいじゃないと、アレから逃れられなくてな」

ガンダムサレナがマニピュレータをサムズアップさせ、後ろをクイカイと示した。中にトモヒサ本人が入っているような動きだ（実際同じようなものだが）。

視線をカバカーリー・ヒノハカマへ戻すと、その横にクラオカ・オリハの操るグリモア・マギテックが、こちらと同じように合流していた。向き合って何かを伝え合っていることから、クローズチャンネルで作戦な何かを相談しているのだろう。

一時的に、戦場に潜む獣が牙を隠す。

「それよか、ホウカの様子がどうなってるのか」

「あつちは墜ちたみたいだけど、まだランキユラスは生きてるね」

「コロニーから脱出できないか、身動きが取れないかのどっちかだろうな…」

ホウカを孤立させてしまったのは、自分としても申し訳ないと思っている。しかし、孤立しながらも相手を一機墜としてくれたのはとても助かる。流星と言うべきだろう。

「正直、あと五分弱と時間もあんま残ってない。連携して墜としにかかるぞ」

「おっけー！ 『テゴメ』 にしちやおー！」

「お前それ意味分かって言ってる!？」

トモヒサの小気味のいいツツコミを耳にしながら、動き出した相手二機と再び戦いの火蓋を切る。

.....

林のぬかるんだ地面を、残った上半身で這う。

横には、地面に突き立てた剣にもたれ掛かるイクス・ルシファアの亡骸がある。首を刎ねられ、機能を停止しながらも、尚も臥ふしまいと

する毅然とした姿で林の中に佇んでいた。

決着がついた後、まるで気絶したかのように反応がなかったガンダムランキュラスが、再び息を吹き返したのだ。

幸い、テールバインダーが剣に引っ掛かり胴から腰部が引っこ抜かれただけで、奇跡的に致命傷を免れている。横一閃に傷が走りながらも、丸いボールポリを剥き出しにして下半身が数メートル先にある（SF映画で、似たような姿になったアンドロイドがいたのを思い出す）。

左腕は落下してきたスピン・ファンネルによって寸断され、こちらは完全に破損していた。右腕はかろうじて動くため、これで地面を這っているのだ。加え、背中を地面に打ち付けた衝撃で、フラワリングジェネレータも左側がひしゃげてしまっている。

何とも、無様で無体な姿だ。アズマ・ハルトやシマ・マリコ、それに流派の師匠にはとても見せられない有様である。

（あっ…マリコ先生は見てるんだった）

僅かに悪寒が背筋を走った。

そうしている内に下半身に手が届き、上半身を背中のスラスタを噴かせて起こしながら仰向けになる。布団に潜るように胴のボールポリ受けを押し込み、下半身を接続しようと試みた。

かっちり嵌った手応えを感じると、コンソールに表示される機体アイコンの腰から下が、再びライトグリーンの輝きを取り戻す。

「…よかった、何とか動く」

足首を動かし、膝を折り曲げる。かなり反応が鈍いが、立って歩くことはできそうだ。一度分離してしまったにも関わらず、再接続して動く機体。丈夫に作ってくれたみんなに感謝を捧げたくなった。

兎に角、立ち上がってPファンネルを呼び戻す。墓標のように地面に突き立っていた（葉の生えていない裸の木々が、一層その雰囲気飾っている）四枚の花弁が浮き、泥まみれの背中に帰投した。

左腕を失い、大きな傷の走る腰。テールバインダーなどは中程から欠けてなくなっていた。この状態がバトル終了後にそのまま残るかと思うと、全国大会の厳しさを嫌でも実感する。

「みんなに、合流しないと……！」

表示されているタイマーを見ると、残り時間は五分ほどだった。このままトモヒサとジニアが無事でいてくれたなら、タイムアツプで「スターブロッサム」の勝利となるが、まだまだ安心はできない。

粒子残量にあまり余裕はないが、プラフスキークラフトは使用できない状態だ。仕方なく、AGE-FXから継承する脹脛内のスラスト等を噴かしつつ、幅跳びの要領で宇宙港への通用口へ向かった。そこへ飛び込み、自由落下に任せて一気に降下する。すぐにコロニー内の重力から解き放たれ、暗く寂れた宇宙港へ到達した。

そして港を出て、宇宙へ身を躍らせる。時々カメラに砂が混じって映像がブレるが、僚機を探そうと視線を巡らせた。

「あそこだ……！」

すぐに、爆発が咲き粒子の光軸が交叉する宙域を発見する。いよいよ最終局面という様相であった。

バーニアを全開にし、仲間の元へと駆け付ける。

もう、残り五分とない。最後まで、できることをしつかりやろう。

.....

「ぐうっ!？」

「トモヒサ!!」

一瞬の間。

フェダーインライフルの砲撃が、右のバインダーに直撃して爆発した。

それに煽られ、ガンダムサレナが大きくバランスを崩す。

『……今です……！』

最大の好機と見たか、グリモア・マギテックが絶え間なくビームガトリングを乱射して弾幕を見舞う。さらに突進を敢行し、トドメを刺そうとしていた。

『余所見なんてしている暇はありませんわよ!』

真紅の斬撃が飛び、寸で躲す。

同じ宙域にありながら、仲間の援護ができずにいた。カバカーリー・ヒノハカマはハルジオンの周囲を付かず離れず、絶妙な間合いで、至近の剣戟と飛ぶ粒子刃による中距離を繰り返す。完全に手中に収められていた。

このまま釘付けにし、仲間にもトモヒサを討たせようとしている。彼を過小評価しているわけではないが、僚機に任せれば墜とせると判断しての作戦かもしれない。そうしてしまえば、後は二人掛かりでハルジオンを攻めればゲームセット、というワケだ。

昔から変わらない強かき、堅実さ。それが彼女の最大の強みであり、発揮されるリーダーシップの源である。

ヒノハカマの緋ノ三叉を躲し、左のビームサーベルを振り抜く。

その直後、爆発音が轟いた。

「ぐあぁッ!!」

ガンダムサレナが吹っ飛び、眼前を過ぎていく。すぐに残るバインダーを噴かせて留まるが、こちらと対面しているヒノハカマが後退する動きのまま三叉戟を振り、粒子の刃を漆黒の機体に飛ばす。

「トモヒサアッ!!」

瞬発的な挙動で僅か動き、ガンダムサレナは左のバインダーにその刃を自ら当てた。

間一髪、本体へのダメージを回避したが、爆発に煽られて大柄な機体が宇宙を泳ぐ。

サイサリスがこうなってしまうっては、もうできることは悪足掻きしかない。フレキシブル・スラスター・バインダーあつてのモビルスーツである。それはもう、誰の目にも明らかだ。

絶望の兆しが、ジニアの脳に陰りを生む。

『油断は——』

そしてその陰りが、ハルジオンに隙を作らせてしまった。

『——身を滅ぼしますわよー!』

振られた三叉戟の赤熱したクリアパーツ。そこから真っ赤な斬撃が飛び、ハルジオンの右腕を持ち去った。

やられた。やられてしまった。

油断せずにいたはずなのに、絶望的な状況に追い込まれてしまった。

せっかくホウカが作ってくれた、チャンスを活かし切れずに、丹精込めて作り込んだハルジオンが、通用しなかった。

六年前と何も変わらない。

やっぱり、サダコには敵わないのか。

『…ふう。もう、閉幕ですわね』

カバカーリー・ヒノハカマが滑り出す。

せめてもの対抗と、左腕のビームバルカン発射口を向けた。

——ヒュン！

突如の、音と光。

二つの白い何かが眼前を猛然と過ぎ去り、ガンダムサレナに追撃を仕掛けようとしていたグリモア・マギテックにビームを撃ち込んだ。

それを、帽子状スパイクシールドから発生させたビーム・バリアが防ぐ。

『…これ、は…!?!』

『な、なんですかの!?!』

さらに、もう二つ。

紅白のモビルスーツの周囲を旋回しながら、不規則なパターンでビームを発射する。

「——ホーカだ！」

そう、それは自分の背中を押してくれた、カネダ・リクヤの手製であるPファンネル。

そして、このチームのエース、キンジョウ・ホウカが駆るガンダムランキンキュラスが持つ武器だ。

視線を移すと、白いモビルスーツが漆黒のモビルスーツの横に並ぶのが見える。

「無事だったんだね！」

「無事なの、かな？こんな有様だけど」

左側がひどく破損しており、片腕の満身創痍と言った風貌だった。しかし、しっかりとステイメンの頭部は前を見据え、AGE-1FXのツインアイはその輝きを強く宿している。

登場の仕方がズルい、カッコよすぎる。

「…へっ、なんつー格好だよ。でも助かったぜ」

同じくボロボロのガンダムサレナが、強面からツインアイの煌きを見せる。

もしホウカが残機で有利と考え、助けに来ずにタイムアップを狙って隠れていたりしたら、もう負けていたかもしれない。

いや、ホウカがそういう考えをしない人間なのは、分かっているではないか。

『…これで、纏めて…!』

Pファンネルの攻撃から身を守っていたグリモア・マギテックが、貯蓄粒子が尽きたのであろう花弁達がラナンキュラスへ戻るのを見計らい、フェダーインライフルを構えてエネルギーを充填させる。

残存粒子の全てを使い果たそうとばかりに、激甚な威力の砲撃が迸った。

「――ガンダム、お願い！　Iフィールドッ!!」

「っ痛えっ!?!」

ラナンキュラスは傍らのガンダムサレナを蹴飛ばし(！)、その極大の砲撃に真正面から立ち向かう。

ム、ムチャだ！　いくら何でも！

片翼となつているフラワリングジェネレータがその効力を発揮し、粒子変容フィールドを前面へ展開、フェダーインライフルの最大出力フルバースト砲を受け止めた。

黄色い閃光が散り、無窮の宇宙に凄惨華麗な輝きを咲かせる。

「ぐ…今の内に、敵をツ!!」

ホウカが、常でない剣幕で叫んだ。

Iフィールド・バリアは非常に不安定らしく、かき消し切れないビームが通過してラナンキュラスの頬を、脚を、胸を掠っていく。

そうだ、やらなければならぬ。この最大最後の大勝負。

サダコに：否、チームで勝つために。

たかが腕の一本がやられたただけだ！

浮いているドツズライフルを掴み、片腕で変形。カバカーリー・ヒノハカマに勝負をかける。

「サダコオオオオオーッ!!」

飛行形態のまま突っ込み、スイカバーアタックを敢行する。ドツズライフルは銃口付近が破損しているため、射撃ができない。そのままヒノハカマの胴に激突し、全バーニアをフルスロットルで噴射させる。

なんだ、いつも通りにすれば良かったんじゃないか。色んな感情が渦巻いて、自分の持ち味を忘れていた。

ダメージレベルAだろうが何だろうが、この際どうでもいい。

『いい加減に：アンドウと呼んでくださいましッ!!』

ヒノハカマが三叉戟を振り上げ、打ち下ろそうとする。

咄嗟の閃き、ニュータイプの音。

変形させていた左腕を展開し、ビーム刃を発生させて三叉戟を握る。右腕を斬り飛ばした。

『なっ!?!』

さらに、サーベルをヒノハカマの胴に突き刺し、絶対に逃すまいと固定した。

『…ふざけてっ…』

向かう先にある、宇宙に浮かぶ提灯の金環。

カバカーリー・ヒノハカマのバイザーが、劇中のマスク大佐のように睨みを利かせながら輝く。

『ふざけていますのオオオオーッ!!!』

加速は一切緩めない。

「ふざけて、ないよっ…!」

クシャトリヤを押し出すユニコーンガンダムの如く、心の中でNT—Dが光り出す。

「全力で：遊んでるんだからああオーッ!!!」

——ゴッ!!

激突。

全速力で突っ込み、二機を激しい衝撃が襲った。

コンソールで鳴り響くアラート音。機体アイコンが次々に暗転していった。

金環の壁面に埋没したカバカーリー・ヒノハカマが、ドツズライフの機首に胸を抉られている。そこから内部フレームのクリアパーツが露出しているのが見え、ふとジニアは、あの粒子制御能力のクリアを理解した。

その顔を覆うバイザーには、既に輝きは宿っていない。

「ハア…ハア…、勝つ…た…?」

ハルジオンの機体アイコンは、生きている。

そのガーベラ・テトラのモノアイに、弱弱しくも緑の輝きが点っていた。

彼方で爆発音が轟く。

『BATTLE END!』

残り時間、30秒。ホウカとトモヒサが、グリモアを撃墜したのだ。

電子音声による決着の宣告を耳にしながら、チーム「スターブロッサム」の勝利を胸に刻んだ。

.....

「…ラインアリスさん、その、先程は…」

「んう?」

ジニアが、ドーナツを口いっぱい頬張りながらアンドウに顔を向ける。

開放的なガラス張りとなっっている大きな窓から、学園を訪れた際に目を奪われた荘厳な庭園を望むラウンジ。これも決して安価ではないであろう椅子に腰をかけ、セント榎葉女子学園側のもてなしをホウカ達は受けていた。

最初は少し多すぎる気もしていたドーナツやシュークリームが、今はもう半分以下にまで減っていた。その犯人は、言うまでもなくジニアである。

昼時にガンプラ喫茶でデザートを食べたというのに、何という底なしの胃袋だろうか。自分は、さすがにもう入らない。

トモヒサは突っ込む気すら起きないのか、煌びやかな装飾が施されるティーセットから注がれた紅茶を口にしながら、眉根を寄せて険しい表情をしていた（昔からトモヒサは口に合わないところという顔をする）。

対面に座る「天照す閃光」の三人は、育ちの良さを総身から溢れさせる所作でブレイクタイムを満喫していた。

そんな一同の前に、テーブルの上に置かれているガンプラ達。

それぞれ大きく破損した酷い様相を呈しているが、どこか清々しい、気持ちの良さも感じさせる。

「ふあーひ、ふあふあふお？」

「食べながら喋るんじゃないよ」

マリコがティーカップを持ち上げながら、隣のジニアを注意した。

やはり、育ちの良さを感じるのは気のせいではない…。噂の真偽が余計に気になってくる。

ジニアはもぐもぐと咀嚼し、飲み込んでから再び話す。

「なーに、サダコ？」

「アンドウですわ」

アンドウは条件反射的に返す。

「先程の、というのは、ルインのことです…」

「あ、それかー。いいよ、気にしてないから」

「本当に、申し開きもありませんわ。六年振りの再会というのに、私ときたら…」

自信に満ちた表情だったアンドウが、急に落ち込んだように顔を曇らせた。そのオーラが、一回りくらい小さくなったようにも感じる。

”ルイン”、という人物が二人の間にいるようだ。

そんなアンドウの様子を見て、ジニアがポケットからスマートフォン

ンを取り出す。

「私ね、今年から日本に来ただけで、去年まで一緒だったんだよ。ほら」

画面をタップし、アンドウへと差し出した。

それを見た彼女の表情が、みるみる内に明るさを取り戻し、振り切れて満開の花を咲かせる。

「まあ……こんなに大きく……！」

大きく……？

子供なのだろうか。

トモヒサが、ガチャンとカップを鳴らして肩をビクつくせた。

「でっしょ〜？もう押し倒されちゃうくらいだよ！」

お、押し倒される……？

アンドウの両側に座るクラオカ・オリハとユツキ・ララが、ぎよつとして二人を見た。

「やっぱり妬ましいですわ！夏休みにでもご一緒に渡米して、デートですわ！デート！」

話の方向がまずい方へ向かっている気がする！

「ちよちよ、ちよつと待てお前ら！一体何の話をしてるんだ！」

我慢し切れずに、トモヒサが口を挟んだ。

スマートフォンを覗き込むジニアとアンドウが、トモヒサを見る。

「何って、ルイン……」

「そのルインって奴と、一体どんな……なんだ……アレだ、ふじゅんいせーこーゆー……」

あたふたとしながら、トモヒサは言葉を選びながら二人へ食いかかる。

ジニアはきよとん、としながら、直後に「お前は何を言っているんだ」と言わんばかりの他人を憐れむような表情を顔面に浮かべた。

「ルインは犬だよ、犬」

「……いい、犬う!?!」

ジニアがスマートフォンをこちらへ見せてきた。

そこに映っている写真には、アメリカらしいラフな格好（少し露出が多すぎる気がする）のジニアが、白黒の毛並みの、それなりに大きい犬にもみくちやにされている姿が写っていた。

「シベリアンハスキー、ですね」

「…かわいい…」

ララとオリハがにこにこしながら覗き込む。

ルインという名前の犬は、ララの言う通りシベリアンハスキー犬だった。この犬種らしい独特の精悍な顔つきに、人懐こい表情を浮かべている。

「ル、ルインって名前の、犬…。ダ、ダメだ、笑う…」

何かがつぼに入ってしまったトモヒサが、顔を背けて肩を震わせた。

「六年前にね、パパとママに連れて行ってもらったデパートで出会ったんだ。そこでサダコとも知り合って、この子がいなかったら、私達他人同士だったんだよー」

「数奇なものですわ。あとアンドウですわ」

感慨深げに、頷き合う二人。

ありもしない誤解を想像してしまったことに、思わず顔が火照ってくるのが分かった。不純（自主規制）だなんて、自分も人のことは言えない。

そうして、しばらくガンプラのことや世間話（自分のことが話題に上がったつもりもした）などを語り合う内に、夕刻となった。

「気が向いたとき、いつでもいらして下さいませね。歓迎しますわ」

アンドウの言葉を最後に、豪華な門扉を潜って校外に出る。

「あ、キンジョウさん」

「はい？」

淑やかな声に呼び止められた。

振り向くと、ユヅキ・ララが駆け寄ってくる。

「見事なサーベル捌きと、ファンネル。確かに、聞き及んでいた通りでした」

「え…?」

”聞き及んでいた”…?

「黙っていてごめんなさい。ご存じですよね、”キャプテン・アゼリア”のことは」

心の奥に、小さな火が点る。

「少し、交友があるので、彼女と。英志学園と練習試合をすると伝えるところ、『面白い体捌きをする、新顔のファイターがいる』とのこと。貴女のことでした」

「…ツツジさんとは、ビッグリングでバトルをしました。でも、全然ダメでした」

「伺っております。ですが、あの方に食らい付けるファイターは、そうそうおりません」

そう言ってからララは目を瞑り、ややあつて青い双眸を開いた。

カンザキ・ツツジのような、鋭い眼光を宿した双眸を。

「私も、次こそは…貴女を斬り伏せてみせますよ」

夕陽に照らされ煌めく白髪が、そよ風に揺れた。

A c t . 0 8 『朗々、天照す閃光!Ⅲ』E N D

Act. 09 『スターブロッサム³の長い一日』

巨大な輸送船の周囲で、数機のモビルスーツが飛び回る。

全長2kmに及ぶ巨体に、リング状の重力ブロックの先に突き出た艦首部と、熱核反応炉の燃料である「ヘリウム3」の貯蔵タンクが縦に連なる、風変わりな輸送船。

パプテマス・シロッコ
木星帰りの男が指揮の拠点とする、ジュピトリス級超大型輸送船の一番艦ネームシップ、「ジュピトリス」である。

グリップス戦役以降、幾度とこの船の同型艦がシリーズに登場するが、その発展型とされる「サウザンスジュピター級」の世界からの客人^{まれびと}が、この戦場を掻き乱している。

その客人たる機体の色は、鮮烈なる茜色。

『今だ！挟撃をかけるぞー！』

『お、おうー！』

次々に墮とされていく仲間達を、ジュピトリスの影に隠れて見ている二機のハンブラビが、エイを髭髯とさせるモビルアーマー形態に変形して茜色の機体に飛び掛かった。突き出た頭頂部と肩部にある飛行用モノアイが、レールを滑走して小刻みに動く。

二機は背部ビームガンを撃ち込みつつ、両腕のヒートクローを前へ掲げてその刃をぎらつかせた。

「……チツ」

茜色の機体——クロスボーンガンダム・クローザーは、背面に広がる骨十字型飛行スラスタを噴射して弾幕を回避し、右手に握っているビームザンバーから粒子加速刃を発生させる。

『いただくー！』

ハンブラビの持つ機動性を活かし、人周りも小柄な機体の背後を取る。

だが、

「甘エよ」

骨十字スラスタによるAMBAC作動で急転身したクローザー

が、ビームザンバーを大振りに薙ぎ払ってハンブラビの両腕を斬り飛ばした。

『ぐわッ!』

『くそっ!』

しかし、その反対側から挟撃を仕掛けていたもう一機のハンブラビが、ここぞとばかりにテールランスを伸ばす。

「…甘エってんだよー」

クローザーはそれをも凌駕する出力のスラスタでさらに反転し、ビームザンバーの一閃でテールランスを斬り落とした。

刃の尾を引く、ピンク色の残滓。その奥で、ツインアイの輝くガンダムフェイスが顎を開き、余剰熱を排出する。

『ひい…い…』

牙を剥いた野獣の眼光。

完全に臆してしまったファイターが、自機への指示を放棄していた。

それ故、マダーレッドに燃える機体がフロントアーマーの変形したシザーアンカーを射出するのにも、反応が遅れてしまう。

中程から斬り落とされたテールランスをシザーアンカーが掴み、電気ショックを与えながらクローザーが再び回り始めた。

尚も追撃を仕掛けようとする両腕を失ったハンブラビへと、牽引された同じ姿のモビルスーツを叩き付ける。

「手前エらのセリフを貰うなら…」

ビームザンバーを脇に添え、一気に加速して槍の如く突き出す。

一切の抵抗を許さず、粒子加速刃が二機を纏めて串刺した。

「あいつらの仲間に、加えてやるよオッ!!」

突き刺したまま、骨十字スラスタを下に向けて勢いよく飛び上がり、二機のハンブラビを頭頂部まで一息にかっ捌く。

無残な姿になった二機は、ぼっくりと開いた惨たらしい傷口から炎上を起こし、ジュピトリスの真上で派手に爆発した。

クロスボーンガンダム・クローザーは再び顎を開いて排熱し、野獣の眼光をそのツインアイに宿す。

『BATTLE END!』

一方的な戦闘が終わりを告げた。
宇宙空間とジュピトリスが分解していき、数体のガンプラが盤面に取り残される。

先刻のハンブラビ二機やガブスレイ、マラサイなど。そのどれもが無残な姿に変わり果てており、ただ一つ、クロスボーンガンダム・クローザーだけが無傷で立っていた。

ダメージレベル、A設定。

彼は時折、こうやって挑戦者を募っては完膚なきまでに相手を叩きのめすのだ。

我ら菱亜学園チーム「ハウンドクロス」、その両翼の片割れである”茜^{あか}き野獣”の異名を取る男、ササミネ・コウスケ。

全く御し得ない、だが信頼のおける片翼たる自分——カンザキ・ツツジ——の後輩だ。

「茜色のクロスボーン……やっぱり、去年の全国大会で猛威を振るった、あの”茜き野獣”なのか……!」

「お、俺のアッシマーがあ……!」

それぞれに自分のガンプラを大事そうに持ち上げ、悔し涙を飲み込んでいる。

幾度となく目にしてきた光景に、思わず嘆息した。

ササミネもクロスボーンガンダム・クローザーを拾い上げ、常のよう^うに猫背になりながらその三白眼を挑戦者達へと向ける。

「……去^いねよ」

その言葉だけで、一同は血の気が引いたように真っ青な顔になり、一目散に走り去っていった。毎週日曜日に開催されているレートマッチの終了後、長い一日が終わってホッと一息ついたばかりの彼らへと、心中で哀悼する。

組んでいた腕を解き、肩にかかった董色のポニーテールを払う。壁に預ける身を起こして、彼に歩み寄った。

「ササミネ、今回も目に敵う相手はいなかったようだな?」

「……面白くねッス」

愛機をケースに収納しながら、視線はこちらへ向けずに言う。

「…どいつもこいつも、弱エ。俺のクローザーに、傷一つ付けられやしねエ」

「ふふ、この地域で君に泥を塗る者は身内の私か、檜葉の者くらいだろう。或いは、やはり”黒い悪夢”か」

「…カトー・トモヒサ…」

ササミネの表情が変わった。三白眼が一層見開かれ、口角がやや釣り上がる。

然も、愛機の排熱行為にも似た、荒々しさで。

(奴も、厄介な者に目を付けられたものだ)

英志学園のカトー・トモヒサとこのササミネ・コウスケは、浅からぬ因縁の関係にあるようだった。深入りする気はないが、先達ての彼の態度からしても、それは想像に難くない。

こうしてシヨップを訪れてはダメーヅレベルAのバトルを求め、自分をギリギリに追い込みつつ獲物を探す。そんなことを繰り返していれば、因縁の一つや二つは生まれようというものだ。

今年の地区大会決勝戦でも、彼らの戦闘は苛烈を極めていたの思ひ出す。

初対面に対するササミネの対応は劣悪と言っているが、その直向きに強さを求めようとする姿こそ、我らのチームに不可欠のスパイスとなっていた。

とは言っても、そんな彼を理解して親しくする物好きな人間も、いるにはいるのだが。

「お、ツツジじゃないか」

突然、声をかけられた。

振り向くと、バンダナを頭に巻いた作業服姿の青年が立っている。

自宅の作業場から着の身着のまま、といった風貌だ。

「ああ、ミヤモトさんか。今日は何用で？」

「何用ってなあ。友人に会いに来た、じゃダメか？」

「ふふ、失礼。問題ないよ」

ここ、ガンプラシヨップ「ビッグリング」に程近い場所に店を構え

る、プラモデル造形専門店「ミヤモト工房」の若き店主、ミヤモト・ロウだ。「ま、いつもの納品ついでだけどな」と、塗料の飛沫が残るバッグを掲げて見せる。

この店長であるフルデ・アルトとは旧知の仲らしく、暇を見つけては互いに出入りしているようだった（尤も、彼の場合は散らかしっぱなしのミヤモト工房を掃除する、という明確な目的がある）。

「ゴウスケ君も久しぶり。ザンバーは好調か？」

「……」

黙ったまま、ササミネは小さく頷く。

ミヤモトは気を悪くした風もなく、満足げにうんうんと頷いた。

「そいつは良かった。またいつでも依頼してくれよ。正直、ここんところ依頼らしい依頼もなくて暇なんだよ」

「ミヤモトさん、笑い事で済まない話に聞こえるよ？」

「あんなツツジ、大人には笑うしかない時もあるんだ……」

途端にしよげ始め、子供のように喜怒哀楽を全身で表す。22歳という年齢にそぐわぬ態度は、大学生か高校生をも思わせるほどだ。

しかし、そういった“若さ”も彼の持ち味であり、今尚その技術が発展を見せている。自分の愛用しているドッズソードも、彼によるハンドメイドのワンオフ品だ。

そして、ササミネの強さを支えるビームザンバーもそうだった。

「ツツジよお、お前も今じゃほとんど自分で作っちゃうから、こっちは商売上がったたりなんだぞ？」

「賞賛の言葉と受け取っておくよ」

「お前は口が達者すぎるんだよ……」

またもしょんぼりするミヤモト。その様に、思わず笑みが零れた。くつくつと笑いつつ、ふと、一つのヘックスユニットが目に残る。

先日、キンジョウ・ホウカと一戦を交えた、あのユニットだった。

（…因縁、か。ササミネとカトーのようなどは言わないが、日に日に胸の炎が滾ってゆくな）

つい昨夜、セント榎葉女子学園のユヅキ・ララから連絡があった。

彼女に、と言うより、「スターブロッサム」に完全なる敗北を喫した

と、何故か嬉しそうにユヅキは語っていた。あの「天照す閃光」が練習試合とは言え破れたとあれば、嫌でも戦意が高まっていく（アンドウまでもが新参者に負けたというのは、さすがに耳を疑った）。

この短期間でそれだけの成長がキンジヨウ・ホウカに、否、新生チームに起こったということだ。

（しかし、再びまみえる時は、地区予選の場でありたいものだ）

選手権予選の大舞台こそ、再戦に相応しい場所であろう。

同じ地区であるため、全国への切符を手にするのは一チームのみ。必然的に、決着の場は地区予選となる。願わくば決勝戦と言いたいのが、並み居る強豪を打破し、勝ち抜かなければ、互いにまみえることは叶わない。

これだ。この高揚感と緊迫感こそ、選手権の醍醐味だ。

「どうした、ツツジ。誰かと脳内バトル中か？」

ミヤモトがこちらを覗き込んでくる。

うっかり、物思いに耽ってしまった。そうして、それほどまでに自分が再戦を願っていることに気付き、我ながら可笑しく思う。

「…いや、少しばかり英志の彼女を思い出していた」

「例の新顔、か。お前をそれほど焦がすとは、伝えた側として嬉しいね」

「ふふ、契機を与えてくれて感謝しているよ」

そうだ、彼女が変わりゆくのであれば、自分も現状で止まっているわけにはいかない。剣術の鍛錬は元より、更なる改修を愛機——ガンダムA G E——2バンガードに施さねばならない。

人機一体。それこそ、陶醉するほどに憧れたあの戦い——伝説の第七回世界大会に見出す、ガン普拉バトルの究極の姿。

「…ミヤモトさん、少し頼まれてくれないだろうか？」

これだから、ガン普拉バトルは止められない。

.....

キンジヨウ・ホウカの朝は早い。

毎朝の習慣として、早朝のランニングは小学生の頃から欠かさないよう心掛けていた。己を律するにはまず健康面から、との師匠の教えを守り通していた。

本来は体作りのために習い始めた古武術（師匠が父の親戚であった）だが、その武芸を教授して演舞大会に出場するなど、あの頃は考えてもみなかった。背中を押してくれた師匠の言葉がなかったら、今頃自分はどんな道を歩んでいたのだろう。

そんなことをふと考えながら、既に見慣れたランニングルート曲がり角を走る。

すると、翠風寮への木々に囲まれた入口が見え、同じように走っている生徒達がそこへ吸い込まれていくのを目にする。寮から出て学園の周囲をぐるりと回り、そしてまた戻ってくるのがランニングルートである。

軽いランニングにしても学園が小高い丘に位置するため、緩やかな勾配でもそれなりに疲れる。自然との調和を目指しているというこの地域は、澄んだ空気も気持ち良く、高低差も相俟って運動部にはうってつけのトレーニングになるだろう。

（でも、私にはちよつとキツイかも…）

早朝のランニングに混ざり始めて、もう二ヶ月になる。しかし、未だに周囲と同じペースでは走れない。そもそも体の造りが、運動部員達とは異なるのを痛感する。

小学三年生の時のこと、一緒に稽古をしていたトモヒサがほとんど疲労を見せないのに対し、自分は既にバテ始めていた。それを師匠に訴えると、「ホウカさんは短期決戦型なんだと思うよ」と、冗談めかして励ましてくれたことを思い出す。

それ以後、体力の無さを嘆くことはなくなった。他人との違いを感じる度、師匠の言葉を思い出しては自分を奮い立たせ、やれる時、やるべき時に全力を注ぐ。

そして今日もまた、その言葉を胸に一日が始まるのだ。

天然のアーチを潜ると、ある人物と鉢合わせる。

「あ…おはよう、（？）ぎいます…っ」

「む、キンジョウか。おはよう」

くたびれたジャケットに、首にかけて特徴的なゴーグル。自分たちのコーチを務めてくれている、アズマ・ハルト用務員だった。

二つ名を”殲滅のアズマ”と言う、英志学園の景観を守ってくれている隠れた伝説。シールドライフルではなく右手に箒、左手に塵取りという、肩書きに似合わない凄まじいギャップを生み出している。

この間、男子から「ヴェイガン絶対殺すマン」と呼ばれているのを目撃した時は、思わず嘔き出しそうになったのは黙っておこう。

「いきなり立ち止まるのは体に良くない。寮まで送るついでに、少し話そう」

「は…っ、はい…」

厳格な面立ちながらも、彫りの深い両目から優しげな視線が送られる。一見は頼れる好々爺、といった雰囲気だが、時折こちらも思わず背筋を正してしまうような覇気を感じ取るのだ。

自分はプラフスキー粒子の中での彼を知るため、男子生徒みたいに安易に軽口など叩けるわけもなかった。

「話と言うのは」

五月も最終週となり明後日には六月へ入るため、朝の七時でも既に陽は高い。朝日が差し込む木漏れ日の落ちる道を、他の体操服姿の生徒たちと歩きながら隣のアズマが切り出す。

「お前の機体について、ワシから提案があるのだ」

「提案、ですか？」

「うむ」

ガンダムランキュラスのことだ。

彼がコーチとなってから、自分自身にもガンプラにも、細かい配慮をかけてくれている。Iフィールド・バリアの出力調整も彼の助力で安定し、Pファンネルの運用にも幅が出ていた。

そして現在、一昨日の練習試合で大きな損傷を受けてしまったために、ランキュラスの改修を急いでいるところである。

「失ったパーツの流用に苦心していたらどう？少々古いものになるが、ワシから工面できそうだ」

「本当ですか？」

小さく頷くアズマ。

「ガンプラの改修には力を貸そう。だが、それを扱うのはお前自身だ。しっかりと向き合い、機体に耳を傾けろ。分かるな？」

「はい」

「いい返事だ」

顎髭を蓄える老兵が、柔和な笑顔を浮かべた。

厳しさと優しさを同時に内包したアズマの指導は、何処となく顧問のシマ・マリコと似ている。それもそのはずであり、彼女もかつてはアズマに師事していたと聞いており、その血脈がしっかりと受け継がれているのが分かった。

「もう一つ、お前のスタイルに合う武装を発注しておいた」

「…？何ですか？」

「両手持ちの複合兵装、と言ったところだな。外見は既存の模造品だが、それを作ったビルダーの腕は確かだ」

かなり興味を唆られた。

現在ランキユラスが装備している手持ち武器は、ドツズライフルとビームサーベル二本である。Pファンネルは、その特性から近接戦闘向きではないため、自分としても、押し込める一手が欲しいところではあった。

「昨晚、奴から連絡があつてな。今日の午後、届けに来るらしい」

「え？郵送じゃないんですか？」

「…ワシもそうしろと言ったのだが、品物は自ら届けに行くのがお約束だとか何とか…よく分からんことを奴は言っていた」

そう言いつつ、アズマは眉間に皺を寄せて渋面を作った。

「とにかく、今言えることはこのくらいだ。カトーにも伝えておいてほしい」

そして、話す内に寮の前に到着する。アズマは「ではな」と言葉を残し、用務員としての仕事を再開した。

スタイルに合う武装とは、如何なるものだろうか。ランキユラスの拳動や射撃のクセ、その上、道場に赴いて（無論、二人の古武道部

顧問には許可を得ている) 実際の古武術までも、アズマは本当によく見てくれている。

その観察眼でどのような武装を見出したのか、自然と期待が高まった。

ホウカは女子寮の自室へ戻り、着替えを回収する。ガンダムラナンキュラスの新しい姿に思いを馳せながら、汗を流すため共同浴場へ向かった。

.....

朝は、苦手だ。

ついつい夜更かししてしまう日もそうでない日も、須らく平等に朝は眠い。

それ故に、運良く早く起きた朝は、周囲から珍獣を見るような目に向けられる。

大きなお世話だと、カトー・トモヒサは辟易した顔で寮の食堂に並んでいた。

「おお、トモヒサ。今日は覚醒してるな」

「可能性に殺されるかもしれないねえな」

「なんだそのツツコミ?」

定食の置かれたトレーを持ちながら、コップに給水しているカネダ・リクヤへ言葉を返す。

時刻は七時を回ったばかり。先程、何やらアズマと話していたホウカが女子寮に入っていくのを見かけていた。

いつもは時間ギリギリにここへ並び、待っていてくれるホウカ(その度に幼馴染の優しさを噛み締める)のために慌ただしく朝食をかき込むのが、いつもの朝である。今日はその必要はないようだ。

「…って言うかよ、いつもにも増して視線が気になる気がする」

「それはそうだろ。今やお前も、俺たちの話題の中心なんだぞ?」

「はあ…」

自然と溜息が漏れる。

リクヤの言うことは事実である。一昨日の土曜日に行った檉葉との練習試合のことは、学園ウェブサイトに掲載される記事を介し、既に学園中に広まっているようだった。いくら情報化社会とは言え、英志学園のそれは赤い彗星の如くである。

その出処は無論、新聞部だ。

そして必ずそこには、「ココネ印」と押された手彫り判子が付き纏う。

もしやクロスロード姓なのでは…と勘繰るが、当然違った。その敏腕記者（自称）のぐいぐい迫ってくる童顔を脳裏に浮かべながら、苗字の読みを思い出そうとする。

トレーを持って移動しながら、連れ立って歩くリクヤに尋ねてみる。

「なあ、新聞部のあいつの苗字、なんて読んだっけ？」

「あの敏腕記者（自称）か？」

「ああ。確か、ガ、ガナ…？思い出せねえ…」

確か漢字は、「賀名生」と書いたのだろうか。とても覚えにくい読みだった気がする。

そんなことを話題にしながら、リクヤの隣の席に座った。その真向かいの席には、一人の女子生徒が座っている。

「おはよう、ミソラ」

リクヤの妹でホウカと同じ古武道部に所属する、カネダ・ミソラである。

挨拶をかけると、ミソラは驚いたような素振りで顔をはね上げた。体育会系らしいショートカットが大きく揺れる。

「あ、お、おはようございませす！カトー先輩！」

「お、おう…？」

少し振り切れたようなテンションで返事がきた。

およそ二か月前にホウカと一緒に入学したミソラは、自分が声をかけると大方このような反応が返ってくる。リクヤと小さい頃からよく遊んでいたため、彼女も時々そこに混ざっていたものだが、こんなキャラだっただろうか？

隣に座るリクヤが、何やら笑いを堪えていた。

「…兄貴、何？」

そんな兄の様子を見て、ミソラが笑顔のまま顔を向ける。

「い、いや、別に？」

「次笑ったら、コレだからね」

ミソラが、立てた親指を首元に添えて真横一文字に走らせた。そのまま手をひっくり返して床に突き出すかと思っただが、さすがにそれはないようだ。

途端にリクヤの顔から血の気が引き、表情が凝結する。

よく分からないが、幼馴染の見えざるカラータイマーが赤くなっただ。

「あ、カトー先輩は気にしないでください」

につこりと、こちらへ笑顔が向く。これは、恐らく真実の笑顔か。

自分は一人っ子であるため、二人の遣り取りは昔から少し羨ましくも思っている。本人達は当然のように否定するが、それもまた天邪鬼な兄妹の仲なのかもしれない。

ふと、ホウカとはどうなんだろうかと思う。

実際、小学校に進学した頃からの仲ではある。しかし、どちらかと言うと同門の同期、親戚の親しい女友達、といった感覚だ。そして今は共に戦う仲間であり、妹などと思うのは、身勝手な傲慢だろう。

妙な空気が漂いながらも朝食を摂っていると、向かいの席に見慣れたコンビが着席してきた。

「おはようございます」

「オイツスー！」

ホウカとジニアである。

彼女達の挨拶に、こちらも三者三様で挨拶を返した。「オイツスー！」が挨拶なのかどうかはこの際置いておく。

いつからか、ホウカがランニングを終えてシャワーを浴びるタイミングに合わせて、起きてきたジニアがそこに合流するのが毎朝の通例となっていた。

今日に限っては、自分が先に食堂にいるというイレギュラーが発生

しているが。

ホウカが「あれ、ランニングはしなかったの？」とミソラに尋ね、古武道部員同士の会話をしているのを耳にする（どうやら、今日のミソラは遅く起きてしまったようだった）。

来たら尋ねようと思っていたことを、ホウカに訊いてみた。

「さつきアズマさんと、何話してたんだ？」

「え？…あ、さつきの？」

今日の定食である焼き魚を解しながら、ホウカが返す。こんな朝早くから何を話していたのか、少し気になっていた。

「ランキユラスの改修パーツが何とかかなりそうなのと、私のスタイルに合わせた武装が届くって話だったよ」

「武装？どこかに発注してたのか？」

「詳しい話はなかったけど、腕の立つビルダーだ、って」

「ふーん…？」

アズマ程の人物が認めるビルダーとは…。ぱっと思えば浮かぶ限りでも、数人がすぐに挙げられる。そのため、誰のことを言っているのか見当が付かなかった。

改修パーツに加えて新装備まで。アズマへの感謝は、本当に筆舌に尽くし難い。

去年よりはガンプラ部の部費が増えたとはいえ（設立当初の三年前はどうなっていたのか）、やはり改修用の部品を工面するのは大変だ。シンイチから斡旋してもらってはいるが、それでも三人分を賄えるには至らないのが実情。

自分からダメージレベルAのバトルを持ち掛けておいて、このザマである。

「アズマさんって、そんなに凄い人なの？」

こちらの会話を横目で見ながら朝食を摂っていたミソラが、隣のホウカへ尋ねる。

意外な人物が話題に乗ってきたため、少し驚いた。

「うん。私もこの間知ったばかりだけど…実際、ほんとに強かったよ」「そういえば先週の部活の時も、道場の端で見てたよね。あの目…確

かに只者じゃないって感じ」

「ふっふっふっ…これは、二人に”殲滅のアズマ”のバトル映像を見せるしかないみたいだね…!」

宇宙怪獣の撃退に発進しそうな腕組み姿（立ってはいない）で、ジニアは目を瞑ってしたり顔をした。

「何でお前が得意気にしてるんだ」

少し怪訝に思いながらも、トモヒサは焼き魚を啄きつつツッコミを入れる。

ミソラは兄のリクヤと違い、ガンプラには大した興味を持っていない。それは昔から同じであり、こちらがガンダムのゲームをしていても参加はせず、ジュースを飲みながら釈然としない表情でいたの思を出す。

そんな彼女にも、アズマが話題として挙がるとは。

「…トモヒサ」

「あん?」

突然、隣から神妙な声が飛んできた。

「…頑張れよ」

「何をだ」

幼馴染の腐れ縁はそう言ったきり、味噌汁のお椀を煽ってずぞぞと吸うだけだった。

（なんなんだ一体…）

珍しく早く起きた朝は、変な朝だった。

.....

「おはようございます」

「うむ、おはよう」

「あ…! テライ先輩、おはようございます!」

「おはよう。元気な挨拶、とても素敵だ」

「は…はいっ!」

高等部の校舎玄関前に立ち、後輩達の登校を歓迎する。

未だ眠い目を擦る男子生徒や、笑顔の眩しい女子生徒。その胸の内に輝く原石を、学び舎で研磨している真つ最中であろう若い芽達。

その姿を、黄土色の両目で見守る。

そうして挨拶を送っていると、生徒達の中を掻き分けて数人の男子生徒が走り寄ってきた。

「テライ様、おはようございますー！」

「おはようございます、テライ元会長！英志の未来を照らす、いい朝日ですー！」

「おはよう、我が英志の友よ。今日も君達の活躍を、期待している」

「『英志学園万歳!!英志学園に栄光あれ!!』」

熱に浮かされたように、数人の男子生徒が右手の拳を左肩関節の辺りに当てて敬礼をする。学年を問わず規律ある姿を見せるのは、英志学園高等部の後輩（ガンダム好きの輪）達である。こうして顔を合わせた時は、必ずこの敬礼ポーズを送ってくるのだ。

自分も応え、同様の敬礼を返す。

襟の広い真紅のスーツと純白のズボンに身を包むテライ・シンイチは、今週の朝の挨拶運動を任されていた。

大学の生徒自治会では、学園全体の保全も主目的として掲げており、生徒達の充実なる学園生活を支えるため、忙しい毎日を送っている。

昨年まで高等部生徒会長の任に就いていたが、それ以上の多忙さと、そして遣り甲斐を感じていた。

「おはようございます」

傍らで淡々と挨拶を送っているのは、ナラサキ・フウランだ。黒いワンピースと白のタイツというツートンが映え、ラベンダー色のツインテールが朝日に優しい彩りを添えている。

「フウラン、私だけでいいと言っただろう？」

「そうは参りません。私は貴方の側近、この任を違えるわけにいきませんから」

「その忠誠心には深く感謝するが…うむ、おはよう」

フウランから視線を外し、生徒へ挨拶を返す。

「挨拶運動に参加するのであれば、まずは表情から改めるべきだな？」
「う…それは、ですね…。あ、おはようございます」

堅苦しい表情で、言葉だけ歓迎の意を表している。
その美貌を台無しにしてしまいかねない堅固な表情が、フウランの唯一と言つていい欠点と言えた。執務などでは、自分の右腕として優秀な能力を如何なく発揮してくれているが、人当たりの悪さは公私においても悩みの種である。

そう、先日のキンジョウ・ホウカとの面会においても、やや剣呑な空気を感じていた（その理由は分からないが）。

「これは、生まれつきです」

少しいじけたようにそっぽを向くフウラン。

固い表情で言うならば、菱亜学園のカンザキ・ツツジも学生らしからぬ達観した表情をよくする。しかし彼女の場合、それは堅苦しいのではなく、自信と揺るぎない信念の表れであろう。

時に、ふつと力を抜いて小さく笑う姿は、和の美しさを見る者に抱かせるのだ。

そうして挨拶運動を続ける内、とりわけ目立つ五人が登校してくる。

「おはよう諸君。今朝のトモヒサは、マグネットコーティングでもしているのかな？」

「どういう例えですかそれ…おはようございます」

一日の学業が始まる前に既に疲労している表情で、トモヒサが挨拶とツツコミを返してくる。他の四人、キンジョウ・ホウカとジニア・ラインアリス、そしてカネダ兄妹からも挨拶が来る。

新生チーム「スターブロッサム」と先代チーム「スターブレイカーズ」が、初めて一度に集結した（十二人）。

傍らのフウランから、静かな敵意がキンジョウ・ホウカに向けられるのを感じ取る。

「今週はシンイチさんが挨拶運動なんですか」

「ああ、そうだ。全く、奇跡のような偶然だな。私がここに配されず、トモヒサも遅れた場合は、こうして全員と顔を合わせることもなかつ

ただろう。む、おはよう」

擦れ違う生徒の挨拶に、忘れず笑顔と言葉を返す。

それを察してか、トモヒサが一同へ「邪魔しちや悪い、さっさと入ろうぜ」と促していた。

「じゃ、俺らはこれで」

「うむ。では」

ひと時の顔合わせが終わり、キンジョウ・ホウカの会釈とジニア・ラインアリスの妙にニコニコした笑顔（噂通りだ）、そしてリクヤの挙手挨拶とその妹の緊張気味の会釈を受け取った。

活動を再開しようとした時、校庭の人混みの中から殺人的な加速を持って一人の女子生徒が突っ込んでくるのを見る。

「その五人組あいや待たれよー！ーっ！！」

キキキキッとブレーキをかけ、その女子生徒が玄関の内へ入ろうとした五人と自分の間に入り込んできた。

長い赤髪を黄色いシュシュで纏める、中学生（最悪、小学生にも間違えそう）と見紛うばかりの小柄な生徒。

センターで分けた前髪から、一束の髪がはねる特徴的な癖毛を揺らしながら、V字を描く太めの眉が目立つ童顔がバツ！と上がった。

「この絶好の機会は逃しません！これより、突撃・隣のガンプラ部を敢行しますっ！！」

英志学園新聞部のエース、高等部二年生のアノウ・ココネだった。

Act. 10 『スターブロッサムの長い一日Ⅱ』へ続く

「ふあ…かあ〜〜っ！」

駅の薄暗いホームに立ち、背伸びをしながら大きく欠伸をする。適当に伸ばしたざんばら髪をかき上げ、目尻の涙を手の甲で拭いた。

「ようやくと到着かいな」

依頼された品物が入っているショルダーバッグを担ぎ直し、ホームの階段を登り始める。約半年ほど前だったか、この駅から近い喫茶店に展示用のガンプラを依頼されたことがあった。

ガランシエールだかメガファウナだか、そんな店名だった気がする。武者頑駄無^{ガンダム}の依頼だったため、結構本気で仕上げた自信作だった。

と、自分では思っていたのだが、あのクソジジイに言わせれば「まあまあやな」らしい。師匠（と二人の兄弟子）が、脳内で満面の笑みを浮かべてダブルピースをした。

「やかましいわい！」

階段を登っているおばさんが驚き、こちらを見る。

「ああ、スンマセン。独り言です」

慌てて、笑顔を浮かべてペコペコした。不審者を見るような訝しげな視線が送られる。

完全に変人と思われたが、そんなことはどうでもいい。何となく、師匠と同門の仲間からぞんざいに扱われている節があるのを思い出し、ムシヤクシャしてきた。

去年の一世一代の発起の時だってそうだ。派閥を立てて独立する、と進言したら「勝手にすればよか」だの、仲間を誘えば「外から楽しませてもらうわ」だの…。

協調性なさすぎやろ！

ゲンナリするようなムシヤクシャするような、自分でもよく分からない気分を味わいながら階段を登り切る。切符を改札に吸い込ませ、

広い駅舎(というより、最早商店街)の中へと出た。インフォオメーションセンターやらファストフード店が両脇に並ぶのを眺めながら、何を食べようかと昼食を探す。

と、香ばしい匂いが嗅覚をくすぐった。

「おっ…この食欲を湧かせるウマそうな匂いは…」

匂いに釣られるまま小走りに外へ出ると、見慣れた屋台を見つけた。両側に突き立っている真つ赤なノボりに「味じまん」と「技じまん」が書かれている。

こんな東の地で、たこ焼き屋大手の「たこ丸」に出会えるとは！

「うおおおおおっちゃん！たこ焼き一つ頼むで！」

北関東一の都会の景色には目もくれず、屋台の前に滑り込んで塗膜剥離現象^M顔負けの神速で注文する。

「あいよー！」

ねじり鉢巻きを頭に巻いた店主が、両手を打ち鳴らして作業に取り掛かる。

たこ丸は、注文を受けるまで決して焼かないのが流儀なのだ。社長が「たこ焼きは焼きたてが一番や！」とこだわり抜いており、それを裏切らない絶品が大手たる所以だった。

「お客さん、関西の人やな？」

生地が鉄板の熱で焼かれていく音と匂いを楽しみながら、店主の言葉に反応する。

「せやで。そう言うおっちゃんも同郷やろ？いや、こないなトコでたこ丸に会えるとはツイてるで〜」

「ん？お客さんの顔、どつかで見た気が…」

自分の顔を見ながら、店主が唸り始めた。

「あ、せや！お客さん、ガンプラ心形流のイブキ・アラタやろ!!」

きゅぴーん！

「フッフッフ…バレちゃあ仕方あらへんなあ！ワイこそ、関西がガンプラ造形のメツカ・心形流で初の派閥”鉄機派”を打ち立てた凄腕ビルダー、イブキ・アラタや!!」

決まった…!

ヤサカ先輩に教わった決めポーズもぼつちり。

「ママー、変な人がいるー」

「見ちゃいけません」

…しまった、関東では封印しておけと言われたのを忘れていた。

「おお！ホンママのイブキ・アラタや！」

「おつちやくん！」

同郷の人間に救われた…！

周囲の痛い視線を謎フィールドで跳ね返しながら、唯一理解してくれた店主を拝み倒す。

「やめてーな、ワイはビリケンさんやないで。そないなことより、今日はまたどないしたんや？関西からわざわざ…」

「ああ、それなら心配あらへんで。今日から一週間程度、関東をあつちやくつちや飛び回る予定やさかい。ここにも、依頼品の受け渡しに来ただけやし」

「ビルダーつちゆうんも、大変やなあ」

「ま、好きでやつとるんで」

気の合う同郷同士、他愛もない話で笑い合う。

そうしている内にたこ焼きが焼き上がり、八個が舟皿に盛られた。それがプラパックに詰められ、袋で渡される。

「はい、お待ち！お勘定は500円やけど…関西の誼みでサービスしたる！200円や！」

「うおおおマジかおつちちゃん！ドテっ腹！」

「それを言うなら太っ腹やで！」

ワハハハハ！と笑い合い、漫才を交わして幸せな気分浸った。相変わらず白い目が向けられているが、もうそんなものは気にならな

い。
ガマグチ財布から200円を取り出して（今笑った奴しばいたる）店主の手に渡しながら、ふと、屋台の中にかけている時計を目にした。

「…アツカン！電車出てまう！」

「どの路線なんや？」

「ええと、なんて言うたっけ…ジヨウエツ線？」

「それなら12番線やで！」

「助かるわ〜！帰りにまた寄ったる！」

ほんじゃ、と別れを告げて走り出す。背中に「気張りや〜！」という店主の快活な声を受けつつ、切符券売機に向かった。

目的地は更に北にあるらしく、ここからは未知の地だ。この都市には、有名なセント櫛葉女子学園があることでガンプラ界限にも知られているが、そこに寄っている予定も時間もない。

目的地——アズマのおっちゃんが勤務している英志学園。そこにいる新米のファイターが使うらしい装備を届けるのが、今日の仕事だ。

.....

哺乳綱、ネコ目、イヌ亜目、きぎやく 鰭脚亜目。

和名を「海豹」と書く、氷上を腹這いで移動する海に進出した哺乳類の一種。

即ち、アザラシである。

「収穫収穫〜！」

多目的教室の机に突っ伏すアザラシを狩猟した、赤髪の小柄なハンターが、満足げに頷きながらメモ帳に視線を滑らせていた。

かつてヒトだった屍は、アザラシの姿で微動だにせず窓の外へ顔を向けている。

「トモにい…」

「どうか安らかにジオンの元に召されよ…」

ホウカとジニアは、右隣の席でチームの長兄へと追悼を捧げた。

「死んでねえよ…」

力ないツツコミがアザラシ、またの名をトモヒサから発せられる。

「こんなに早くネタを手に入れられるとは思ってませんでした〜！ご協力、感謝します！」

赤髪のハンター——アノウ・ココネがビツ！と機敏な動きでこちら

に敬礼をしてきた。そして「あ、英志っぽくするならこっちはですね！」
と言いながら左肩関節に右拳を当てる。

トモヒサが珍しく早起きした、その日の昼。新聞部のエースと言われるココネにインタビューをさせてほしいと約束を取り付けられ、こうして昼食後に行われたのだ。朝、七人が揃った姿もバッチリと写真に収められている。

その内の二人を除いた五人、つまり、自分たち「スターブロッサム」とカナダ兄妹が、彼女のインタビューを受けていた。

「元会長にも是非お話を訊きたかったのですが…仕方ありません」
センターで分けられた前髪から飛び出る癖毛が、まるで感情を表すかのようにしな垂れ…たように見える。

彼女はとても小柄であり、制服を着ていなかったら十中八九は年下だと思うだろう。しかし、平坦な胸に下がるネクタイの色は、トモヒサと同じ赤だ。

あろうことか、むしろ年上だった。

「…今更なだけどき、あたしここに必要？」

「それを言うなら俺もだ」

自分たちから更に右隣に座るミソラとリクヤが、ぼそりと呟く。

それにも耳聴く反応したココネが、机を挟んで二人の前に走り寄った。

「勿論です！ 昨年のチームメンバーだったカナダ・リクヤさんとその妹さんにも、お尋ねしたいことは山ほどあります！」

「や、山ほどもあるのか…」

そうしてココネはメモ帳とペンを取り出して、「ではでは早速」と言いながらインタビューを始めた。

その際に、トモヒサの背中を揺する。

「トモにい、生きてる？」

「だから死んでねえっての」

「あ、もうすぐ召されるところだったのに」

「俺はネオジオン総帥か…」

ジニアにツツコミを返しながら、むっくりと起き上がったトモヒサ

がヒトの姿を取り戻した。

「何だよあいつ…あの体のどこにエネルギー蓄えてんだか…」

「ねー」

「お前も似たようなもんだろ」

ジニアが「どういう意味かな!」と返して身を乗り出す。

「そんなことよりホウカ、お前の考えるランキユラスの改修案とやらは、イメージできてるのか?」

襲いかかってくるジニアの頭を抑え込みながら、トモヒサが訊いてきた。

「あ…うん。大きい改造はないけど、もっと使いやすい形になりそう」

「そうか、ならいい。とは言えそんなに余裕はないぞ?再来週には、もう予選が始まるからな」

「うん、分かってる」

そう、地区大会が迫っている。

それに向け、今日から各自で最終調整に入るのだ。破損したガンブラの修繕は勿論のこと、気付いた点なども出来得る限りの工作を施す。

何故、マリコが大会の直前に練習試合を組んだのか。そして、トモヒサがダメージレベルAをこのタイミングで仕掛けてきた理由も、それらは大会の前に後悔を残さないためだった(結果、部品の遣り繰りに悩むことになったが)。

事実として、自分もガンダムランキユラスを感触に合うよう、使い易くしたいと思った。チームとしての位置取り、それに見合った機体調整が必要なのだ。

バックアップであるリクヤも同意見であり、制作の中心だったトモヒサの”盛り込み癖”が役割に見合わないと判断している。無論、改造コンセプトの反映や、展示した時の美しさは文句なしだが、基礎的な出力の高さを合わせて調整(デチューンと言うらしい)することも急務だった。

今思い描いている姿は、かなりスッキリしたものをイメージしている。

トモヒサもジニアも、一昨日の練習試合で得るものがあつたらしく、修繕の中で取り入れていくと言っていた。
(そういえば、今日届けに来るってビルダーの人。誰なんだろう?)
ふと、今朝方アズマに言われた言葉を思い出す。

——コンコン

「カトーはいるか? ワシだ」

「あ、アズマさん?」

丁度思い出していたところだったために、思わずドキツとした。
断りを入れ、アズマが多目的教室に入ってくる。

「ここにいと聞いてな」

「どうしたんですか?」

「キンジョウウから聞いているのだろうか? ワシが依頼しておいた物についてだ」

立ち上がるトモヒサに釣られて、自分も後に従った。ちなみに、ジニアはトモヒサの腕に抑えられたままである。

「例のビルダーから連絡があつてな。予定通り、放課後には到着できるらしい。…ラインアリスは何をしている?」

「気にしないでください」

「ジニーはこつち」

頭を押し付けるジニアを、トモヒサから引き剥がした。

「…それより、そのビルダーって誰なんですか?」

「ん? ああ、知っているだろう、イブキだ」

さらっと出てきたその名前に、真っ先にトモヒサが反応する。

「イブキって…心形流のイブキ・アラタ!?」

「心形流…ええっ!?!」

ジニアと一言一句がシンクロした。

その名前は、この間知ったばかりである。それに、ガンプラ喫茶「メガファウナ」に展示されていたイブキ・アラタの作品、「BB戦士^{マスターゼータ}真星勢多」を間近で見ってきたばかりでもあつた。

そんな有名な人が、協力してくれたのか。

「そ、その人が、ラナンキユラスの武装を…?」

「そんなに驚くな…。奴とて、一介のビルダーに過ぎん」

心形流のビルダーを、一介…。

「腕がいいのは認めるが、他のビルダーと比して一般の認知度があるか否かの違いでしかない。それだけのことだ」

「う、ううん…まあそれは…」

トモヒサが腕を組んで唸った。

アズマの言葉は、確かに的を射ていると思う。同じく心形流の門弟であるヤサカ・マオもサカイ・ミナトも、バトルの舞台に立ってみれば多くのビルドファイター達と同じ。特別なことは何もないのだ。

そこにあるのは、辿った道。その違いしかなかった。

”殲滅のアズマ”の言うことはやっぱり違うねえ」

「…ワシとて例外などでは…まあいい」

腕を組んでトモヒサの真似をしながら、ジニアは感心するように頷く。

アズマはそれに対してハア、と嘆息した。

「ふっふっふ…聞きましたよその話…」

ジャブローの川底から姿を現すズゴックのように、ココネが目を光らせながら下からぬつと出てくる。

「是非、その場に立ち合わせてくださいっ!!」

「ぬ、ぬウ…!?!」

ずずい、と迫るココネにアズマがたじろぐ。

あれ、デジャヴ…?

「お前は確か、新聞部のアノウ・ココネと言ったか…?」

「覚えていてくださったのですね!感激です!」

横に立つジニアが腕を組んだまま(今日はやたらとこの格好をしている気がする)、うんうんと何かを悟ったような表情をしていた。ちなみに聞くとところに因ると、ココネの突撃を二年間もアズマは回避し続けているらしい。

アズマは頭の後ろをポリポリとかきながら、彫りの深い両目を閉じ

て暫し思案しているようだったが、やがて目を開いた。

「…勝手にしろ。ただし、一つ忠告しておくが、奴にこのメンツは毒かもしれない」

「むむ？…どういうことですか？」

「若き故のナントカ、だ」

アズマが何か言い含めるように言った直後、昼休みの終わりを告げるチャイムが校舎に鳴り響いた。

.....

凄腕ビルダー、イブキ・アラタの紙芝居の時間や！

心形流鉄機派は何故生まれたか？ 始まりやで〜！

まずは、ワイが京都にある心形流の扉を叩いた五年前に遡るで！

最初の動機は、自分の手でめっちゃ動くめっちゃかっこいい武者頑駄無を作りたい、その一心からや。

険しい道程やった…。SDガンダム特有のデフォルメ頭身に、如何に関節機構を盛り込むか、メッキ塗装はどうやって施すか。師匠は基本的に我関せずのスタンスやし、先輩達も割と忙しいしで、それはそれは辛かった…。

辛い^{から}ちやうで、辛いやで。

そんなんで二年間の修行の末、満足のいく武者頑駄無を作ることには成功したんや。心形流に居らんでもええやんけ！…っていうツッコミはナシや。

ほな、ワイの作った武者頑駄無で並み居る強豪をバツタバツタと倒したる！と意気込んだはいいものの、そない簡単なことやなかった。覚悟しとったことやけど、ガンプラバトルの世界の厳しさを嫌と味わったで〜。

「兄ちゃん、それでテツキハって何なんだよー」

「それを今から説明するトコやんか！ 黙って聞いとれボウズ！」

そうして先輩の背中を追うようにビルダーを志望し始めたんやけど、ワイに一世一代の発起をさせる、重大なことが三年前に起こった

んや。

そう！言わずと知れた「第13回全日本ガン普拉バトル選手権」、本場静岡で開催された全国大会のことや。

その出場ファイター達の中でも、ワイらSDガンダムファンの注目を浴びたのがチーム「トライファイターズ」の紅一点、ホシノ・フミナちゃんの「スターウイニングガンダム」と、チーム「SD-R」の「スナイバルガンダム」「ドラゴナーゲルガンダム」「ギラカノンガンダム」の四体のSDガンプラや。

その活躍は、ワイらが昇天してまうくらいええもんやった…。

せやけどなあ！ワイが不満に思うんは、肝心の”武者頑駄無”が一体もおらへんかったことや！

それからや、武者頑駄無の魅力をもっと世間に広めたい、もつとみんな武者頑駄無を使ってほしい、そう思うようになったんは。

そして思い付いたんが、”心形流の名を借りてワイ自身が宣伝の筆頭になる”ということ。

それを成し遂げるために、再び二年間の修行を経て鉄機派を打ち立て、ようやく去年、ホビーホビー誌でドローン！と発表して今に至るんや。

ええ話やで…。

「……何をやっているのだ、お前は……」

「おお、アズマのおっちゃん！待つとったで！」

紙芝居を終えて目尻の涙をハンケチーフで拭い、終わるまで黙って見ていた老齢の男がいた。

依頼主のアズマ・ハルトである。

「それはこちらの台詞だ。もう直到着すると連絡があったから校門で待っていたと言うに、向かいのコンビニで小学生を捕まえて紙芝居など…」

「それは刷り込み…ゴッホン！若人の買い食いを止めるためやがな」

学校帰りに買い食いしようとしていた小学生男子を捕まえ、年長者

として真つ当な道を示すための紙芝居だったのだ（口実であるなどが裂けても言えんわ）。

「なあ兄ちゃん、そんなのどうでもいいからガンプラ見せてよ！」

「そうだそうだ！見せろよー！」

「どうでもいいとはなんやねんガキンチョ共!!ああもう、ワイのウルトラスーパーハイクオリティなめちゃんこカッチョイイ武者頑駄無見せたるから、バトルシステムがあるトコまで案内せえや！」

と言いつ放った途端、アズマが襟首を掴んで引き摺り始めた。

「か、堪忍してえなアズマのおつちゃん！武者頑駄無フアンの可能性の芽がそこにおるんやー！」

「バトルシステムなら英志にある」

「ドイヒーなことするんやろ!?ウェイガン兵みたいに！ウェイガン兵みたいに！」

引き摺られながら、「ちえーつまんないの」「じゃあな兄ちゃん！」と散り散りになっていくチビっ子達。

ああ、さよならグツバイ、可能性の芽…。

.....

「…つていうことは、テールバインダーを排して腰周りのクリアランスを確保したらいいんじゃないか？」

「うーん…でも、コンセプトにステイメンがありますし…」

「それは分かるけどな。でも、基本的な白いガンダムつていう特徴と、メット部はステイメンだから、その辺に問題はないと思うぞ？」

ガンプラ部の部室で、リクヤと意見を交わした。

選手権予選への最終調整ということで、今日は古武道部を休んでいる。それに来客がいるということで、カンベ・アリサ顧問に許可を取ったのだ。

「変更箇所は両腕と腰部か…。ステイメンの最大の特徴をオミットするのは思い切ったもんだけど、俺はアリダと思う」

「とにかく、アズマさんからパーツを受け取った後、ですよね」

「ま、そういうことだな」

意見交換が一段落し、リクヤと改修点をメモ帳に纏める。

と、部室のドアを開けて小柄な生徒が入ってきた。

「どうも、失礼します！・敏腕記者アノウ・ココネです！」

元気よく挨拶をし、「ココネ印」と刺繍の入った左の腕章を見せ付けるポーズを決めた。

「面白そう！私もやる！天才役者ジニア・ラインアリスだよ！」

「ええいやかましい!!」

その後ろから、ポーズを真似するジニアと、勢いのあるツツコミを切り込むトモヒサが続いて入ってくる。

「私たち仲良くなれそうですね！」

「やだなーキョウダイ！もう友達じゃないかー」

えへへへへ、と二つの変な笑い声が部室に響き渡る。

「ボケとツツコミの比率が……世界の悪意が見えるようだけハレルヤ……」

見るからにエネルギーが枯渇したトモヒサが、フラフラと歩いて隣に着席した。そして、昼と同様にアザラシに変身する。

「トモにい、そろそろ心形流の人来るよ？」

「俺は父ジオンの元に召されるだろう……」

「ああ、こいつはもうダメだ」

リクヤが、お手上げとばかりに両手を広げた。

脳内に、トモヒサへの対応策候補が幾つか挙がる。

↓励ます、ツツコミ役が変わる、追討ち、そつとしておく。

うん、そつとしておこう……。

「喜劇はこんくらいにしてよ、トモヒサ。お前はサレナの改修大丈夫なのか？」

「んー？まあ装甲の予備パーツは常に準備してるから問題ない。が、バインダー基部辺りはダメーシ深いから、これだけは新造中だ」

関節部分を新造する、という言葉に現実味を感じない。ガンプラの関節は綿密な設計がされて金型が作られているらしく、フルスクラッチとなると高い精度が要求される高等技術だ。

トモヒサは、基本的にミキシングや武装の流用を得意とするためフルスクラッチはほとんどしないのだが、その際に発生する保持強度や関節の剛性などに手腕を発揮する。愛機であるガンダムサレナ自体が、大型の兵器を運用する重量級ということでもあるため、彼にとつて必須のスキルとなったのだろう。

ガンプラの話で意見を交わし合う二人を見ながら、ふと気になることがあってジニアに話題を持ちかけてみる。

「そういえば、ジニーのハルジオンは大丈夫？」

「んむ？ そうだねー、元々修理しやすいように取外しも考慮してあるから、後は今まで通りに丁寧な工作すればおつけー、って感じかな？」

「アンドウさんと結構激しいバトルをしたみたいだけど…すごいね」

「^{ハルジオン}ジオンの春は伊達じゃないからね！」

むふー、と鼻息を吹き、自信ありげに胸を反らした。

そのジニアに何故か抱かれる形で膝に座っているココネが、割って入る。

「すごいですねー、今度ガンプラそのものにインタビューしてみたいです」

「いいともさきョウダイ！ 『スターブロッサム』は君に協力を惜しまないよー！」

「ひいっ」

トモヒサから小さな悲鳴が上がった。

（こうしてみんなの話を聞いてると、ほんとにすごいな…）

オリジナルのガンプラを、自分の手で作り上げる。

ガンプラ部に入部した当初は夢物語、雲の上の話だと思っていたのだが、この三週間程度で多くのビルドファイターに出会い、その考えも変わってきている。

いつかは、ガンダムラナンキュラスみたいなガンプラを、自分の手で作りたい——そう、強く思うようになったのだ。

後で調べてみて分かったことだが、チーム「天照す閃光」の三機も原典機から大きく改造されており、ほとんど別物と言えるほどだ。

自由な発想。ガンプラの可能性は無限大なのだ。

しばらく談笑などをしてしていると、部室のドアが開かれてアズマが入ってくる。

「全員、集まっているな。入っていいぞ」
「お邪魔します〜」

その後ろから、語尾が上がる関西弁らしき声が響く。

長すぎ短すぎのざんばら髪が印象的な、Tシャツとジーパン姿の質素な服装をした青年（トモヒサと同じ年、もしくは年上だろうか）。少し大きめのショルダーバッグを肩に担いでいた。

「えろうお待たせしてすんまへん。この度は心形流鉄機派イブキ・アラタに依頼をくださって、まことに…」

そこまで挨拶をして言葉を切り、こちらをじっと見てくる。

「えっ…と、あの…?」

「可憐や…」

「へ?」

今、何かを呟いた気がしたが、上手く聞き取れなかった。

直後、青年——イブキ・アラタはざんばら髪に手櫛を入れ、ついでに表情が気持ち真面目になったようにも見える。

アズマが「やはりこうなるか…」と言いながら、呆れた顔で嘆息した。

イブキは滑るように歩み寄って、自分の手を握ってくる。

「え?…え?」

「可憐や…」

か、顔が近い!

握られた両手に熱が籠もり、ひたすらこちらを近距離で見つめてくるイブキに対し、体温が急激に上昇してくるのを感じた。

「…へ、あ、いや! オイコラちよつと待て!」

我らがヒーロー・トモヒサが音を立てて椅子から立ち上がり、自分とイブキの間に割って入る。

「いきなり何なんだあんたは!」

「あん? アンタ誰や」

「お、俺は英志学園チーム『スターブロッサム』のリーダー、カトー!

トモヒサだ」

「ほー？アンタが噂の”黒い悪夢”かい」

「そんなことはいいい。それより、いきなりホウカにちよつかい出して何のつもりだ？」

「なんや？アンタこのお嬢さんのカレシかいな？」

「なっ、カ、カ、カレ…!?!」

トモヒサは半歩後退り、明らかな動揺を全身に表した。

それを見たイブキがにやりと口角を上げ、嘲笑を浮かべる。

「はっはくん。どうやら違うようやな。ほんなら野郎は下がつとれ、シッシ」

「なっ…!?!」

「は〜い！この勝負、私が預かるよ！」

あわやリアルファイト、という雰囲気になりかけたところで、さらにジニアが二人の間に割って入った。

「リアルファイトをしいいいのはモビルファイターだけだよ？アムロとシヤアみたいなのは現実に持ち込まないの！」

「ジニー、ありがとう…」

ジニアがサムズアップをして見せる。この中で一番かっこいいよ…。

「むむ？よう見ると君もかわええなあ…」

「いい加減にせんか！」

「むっぢや!?!」

今度はジニアの顔をまじまじと眺め始めたイブキが、アズマの振り下ろした鉄拳の制裁を受ける。

「なにすんねん！」

「もう紹介の必要はないようだが、改めて、この馬鹿者がイブキ・アラタだ」

アズマが呆れ顔のまま彼を紹介した。

紹介を受けたイブキは、「っちく、結構本気で殴ったやろ」と言いながら頭の天辺を撫でている。

何というか、印象的を通り越して、強烈な人だ。

「ちと暴走気味だったんは認めるわ。すまんかったな」

「あ…ああ、いえ、そんな」

こちらに向き直り、意外と丁寧に頭を下げて謝罪をしてきた。慌てて手を泳がせながらも、言葉を返す。

真面目なところもあって、少し安心した。

「せやけど、それはそれ、これはこれや!」

と思いきや、弾かれたように体を起こしてトモヒサをビシツ!と指差した。

「アンタ、なんちゅくくく羨ましい青春しとるんや!?ただでさえ出会の少ないガンプラ趣味のクセして、こない可愛い部員に囲まれよってからに!清楚系に元気系に…ロ、ロリっ娘!?なんでや!?と、とにかく選り取り見取りで!…ってゆーか、アンタ結構イケメンやな!!うわ、余計腹立つ!!」

一気に捲し立てたイブキが、ふう、と息を吐いて額の汗を拭った。

黙って聞いていたトモヒサは、死んだ魚のような目をしている。

「こうなりや、決着はアレしかあらへんなあ…」

「ふっふっふ…私が預かってるからね!両者とも合意と見てよろしいですね!」

「よろしくねえ!」

「ガンプラバトル、レディーゴーゴー!!あ、バトルシステムはあちらになりま〜す」

トモヒサの意思は完全に無視され、ジニアとイブキが低い天井へと高らかに右腕を掲げた。

「もうやだ…俺もう早起きしない…絶対何かに呪われてる…」

「トモヒサ、頑張れよ」

「これは面白すぎるネタを拾ってしまいました…!そういうば、口りっ娘って誰のことです?」

「依頼した品はどうし…、いや、もうワシの手には負えんか…」

気付けば、狭い部室が賑わっている。

善し悪しはともかくとして、これはこれで悪い気はしなかった。

A c t . 11 『スターブロッサムの長い一日Ⅲ』へ続く

Act. 11 『スターブロッサム』の長い一日Ⅲ』

ムシヤガンダム
——武者頑駄無。

所謂、「リアル頭身」と呼ばれるデザインを大胆に二頭身、或いは三頭身にアレンジしたものがSD（＝スーパーデフォルメ）ガンダムであり、その一ジャンルに含まれている武者頑駄無の主流タイトルでもある。

その歴史は、時代の波に翻弄された紆余曲折を辿る。

本来、武者頑駄無は伝説的漫画作品「プラモ狂四郎」の主人公が、劇中で作り上げたプラモデル——「武者ガンダム」を始祖としている。現在でこそ「武者と言えばSD」というのは一般的な認識だが、その始祖である武者ガンダムはリアル頭身だった。

それもそのはずであり、SDガンダムとして展開していくことは当時想定されていなかったのだから、当然であろう（そもそも、ガンダム自体が鎧武者をモチーフにしており、ガンダム×武者の発想はここに由来する）。

付け足しておく、かの三代目メイジン・カワグチの「アメイジン グ・レッドウオーリア」とレディ・カワグチの「紅武者アメイジング」の原点も、「プラモ狂四郎」なのだ。

兎も角、これ以降の武者頑駄無はSD体型の商品展開にシフトしていく。その間、プラモデルの説明書に掲載される漫画などで、本家ガンダムシリーズとは違った独特の世界観を広げていくことになるが、それをさらに昇華した、武者を主役とするストーリーラインのある作品として「SD戦国伝」が誕生した。

この流れを汲み、「武者七人衆編」などの様々なストーリー展開を経て、武者頑駄無はSDガンダムから独立していくのだ。

そして、21世紀が明けた頃に登場した、一つのシリーズがある。

ある児童雑誌で連載された、「SD戦国伝」以後で最も長寿シリーズとなる、「SD頑駄無 武者〇^{マル}伝」である。

このシリーズは、過去に登場した武者を再登場させつつ、人間の子

供との交流や新設定、過去シリーズから一線を画すコミカルな作風などを盛り込んだ、全く新しいシリーズとなった。

昨今、各メディアを何かと賑やかしているガンプラ心形流鉄機派のイブキ・アラタも、この作品に魅せられた一人である。

何を隠そう彼の愛機こそ、武者○伝シリーズ初代主人公にして歴代で一番フヌけた軽装形態を持つ、関西弁でたこ焼き大好きな「武ちや丸」こと「武者丸」なのだ。

ガンプラマファイア軍団、恐るるに足らず！

.....

「まつさか、コイツを持ち出すことになるなんてな…」

コントロールスフィアを握り込みながら、トモヒサはランダム設定された都市の開けた路上に機体を降着させた。

その機体は、海軍色を思わせる濃紺に包まれた巨躯を直立させ、メラユニットを保護するクリアオレンジのバイザーに注ぐ陽光を反射させる。

紛うことなき、「RGM-96X ジエスタ」だ。

いや、ジエスタなのだが、異なるシルエットを形成している。

バックパックの右側には大型ビームライフル、左側には円盤レドーム。ただでさえ巨大化のピークに達していた最後期アナハイム製のしい巨躯が、一回りも大きく見える。

その名も、「ジエスタ試作0号機」。

去年、暇に任せてリクヤと一緒に笑いながらネタを出し合い、「ジエスタ開発計画」なるシリーズが生まれたのだった。詰まるところ、ネタガンプラである。

本家と同じく、スタートは「ガンダム試作0号機 ブロッサム」をモチーフにし、それらしくパーツを拾って割と丁寧に完成させた。が、4号機まで作るのかとか、ユニコーンガンダムの露払いのために開発されたのに主役出る幕ないじゃんとか、冷静になってみると根本

的なツツコミがどんどん出てきた。

そんな理由から一気に冷めてしまい、0号機のみロールアウトしてジエスタ開発計画は終了してしまったのだった。

（出せるガンプラがアデルとドラド、そしてこいつだったんだが…この中で一番性能がいいのはこいつって、何て言うか）

ようやくジエスタ試作0号機が報われた、と言うべきか。

コントロールスフィアを操作し、ジエスタの挙動をチェックする。長く棚の奥で凍結されていたが、無論ガンプラなので関節が錆び付いているわけではない。気分というものだ。

『なんやそれ？ジエスタ・キャノン…っばいけどちやうな…なんやそれ？』

疑問を反芻した関西弁と共に、接近する機体。

「言葉を返すけどな、なんだよそれ…」

ジエスタのカメラで見上げる先、都市に大きな影を落とす弾薬庫の如きそれを見た。

右手に長大なメガ・ビーム砲、左手に巨大なIフィールド・ジエネレーター。おまけに、頭上には四基のドでかいコンテナを乗っけている。

しかし、それら武装類の中心に陣取っているのは、ステイメンでもフリーダムガンダムでもガンダムバルバトスでもなかった。

真紅のSDガンダムである。

「デンドロビウム…？」

ヘックスユニットの外で観戦しているホウカが呟いた。

『ん、ホウカちゃん惜しい！ちとちやうな！これは…』

「ウエポンシステムだろ？」

『オオイ台詞を取んなや!!』

イブキが声を荒げる。

ホウカの指摘は、当たり半分間違ひ半分、といったところだ。

確かに、デンドロビウムを構成する巨大ユニット「オーキス」によく似ているが、中心にステイメンが収まるパーツがなく、真紅のSDガンダムが小さな五体を露出している。装甲類もかなり削減されて

おり、加えて武装の間は隙間が多く、可動範囲が確保されていた。

知る人ぞ知るG P O 3のバリエーション、簡易版オーキスとも言える「ウエポンシステム」がその正体である。

『これこそ、ワイの武者魂の結晶！「武者○秘將軍 最善門アーチャーモード武装形態」やアツ!!』

「…ハツ!? そうか、最善門!!」

『おお!? アンタ分かるンか!?!』

通信回線越しに、イブキの嬉々とした声。

彼の言う「最善門」とは、オーキスをモチーフにした「武者○伝Ⅲ」に登場する文字通りの”門”である。よく見れば、ウエポンシステムには原作に似た城門を思わせる意匠が施されていた。

そして、中心に座する真紅のSDガンダムは「武者○秘將軍」。イブキ・アラタが「B B戦士 武者丸」を好んで使用しているのは知っていたが、「赤備えの鎧」を装着したパターンで来るとは思いもしなかった。

最善門武装形態…つまり、ガンプラバトルで再現するため、ウエポンシステムの要素を取り入れて追加装備にしたのだろう。敵を迎撃するため、武者○秘將軍が最善門を起動させていたことから、分かる人には分かる納得のコンセプトだった。

そう、偶然にも自分は分かる人種なのだ。

「そりゃあ、昔から好きな漫画だからな」

『くう〜！ガンプラバトルは一期一会やなあ！前言撤回、アンタとは仲良くなれそうや〜！』

「そ、それは良かった…」

よくもまあ、ややこしいコンセプトのガンプラが揃ったものだ。

もつとじっくり観察していたが、今はバトルフィールドの上である。コンソールのチェックを終えて、スフィアを再度握り込んだ。

ジェスタのバイザーが輝き、腰を落として臨戦態勢を取る。

『そっちのガンプラのネタばらしは後で聞かせてもらうで。とりあえず今は…』

武装に包まれる武者○秘將軍が、眼帯のない左の緑眼をギラつかせ

て右手のメガ・ビーム砲のグリップを掴んだ。

デフォルメサイズに落とし込まれたにも関わらず、1/144ガンブラの身長ほどもある砲身が唸りを上げ、砲口に光が充填された。

『お嬢さん達に、ええトコ見せたるでえッ!!』

「そつちかよ!?!」

イブキの大声と自分のツツコミの直後、メガ・ビーム砲から凄まじい質量の粒子塊が吐き出された。

「頼むぜ、ジエスタ試作0号機……!」

球体操縦桿を切り、濃紺の機体を走らせる。T字路を左に滑り、ビルの影に隠れてメガ・ビーム砲による攻撃を躲そうとした。

——ビュオオオオオオ!!!

ついさつきまで立っていた場所に粒子の瀑布が雪崩込み、周囲のビル群を閃光が照らす。

その場のノリで誕生したガンプラだが、制作には一切手を抜いていない。その機動性は原典機を再現するに足りている(この場合どちらのことを言えばいいのか)と、リクヤ共々自負していた。

それに間違いはなく、ジエスタは思い通りのレスポンスを見せてくる。スケール感を狂わせるような大爆発が起こり、吹き飛ぶT字路の余波から逃れることに成功した。

『なんやあー逃げの一手かいなー!』

だが、イブキは休みなく連続攻撃を仕掛けてくる。

「遠慮なしに撃つておいて……!」

まだビームの残滓が残る内、立て続けに次の砲撃が襲ってきた。

ジエスタの脚を止めずに道路上を走らせると、こちらを追いかけるようにメガ・ビーム砲がビルを撃ち抜き、背後で爆発を咲かせる。

バックパックに装備した索敵レドームが相手の位置を明確に捉え、それに従ってジエスタを飛び上がらせた。

「そらー!」

ビルの影から上半身を見せ、右肩から銃口を覗かせている大型ビー

ムライフルの照準を合わせて撃ち込む。

しかし、真紅の將軍はその場から動かず、回避する素振りも見せない。

直撃するかと思つた瞬間、ビームの光軸が直前で弾け飛んでしまった。武者○秘將軍は泰然と構えたまま、微動だにしない。

『そんなヘナチョコ攻撃、ビクともせんぞ！』

「ちいーやっぱIフィールドかよー！」

これは、大体予想していた。巨大なジェネレーターを備えている以上、デンドロビウムと最善門同様のバリア能力があるのは当然である。その辺りにも抜かりはないようだった。

では何故攻撃したのかと言えば、最善門がビームを弾くのを見てみたかつたから、である。

とは言え決して無駄ではない。どれほどの出力があるのか、範囲はどのくらいなのかなど、推量するには必要なことだ。

その結果として分かったことは、デンドロビウムとほぼ同程度の出力を誇っていることだった。

『アズマのおっちゃんから聞いた話じゃあ、ホウカちゃんのガンプラもIフィールド・バリアを使うらしいやん！これはもう運命やで！デステイニーやで！』

「デステイニーはネガティブな意味だがな」

イブキのお喋りに、アズマからの穏やかなツツコミが飛ぶ。

「えっと…あはは…」

「ホーカ、フアンは大事にしないとだよ！」

「煽らんでいい！」

照れ笑いするホウカと、妙な熱気を声に込めたジニア。バトルフィールド越しても突っ込まざるを得ない（アズマに対抗したわけではない、断じて）。

『なんて言ってる内にロックオンできたぞ！』

その声に、ハツとして見上げる。

武者○秘將軍の頭上に鎮座するウェポンコンテナが重厚な門扉を開き、内部から四つの武器スロットが前へ迫り出した。

『持つてけ泥棒ッ!!』

そこから、無数のマイクロミサイルが一齐に発射される。

——ドドドドドドドドドド!!!

その発射音は、最早、爆発音。

直後に、ヒュウウウという飛来音を伴って弾幕が襲いかかってきた。コンソールには確認し切れないほどの警報が表示されている。

「くっそおー」

躊躇うことなく、バーニアを全開にしてジェスタをその場から退避させた。ビルに機体を近づけて盾にし、ギリギリの間隔を維持しながら全力で逃げる。

怒涛のように押し寄せるマイクロミサイルの大群がビルに着弾し、背後で爆発した。コンクリートが弾け飛び、窓硝子が道路上に降り注ぐ。まるでドミノ倒しのように、通り過ぎたビルが時間差を置いて倒壊していった。

「デンドロが無重力専用で本当に良かったな……!」

『何言うとんのか? 最善門は地上やったやんか』

撃った本人が冷静に突っ込むな! と言いかけたが、ツツコミをしてばっかりではボケの思うツボである。口を嚙んでそれを押し殺した。

とは言え、この隙が好機。

大火力を一気に吐き出したことで、必ずあの弾薬庫は動きが止まるはずだ。

(一気に距離を詰めて、バリアの内側に潜り込む!)

未だ砂埃が漂う場所から飛び上がり、大型ビームライフルと素体になったジェスタ・キャノンのビームライフルを連射しながら、ビルの上を蹴って迫撃を仕掛けた。

『そんなヘナチョコ攻撃は効かん言うたやろ!』

やはりフィールド・バリアが展開されて、射撃が悉く打ち消されていく。

それでいい。

絶対防御に掛かりつきりになってもらおう。

『…なる、懐に飛び込んで最善門を破壊する算段やな!』

「だつたらなんだ!」

『甘いわアツ!!』

イブキが叫んだ。

と同時に、最善門の中心に座する武者○秘將軍が両腕を前へ掲げる。

『行け!突来四連打ツ!!』

「なっ!?」

両肩に装備されているバインダー(シナンジュの脹脛部フレキシブル・スラストーを彷彿とさせるのは何の因果か)から、鳥のような四つのユニットが分離してこちらへ向かってきた。

小羽根が生えた本体から、鋭いビームが発射される。

急制動をかけ、コンクリートジャングルの上を蹴りながら後退した。小刻みな回避行動で射撃を躲していく。

「…このっ…うるさいっ…カトンボめっ!」

『ホラホラー!カトンボなら落としてみいや!』

イブキの煽りは無視だ。

チュインチュインと、漫画通りの効果音と共に絶え間なく射撃が襲ってくる。その間も、コンソール上の地図をちらちらと確認した。

(——それか!)

柄にもなく策を講じてみる。

恐らく、都市の公園といったところだろう。コンクリートジャングルの中にぼつかりと空いた、緑の茂る場所へ着地した。

そして、脹脛のハンドグレネードを左手で握る。

思った通り、ビルの上から飛来してきた突来四連打が一斉に仕掛けてきた。それと同時にハンドグレネードを投擲し、ビームライフルで起爆。

ガスのような煙幕が、空中で弾けた。

『ビーム攪乱幕!?!』

「ご明察!と心の中で答え、射撃が掻き消えたのと同時に一気にバー

ニアを噴射する。左腰にマウントされているビームサーベルを取り出し、粒子の刃を発生させた。

煙幕を破り、ロックオン対象を見失っていた突来四連打の一つに向かってビームサーベルを振り被る。

「どおおおおりやあッ!!」

真つ赤な小鳥に粒子刃が叩き付けられ、爆散した破片が公園に降り注ぐ。

あつさりと撃墜に成功し、バーニアを噴射して反転、ビームライフルで直近の突来四連打も撃ち抜いた。

やはりオートロック式なのだろう。無線遠隔兵器に対象を再認識させるには、アンテナ類の加工や兵装自体の工作も必要とされる（Pファンネルのようなマルチロック式、ガンダムジエンドの手動ファングなどもそれなりの手間があつてこそだ）。

心形流と言えど、遠隔武器の理解と技術はこちらの方が上手のようだ。

ついでにもう二基の突来四連打も撃墜しようとしたが、既に後退している。本体の頑駄無に帰投し、右肩のバインダーに接続された。

『やるなアンター！楽しくなってきおったで！』

「へっ、「赤備えの鎧」を使いこなすにはまだまだだな！」

『言つてくれるやないかあ！』

イブキは叫びながら、堂々と浮いていた最善門を前へ押し出した。背面に、巨大なバーニアの噴射の光が爆光の如く輝いている。

「ありがてえ、真つ向ぶつかった方が楽しくなるつてもんだ！」

『ワイかてコツチの方が本分やでえ！』

言いつつ、メガ・ビーム砲から砲撃を迸らせた。

ジェスタを機敏に回避させ、緑の茂った公園に粒子の塊が着弾した。余波だけで、木々のオブジェクトが吹き飛ぶ。もしここがアニメのコロニー内だったら、とんでもない非人道的な被害が出たことだろう。バナージだって怒るわけだ。

などと、無駄な思考が浮かぶ内に、最善門が再びコンテナを展開させてマイクロミサイルの雨を降らせてくる。

やはり逃げるしかない。こんなものを迎撃できるほどジエスタ試作0号機に武装は積んでいないし、サイコ・フィールドを出せるわけでもないのだ。

道路上を駆け抜け、一区画を出たところでまばゆい爆光が輝く。既にコロニーでも落ちたのかと思うほどの被害が、このフィールドで起こっている。

(何食らったって、一撃でお陀仏かよー)

さすがに戦々恐々とするが、行動はもう起こしている。

そうだ、向かってきてくれたことが、最大の好機だった。高出力を誇るジエスタのバーニアをフル稼働させ、レドームでしっかりと位置を捉えて最善門の下に潜り込む。先程は距離が空いていたためにできなかつたが、それが縮まった今、チャンスが訪れていた。

『——ん!?どこ行つたんや!』

やはり、大量のミサイルで発生した爆煙により、こちらを見失っているようだ。

二つのビームライフルを直上へ向け、トリガーを絞る。最善門から落ちる影の中でビームの閃光が輝き、Iフィールド・ジエネレーターとメガ・ビーム砲に風穴を穿っていった。

『下ッ!?くう…分離や!』

イブキが気付いた時には、既に最善門の下から炎上が起こり始めている。狙いは両側の脅威だったため、無傷の武者○秘將軍を残してしまっていた。案の定、イブキは最善門を捨てて退避する。

最大の脅威を排除できたのだ、本体とは後で決着をつければいい!

「うわわわ危ねえ!」

制御を失った最善門が、あちこちを爆発させながら落下してきた。慌ててその場からジエスタを退去させ、高層ビルの影に身を滑り込ませる。

直後、コロニー落としもかくやという轟音と爆発が巻き起こった。

『ようやってくれたなア…』

最善門が落下した場所にジエスタの首を巡らせた。都市の半分が壊滅的な被害を受け、炎が燃え盛り火災旋風が立ち昇っている中を見

る。

そこにいたのは、真紅のSD武者。

——ブワツ!!

火災旋風が弾け飛び、炎が形となって真紅の武者を取り巻いた。まるで翼を広げるかのように見えるのは、不死鳥。フェニックス

「ま、まさか…鳳凰…」

トモヒサが思い出したのは、信念を貫き通した者に現れるという天宮アークの聖獣。

圧倒的な熱量の只中に居ても、武者○秘將軍は燃えず、崩れず、屹立する。

『せやけど…いや、せやからアンタに見せたるわ…ワイの武者魂と、プラモスレリッツ魂をツ!!』

両肩のバインダーから炎を噴き上げ、イブキの武者魂が温度上昇ヒートアップするのを感じ取る。

本来ならば、何故燃えないのか、不死鳥とはどういう原理で形になっているのか、色々と疑問が湧いてくるであろう。

だが、今のトモヒサの思考は、完全に武者の世界へ旅立っていた。

『武者不死鳥覚醒！超王武者○秘將軍ツ!!』

鳳凰の翼が左右に広がり、背中の鞘から抜刀する炎を纏った武者頑駄無。

原作漫画には、こんな形態はなかったはずだ。セオリーから大きく逸れ、しかしどこまでも自由…。

これが、ガン普拉心形流。

「ば、バカな…これほどの炎に包まれて平然としている!?熱くないのか!?!」

『熱い!!だが熱くない!!』

「どっちなんだ!?!」

『例え地獄の業火だろうと…熱くないと思えば熱くない!!』

「んなムチャな!?!」

無駄だと分かっているながらも、攻撃を仕掛ける。ジェスタ試作0号機の武装という武装を、全て使い果たさんとばかりに。

二つのビームライフルの同時射撃、そして投擲するハンドグレネード。

しかし、武者○秘將軍はあえて突っ込んできた。ビームの光軸をSD体型からは想像できない機動性で躲し、ハンドグレネードを刀で斬り伏せて見せる。

そして、今になって分かった。最善門はあくまで前座であり、こちらが本領。それどころか、最善門を破壊したことで全力を引き出してしまったのかもしれない。

(こいつ…:…とんでもねえ!?ノリじゃなく、マジだ!)

そのまま炎の尾を引きながら、武者○秘將軍は左腕で背中のもう一本の柄を掴む。

そして、抜刀。

『デマカセウシンシタイ出任勢運知大!…ハズレや!』

「ぶっ!」

そこまで再現するのか!

引き抜かれた刀は、刀身がなくアイスの手棒のようになっており、でかかかと「ハズレ」と書かれている。

「あ、悔りやがって!刀身もなく戦えるか!!」

こちらのツッコミを合図としたかのように、ハズレの刀がヴヴ…と音を鳴らして燐光を放ち始めた。

『刀があると思えば…』

横振りにハズレ刀を薙ぐ。

バシユ!と、棒から粒子が溢れ出てビームソードを形成した。

『あるッ!!』

「んなムチャなッ!?!」

一気に距離を詰められ(安全地帯はほとんどフィールドの隅だった)、刀とビームソードを構えた武者○秘將軍に間合いへと入られる。

左手に握っているビームサーベルで牽制しようとするが、神懸かり的な速さで振り抜かれた刀により、左腕を根元から斬り飛ばされた。

真紅の武者は炎を引きながら回転し、ハズレのビームソードを抜刀居合のように下段から突き出す。

『頑駄無流秘奥義!!』

あまりの剣技に全く反応できず、トモヒサは断末魔の台詞を考えてしまう。

突き出されたビームソードがゴウ!と炎を噴き出し、ジェスタ試作0号機の胴体を斬り裂いた。

『マルヒムトウザン○秘無刀斬・紅蓮ツ!!』

炎がジェスタを包み込み、傷口から内部に引火する。

大きく火柱を上げながら、濃紺の機体が爆発した。

「シャ：遮ナル亜惨ーーン!!!」

断末魔の叫びを思わず上げ、爆発を背景に武者○秘將軍がアタリとハズレの刀を交叉させる。

『ビスト財団、恐るるに足らず!!』

『BATTLE END!』

眼帯で隠されていない右の緑眼が、燃えるように輝いた。

.....

「トモにい、ノリノリだったよね?」

「特撮番組じゃないんだからあ」

「う……返す言葉もねえ……」

本当に、返す言葉もない。

ホウカとジニアの溢れんばかりの不信感を一身に受け、小さくなる。本当に身長が低くなつた気さえする。

「まあまあ二人共、トモヒサだって頑張ったんだし。その辺にしといてやれよ、なあ?」

親友の有難いフオーローに、ぶんぶんと首を縦に振った。

じと：とした目でこちらを見ていた二人だが、互いに顔を見合わせ

て表情を崩す。

「まー、見ていて面白かったからヨシ！」

ニコツと笑うジニアと小さく頷くホウカ。

しかし、

「甘いでジブンらー！甘ちゃんやー！」

ビシ！とこちらを指差すのは、イブキだ。その後ろでは、腕を組んで険しい表情になっているアズマが立つ（かなり怖い）。

チームメンバーには許されたが、本命の対戦相手だったイブキの指摘には思わず身構えてしまう。

「アンタには足りひんモンがある！それが何か分かるか？」

「…生憎と」

「そーかいそーかい…そんなら教えたるわ…」

両目を伏せて腕を組み、3秒ほど黙る。

そして、くわつと見開いた。

「それは、非モテ男の気持ち…むっぢや!？」

背後からの拳骨に悲鳴を上げるイブキ。「せやから痛いっちゅく…」と零しながら頭を撫でた。

「オッホン！それはな、”遊び方”や！」

「遊び方…だと？」

「アンタのガンプラは、確かに面白うできとる。出来もええし性能も申し分ない。せやけど、忠実になる余り、なんやガンプラ自体の遊び方も固いつちゅーか…もつと型をぶっ壊すべきやと思うで」

遊び方が、固い…？

さすがにその指摘には、疑念を抱く。

「分からねえ。もつと具体的に言ってほしい」

「あゝくん、分からんか？じゃあハッキリ言うで…中途半端なんや！」

イブキはざんばら髪を掻きながら、言葉を選ぶようにゆっくり話し始めた。

「見させてもらったで、ガンダムサレナの映像。セオリー通りのサイサリス改造に、ダブルバレットの採用とかもオモロイ。せやけどな、イ

マイチハミ出し切れん気持ちしが伝わってきよる。それが操縦自体にも表出してしまうとる」

「俺は、そこまでハミ出すつもりは…」

イブキはぶんぶんとかぶりを振り、嘆息する。

「それに気付けん限り、ガン普拉バトルで昇華することはでけへんで」
鋭い視線が、前髪の向こうで光ったように感じた。

と思うと、床に置いていたシヨルダーバッグを開いて筆箱サイズのケースを取り出す。スキップするかのように軽快な足取りで、ホウカへ歩み寄った。

「さてきて、本題の品物や。ホウカちゃんのためにワイが丹精込めて…」

「はいはい、これ以上の接近はご遠慮願うよー」

「ああんいけず〜」

隣で賑やかになる三人だが、そんな声も耳に入ってこない。

ガン普拉バトルで昇華できない…どういうことなのか。

静かに、拳を握り締めながらイブキの言葉を胸に刻み込んだ。

「大漁です…ふふふ…書き切れないほどのネタが…ふふふ…」

アノウ・ココネの赤い癖毛が、触覚のように揺れた。

A c t . 11 『スターブロッサム』の長い一日Ⅲ』 E N D

Act. 12 『画竜点睛Ⅰ』

ある男が言った。

「プラフスキー粒子は風だ、と。」

戦場を満たし、命なきモノに命を与え、創造主を空想の世界へと誘う。

ガン普拉バトルはゲームだ。それは揺るぎようもない。

しかし、男の考えるガン普拉バトルは違った。

男は、ある理由から瞑想修行をインドで積んだことがある。そこで精神を啓いた男は類希な身体能力を活かし、映画の世界へ足を踏み入れて成功した。現在でも、己を磨き上げるために数日間に亘って山籠りを行い、清祓きよはらいをするのだと言う。

現代においては些か以上に浮世離れしているが、現に男の映像界での成功はここに起因しているのではないか、とも囁かれていた。

そんな男に、ひよんなことからガン普拉に触れる機会が訪れた。

これほどガン普拉バトルが隆盛を極めている世の中なのだ。テレビ番組で触れる機会があっても、不思議はない。

そこで男は、プラフスキー粒子を知る。

そして、フィールドを満たす粒子の流れを、“感じ取れる”と言ったのだ。

そんな突拍子もない話など、通常であれば誰も信じない。だが、その言葉に説得力を与える事実が存在する。

アイラ・ユルキアイネン。

彼女は、“プラフスキー粒子の動きを感知し、ガン普拉の行動を予測できる”という、特異な能力を持っていたと言われる。

現在、第七回世界大会以後の彼女の所在は不明である上、強化訓練をさせていた「フラナ機関」という団体が記録を抹消してしまったため、真偽を確かめる術はない。だが、数々の映像検証や対戦したファイター達の証言から鑑みても、人智を超えた能力を持っていたとしか説明できないのである。

そういつた前例があるため、男の言葉は一概に妄言と一蹴できなかった。

その上、三年前の全国大会にてチーム「トライファイターズ」のメンバーの一人、カミキ・セカイ選手が「アシムレイト（＝自己暗示）」と呼ばれる境地に達し（彼の格闘技「次元霸王流」なる拳法が関係しているのかは不明）、理屈では説明できない事象すら起こしていた。

男は言った。

プラフスキー粒子は風だ。

巡る風が万物に生命を吹き込み、世界を育んでいるように。

巡る粒子によって動くガンプラにも、等しく生命が吹き込まれている。

煙焰天に漲る男——”焰梵天”と渾名されるチャウ・フェイロン

は、己の手で造り上げた分身たるガンプラ「ビルドブラフマー」の剛拳に乗せ、若き世代へ寡黙に、沸き立つ激情を伝える。

プラフスキー粒子が逆巻く、無窮の世界の向こう側へ。

.....

「ええつと……これが、ビームライフル？で、こつちがバルカン……」

「落ち着いて、ミソラさん」

「う、うん……ダイジョブ……」

ホログラムコンソールの内側で、サポートに回る。

今、コントロールスフィアを握っているのは、カネダ・ミソラである。

『基礎的な操縦方法は以上だ。さあ、準備はいいな？これより仮想敵を投入する』

「は、はいー」

対面にいるアズマの通信に対し、ミソラの緊張気味な返事。演習場に設定されたバトルフィールドで、少し腰の引けたポーズになる薄桃と赤が映えるモビルスーツ。

MBF-02 ストライクルージュ。

学園から近い模型店で、ミソラが購入したガンプラだった。初めての操縦ということで、エールストライカーを装備せずに出撃している。

こちらが待ち構えていると、コンクリートの地面がスライドする。そこから一機二機と、ザクのような色をしたモビルスーツが飛び出した。

バトルシステムにデータとして記憶されている、プラフスキー粒子で再現されたハイモックである。

「な、何か出てきた!」

『落ち着け、NPCのハイモックだ。こちらでプログラムを操作している。攻撃をせず、周囲を不規則に飛び回るだけだ』

二機のハイモックは、ザクマシンガンに似た形状の武器を手にしていた。それぞれに変則的な軌道を描き、演習場の空を低空飛行する。

『では、演習を行うぞ。まず、ビームライフルの射撃からだ。構えろ』

「はい!えっと、ビームライフルは…」

不慣れな手付きでスフィアを操作するミソラ。

それに従い、ストライクルージュがビームライフルを前へ掲げた。

「ビームライフルは両手持ちにすると安定するよ」

「りょーかい!」

フォアグリップを左手で掴み、肩を入れてしっかりと固定する。

自分も得意というわけではないのだが、経験からアドバイスを与えてみた。

『よし、しっかりと狙ってから撃て』

アズマの声を受けて、モニターに表示されているスコープ越しに一機のハイモックを捉えた。

「当たれっ!」

マズルフラッシュが閃く。

発射されたビームは、しかしハイモックが軌道を変えたことで脇へと逸れてしまった。

「ああ、外しちゃった!」

『最初はそんなものだ。弾数制限は解除してあるからな、好きなだけ撃つといい』

ミソラは頷くと、再びハイモックに狙いを定める。見ると、ストライクルージュの姿勢が先程よりも安定していた。両脚が肩幅に開き、引けていた腰が、今はしっかりと体幹を支えている。

一射、二射とストライクルージュがビームライフルを撃った。するとハイモックの右脚に直撃し、空中で大きく機体が傾ぐ。

「ミソラさん、今！」

「うん！」

チャンスを伝えると、ミソラはすかさず追討ちを仕掛けた。

放たれたビームが扁平な胸を撃ち抜き、ハイモックが空中で爆散する。

コンソールに撃墜の表示が光り、カウン트가0から1に変わった。

「やった！やったよハウカさん！」

「ミソラさんすごい！」

小さくハイタッチを交わす。彼女のショートカットも嬉しげに揺れた。

たったの三射で、見事にハイモックを撃墜してみせるミソラ。この頃の自分だったら、もう暫く手間取っていたのではないだろうか。

『ふむ、見事だ。傍らのサポートがあつたにせよ、バランスを崩したところを的確に撃ち抜いたな。上手くやれたようだ』

「あ、ありがとうございます！」

『ここまで、な』

通信越しに、アズマが挑戦的な笑みを浮かべているのを思い描いた。

『では、次のステップだ。アグレッサーによる攻撃を回避し、これを撃破せよ』

「ええ!? もう次!?!」

ストライクルージュが驚いたように跳ね上がる。

『どうした? もう怖気づいたのか?』

「い、いえ! 望むところです!」

『ハッハ、その意気だ』

挑戦者を焚き付けながら、強く答える姿に優しく笑う。”殲滅のアズマ”らしい指導だ。

そうしていると、ハイモックの挙動が変わるのを見る。先程までの不規則な飛行から一変し、確かに敵を認知しているようにストライクルージュへ向かってきた。

「やってやろうじゃん！」

ミソラは奮起一声、手首をぶらぶらさせてからコントロールスフィアを握り直した。

ハイモックは接近しながら、マシンガンの銃身に大きな左手を添えて発砲する。演習場のコンクリート面に弾痕を刻みながら、射線がストライクルージュに迫った。

ストライクルージュはバックステップを繰り返しながらマシンガンの射撃を躲しつつ、両手持ちになっているビームライフルの照準を、空中のハイモックに合わせる。

応射をするが、先程とは打って変わった反応性でハイモックが回避していった。

「さっきと全然違う…!?!」

「ミソラさん、後ろ！」

「えっ…」

注意した時には、もう遅かった。

ストライクルージュがバックステップした先には大きなコンテナがあり、強かに背中を打ち付けてしまったのだ。

モニターの画面が衝撃に大きく揺れる。

「きゃあっ!?!」

『オブジェクトにも気を配ることだ。さもないと、今のようなになる』

前傾に倒れ込むストライクルージュの隙に、ハイモックがすかさず追撃を仕掛ける。マシンガンの弾幕が降り注ぎ、薄桃の装甲に無数の弾痕が穿たれていった。

機体が無理矢理に起こされ、コンテナの壁面に縫い付けられていく。

半秒の間を置いて、ストライクルージュは爆発してしまった。

『BATTLE END!』

バトルが終了し、プラフスキー粒子が分解する。ユニットの上に残されたのは、ダメージレベルC設定のため無傷で生還したストライクルージュ。

「さつくりやられちゃった…」

「でも、初めてなのに上手だったと思うよ」

「ありがとう」

ストライクルージュを回収し、ばつの悪い笑みを浮かべるミソラ。くたびれたジャケットと首にゴーグルを提げているアズマが、こちらへ歩み寄ってきた。

「確かに、悪くない。本当にどうしようもない場合だと、動かないすらまともに命中させられないこともある」

「そんな人もいるんだ…。あぁっと、今日はありがとうございました。ホウカさんまで付き合ってもらっちゃって」

「ううん、大丈夫だよ」

ミソラが、アズマと自分にまで頭を下げる。

「この程度ならば、いつでも歓迎する。ガンプラバトルの魅力を伝えることができるなら安いものだ。さあ、今日のところはもう休め。二人共、演武大会の後で疲れているだろう?」

「大丈夫ですよ。激しい運動はしてないですし、ね?」

「うん。私も平気です」

週末の土曜日である今日は、県内にて演武大会が開催されていた。去年自分が参加した、全日本古武道演武大会よりは規模が小さいが、見覚えのある関係者も参加している正式な大会だった。

内容は評価制ではなく、どちらかと言うと成果を披露するための舞台。表彰式もあったが、代表者に手渡しされただけで参加した中高生のほとんどが授与されている。

会場の前で撮った集合写真では、表彰状を広げて全員で写っていた（イワクニ・ブライアン顧問とカンベ・アリサ顧問が代わる代わる撮影した）。

その後、学園へとマイクロバスで戻ったのだが、その車内でミソラから「ガンプラバトルを教えて欲しい」などと頼まれたのだ。唐突なことだったが、丁度戻った時にアズマに出会したため、こうして短時間ながらの練習をしたのだった。

その動機については、組立て方をアドバイスした一昨日から薄々勘付いている。

「しかし、もう17時を回っている。兎も角としても、寮に戻った方がいいだろう」

「それもそうですね。じゃあ行こっか、ホウカさん」

「ああ悪いが、キンジョウは少し残れ」

「…？はい」

踵を返そうとした時、アズマに呼び止められた。ミソラが何事かと見るが、「こちらの部の話だ」とアズマが断りを入れたところで察する。

じゃあお先に、とミソラは言い置き、ログキャabinを後にした。

アズマがこちらに向き直り、話を始める。

「大した話ではない。明日、時間はあるか？」

「えーと…予定はなかったと思います」

「うむ、であれば都合がいい。明日の午後、お前とカネダ・リクヤで完成させた、新しいランキュラスのトライアルテストを行う」

「…分かりました」

「そう構えるな。隠さなくてもいい、一日気を張っていたのだろうか？」

…見透かされている。

「余計な視線もあつたことは、想像に難くない。英志古武道部の今年最初の大会だからな、取材陣も多かったのではないか？」

「はい…仰る通りです…」

アズマの彫りの深い目には、読心力でもあるのだろうか。

ミソラの前では平気と言ったが、本当のところ今日は疲れた。自分の番が回る度に取材陣のカメラが向き、チャンスがあれば囲まれるかというほどだった。

とは言え、密着取材として同行していたアノウ・ココネとカンベ・

アリサ顧問が目を光らせていたために（見事な連携プレーだった）、何とか取材陣を避けることには成功していたのだが。

「それに、お前はガン普拉部を掛け持った上に選手権にも出場するのだからな。これからも、それなりに覚悟をしなければならんだろう」「それは…うう、はい…」

メデイアの厳しさを突き付けられ、鬱屈とした気分が胸に広がった。

アズマはそんな自分を見てか、ふっと笑みを零して柔和な好々爺の表情を浮かべる。キオ編が始まった直後のような、”あのフリット爺ちゃん”と完全に一致して見えた。

「では、少し話題を変えよう。カネダ・ミソラと言ったか…彼女、恐らくはカトーのことを」

「あ、やっぱりアズマさんも気付きました？」

「まあ、な。これでも教師をやっていたのだから、それくらいの察しはな…」

アズマは、蓄えた顎鬚を触りながら苦笑する。

やはり、どうやらミソラがガン普拉を作ったのも、ガン普拉バトルがやりたいと言い出したのも、全てはトモヒサが原因のようだ。

つい忘れがちだが、トモヒサはイケメンである。五日前に学園を訪れたイブキ・アラタとも、それを口実にバトルが始まったのを思い出す。

そういえば、トモヒサとミソラは小さい頃からの顔見知りでもあると言っていた。兄のリクヤを介して、一体いつから恋する乙女の視線を送っていたのかを想像すると、とても微笑ましい。

自分にとって、トモヒサはいつまでもトモにいだ。彼に対しても同級生の男子に対しても、そんな感情は抱いたこともないため、少し恋するミソラが羨ましくも思えた。

「ラルではないが…」

と、アズマが誰かの名前を呟く。

「これが、若さか」

.....

翠風寮にある女子棟、そのダイニングルームでは多くの女子生徒が集まっていた。

一同の視線が集中しているのは、壁に掛けられている薄型テレビ。その画面には、毎週土曜日に放送されている特選映画が映っていた。いつもなら、視聴している女子生徒はまばらである。しかし、今日放送されている映画は彼女達の興味を大変引くものだった。

タイトルは、「ドラゴン・炎の闘技場」。

これでもかと言うほどの暑苦しさを醸し出すタイトルだが、出演する俳優が軒並み美形揃いなのだ。それも、昭和のアクション映画を感じさせるような汗だくの半裸で。

主人公の武闘家を演じるのは、「チャウ・フエイロン」と言うアクション映画のスターである。中国出身の俳優で、今ではハリウッドにまで進出している超人気俳優だ（一昨年公開された映画では、あの日本人女優「ミホシ」と共演したことで大変な話題になっていた）。

自分もチャウ・フエイロンのアクションが好きであり、それなりに映画も視聴済みだったりする。

「いけー！そこだー！」

右隣の席で腕を突き上げているのは、ジニアだ。特撮ヒーロー番組を見ているかのようなノリである。

「ふう…いい汗かいたぜ」

精一杯の低い声で、額の汗（実際は浮き出ていない）を拭う。

さらにその隣には、ココネが今日の密着取材のメモを纏めており、自分の左にはミソラが座っていた。

ジニアがこちらを向く。

「ねえねえ、ホーカ知ってる？あのチャウ・フエイロンって、ガンプラバトルもやってるんだって」

「詳しくは知らないけど、聞いたことあるよ」

「意外だよー。あ、でも最近だとそうでもないのかな？」

「結構多いよね、俳優とかモデルとか」

言われてみれば、関連がなさそうなジャンルの人物でも、実はガンブラが好きとはここ数年でよく聞く話だ。

隣のミソラも、話題に入ってくる。

「あ、私も知ってる。モデルのカミキ・ミライさんも、あのカミキ・セカイ選手のお姉さんだっけ言うでしょ？」

「ほんと意外すぎるよねー」

ジニアが感慨深げに頷いた。

そんな会話をしていると、長机を挟んで話しかける人物が。

「…キンジョウ・ホウカさん。ここ、いいですか」

ラベンダーのツイントールが美しい、ややコスプレじみた黒のワンピースと白タイトの女生徒。

大学のナラサキ・フウランだった。

「…はい、大丈夫ですよ」

「失礼します」

丁寧にお辞儀をし、向かいに着席する。

途端に緊張が奔った。何も後ろめたいことなどないのだが、彼女の前になると何故だか内心で構えてしまう。それはやはり、以前のテライ・シンイチとの面会での一件が原因になっているのか。

何を言いつ出すのかと待ち構えていると、

「お二人とも、今日は演武大会、お疲れ様でした」

「…え？」

吊り目の視線が真っ直ぐにこちらを見てから、静かに一礼した。

テライ・シンイチに関連する何かを言われるのかと、少し身構えていただけに呆気に取られてしまう。

「…？何か」

こちらの反応を不審に感じたようで、フウランが小首を傾げた。

「ああ、いえ。ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

ミソラと一緒に、返礼する。

「生徒自治会としても、あなた方のご活躍は注目していますので。今後、古武道部を盛り上げてくださることを期待しています」

「は、はい！頑張ります！」

ミソラが姿勢を正しながら、力強く返した。

フウランは小さく頷くと、自分に視線を合わせてくる。

「キンジョウ・ホウカさんも、ガンプラ部との掛け持ちは大変かと思えます。ご協力できることがありましたら、何でも言ってくください」

「お気遣い、ありがとうございます」

「…それと、テライさんから伝言です」

フウランの声音が、少し、ほんの少しだけトーンが下がった…ような気がする。

「明日のトライアルテストの件ですが、テライさんも同席するとのことですよ」

情報の伝達が早い。アズマがシンイチへと伝えたのだろう。さらに回りくどくフウランを介して伝えてくるとは、彼らしいと言わなければならないのか（21時を回ったことで女子寮は男子禁制となった上、シンイチの連絡先を知らないため当然と言えば当然だ）。

「テライさんが…ですか？」

「はい。伝言は以上です」

目を伏せて、フウランはそそくさと締め括った。

やはり、気のせいではない…。

「では、私はこれで」

席から立ち上がり、最後に一礼してからフウランはダイニングルームを去っていった。

しばらく黙っていると、ジニアとココネが口を開く。

「ニュータイプ空間の激しいバトルだったね…！」

「ふむふむ…テライ・シンイチを巡って争う女二人ですか…」

「お、お願いだからそんなこと記事にしないで…」

暴挙に出ないよう、赤毛の小柄な先輩に願い続けた。

.....

ガンプラの稼働耐久テストの形式の一つに、通称“百鬼夜行”と呼

ばれるものがある。

内容は単純明快だ。百体のガンプラを相手に連戦を行う”1対100”という、極めて過酷な戦いである。これは、ヤジマ・エンジンリングで採用されている検証実験用のプラグラムであり、実際にガンプラをファイターが操縦することで”生きた”データを収集するためでもあった。

ヤジマの主任技術者であるヤジマ・ニルスが、データ収集と題していい汗をかいているという話は、余談だ。

数年前、検証に協力してほしいとニルス本人から声がかかり、ニールセン・ラボを訪れたことがあった。その際に強烈なインパクトを受けた”百鬼夜行”に興味を惹かれ、許諾を得てプラグラムを持ち帰っている。

今、その過酷な戦いの真っ只中にいるのは、キンジョウ・ホウカだ。20体目に投入された「グレイズリッター一般機」を、白青の機体が新装備である二対の刃で斬り伏せた。

「これで20体だ。まだまだいくぞ」

『はいー!』

ホウカが、こちらの呼びかけに威勢よく返す。収集されたデータが、続々とこちらのコンソール画面に送信されてくる。

白青の機体——新たに生まれ変わったガンダムラナンキュラスが、戦場に立っていた。

『ホウカさん、駆動系に問題は見られない。存分にやっていい』

『そら、次が来るぞー!』

セコンドには、テライ・シンイチとカナダ・リクヤが付いている。プラグスキー粒子がプラグラムを再現し、21体目のガンプラを作り上げた。

倉庫が建ち並ぶ殺風景なフィールド、アニメで言えば「トリントン基地」のコンクリート面から、濃淡グリーン色の機体が迫り上がる。

『あれは、バクト…!?!』

『フリット激似のアズマさんがヴェイガン機を出すかよー!』

「ワシが選んだわけではないぞ」

とはいえ、リクヤの言う通り確かに皮肉だ。

バクトの細長いアイセンサーが光り、あの宇宙恐竜の鳴き声に似た電子音を響かせる。重装甲に似合わず、ガンダムランキンキュラスに向かって一気に走り出した。

右手のビームバルカン発射口から、黄色のビームが連射される。

ランキンキュラスはそれに対し、新武装の柄を握ったまま手首の青い手甲をシールドのように突き出した。

直後にビームバルカンが着弾するが、手甲の前で掻き消える。

「ほう…い」

『フラワリング・フィールド、万全のようだ』

シンイチが、満足げに言う。

ホウカ自身の発案で、ジェネレーター構成を組み換えたいらしい。本来は花卉型ウイングユニットのみで賄っていたものを、ファンネルラック自体をジェネレーター化して補い、さらに両腕をガンダムAGE-E-FXに戻して（両肩はステイメンのシルエットを大事にし、AGE-1ノーマルのものだ）手甲そのものからフィールドを発するようになったのだ。名称も「フラワリング・フィールド」となり、まさに独自の機能へと昇華している。

今見た感覚としては、Iフィールド・ハンドに近いだろうか。

両掌からサーベルを発振させて接近したバクトに向かって、ランキンキュラスが応戦する。

『やッー』

右の刃が振り抜かれ、黄色いサーベルを弾く。傾くバクトはすぐに重心を前に倒し、袴のように太い脚を踏みこんで左のサーベルを突き出した。NPCと言えど、そのプログラムは積み重ねられたデータの蓄積によって再現されているため、侮れない。

だが、慌てず、騒がず。自分から出ずに待ち受ける。

ランキンキュラスは突き出されたサーベルをひらりと躲し、刃が収納された左の武装を、バクトのビームスパイク発生口のある胸へ向ける。

ほぼゼロ距離で、トンファーのように逆手に握られている武装の銃

口から強力なビームが迸った。

——ドツ：ギユウウウウン……！

バクトの背中を貫通し、旋回するビームがトリントン基地の倉庫の二、三をも撃ち抜いた。

爆発せず、その場に倒れ伏すバクト。

『21体目、撃破確認だ』

『ドツズトンファー、キンジョウにぴったりだな。さすが心形流製』

『今度、何かお礼をしないとですね』

ラナンキュラスが両手に持つ新武装——「ドツズトンファー」と名付けられたそれを、ホウカは逆手のままぐるりと回して握り込ませる。

「あんな男だが、腕は確かだと言っただろう？」

『この場にトモヒサがないのが残念でならないなあ』

いたらいたでさぞや悔しがらるだろうな……と、内心で呟いておくに留めた。

しかし、生まれ変わったガンダムラナンキュラス、その出来には驚かされる。

自分が補修パーツを渡してから、たったの五日だ。この短期間で、キンジョウ・ホウカはジェネレーター構成を立案し、基本的な形を組み上げたという。最終的な仕上げこそカネダ・リクヤのサポートがあつたが、その成長ぶりには感心を抱かざるを得ない。

演武大会に向けて強化していた頃だったのだが、学業も加えた三足の草鞋を物ともしない根気は褒めてやるべきだろう。

だが、ここで甘さを見せてはいけない。首にかけているゴーグルを目にかけ、気を引き締め直す。

「さあ、残りも打倒してみせろ」

指導者^{コーチ}とは、厳しくあるべきなのだ。

.....

空中に蹴り上げたガフランを、Pファンネルの包囲攻撃で細切れにする。

爆発を背に、ラナンキュラスがコンクリート面を踏み込んでドツズトンフアーを握る両腕で脇を締めた。

「ふう…残り、一体…！」

連戦を続けて、気付けば99体を撃破していた。

50体目を終えた時に一時休憩を挟んだが、こんなに過酷なバトルは過去に経験したことがない。この”百鬼夜行”を考えた人は、きっととんでもない人物に違いなかった。

改めて見たラナンキュラスの改修姿は、イメージ通りに纏まってくれている。テールバインダーを撤廃し、腰周りのクリアランスを確保したことで近接戦闘の挙動が軽くなっていた。

名称が改められた「フラワリング・フィールド」も、ピンポイントの防御にシフトさせたことで出力調整の必要もなくなっている。

99体を戦い抜いた愛機に、劳いの言葉を送りたくなった。

『ホウカさん、大事はないか？』

コンソールの横画面に、ゼハート・ガレットと見間違うかという程に似た、シンイチの銀髪に包まれた端正な顔が映る。

「何とか、大丈夫です」

『そうか。さあ、次で最後だ。気を緩めずに行こう』

「はい」

優しいな笑みと共に、シンイチがエールを送ってきた。

一瞬だが、ドキツとする。

(…ダメダメ…今は集中しないと…)

表示が消えるのを待ってから、頭を振った。

こんな時に何をしているのだろうか。昨夜フウランに会ったことが、響いていると言うのか。今になって意識し始めるとは…。

気を取り直すため、丹田に力を込めてゆっくりと呼吸をする。

「…よし」

コントロールスフィアを強く握り、ラナンキュラスの視界に自分を

合わせた。

そのツインアイに映る殺風景な基地の地面から、次のガンプラが現れる。

『よくぞ根を上げず、ここまで戦い抜いた』

アズマの、静かな声が聞こえる。

『これで100体目だ。最後の相手となる』

地面から上がってきたのは、紫の太く逞しいボディに黄色と赤が映える、モノアイのモビルスーツ。右手に握られているのは、細長い黄色い武器。

セコンドのリクヤが疑問を投げかける。

『ZZのドライセン…だな。しかしなんだ、このパラメータ』

『明らかに人為的な工作がされている、な』

シンイチからも、動揺が伝わってきた。

ドライセンは両脚を肩幅に開き、黄色い武器——ビーム・トマホークから斧状に形成されたビーム刃を発生させる。

そして、思いもよらぬ人物からの通信が入ってきた。

『久しぶりだな若造!!このアサクラ・ミツオミが、最後の関門となって貴様を叩き潰してくれるわアツ!!』

『げえっ!?!』

『あ、貴方は…!』

「まさか…!」

三人の声が、一致する。

『「アサクラ教頭先生!?!」』

Act. 13 『画竜点睛Ⅱ』へ続く

「教頭先生、どうして…!?!」

『言っただろう、最後の関門となつて貴様を叩き潰すとなア!!』

こちらの通信に対し、アサクラ教頭は激昂したように返してきた。ドライセンが、人差し指を突き出したマニピュレーターでこちらを指し示す。その大きな袖口から、三連装ビーム・ガンの銃口がちらついていた。

コンソールの横画面から、テライ・シンイチが口を開く。

『アズマさん、どういふことなのかご説明いただけますか?』

『見た通りだが?』

それに対して、はぐらかすアズマ。

一、三秒ほどの沈黙を置き、シンイチは顎に手を添える。

『…うむ、なるほど。分かりました』

『ちよちよ、何が分かったんだ?』

そのウィンドウの隣に、焦った様子のカネダ・リクヤの中性的な顔が映った。

『これは、試練だ。予期せぬ事態にも打ち勝ってみせよ、ということだ』

『百鬼夜行』を打ち勝ってきたキンジョウに、まだ試練を課すつてのか…鬼だな』

『ええいごちやごちやと!やるのかやらないのか、どっちだ!』

痺れを切らしたアサクラが、ドライセンのビーム・トマホークをバトンのように回して構えさせた。

一か月前の、デブリ帯でドム・トローペンと対峙した瞬間を思い出す。

以前のバトルは、戦う相手に対する姿勢の在り方を自分に考えさせる機会になっていた。己の情熱を注いだガンプラこそ最強、それを最大限に引き出せるのは自分と、ガンプラファイターというのは手に負えないほどの気概なのが普通だとアズマに言われている。

しかし、だからこそ。立ち向かう側としての姿勢を、自分は大事にしたいのだ。

それを認識させてくれたアサクラの挑戦ならば、今一度、全力で戦ってみたい。

「これが試練と言うのなら…私、やります」

『キンジョウ、大丈夫か？さすがにあの連戦の後でアサクラとやるのは…』

「大丈夫です。私と、ラナンキュラスなら」

リクヤの気を使ってくれている言葉に対し、我を押し通した。

99連戦を勝ち抜いたが、不思議と思えば清澄に落ち着いている。コントロールスフィアを通し、愛機と一体に…というのは過言かもしれないが、今の自分達ならどこまでもやれそうな、確かな自信を覚えた。

ラナンキュラスが握るドツズトンファー、その刃を伸ばす。

「教頭先生、お手合せお願いします」

『フン、言われるまでも——ないわアツ!!』

刹那の間、戦端が開かれる。真っ先にドライセンが動いた。

背面からブースターらしきユニットが左右に伸び、ビーム・トマホークを構えて勇躍、突っ込んできた。

『あれ、ランダム・バインダーか!?!』

『ドライセンにリック・ディアスをミックスか…フフ、中々どうして、教頭先生も好き者らしい』

賑やかなセコンドは無視し、ラナンキュラスに半身を取らせてカウンターを狙う。

流派”花鳥風月”における柔術の心得、それはこちらから安易に飛び出さずに待ち構えること。そして剣術や棒術で培った基本形を、イブキ・アラタから渡されたドツズトンファーにより最大限に引き出す。

アズマが導き出した、自分とラナンキュラスのバトルスタイルだ。

『真っ二つにしてくれる!!』

ユニット——ランダム・バインダーを噴射させるドライセンが、

ビーム・トマホークを横薙ぎにして攻撃してきた。

——バチイン!!!

構えた右のトンファーを真反対から斬り払い、実体剣とビーム斧が交錯する。擦過の火花のように、黄色の粒子が弾け飛んだ。

(……こー！)

狙いのカウンターを、すかさずに打ち込む！

硬直による一瞬の間隙に、突っ込んできたドライセンへ左のトンファーを突き出し、一息に勝負を決めにかかった。

だが対するドライセンは、たたらを踏みそうになるところで力任せにコンクリートを踏みつけて留まる。その左腕の装甲がスライドし、露出した三連装ビーム・ガンの銃口がこちらを捉えた。

「これでっー！」

『喰らえッー！』

同時に叫び、同時に銃撃が迸る。

ドズトンファーの射撃はランダム・バインダーの噴射によって躲され、三連装ビーム・ガンは、咄嗟に掲げた左手甲のフラワリング・フィールドによって霧散した。

『互角か……！』

リクヤが感嘆の声を上げる。

ドライセンは直様に離脱し、彼我の距離を空けていった。

『私はこの日のために……！』

そしてトリントン基地の倉庫の上に着地し、肩部と胸部ダクト上の装甲を開かせる。

そこから露出するのは、無数のマイクロミサイルの弾頭。

『最高のガンプラと、過去を凌駕するファイター技量を磨いてきたのだ!!』

弾薬庫をぶち撒けたのかという量のマイクロミサイルが発射され、濃霧のような硝煙の尾を引いて雨霰と飛来してきた。

『おかげで5キロも痩せたわアツ!!』

「ダイエツト!?!」

思わずトモヒサのようにツツコミをしてしまう。

兎も角、ミサイル群を対処しなければ。こういう状況にこそ、ジェネレーターは真価を発揮する。

ラナンキュラスの両腕を、胸の前で交叉させた。発生したフィールドの力場を共振、増幅させる。

「フラワリング・フィールド、出力最大…」

Iフィールド・バリアの時は、原典設定に忠実だったため物理衝撃に対して防御能力を持たなかった。しかし、この新解釈の機能は違う。

先の”百鬼夜行”により感覚が練磨され、より確かにタイミングを掴んだ。

「やアツ!!」

気合を放つと同時にラナンキュラスの両腕を払い、増大したフラワリング・フィールドを押し出す。

半秒後には着弾するかと思ったミサイル群が、見えざる力場に圧されて揉みくちやに空中でぶつかり合った。

連鎖的に爆発し、殺風景な景色を彩るかのように眩い爆光が炸裂する。

『そうこなくては戦^やる意味がない!』

妙に嬉しそうな、アサクラの声。

改めて、ガンプラを通して彼の心情を考える。

一月ほど前のバトルでは、尋常ならざるほどの気迫を感じていた。本当に、怒り心頭といった様子だ。

しかし、今はどうか。どこか清々しさを感じ、ガンプラの出来栄えにしても、あのドム・トローパーより頭二つほど抜きん出ている印象を受ける。その変貌には僅かばかり当惑するが、ひとまず慮外に追いやった。

いずれにしても、交戦の最中は全力で応えるしかない。

手加減は一切なし。心と心、技と技を真つ向から打ち返す。

それが、”花鳥風月”の矜持なのだから。

その先に、きつと真実を発見できるだろう。

「いくよ、ガンダム」

愛機の鼓動を、スフィアを通じて感じた。

.....

テライ・シンイチは、ミサイル群を払い除けた白青の機体を見て舌を巻く。

バトルフィールドでのキンジョウ・ホウカ、それを実際に見て、驚かされることばかりである。

以前会った印象は、大人しそうな女子生徒、という程度だった。

ところが、だ。”百鬼夜行”などという過酷な戦闘においても、彼女は根を上げず、それどころかバトルができることを幸せに感じているようにも見えた。その上にアサクラ教頭という乱入者である。然しもの文句の一つでも言うかと思っただが、それもなかった。

その愚かしいまでの実直さは、あの女海賊カンザキ・ツツジを想起させる。

本人がアサクラ教頭との戦闘を拒否すれば、乱入してでも止めたところだ。しかし彼女は、大人しそうな印象を払拭するほどの自我を通してきた。

何が彼女をそうさせているのか。その柱となっているものは何か。単純な興味だが、その領域に踏み入ってはならない。完全にプライベートな部分だからだ。

いずれ本人の口から聞ける日も来よう。

「…む」

フィールドを見てみると、アラート音が鳴り響いた。

『おい、この反応は…』

リクヤも、それに気付く。

ドライセンが立っている倉庫——と思っていた格納庫が震え、中から濃緑のモビルスーツ：果たして本当にモビルスーツと呼んでいいのか疑わしい機体が太い尾を薙いで壁を破壊し、ドラゴンのような鎌首をもたげて姿を現した。

ヴェイガンの第三世代量産型、人型から大きく逸脱した巨体を持つダナジンである。

その数、三体。

『ダナジン…三体も!?』

ホウカの狼狽した声。

ご丁寧アニメの初登場シーンを再現したかのようなダナジン達が、身体を揺らせて付着した砂埃や装甲に引っかけた鉄骨を振り落とす。

ドライセンは崩れる格納庫から降り、近寄ってくる三体のダナジンの頭を撫でた。

『おおーよしよし』

ダナジン達は太い尻尾をふりふりし、喜びを巨体で表す。

まるでペットのようだ。

『…って色々突っ込みたいけど、これはさすがにやりすぎだろ!』

『予期せぬ事態とは、一度だけとは限らんからな』

『暴論…』

アズマの他人事のような返事に、リクヤも言葉が詰まる。

やたらと動物感溢れる動きで撫でられていた三頭（この数え方が似合う）のダナジンが、側頭部から伸びる耳のようなパーツを動かすと、それまでの動作をぴたりと止めてガンダムランキユラスを見た。

まるで、野生動物が外敵の気配に勘付いたときのような。

「——ホウカさん！来るぞー」

こちらが声をかけた時には、既に三頭が駆け出していた。

ズシズシとトリントン基地全体を揺るがし、怒涛の勢いで驀進する。遅しい尻尾でバランスを取り、膂力のある二足で平らなコンクリート面を物ともしない。自然環境での踏破能力を追求した結果に辿り着いたとされるフォルムにより、前傾姿勢ながらも危うさが全くなかった。

ダナジンはその見た目通りの暴虐さを見せるかと思われたが、意外にも出鱈目に襲いかからず、一直線に驀進する一頭を残して左右の二頭が散開した。

動物番組で紹介されていた、メスライオンの狩りを思い出させる。

『ハハハハ！これをどう戦うか見物だな！』

瓦礫となった格納庫にふんぞり返るように腰掛けるドライセンが、愉快げに紫色の太い体軀を揺らしている。

「なんと悪趣味な…」

『腹立ってきた…』

しかし、こちらの憂いなど意に介さないように、ランキュラスは応戦の構えを取っている。

真つ直ぐに突進してくるダナジンが、顎先からビームシューターを発生させて飛びかかった。

ひらりと、ランキュラスは冴える技巧で、淀みなく軽やかに躲す。同時にカウンターを打ち込もうとするが、散開していた二頭のダナジンが挟撃を仕掛けてきた。

NPCとは思えないほどの連携である。

『——ならー！』

ホウカは攻撃の手を引つ込め、背面に広がるフラワリング・ジエネレータを展開させて機体を上空に飛び上がらせた。

突進の勢いを殺せなかったダナジンが正面衝突する。

(この位置取りならば…！)

自分ならこうすると、愛機がドーバーガンを構える姿を思い描く。ランキュラスは倒れ込むダナジン二頭へ向かって、両腕を突き出して上からドツズトンプアーの銃口を向けた。

アズマの駆る、ガンダムAGE—1フルグランサの同時砲撃を幻視する。

そして、ドツズの斉射が迸った。

「ッ!？」

しかし、ドツズはダナジンの体を穿つことができなかった。

濃緑の装甲表面で、粒子が弾けて拡散したのだ。

『えっ…！』

予想だにしなかった結果なのだろう、ホウカも驚く。

そこへ不意打ちをかけるように、最初に呐喊をしたダナジンが飛行

形態でラナンキュラスに向かってきた。

それを空中で躲し、一度大きく距離を取る。

『…そうか、電磁装甲だ!』

セコンドのリクヤが指摘する。

「電磁装甲…ウェイガン機に採用されている防御システムか」

『そういうこと。まあ、ガンプラバトルだから耐^Aビーム^Bと同じようなもんだけど…えらく強力に調整されてるな』

「うむ…近接戦闘、若しくはファンネルで撃破するしかないようだ」

原作では、バクトの装甲がガンダムドツズライフルを弾いていたか。これまでに何度かバクトと交戦していたが、ドツズは難なく装甲を貫いていた。実際のガンプラではない故に、その性能も並以下なのだろう（そうでなければ1対100の戦いなど断固反対していた）。

このダナジン達もバクトと同じくプラフスキー粒子によって再現されているはずだが…なるほど、アズマがパラメータを弄ったか。

（「殲滅のアズマ」のダークサイドが出たようだな…）

鬼神とも形容される男の覇気が、ダナジンを介して伝わってくる気がした。

「ホウカさん」

『聞いていました。やってみます…行つて、Pファンネル!』

ラナンキュラスの背面から、四枚の白き花卉が舞う。再び陣形を整えたダナジンに向かってPファンネルが飛び、その周りを包囲した。

ダナジン達は咄嗟に掌からビームサーベルを発生させるが、四枚の花卉の軌道を全く追えていない。Pファンネルの刃が陽光を受けて閃いたかと思つた瞬間、三頭の間を白い残光が駆け抜けた。

身を振る三頭のダナジンの腕、翼、尻尾が細かく切り刻まれる。

『ぬう…!?!』

然しものアサクラも動揺し、座つていたドライセンを立てさせてビーム・トマホークを握らせた。

まずい!

「ドライセンも出るか!」

背部のランダム・バインダーを噴射し、翻弄されるダナジン達の間

に飛び込む。両手でビーム・トマホークを回転させ、F91のような即席ビームシールドでPファンネルを払い除けた。

散り散りになったPファンネルは、ランンキュラスの背に一旦帰投する。

ドライセンは損傷の激しいダナジンをモノアイで一瞥すると、三頭を率いて突進してきた。

『小癩なガンダムを始末するぞ、ダナジンども！』

『4対1!? 卑怯だぞ教頭！』

『うるさい！ 卑怯もらつきようもあるものか!!』

リクヤの非難を、大声で笑って跳ね除けるアサクラ。

ドライセンがビーム・トマホークを振り、やはりランンキュラスは容易く躲す。しかし、そこへ左右からダナジン二頭のビームシューターが突き出された。

それも、掲げた両腕の手甲から発生した力場によって防ぐが、続け様にドライセンの背後から両腕を失ったダナジンが姿を現す。そして跳躍しながらの前転——からの、遠心力を伴ったダナジンスピナーの叩き付けが襲う。

ランンキュラスは半身を翻し、尻尾の一撃を寸で回避した。

『キンジョウ、空だ！』

リクヤからの指示が飛ぶ。

ランンキュラスはフラワリング・ジェネレータを開き、指示通りに空へと一時撤退しようとした。

『逃がさんぞー！』

『…ッ!?』

浮き上がったところへ、ドライセンの追撃。ランダム・バインダーによる急加速によって飛び上がり、ボディタックルを仕掛けた。

常であれば、そのような攻撃など食らうようなものではないだろう。しかし、4対1の連続攻撃の後では…。

反応を取れず、ランンキュラスのしなやかな瘦身が砲弾のような強打に見舞われた。重モビルスーツのそれ自体が脅威となるタックルで吹き飛ばされ、倉庫に突っ込んで押し潰してしまう。崩れる倉庫の

瓦礫で、白青の機体が埋没した。

やはり、”百鬼夜行”の疲労がここで出てしまったか。

ドライセンはそこへ接近しながら、左拳を突き出して人差し指の根元辺りから白い物体を射出した。

それが体を起こすランキュラスの足元に付着し、瓦礫や鉄骨を纏めて地面に貼り付けた。

『う…動けない!?!』

「トリモチだ!」

機動戦士Zガンダムでよく描写される、リック・ディアスや百式が備えるトリモチランチャーだった。ドライセンには本来ない機能だが、ランダム・バインダーを装備しているだけではなかったのだ。

アサクラ教頭、中々やる。

『これで終わりにしてくれるツ!!』

ランキュラスがもがいてそれを剥がした時には、もう囲まれていた。

ドライセンの大上段に振り上げられたビーム・トマホーク。

三頭のダナジンによるビームシューター。

四つの爪牙が、獲物を捉えた。

(終わるか…!)

いや。

まだまだ、見せてほしい。

絶対的な苦境にあっても、それを跳ね除ける力を。

君たちならば、できる。

.....

何故だか、昔の記憶が過ぎった。

医師からの許可を得て、師匠と共に軽く山道を歩いた記憶だ。

標高のある山ではなかったが、退院して日も浅かったあの頃の自分には、それなりに堪えたものだった。

『どうだい？風が気持ちいいだろう？』

師匠にそう言われて立って見た岩の上、そこから見た景色に、目を奪われた。

どこまでも深緑と蒼穹が広がった、山の景色。狭い世界しか見たことのない自分には、あまりに広すぎる世界だった。

そして体を吹き抜ける、木々の薫りを運ぶ爽やかな風。

疲労さえ忘れるほど感動して打ち震える自分に、目線を合わせて屈む師匠が言う。

『体作りも大事だけど、ぼくは何より、この世界を感じてほしかったんだ』

優しく話しかける師匠の、穏やかな表情が真摯に見つめてくる。

『“花鳥風月”が本当に伝えたいことって、この自然のような、在りのままを感じることもなんだ。武術も同じ。技を通して、心を通わせ合うための手段に過ぎない』

言っている意味が分からず、小首を傾げる。

『ごめんね、まだ分からないよね。でも、いつか君の力になってくれるはずだから』

そう言って師匠は立ち上がり、両腕を広げて風を一身に浴びた。

一際強い風が吹き上がり、百花斉放とばかりに咲き誇る山桜の花片を巻き上げ、自分達を包む。

すう…と小さな胸いっぱい、山の空気を吸った。

「ありのまま…ちよっと、わかるきがします」

(在りのまま、在るがままに——)

自然と、スフィアを握る両腕が動いた。

心に何かか吹き込む。

これは、風——？

爽やかな薫風が、総身に広がる。

それは——生命いのちを宿した、ガンダムランキュラスの息吹。

そして見上げた先、そこにはアサクラのドライセンと、三頭のダナジン。

動かしたスフィアを胸の前で交叉させ、力場を共振させる。

(——今できる、全力でっ！)

刹那、

コンソール上のフィールド出力が、有り得ない数値を叩き出した。

「ハア————ッ!!!」

裂帛を轟かせ、ランキュラスの両腕からフラワリング・フィールドが放たれる。

『な——』

肉薄していたドライセンと三頭のダナジンが、その力場に圧されて後一步を踏み出せない。

『この出力…!?!』

否、それは最早、護るための力ではない。

ジェネレーターによって発現された力場が、その場で変質した。

防御手段でしかないフラワリング・フィールドを超え、凝縮された力場が激しく共振し、空気中のプラフスキー粒子に伝播する。

——ゴウツ!!!

直後、強烈な衝撃波が、ドライセンとダナジン達を襲った。重量級を誇る4機が、見えざる打撃力に全身を満遍なく叩かれる。まるで風に舞い上がる朽葉くちばの如く、空中に吹き飛ばされた。

その余波だろうか、フィールドとホログラムコンソールを透過して、そよ風が自分の黒髪を揺らす。

衝撃波をまともを受けた4機は散り散りに吹っ飛び、腕が、脚が、尻尾が、胴体が、バラバラにちぎれ飛んだ。

そして、コンクリートや倉庫の上に落下する。

『な、何なのだ、今は…!?』

アサクラが起こったことを理解できず、慌てふためいた。

「ハア——」

ランンキュラスを瓦礫の中から立たせ、自身の呼吸を整える。はつきりと、今起こったことを理解できた。

フラワリング・フィールドの先にある、愛機と導き出した答えだ。

「…”プラフスキーインパクト”…」

捻りも飾り気もない、印象そのままに、名前を付ける。

『掴んだな、キンジョウ』

通信越しに、ただ戦況を静観するだけの、アズマの声。

今一度、スフィアを緩やかに握って確と実感する。

心に吹く薫風、愛機の息吹。ここに至って、それらは茫漠とした不明瞭な印象ではなく、間違いなく感覚としてここに在る。

然りとて、心身は清冽な静けさを湛え、羽のような軽さを覚える。

『おのれエ…。やはり、私では適わんのか…』

倉庫に落下したドライセンが、瓦礫を払い除けて立ち上がった。

何の偶然なのか、あの時のドム・トローパーのように右腕を破損している。肩だけ残し、二の腕から無くなって無残にフレームを露出させていた。さらに、脚部の装甲やフロントアーマーなど、分厚い鉄板に叩かれたかのように凹み、罅割れている。ランダム・バインダーも

失ったようだ。

『しかし、このままでは終わらせん…!』

アサクラは、胸の奥から押し上げるように声を漏らした。ドライセンの右肩が根元で爆裂し、瓦礫の中へ落下する。

そして、足元に落ちているダナジンの右腕を拾い上げ、パーズしたばかりの右肩へ接続した。その異形の腕が数度痙攣すると、スムーズに動き出す。

掌からビームサーベルが飛び出し、ドライセンの真つ赤なモノアイが燃えるように輝いた。

『全力で、貴様を倒すツ!!』

その紫色の機体に、闘志が漲っていくのを感じ取る。

先程までの演技じみた態度とは違い、本心であろう台詞には確固たる決意、そして愉快さをも滲ませていた。

そう、これはガン普拉バトル。楽しまなければ損だ。

「受けて、立ちます!!」

精一杯の気迫と凄みを利かせて、アサクラ教頭とドライセンへ応じた。

そして、真つ向疾駆する。

既に、打たせるカウンターは看破されているのだ。温存すべき二の太刀は結局のところ、ガン普拉とガン普拉の純粹なぶつかり合い。

『ツせい!!』

「やアツ!!」

掌のビームサーベルとドツズトンファアの刃が剣戟する。

弾いては斬り合い、

蹴っては殴り、

後退しては懐へ、

力場で吹き飛ばしては、三連装ビーム・ガンの応酬。

そこへ、突如のアラート音。

「——っ!」

ボロボロの満身創痍になった二頭のダナジンが、ダメージを物ともせず果敢に向かってきた。内一頭の姿が見えないが、プラフスキー

ンパクトで撃破していたようだ。

ラナンキュラスを大きくバックステップさせながら、スフィアを滑らせる。

Pファンネルが射出され、一頭のダナジンを取り巻いた。走っていく両腕と翼のないダナジンを、コンクリートの地面スレスレに足払いして軸足を浮かせる。もんどり打って倒れるダナジンにPファンネルが突き立ち、そのまま射撃して内側から爆裂させた。

さらにもう一頭が反対側から迫って来るが、足払いした回転そのままにドツズトンファアを振り抜き、胴体を真横一文字に寸断する。

ダナジンを撃破したPファンネルが、ラナンキュラスの周囲に整列した。

『あえて、見事だと言わせてもらおうッ!』

ドライセンが再び駆け出し、間合いを詰めてくる。

『お願い、Pファンネル!』

Pファンネルをラナンキュラスの前に放射状に展開させ、その空間にライトグリーンの膜が形成された。

両腕のドツズトンファアを突き出し、同時射撃の構え。

ライトグリーンの膜——プラスキーパワーゲートをドツズが通過し、その威力が増幅する。ほんの半秒だけ留まったドツズが、その高威力を凝縮して標的へと発射された。

一点集中の、フルバースト!

『ぐうッ!!』

ドライセンは急制動をかけて回避しようとするが、間合いを詰めたことで遅れてしまった。

凝縮された砲撃がドライセンの左肩を撃ち抜き、腕が後方で爆発する。機体が行かなくなりになるドライセンだが、渾身の力で踏み止まって右掌からビームバルカンを乱射した。

「っ!」

アサクラのド根性に思わず震駭する。

フィールド発生が間に合わず、バラバラとばら撒かれる黄色い弾幕に曝された。

致命的なダメージとはならないが、動きを拘束されてしまった。すかさず、ドライセンが太い両脚で地面を蹴って懐へ潜り込む。

『もらったアツ!!』

下から掌を突き上げ、発生した黄色の粒子刃がドツズトンファアを弾き飛ばした。

「ふっ——」

しかし、それには構わず、逆にランキュラスの体を大きく沈み込ませ、脇へ引いた右腕の手甲に力場を込める。

そして、息を吸って裂帛一声、

「——破アツ!!」

得物を失った、右の掌底を打ち上げる!!

片腕から繰り出された衝撃波が、ドライセンを叩き上げた。

ドム系統の最終強化とされる重モビルスーツが、白青の瘦身たる機体によって打ち上げられる。今度は左腕を引き、同じく力場を込めて空気中のプラフスキー粒子を激しく震わし、波及させる。

ドライセンのモノアイが眼下を見、しかし、最早抗うことはできない。

『ぬウ…おオオオオオオ!!』

叩き込むは、

渾身の、一撃!!

「プラフスキーインパクトツ!!」

——ゴアツツ!!!

足下から脳天へ、凄絶なる衝撃波が頑健な体軀を駆け上がった。

紫の装甲がひしゃげ、稲妻のように罅が全身に走り、頭部の無色バ
イザーが硝子の割れるように粉碎される。

一瞬の間を持って、ドライセンが弾けて爆散した。

降り注ぐ破片、その只中に立つガンダムラナンキュラスが、静かに
背筋を伸ばす。

「――ふうー…」

キンジョウ・ホウカは、強く、静かに、息を吐く。

ガンダムラナンキュラスの青い双眸が、生きとしモノの光を湛え
た。

.....

『そーかー！そないオモロイことやとつたんか！』

部室で缶ジュースを飲みながら、体を休める。さすがに、過酷な連
戦の上にあの相手の挑戦を受けた後だ、疲労は隠せなかった。と言う
より、「たまにはしつかり自愛しろ」というアズマの強い口調ながらの
優しさに甘んじている。

そのアズマから借りた縦長の携帯電話（ガラケーというらしい）か
ら、快活な声が放られた。

声の主は、イブキ・アラタである。

『ホウカちゃんのために頑張った甲斐があつたつてもんやで〜』

「キンジョウの名も、女子だということも、ワシが依頼した時には一言
たりとも伝えた覚えはないぞ」

『そこは突っ込まんといてーな』

机の上に置かれた携帯電話のスピーカーモード（レトロな香り）で、
会話に入り込む。

「イブキさんのドッズトンファーがなかったら、”百鬼夜行”を完遂
できてなかったかもしれませぬ。本当に感謝してます」

『ええってええって。これも仕事やし、役に立ったんならワイから言
うことはなんもあらへん。それに、ソイツはもうホウカちゃんの物や
で』

インターネット通話という便利な手段もあるが、イブキが移動中で連絡先を自分が知らないということもあつたため、アズマに頼んでこのような通話の形となっていた。

ちなみに、シンイチは自治会の業務があるらしく、リクヤはトモヒサの進捗具合を確かめるために翠風寮の方に行っている。

そして、問題の人物であるアスクラ教頭はと言うと、バトルの直後に想定外のことを言われたのだった。

曰く、初めて戦った時のことを謝らせて欲しい、今回の乱入はアズマ用務員との打ち合わせがあつた（これは薄々気付いていた）、今後はガンプラ部のサポートに尽力したい、など。

最初の部分については殊更に言及しており、ガンプラを作るのも操縦するのも今一つで、加えて性格の悪さなども緇い交ぜになつたコンプレックスを抱えていたと語る。ガンプラ部に対して羨望の気持ちもあつて、あの時のことはそれらの裏返しだったらしい。教師失格だと言いながら泣き始めたときは、全員で必死に励ました。

全身全霊のガンプラで気持ちよく敗北し、しかし立派なヒーロー役を全うして生徒の最大限を引き出せた今回のことで、吹っ切れることができたとも言う。小屋を後にする40代後半の中年太りの背中には、哀愁のようなものを感じた。

ともあれ、密かに気にしていた懸案がさっぱりと解消されてほつとしている。同時に、彼のお陰で（結果論ではあるが）愛機との新たな世界を拓けたことで、疲れていながらも気持ちには晴れやかだ。

『そーいえば、昨日は演武大会だったんやってな！お疲れちゃん！』

「あ、ありがとうございます。あれ？どうしてそれを…」

『んっふっふっ、それは○秘や』

悪戯っぽい声が携帯電話から流れ出る。

『あ、そうやー！』

「？」

と、イブキは暫時の沈黙。

『えとな…ホウカちゃんの連絡先知りたいなく…思てンやけどく…』

「あ、そうですね」

『ええの!?!』

「え…? ええ…」

『我が世の春ウウウー!!』

「あ、でしたらトモに…カトー先輩の連絡先は」

『あ、それは遠慮しときます』

ぴしやり、と拒否されてしまった。

ともかく、連絡先を伝える。電話越しに何やら嬉しそうな鼻歌が聞こえてきた。

しばらく黙っていたアズマが、イブキに話しかける。

「イブキよ、一つ尋ねておきたい。例の件…お前は乗り気のようにだともあの男から聞いていたが、そうなのか?」

『ああ、アレか。めっちゃオモロそうやん? ワイはもう構想練っているで』

「ふむ、そうか…」

何のことを話しているのかは分からないが、アズマが顎に手を添えて洗面を作っていることから、重要な内容らしい。気になるには気になるが、聞き出しにくい雰囲気があった。

『おっと、そろそろ電車来るわ。ほなまたな』

イブキはそう言い置き、通話が切れた。

.....

梅雨入り前の、乾いた風が会場前を通り抜ける。

健やかに晴れ渡った青空の下、大勢の中高生がここに集結していた。

「そーいえばさ、この県の地区予選って他より三週間も早く始まるよね?なんで?」

「あ、私も気になるな」

シマ・マリコ顧問の車に乗せてもらい、地区予選の会場があるこの街の地を踏む。ここはセント楳葉女子学園の地元でもあり、県内一の都会ということもあって会場の規模は中々の迫力だ。

隣を歩くジニアが、色取り取りの制服姿の人混み（ほとんどが出場者だろう）を黄金色のぱつちりした両目で見回す。

真つ赤なカーディガンを羽織り先導するマリコが、こちらの疑問に答えた。

「単純な話さ。ここは都会だけど、他の街は田舎同然だからね。開催するイベントがなくて、この会場が暇なんだよ」

「ええー、そんな理由なんだー」

「と、いうのは半分冗談。もう半分の理由は、梅雨入り前の方がガンブラを完成させるのに最適なのと、学生達の期末試験の時期に合わせているんだよ」

「まだあるぞ。ここの地区予選はストイックでな、準決勝に残った4チームだけダメージレベルAだ」

最後尾を歩くトモヒサが、補足を加えた。

後ろに顔を向けて訊ねる。

「ダメージレベルAって、全国大会の規定だよね？」

「そうだ。全国に行く前に一度味わって覚悟を固めろ、という運営方針らしい。でもそれだと、ガンブラが大破した時の修復とかが大変だろ？それで、長くインテールを取る必要も出てくる。そんなんで、シーマ様の言った理由も併せて三週間早いんだ」

「複雑なんだね…」

「お陰様で、去年は俺らもほとんど作り直しだったんだぜ？」

高身長を見上げる形になって、トモヒサの苦笑を見た。

と、マリコの声が。

「カトー、私が聞き流すと思ったかい？」

やや棒読みの、空恐ろしい声音。

途端にトモヒサから苦笑の表情が消え、野生の熊にでも遭遇したかのような鬼気迫るものへと変わった。

そういえば、「シーマ様」と呼ばれるのをマリコは酷く嫌っていることを思い出す。常日頃からジニアがそう呼んでいるため、つい忘れがちになっていた。

そうして一行は歩き、会場の入口前に立つ。

「さあ、いよいよだ。気を引き締めていくぞ」
「うん」

「あいあいさー!」

三者三様の言葉を交わし、入口を潜った。

星空を覆い尽くす、青く輝く炎を胸に。
遙かな宇宙、彷徨える光はガンプラに。
熱き闘志を漲らせ、憧れの大地に立つ。
そして今、曇りなき空の下を踏み出す。

あの、場所へ。

A c t . 1 3 『画竜点睛Ⅱ』 E N D

Act. 14 『遭逢、睥睨、地区予選Ⅰ』

少し遅れて来ると言うアズマ達（カナダ兄妹とココネ）を待つシマ・マリコと入口で別れ、三人は地区予選会場の中へと足を踏み入れた。県民体育館のエントランスホールは二層構造となっており、外と同様に大勢の学生達で埋め尽くされているのを目の当たりにする。

「サ」

そしてその中に、記憶に未だ新しい、朽葉色に染まった気品のある制服姿の三人組を見付けた。

「ダ」

声をかけようと歩み寄ろうとすると、隣にいたジニアが真つ先に猛進する。

そして、その標的たる花の髪飾りと赤いリボンのアクセントが添えられた、流麗な黒髪が美しい女子生徒へイージスガンダムのように飛び付いた。

「コオーツ!!」

某SF映画に出てくる顔に張り付く生き物のように、女子生徒の顔に覆い被さる。融合した怪物は、反り返りそうになる体を渾身の力で踏ん張って、顔面に張り付いたジニアを引き剥がしにかかった。

「ア……ン……ド……ウ…… ツですわ!!」

——ベリイ!

自爆寸前のイージスガンダムが引き剥がされ、床に着地する。

「スキンシップだよサダコ」

「て、て……程度を考えてくださいましー!」

尚も密着しようとするジニアを制しながら、アンドウ・サダコが顔を紅潮させていた。その様子を、彼女のチームメンバーであるユツキ・ララとクラオカ・オリハが、にこやかに笑いながら傍観を決め込む。

「な、何を笑っていますの？」

「いいえ。アンドウさんのそんな姿、中々お目にかかれませんか？」

「…アンドウさん…かわいい…」

「なっ、かつ」

そして、再び茹で上がった。

ジニアは力が緩んだ隙に制止の手を潜り、アンドウの右腕に抱き着く。

「……先達での練習試合以来ですわね、『スターブロッサム』の皆様」

どうやら諦めたようで、右腕を振り解こうとはしなかった。二人と同じように傍観していたこちらへ向き直って、胸元に（自由な）左腕を添えて恭しく挨拶をする。しかし、顔はまだ薄紅を残したままなので、やはり締まらない。

「おう。…丁寧にどうも、『天照す閃光』。ガンプラは直つたのか？」

「ええ、問題ありませんわ。言葉を返すようですが、貴方達の方こそガンプラは万全ですよ？」

「俺たちを見縊みくびつちや困るぜ、なあ？」

チームリーダー同士の挨拶をするトモヒサが、自分を横目に見て振ってきた。

それに対し、強く頷く。

「そう。ですってよ、ユヅキさん？」

アンドウも、傍らに立つ編み込まれた白髪が美しいララを見遣った。

ララはにこりと笑って、自分と視線を交わしてくる。

「ふふ、それは楽しみですね。しかし…私達も以前より強くなっていくと自負しておりますので、ゆめゆめ努々お忘れなきよう」

「はい、勿論です」

ユヅキ・ララは表情に笑顔を、しかし言葉には剣のような剣呑さを滲ませていた。謹厚な人柄の中に鋭さを内包させた独特の雰囲気は、以前に戦った時と変わらない姿である。

こちららも、心身が引き締められるようだった。

『ご来場の選手の皆様に申し上げます。間も無く開会式が開催されま

すので、中央ホールへお集まりください』

エントランスホールに、館内放送が響き渡る。

周囲にいる学生達が一斉に、互いに顔を見合わせたり腕時計を確認したり、各々のリアクションを起こし始めた。

こちらも、それぞれ向き合う。

「では、後程またお会いしましょう。私達と当たるまで、敗北は許されませんわよ」

「へっ、そっちこそ」

挑戦的な笑みをトモヒサとアンドウが交わす。そして、互いに小さく一礼して別れた。

「っておいジニア、お前はこっちだろーがよ」

「あうううう」

全力でスルーしていたが、この間、ジニアはアンドウの右腕に寄生したままであった。チーム『天照す閃光』に引き摺られようとしていたところを、トモヒサが慌てて引き剥がす。ジニアは「サダコ〜また後でね〜」と、遠ざかっていくアンドウの背中に別れを告げた。

「よし、俺らも行くか」

「うん。…?」

ふと巡らせた視線の先で、小さな響めきが起こっていることに気づく。

「おい、菱亜学園だぞ…」

「去年の優勝校か…。しかも全国大会トップ10…」

”キャプテン・アゼリア”、相変わらずお美しいわあ…」

響めきの渦中である、深紅に彩られた制服に包まれた三人。

その先陣を切るのは、董色のポニーテールと秀麗な長身が美しい人物。己の自信を余すことなく体現するような綺麗な背筋から、彼女が只者ではない空気が溢れ、周囲を遊弋する。

菱亜学園チーム『ハウンドクロス』。そのリーダーであり先手大将、人呼んで”キャプテン・アゼリア”ことカンザキ・ツツジだ。

「クロスボーン使いの”茜き野獣”だ…。凄え眼力」

「ということは、あの女の子が”カノーネ・フューラー”?マジか…」

その後ろに随伴するのは、二人の男女。

「ツツジさんの後ろの二人って…」

「そっか、ホーカは初めて見るのかな？」

隣のジニアが補足する。

「栗色のショートボブがかわいい子いるでしょ？あの子が『ハウンドクロス』で唯一の射撃戦主体で戦う、”カノーネ・フューラー”って呼ばれてるシバ・ニーナちゃん」

シバ・ニーナと紹介された女子生徒は、確かに栗色のショートボブが可愛らしい。凜としたツツジと三白眼の男子生徒（結構怖い）と比べ、明るく話しかける姿にいかめ厳しい異名は不釣り合いのようにも思えた。

「その隣のこわーい目のお兄さんは、”茜き野獣”って呼ばれてるサミネ・コウスケさん。去年の決勝でトモヒサをボッコボコに……はっ」

「……」

トモヒサから、無言の圧力が放たれている気がした。

ジニアが慌てて弁解する。

「トモヒサごめん」

「…いや、ボッコボコにされたのは事実だからな。気にすんな」

そうは言うが、表情は険しいままだった。

（…あ、あの時と一緒だ…）

それは、レートマッチの参加と選手権にエントリーするため、ガンブラシヨップ「ビッグリング」を訪れた日のことだ。そこで初めてツツジと出会った際に、トモヒサは一瞬だけ今のような険しい表情をしていたことを思い出す。

いつものトモヒサらしくない姿だった。

（あまり、気にしない方がいいのかな）

トモヒサ自身から何も言っていないのなら、こちらから追求する必要もないだろう。言いたくないことを、わざわざ口に出させるのは気が引けた。

「……」

突然、妙に居心地が悪くなる。

その違和感の正体を探ろうと少し周囲を見ると、何やら複数の視線を感じた。

「黒い悪夢」がいるぞ…しかも女子を二人連れてる…」

「今年は『スターブロッサム』ってチーム名だっけ？女子を侍らせ^{はべ}るなんて、さすがカトー・トモヒサだ」

「正直言っ^て羨ましい」

ぼそぼそと、しかしはつきりと内容が聞こえてくる。

「今年は」ライトニング・エデン」様がいらつしやらないのね…」

「ちよつと、あの子もしかしてキンジョウ・ホウカ？英志学園に入学して、しかもガンプラ部にも入部したって噂、本当だったんだ」

「ねえねえ、隣のサイドテールの子、外国人かな？めつちやかかわいくな^い？」

そのざわめきが波及し、次々とこちらを刺す視線が増えていった。

それにトモヒサも気づいているようで、そわそわし始める。

「ト、トモにい、早く行^{こう}？」

「お、おお、そうだな。そろそろ開会式だからな、急^{ごう}」

「トモヒサ！ホーカ！私達注目されてるよ！人気者だモゴ！」

「しーっ！」

はしやぎ始めたジニアの口を二人で塞ぎ、気持ち背を低くしながら速やかにその場を移動する。まだ地区予選が始まったでもないのに、余計な緊張など感じるものではない。

新生英志学園チーム『スターブロッサム』として、初のガンプラバトル選手権の舞台への入場は、少し慌ただしいものになってしまった。

.....

厳かな、そして今にも爆発しそうな緊張が張り詰める、地区予選の会場となった県民体育館。

中央ホールの大型スクリーンにトーナメントの組み合わせが発表

され、今や遅しと若き挑戦者達はその時を待ち焦がれている。

そして、ウグイス嬢の声がその到来を告げた。

『これより、ヤジマ商事主催、第17回全日本ガン普拉バトル選手権
中高校生部を開催致します』

会場が、一斉に爆発した。

選手も観戦者も、誰もが一緒になって声を大にし、歓声を上げる。
今年もまた、この瞬間が訪れたことに会場全体が歓喜していた。

高い位置にある観客席に座りながら、アズマ・ハルトはその熱気を
味わう。

「今年は控えようかとも思っていたのだがな…中々、この熱狂から離
れることはできんものだ」

「ガン普拉バカは死んでも治りませんよ、先生」

右隣に座る、真っ赤なカーデイガン羽織ったシマ・マリコが言う。
「フン、生意気を」

「ガン普拉ファイターどもは、ちよつと温めただけで…ボン。この熱
しやすい燃料の塊が燃える瞬間こそが、華ですよ」

「それらしく喋りおつて。だが、同意できることではある」

「青春をガン普拉バトルに燃やす彼らが何を賭けるのか、何を残すの
か。見てやろうじやありませんか。…しかし、今日は何だか少し暑い
ね。気温まで変えちまったのかい？」

そう言いながら、シマ・マリコはどこから取り出したのか、扇を広
げて自身を扇ぎ始めた。口にはしないが、赤いカーデイガンとやや緑
かかった黒髪、加えてその扇まで広げれば、シマ・ガラハウと瓜二
つである。

ちなみに、自分の車で連れてきたカナダ兄妹とアノウ・ココネもい
るのだが、三人は下の方で『スターブロッサム』の面々と会っている。

「やあー二人。久しぶりだなあ」

突然、背後から軽い声が降ってくる。

その声の主は段を降りてきて、自分の隣の空席に腰を下ろしてき
た。腕を捲った、赤と黒の差し色がある白一色の上下ジャージ姿。浅
黒い肌とは対照的に髪まで白く（染色ではない）、動物の剛毛のような

頑固な癖毛が目立っている。

「エニワ・シロウか。何の用だ」

「何の用はないでしょう、アズマ先生」

エニワ・シロウ。今から丁度10年前、第7回世界大会の事件も未だ痕跡を残している時に勃発した、”とある事件”と重なる時期に弟子だった三人の内の一入である(もう一人はシマ・マリコ。三人とも、当時は17歳の学生だった)。今は、菱亜学園の体育教師かつガン普拉部顧問として、その辣腕を振るっている。

「マリちゃん：いや、”宇宙の陽炎”も昔と変わらない美しさだ。そろそろ、イイ話の一つや二つはあるだろ？」

「故さえあればいくらでもあるさね。けど、生憎と色恋にかまける暇がなくてねえ、報告できるような話はないよ、シロ君：いや、”ホワイト・ガルム”」

「だったら、オレにもまだチャンスがあるってわけだな」

「フフ、私みたいないい女をモノにできるか、見物だよ」

軽口を叩き合う二人は、10年前と変わっていない。それを良い事と捉えるべきかどうか、指導者だった立場としては何とも判断に困る。

「お前達、自分の教え子の面倒は見なくていいのか？特にエニワ、お前のところは第一回戦に組まれているだろう」

「うちの『ハウンドクロス』の三人は強いですからね。最高のオレが育てた、最高のスーパファイター達だ！今更、手を焼くことはもうないんですよ」

腕枕をしながら、エニワ・シロウは自慢げに鼻を鳴らした。

やはり、昔と何も変わっていない。まるで口癖のように「最高」だの「スーパ」だの、子供染みた抽象的な表現を好み、己に対して絶対的な自信を持っているのだ。

しかし、ガン普拉ファイターとしての技量は一流に仕上がっている。彼の教え子である『ハウンドクロス』の活躍ぶりを見れば、「最高」と自称し得るのも認める他なかった。

自慢げにするエニワ・シロウに対し、シマ・マリコが顎杖について

言葉を投げる。

「余裕だねえ。でも、うちの子達に足元を掬われるかもしれないよ?」

「去年の雪辱を晴らす、ってか?」

「いいや、そんな崇高な理念はないさ。でも、うちのルーキーどもが、それを成すかもしれないね」

「ルーキー…あの二人のことか」

彼の目が、鋭く眇められる。

それとタイミングを同じくして、中央ホールに設えられた三基構成の四つのバトルシステムが起動し始めるのを見た。ホールの上からは液晶大画面が幾つか吊り下げられ、この観客席からでもはつきりと観戦することができる。

『これより、第一回戦を開始します。選手の皆様は、所定の位置に着いてください』

ウグイス嬢の放送が響き、会場のざわめきが静まっていった。

選手が次々にユニットの前に並び、深紅に彩られる菱亜学園の三人も姿を現す。その瞬間、観客席からどよめきが湧いた。

無理もない、去年の地区予選優勝チームかつ全国大会のトップ10に食い込んだ強豪であり、今大会でも最有力の優勝候補だ。その三人のバトルが第一回戦に行われるのであれば、否が応でも期待が高まる。

「…そうさ、うちのヒョッコは強えんだよ。自慢のスーパーファイター達だ」

隣に座るエニワ・シロウが、獣じみた笑みを浮かべた。

.....

『BATTLE START!』

「カンザキ・ツツジ、ガンダムAGE―2バンガード」

「シバ・ニーナ! デナン・ゲー・ツイーレン!」

「…ササミネ・コウスケ、クロスボーンガンダム・クロザー」

「チーム『ハウンドクロス』。披荊斬棘、押し通る！」

静謐な心に火を灯し、武士もののふの如く名乗りを上げた。

三機がカタパルトを滑走し、フィールドに躍り出る。眼下に、灰色の大地を削り貫く巨大なクレーターに建設された都市が広がった。

宇宙世紀の建築施設、月面都市「フォン・ブラウン市」である。アポロ計画の中樞を担ったヴェルナー・フォン・ブラウン博士の名に因んだこの都市は、劇中においてガンダム試作1号機の修復やテイターズによる占拠、レガンダムの開発など、何かと主人公と浅からぬ因縁がある場所である。

今年の地区予選の一回戦目としては、中々趣のあるフィールドが選定されたものだ。

後方に続くデナン・ゲー・ツイーレンが、火器積載された小柄な迷彩柄の機体（背中にある二門のメガ・ビーム・キャノンや全身の火器のせいで、重モビルスーツかと見紛う）を降下させる。

「状況を開始します。ツツジさん、コウスケ、市内に侵入して敵機を炙り出してください」

「委細承知」

「…ん」

シバ・ニーナから即座に指示が下り、両翼たる自分とササミネ・コウスケが前へ出る。フォン・ブラウン市へ降下すると、隔壁ガラスが大きく割れているのを確認し、既に相手はこちらを待ち伏せる戦法に出ているようだった。

しかし、我らに対して、その作戦は失策だ。

「ササミネ、先行して暴れる。私は別動して潜入する」

「…ん」

ササミネは言葉ですらない返事をし、黒い外套ABCマントを纏ったクロスボーンガンダム・クローザーを動かす。外套の隙間から露出する骨十字スラストアーを上向きに噴射し、割れた隔壁ガラスの中へと入り込んだ。

瞬間、

『来たぞー！撃てエ!!』

三方向から、一斉の集中砲火。

色取り取りの光軸がクロスボーンガンダム・クローザーに直撃し、あつと言う間に機体が光に包まれた。

その隙に、少し離れた場所から隔壁ガラスを蹴り破って侵入する。

『ノコノコ入ってきたのが運の尽きだな！』

『優勝候補が聞いて呆れるぜ！』

『茜き野獣』もこれで御終いだ！』

(運が尽きたのは、お前達の方だな)

オープンチャンネルを通じて、相手チームの快哉が聞こえた。しかし、数秒後には自分達の過ちと慢心を後悔することになる。

「——ハアー……」

ビームの乱射が終わると同時、ササミネから深い吐息が漏れるのを耳にする。

『ざまあまないぜ！ハハハ、ハ……ん？』

と、ビルの影から覗くゼク・アイン（ビームライフルとプロペラントタンクから、第1種兵装のパターンだ）を操縦しているファイターが、異変に気付いた。

そこにいたのは、変わらず滞空したまま微動だにしない、クロスボーンガンダム・クローザー。あれだけの砲火を浴びながら、ABCマント一枚だけで全てを防ぎ切っていた（本来、ABCマントはビームライフルの直撃を3発程無効にできればいい方である。しかし、ササミネが言うにはこのABCマントは「特注品」とのことだ）。

刹那、野獣が眼光を輝かせて一気に飛び出す。

『う、嘘だろ……うわっ!?!』

電光石火の勢いで肉薄し、ボロボロになった外套を脱ぎ捨てながら握るビームザンバーを薙ぎ払った。

ゼク・アインは、咄嗟に両肩のシールドを掲げようとするが、間に合わない。左脇からの逆袈裟斬りによって、青い胸と赤いコクピットハッチをビームザンバーで斬り裂き、左肩に懸架されている二本のプロペラントタンクまですっぱりと寸断した。

しかし、ギリギリ深手を負うところで半歩後退し、ゼク・アインは

仰け反りながらモノアイを動かしてクローザーを見る。

『この、…ッ!?』

見て、次の瞬間には、幅広の頭部が宙に飛んだ。

クローザーは骨十字スラスターの作動によって急転身し、ビームザンバーの粒子加速刃を逆袈裟に斬った傷口へと突き刺す。そのまま、首のない胴体を真上にかつ捌いた。

半秒の硬直の後、ゼク・アインが爆発する。

炎の照り返しを受けるフェイスマスクが開き、”茜き野獣”がブシユウと音を立てて排熱した。

『や…やべえ！一旦退くぞ！』

『くっそおー！』

あつという間に仲間を撃墜され、恐れを成したバーザム改とFAZZが、隠れていたビルの影から身を踊らせて後退しようとする（機体をガンダムセンチネルで統一しているのは好感を持てるが、いずれも待ち伏せ戦法には不向きな機体だ）。

「ツツジさん、接近するバーザムの出来損ないを撃破したら、FAZZをポイントに追い込んでください」

「承知した」

シバから、赤くマーカーが示されたマップデータが送信される。彼女の辛口ジョークに小さく笑いながら、目標を曲がり角から確認した。

ガンダムMk-IIとの繋がりを示唆する機体構造のバーザム改（これを出来損ないと言っていたのだ）が、ビルの壁面を削りながら道路を遁走とんそうしてくる。

待ち伏せというのは、こうやるのだ。

曲がり角からバンガードを飛び出させ、左脇に押し込んだドッズソードの柄を強く握った。

『ひいーん、この機体は、AGE-2バ…』

『御免！』

必殺の居合。

Gエグゼス ジャックエッジから流用した両足を浅く踏み込み、左

に捻った上半身を逆へまた捻る。全身の流動的な動作でドツズソードを振り抜き、シングルブレイドの重量を乗せてバーザム改の胴体を真一文字に斬り付けた。

——ツザン！

一撃。

成す術も与えず、ムーバブルフレームのモバイルスーツが上下に別れる。

爆発する直前でバンガードをストライダーモードへ変形させ、FAZZZを追うためにフォン・ブラウン市の上空に飛び出た。

「ササミネが狙われているな」

すぐに、白とグレーを基調とした着膨れ寸前の大型モバイルスーツを見付ける。ビルの上に陣取り、右肩に担いだメガ・ビーム・カノンをクローザーに向けて撃ち放っていた。

FAZZZの最大の特徴とも言える巨大なビーム兵器は、このように閉塞された空間で使うような代物とは言い難い。長射程の膨大な光軸はフォン・ブラウン市の隔壁ガラスを砕き、ビルを数個纏めて撃ち抜いている。威力こそ立派なものだが、クローザーはそれを難なく回避しつつ、次第に距離を縮めていっていた。

「ササミネ、誘い込むぞ」

「……」

無言を返答と解釈し、飛行形態のままビームバルカンをFAZZZへ向けて撃つ。

クローザーも、右手に握るビームザンバーをバスターガンとドツキングさせ、ザンバスターにしてFAZZZを狙った。

FAZZZはたまらずビルの屋上から飛び上がり、バックパックからミサイルを発射しながら後退する。それを躲しつつ、宇宙に逃げようとするところを二機の牽制射撃で制して、市内へ釘付けにさせた。

コンソール上でマップを見ると、狙い通りに赤くマーカーが示されたポイントに誘い込めているのを確認する。

F A Z Z が着地した場所は、アームストロング船長の名を冠したあの公園だ。

「いいぞ、シバ」

こちらが促すより早く、公園のそこかしこで何かが爆裂した。

『なっ、何だ!?!』

狼狽える F A Z Z のファイター。公園全体に亀裂が走ったかと思った瞬間、その隙間から光が漏れ出す。

そして、閃光。

——ビュオオオオオオ!!!

公園の真下から、F A Z Z の足元を基点とした十数メートルの範囲を根刮ぎ蒸発させる、極大のビーム砲撃が撃ち上がって光の柱を作り出した。

隔壁ガラスをぶち抜き、月面から見える地球を頭上として、フォン・ブラウン市のど真ん中から粒子の奔流が天高く昇っていく。

(フフ、シバめ…選手権開催への狼煙のろしのつもりか)

繊細かつ大胆な作戦とガンプラを信条とする彼女にしては、些か派手な演出をしたものだ。

やがて、一筋の細い光軸となってビーム砲撃が終わる。大穴の空いた公園の上から、一つ下の階層で二門のメガ・ビーム・キャノンを上へ向ける小柄な迷彩柄のモビルスーツが見えた。頭部の丸眼鏡のようなハイブリッド・センサーをさらに覆う、クリアブルーのフォロスクリーン(ケルデイルガンダムのものだ)をバックパックへと収納する。

F A Z Z は原型を留めないほどに破壊され、デナン・ゲー・ツイーレンの横に落下した。

「よし、状況終了!」

明るい声で、シバは宣言する。

フォン・ブラウン市の下層に侵入していたシバは、予めサーチファネルをばら撒いておき、フィールドと相手チームの行動を詳細に把

握っていたのだ。故に、こちらで対応したバーザム改の接近と、FAZZが公園に誘い込まれたことも看取できていた。

チーム『ハウンドクロス』の基柱、両翼たる自分とササミネを統制し得る司令塔、”カノーネ・フューラー”ことシバ・ニーナの本領である。

『BATTLE END!』

システム音声が決着を告げた途端、会場全体が沸騰した。

「いいぞー！菱亜学園！チーム『ハウンドクロス』！」

「一回戦から魅せてくれるなあ！ガン普拉バトルはこうでなきやあ！」

「相手チームもこれを踏み台にして頑張れよー！来年は期待してるぜ！」

「今年も熱くなりそうだ！」

煮え滾った観客席から、様々な喝采が飛んできた。それを心身に浴びながら、深く呼吸をして選手権の幕が上がった実感を得る。

愛機を回収し、AGEデバイス型の深紅のケースへ仕舞った。そして、バトルシステムの対面で呆気に取られている三人へ歩み寄る。

「死して屍拾う者無し…バトルの巷は厳しいものだ。しかし、必ず得る何かがある。いずれまた、相見えよう」

そうして、掌を差し出して握手を求めた。

ポカんと、2秒ほど呆然としていた学ラン姿の男子生徒（FAZZを操縦していたリーダー）が、慌てた様子で握手を返す。

「は…はい！ありがとうございました！」

強い返事と握手に対し、こちらも強く頷くことで応えた。そして握手を解き、踵を返してササミネとシバの元へと戻る。

「おい、どうした？ボケーっとして」

「ダメだ、完全に逆上させてやがる」

「惚れたかも…」

相手チームが何やら騒がしかったが、会話の内容までは把握できなかった。

戻ると、シバが右手を上げてきたのでハイタッチを返す。彼女の栗

色のショートボブが軽やかに揺れた。

「一回戦、ばっちりですね！」

「うん。まずは初白星、いい勝利だった」

そのシバの隣で、猫背で愛機をケースに仕舞うササミネ。

「ほーら、コウスケも勝ったんだからもつと喜ぶ！」

「……るせエ」

シバが彼の手を持ち上げるが、そつぽを向いて明後日の方向へ三白眼の視線が飛ぶ。その先で、数人の悲鳴が聞こえた。

ササミネの為人は、決して悪人などではない。ひととなりしかし、今のようない無意識からの態度が、他人にとっては狂犬のようにイメージを抱かせるのである。そんな彼の数少ない理解者が彼女、シバ・ニーナなのだ。

中央ホールから出ようと廊下に向かうと、その奥から赤と黒の差し色が目立つ白い上下ジャージ姿の、スポーツマンらしい浅黒い肌的人物が歩いてきた。

菱亜学園の体育教師にしてガンプラ部顧問の、エニワ・シロウだ。

「よおヒヨッコ達。いいバトルだったじゃねえか、特別に褒めてやる」

「賞賛の言葉痛み入ります、エニワ先生」

「先生、いい加減にヒヨッコはやめてください！」

シバは抗議の声を上げながら、エニワの腕に掴みかかった。

しかしエニワは、その手を振り解こうとはせずに袖を捲った両腕を組む。シバの身長が足りず、まるでぶら下がったように背伸びになった。

「生意気言ってんじゃねえ。最高のオレからすりやあな、お前らはまだヒヨッコだ」

「いじわるです〜！」

頬を膨らませるシバに対し、エニワは快活に笑う。

ひとしきり笑った後、エニワの表情が引き締められた。自分も、不満げだったシバも、そつぽを向いていたササミネまでが、エニワの鋭い両目に視線を合わせる。

「第一回戦、まずは上々だ。だがな、気を抜くんじゃねえぞ。他の3チームのバトルも見てたが、去年よりレベルが高いのは間違いないねえ。」

思わぬ落とし穴だつてあるかもな。しっかりとガンプラの調整、そして心身のコンディション保全も怠るんじやねえぞ。分かったな！」

「応きー！」

「はいー！」

「…うす」

軽い態度が一変して厳しい指導者としての顔になったエニワに、三者三様の返事と表情で強く応えた。

.....

『間も無く、第三回戦が開始されます。選手の皆様は、所定の位置についてください』

アナウンスが放送され、数人が廊下を歩き出す。

トーナメント表に従つて、第二回戦ブロックに組まれた4チームである。各々、互いに言葉を交わしたり無言で頷き会ったり、バトルへの意識が高まっていく空気がこの場を満たした。

「…いよいよだね」

隣を歩くジニアが、珍しく静かな語調で言う。

「うん。緊張は……してないね？」

「イロイロ舞台を経験してきたラインアリス様は、このくらいでキンチョーしないのさー！」

「そりゃあ素晴らしいことだが、気を緩めすぎない程度に頼むぜ」

前を先導しているトモヒサが、少し呆れた様子で言った。

「そーゆートモヒサはどなの？キンチョーしてるんじやない？」

「アホ言え、リーダーが緊張してどうする。この通りバツチリだ」

そう言つて、トモヒサは右手に握っている真つ黒なケースを持ち上げる。光沢の美しいケースの表面には「EXTREME」とシルバーの文字が印刷されており、サイズ自体が通常のガンプラケースより二回りほど大きかった。

「トモにい、それつてガンプラケースだよね？」

「ん？これか？ああ、俺の愛機が入つてるぞ」

「でも、その大きさ…」

「見れば分かるさ」

何やら自信ありげのような、勿体振るような様子である。

トモヒサの愛機と言えば、”黒い悪夢”の由来となったガンダムサレナ。確かに、G P O 2サイサリスの体はバインダーや脚の意匠によつて大きくかつ重厚なシルエツトだが、巨大かと言われれば実際はそうでもない。

そもそも、巨大なモビルスーツ（それこそサイコガンダム並のガンブラ）は全日本ガンプラバトル選手権のレギュレーション規定により、一律してモビルアーマーと見做される。積載した武装や大きすぎる支援機を搭載しているガンプラが、そういった規定に抵触するケースは結構あるらしい。

ガンダムサレナは、その規定に触れるようなガンプラではないはずだ。真つ黒なケースの中身がどうなっているのか、否応なく興味が湧いてくる。

「よし、二人とも。拳を突き出せ」

そんなことを考えていると、廊下から体育館の中央ホールに出た。そこで、トモヒサがこちらに向き直つて拳を突き出す。

ジニアと一緒に頷き、同様に拳を握つて突き出した。

トモヒサも、強く頷く。

「これまでの成果を存分に出せ。自分達のガンプラを信じて戦え。ここが俺達のスタートライン、ここが俺達の初舞台だ」

「うん。行こう、あの場所に」

「見せつけてやろうよ！ 私達の本気を！」

「ああ、勝つぞ！」

拳を打ち合わせ、バトルシステムへと向かった。

ケースからガンプラを取り出し、パーツ類を取り付けて準備する。こちらと相手チームの様子を確認した係員がコンソールを叩くと、システムが唸りを上げて戦いの舞台が動き出した。

『GUNPLA BATTLE. Combat mode, Start up』

電子音声が響き、第二回戦の始まりを告げる。

『Mode damage level, Set to "B".
Please, set your GPbase』

音声の指示に従い、GPベースをユニット台に接続する。ヤジマ商事のロゴマークが浮かび上がり、続いて機体データが表示された。

『Beginning, PLAVSKY PARTICLE"
disperse』

青く輝くプラフスキー粒子が散布され、舞台の上を充満する。

『Fieldl, "SPACE". Please, set your GUNPLA』

GPベースへとガンプラをセッティングする。自分の思い描く姿に完成させた愛機の背に、気のせいかな頼もしさを覚えた。

背筋を伸ばし、丹田に力を込めて深く、強く、呼吸をする。

『BATTLE START!』

「キンジョウ・ホウカ！ガンダムラナンキュラス！」

「ジニア・ラインアリス！ハルジオン・フェイク！」

「カトー・トモヒサ！ガンダムヘリクリサム！」

三機が宣言に合わせ、発進体勢を取った。

チーム『天照す閃光』との練習試合以来、二回目の宣言。

しかし、あの時と違い、気恥ずかしさは欠片もなかった。

「チーム『スターブロッサム』——」

粒子が浸透し、愛機に吹き込まれた命を心に、体を感じる。

「——百花斉放、吹き荒らします！」

——行くよ、ガンダム。

「あれが……モビルスーツだって言うのかい!？」

チーム『スターブロッサム』の出撃を見守っていたシマ・マリコが、カタパルトから吐き出される漆黒に染まった超重の機体を見て、思わず仰天した。

A c t . 1 5 『遭逢、睥睨、地区予選Ⅱ』へ続く

ミヤモト・ロウは、全日本ガン普拉バトル選手権の開催の場を訪れる。

県民体育館のエントランスを通過して中央ホールに出ると、煮え滾るような歓声が耳朶に飛び込んできた。

たった今、第二回戦のブロックが終了したところだった。

「あちやー、二回戦目まで終わっちまったか」

「ロウさんのせいですよ、こんな日に寝坊だなんて…」

「うぐ…。し、仕方ねえだろ、急な依頼だったんだから…」

隣に連れ立っているフルデ・アルトが、これ見よがしに非難の視線を自分に注いでくる。ジーパンに安っぽい柄のシャツ、その上にこれもまた安っぽい緑色の上着を着ただけの自分と比べ、アルトの出で立ちがファッション雑誌の撮影を終えてそのまま来た、と言っても信じてしまいそうな服飾だ。

その外見からは、普段の「燃え上がれガンプラ！」とプリントされたエプロンを首にかけるプラモデルショップの店主だとは、到底思えない。

そんなことをちらりと考えていると、アルトが何かに驚く。

「……あつ！第一回戦に菱亜学園も組まれていたんじゃないですか！」

「えっ!?マジ?!」

アルトと同じ方向を見ると、天井から吊り下がる液晶大画面にトーナメント表が映っており、確かに第一回戦に「菱亜学園」の名があった。

絶対に見逃せない一戦を見逃してしまい、ハロ型目覚まし時計を叩いて故障させたまま放置していた自分を呪う。

「しまったあ…」

「…終わってしまったものは仕方ないです。後でライブ映像を見ましようか」

「ほんと悪い…」

アルトが、「もういいですよ」と言つてにこやかに笑つた。

友人の優しさに打ちひしがれ、項垂れながら歩く。「ビッグリング」の店主を務めている彼の優しさは、自分の店である「ミヤモト工房」にまで及んでいる。つつい散らかしてしまふ店内を、時折訪れては片付けてくれているのだ（勿論、その時は全力で自分も掃除するが）。

さらに、自分のせいでツツジ達の初戦を見逃すこととなつてしまふ、一歳年下の彼に対して申し訳なさが重くのしかかつてくる。チーム『ハウンドクロス』の三人は両店を頻繁に訪れてくれているため、彼女らに対しても悪いことをしたと思う。

アルトとは、かつての「ガンプラ塾」が法人化した「私立ガンプラ学園」、その第一期生時代からの付き合いである（今年で9年になる）。その頃から世話になりっぱなしであり、卒業してからもこの関係は変わることなく今も続いていた。

とりあえず気を取り直し、観客席に腰を下ろす。再び、液晶大画面に映るトーナメント表を注視した。

「さて、第三回戦ブロックは……お、英志学園がいるじゃん」

「いよいよ、チーム『スターブロッサム』の活躍が見れますね」

「今年はトモヒサがチームリーダーだったな。お手並み拝見といこうか」

「弟子の成長は、やっぱり楽しみですか？」

「ハハ、そりゃあな」

3年前、古い喫茶店を改装して完成したばかりのミヤモト工房に、突然押しかけてきた身長の高い少年がいた。弟子にしてほしいと懇願され、最初は突っぱねていたのだが、やがてその熱意に圧されて承諾した。

その少年が、当時中学二年生だったカトー・トモヒサだ。

近頃は選手権に向けての準備などで会うこともなく、ほとんど毎週参加していたビッグリングで開催されるレートマッチも、一ヶ月ほど顔を出していなかった。それ故に、この第二回戦目でのトモヒサの活躍は楽しみなのだ。

「ん？なんや、お二人さんも英志学園チームの関係者だったりするん？」

突然、左隣から関西弁が飛んできた。

縁遠い地域の方言に加えて、全く隣席に意識を向けていなかったため少し驚く。

「そういう君は…トモヒサの友達か？」

「トモダチイ〜？」

見ると、特徴的なざんばら髪の少年（いや、青年か？）が、とても機嫌を損ねたと言わんばかりに眉をぐにやりと顰めた。

「冗談やない！そないヌルい関係ちゃうで！…そう、恋敵や！」

「こ、恋敵…？」

「そーや。カトー・トモヒサとは相入れん関係なんや」

仏頂面で腕を組み、トーナメント表を見ながら不機嫌な態度で座り直す。

ふと、その顔にどこか見覚えがあるように感じると、

「あれ？もしかして君、心形流の…」

アルトが身を乗り出し、彼の顔をまじまじと眺め始めた。

その瞬間、彼の耳がピクンと動いて（本当に動いた）仏頂面から一変して満面にドヤ顔を浮かべる。

「ハハハ！さすがワイヤ、有名やで〜！その通り、ワイこそガンプラ心形流・期待の新星！鉄機派を打ち立て、東西南北を奔走しながら武者頑駄無の魅力を広める、絶賛飛躍目覚しいイブキ・アラタやっ！」

立ち上がって独特のポーズを決め、慎ましきなど皆無の声を張り上げた。

周囲の観客席に座っていた観衆（ガンプラファンと言うより、主に選手の父兄方と思われる）が、何事かと彼——イブキ・アラタに振り返る。

「おおー、本物だー」

右隣のアルトが呑気に小さな拍手を送った。

数秒ほど歌舞伎のように見栄を切っていたが、やがてアウエー感に気づいたのか、いそいそと居住まいを正して着席する。

「どうも、よろしゅう」

「こ、こちらこそよろしく」

ペこりとイブキは小さくお辞儀をし、なかったことにした。

人物としては、「月刊HOBBY HOBBY」誌面上でのインタビューやイメージングビルダーズでの作例など、その他様々な媒体での活躍で聞き及んでいる。本人と会うのはこれが初めてだが、読んだ通りの人物なのだと言えよう。

そんな彼だが、生み出されるガンプラの完成度は自分の目で見ても一級品なのだ。

「ところで、心形流として名高いイブキ・アラタ氏が、どうしてまたこんな関東の端っこに？」

「ええって、他人行儀な呼び方は。よく見たら、アンタも知ってる顔や。かのガンプラ学園の第一期生、ミヤモト・ロウ氏でつしやる？ してお隣さんは、フルデ・アルト氏」

思わず、アルトと顔を見合わせた。

「前に近場に来たときに、近辺のショップはチェック済みやさかい。ま、知らない関係やないってことで、気楽にイブキでええよ」

確かに、ミヤモト工房とビッグリングのインターネットサイトでは、自分たちの大まかなプロフィールを公開しているのだ。ガンプラ学園の第一期生という肩書きは積極的に押し出していくべき、という話で纏まっていた。

「……いつは、一本取られたって感じだな。そういうことなら、こっちも好きに呼んでもらって構わねえぜ」

「改めてよろしゅう、ミヤモトはんにフルデはん」

にっこりとイブキは笑う。

「それじゃ、イブキ君。トモヒサと恋敵って言ってたが…察するに、『スターブロッサム』の新メンバーのどちらかにゾッコンか？」

「そうや、キンジョウ・ホウカちゃんにゾッコンなんや。ワイ、黒髪の大人しめな子が好みやけど、中々どーして彼女のバトルには鋭さがあつてなく。マリナ・イスマイル系の美人はんと思いきや…」

一気に捲し立てるイブキ。どんどん溢れ出る言葉から、かなりお気

に入りらしいことは大体把握できる。何やら、隣のアルトがくすくす笑っていた。

しばらく、今大会の注目チームや技術面の話題などを三人で話す内に、液晶大画面に第三回戦ブロックのチーム名が表示される。

『間もなく、第三回戦が開始されます。選手の皆様は、所定の位置についてください』

「さて、いよいよ英志学園の登場やな。どう転ぶか…見物やで」

朗らかに話していたイブキが、真剣さを声に滲ませて大画面を睨む。

ビルダーとしてもファイターとしても、かなりの腕を持つ彼。口ではキンジョウ・ホウカに入れ込んでいる様子だが、ガン普拉バトルを見る目は真剣そのものである。

自分も、弟子可愛さで観戦するつもりはない。トモヒサが自分の元を離れて、どんな成長をしているのかを見定めねばならない。

やがて、廊下の奥から白青の制服を着た三人が姿を現した。他のチームの面々と比べても、高身長が目立つ男子がトモヒサだ。

(お、確かに二人共かわいいな)

そして、マゼンタ色のサイドテールが特徴的な女子(外国人だろうか)と、大人しそうな黒髪の女子も確認する。この県では割と有名人であるキンジョウ・ホウカだが、実際にこの目で見るとまでは半信半疑であった。イブキがマリナ・イスマイル系と言っていたが、確かに外見で言えば納得だ。

(さ、見せてもらおうじゃねえか。新生英志学園チームの実力とやらをな)

拳を打ち合わせた三人が三基構成のバトルシステムに並び、ガン普拉を用意する。そして、中央ホール全体が薄暗くなり、四つの青い輝きが光り出した。

液晶大画面が、四画面に分割される。

『BATTLE START!』

そして、ガン普拉がフィールドに勇躍した。

それぞれのガン普拉を観察しようとしたが、思わず漆黒の一機に釘

付けにされる。

「な、なんやあれ……あれが、モビルスーツや言うんか!？」

デンドロビウムを見たモーラ・バシットよろしく、イブキが驚嘆の声を上げた。

.....

無窮^{むきゆう}の宇宙に咲く、巨大な薔薇の花。

放射状に広がる形状は花卉を思わせ、艦を固定する幾十ものレーンが甲虫の肢のように伸びている。奇妙な物体だが、歴^{れっき}とした宇宙世紀における研究開発施設である、「ラビアンローズ」だ。

あのGPO3デンドロビウムはここで試験運用され、グリプス戦役時にはエウーゴの補給拠点としても機能する。

「…ラビアンローズかよ。ほんとシステムって奴は気まぐれだな」

自分が抱いた感想と同じ内容を口にしたトモヒサが、ラビアンローズに引けを取らないほどの異様な物体を操縦していた。

僚機の表示名は、「RX-78GPO2H ガンダムヘリクリサム」
ガンダムランキュラスとハルジオン・フェイク（こちらは外見に目立った違いは見られない）の後方から威圧感を放つ、漆黒の巨体の名前である。

「何、その化け物…?」

ハルジオン・フェイクのモノアイが背後をちらりと見る。然しもの、ジニアとしても声に動揺を隠せていなかった。

超重の機体の正体は、縦にも横にも広くなったガンダムサレナである。

その巨体を構成しているのは、背面に積み重なったように装備される武装。上方に存在を誇示するように屹立する太い二つの砲身は、見間違いようもなく「グラストロランチャー」だ。さらに、その後ろにも追加武装があるようで、モビルスーツ一機分とは思えないバーニアの噴射光が輝いている。

しかし、まだ目を引く部分があった。中心にいるガンダムサレナが

両手に構えている対艦ライフルと、四枚に増えたフレキシブル・スラストター・バインダーがそれである。

「ぶつつけ本番でお披露目して悪いが、呑気に話してる場合じゃないぜ！」

「——来た！」

そう、トモヒサに問い質している暇はなかった。ラビアンローズを迂回するように、一機がこちらに向かってくるのを確認する。

目が覚めるような派手なピンクのモビルスーツ。頭部のセンサーカメラが鶏冠とさかのように長く、細長い四肢と各部のエッジにより、全身に鋭い印象を与えている。

それが、僚機を伴わず一直線に飛ぶ。

「イージスガンダムだ！あいつは私に任せて！」

ジニアは相手——イージスガンダムを確認すると、ハルジオンを飛び出させた。直ぐ様に飛行形態に変形し、対するイージスガンダムもモビルアーマー形態になる。両腕と両足が前方に突き出て、見様に因つては鳥賊か昆虫か、奇妙な姿となる。

トモヒサの指示を待たずに先行したジニアだが、元より高機動タイプを抑える役目があることは本人も把握しているのだ。

「よし、残り二機の攻撃に備える。ヘリクリサムで索敵：おっと、お出でなすつたぞ」

トモヒサは軽い口調で言うや、ガンダムヘリクリサムを操作した。

漆黒の超重モビルスーツはその場に止まると、バックパック（モビルスーツ一機分くらいの大きさだが、あくまでバックパック）の両側から”分厚い何か”を分離させる。

直後にアラート音が鳴り響き、ミサイルの雨が襲ってきた。

「っ！フィールドを…」

「いや、ここは俺に任せろ。お前は技を温存しとけ」

すぐにフラワリング・フィールドを展開させようとしたが、トモヒサの制止の声。と同時に、ヘリクリサムから分離した”何か”がラナンキュラスの前に被さるように躍り出た。

その形状は見覚えがある。GPO2サイサリスの特徴の一つであ

る、ラジエーターシールドと同じものだった。

「シールドビットR」と、ヘリクリサムなら……！」

そして、ヘリクリサムの頭上にあるミサイルコンテナが開き、20もの弾頭が顔を覗かせる。

「派手にいくぜえッ!!」

轟音。そして、発射音。

硝煙の尾を引いてミサイルが弾幕となり、飛来してくる小型ミサイル群に直撃してラビアンローズの前で盛大に爆ぜた。

爆炎がこちらにまで届いたが、二つの巨大な盾——二基のシールドビットRによってラナンキュラスとヘリクリサムに被害はない。どうやら、ラジエーターシールドの液体窒素噴射口がスラスタに改造してあるらしい。

「すごい……！」

「ホウカ、3機目が接近だ。こっちのザクファントムは俺がやる！」
「了解！」

見ると、立ち込める爆煙から白いモビルスーツが横滑りし、飛び出すのを確認した。背面には、大型のスラスタを備えた特徴的なバツクパックがあり、その機体が「ブレイズウイザード」を装備したザクファントム、つまりブレイズザクファントムだというのに気付く。

逸早く3機目を捉えていたトモヒサの言う通り、ラナンキュラスの索敵も敵機を捕捉する。ヘリクリサムがブレイズザクファントムに向けて対艦ライフルを構えると同時、自分もラナンキュラスを発進させた。

爆煙が消えた向こうから接近してくるのは、オレンジ色のモビルスーツ。

『チーム『スタープロッサム』の実力、測らせてもらおう！』

そのファイターから、威勢の声が放たれた。

両手持ちにされているのは、SEED系に疎い自分でも知っている、二振りの長大な対艦刀「シユベルトゲベル」だ。そして、両肩に突き出るビームブーメラン「マイダスメッサ」と、腹部に砲口を開けるエネルギー砲「スキュラ」があり、カラーリングと細部の違い

こそあるが間違いようもない。

「ソードカラミティ……」

対戦相手のチームが『ゴズモフェイズ』という名称だったのだが、ここにきてようやく合点がいった。

少し前に、ジニアから機動戦士ガンダムSEED、及びSEED DESTINYの機体について熱く語られたことがあり、彼女に対して少し有難い気持ちを抱く。

真正面から距離を縮めてくるソードカラミティに向かいながら、両手に握るドツズトンファアの刃を伸ばした。

『せいッ！』

「やあッ！」

裂帛の声が重なり、同時に刃が交錯する。

シュベルトゲベールによる力任せの斬撃に対し、ラナンキュラスに受けの体勢を取らせた。大振りの一撃を弾かれたことでソードカラミティの上半体が仰け反り、そこへドツズトンファアの刃で反対から間断なく攻撃を仕掛ける。

『こいつッ……!?!』

刃が閃き、確かな手応えがコントロールスフィアを伝った。

しかし、それは胴体を貫いたのではない。ソードカラミティの腰にあるブースターを抉っただけだった。

こちらのカウンターにギリギリで反応し、相手のファイターはマニューバを切ったのだ。その回避運動のまま、もう片方のシュベルトゲベールを上段から振り下ろしてくる。

『これで墜ちろ!!』

「——ッ！」

しかし、それは予測済みの攻撃。

息を吸いながら、左のドツズトンファアでその一撃を受けた。受けつつ、刃を寝かせて斬撃のベクトルを逸らす。即座に鋭く息を吐き出し、呼吸に合わせた連動で脇に引いていた右のドツズトンファアの銃口を、スキュラ発射口へ突き出した。

淀みのない、一呼吸間のカウンター。

——ドツギユウウウウン……!

DODS^{ドツズ}の光軸が、ソードカラミテイのオレンジ色の胴体を貫いて宇宙を奔った。

ラナンキュラスの体をくの字に折り曲げ、脹脛内のスラストを噴射して大きく後退すると、胸を撃ち抜かれて硬直していたソードカラミテイが炸裂し、爆発する。

「二機、墜とせた……!」

初めての選手権の場で、興奮することも焦燥することもなく、落ちていた心持ちで戦えた。事前にトモヒサから言われていた、「奥の手を見せずに戦う」という心得を完遂できていたことも後押しし、ドツズトンファアの柄を握り直すことで勝利の実感を得る。曰く、自分とガンダムラナンキュラスがチームの秘密兵器、ということらしかった。

とはいえ、決して相手を過小評価はしていない。この世界では、自分はまだまだ駆け出したばかりの素人なのだ。故にこそ、持てる全力で立ち向かう覚悟も決めていた。

「——よし、二人の援護に……!」

そう思つてコンソールを見つつ機体を轉身させるが、既に戦局は佳境を迎えていた。

.....

ラビアンローズの昆虫の肢のようなレーンを掻い潜りつつ、互いに牽制を続ける。コウモリダコのような異形の機体が、これもまたタコの口のような砲口からビームを発射した。

真つ先に先行してイービスガンダムを抑えにかかったが、中々ダメージを与えられない。しかし、それは相手も同じであり、エネルギー砲「スキュラ」をハルジオン・フェイクの機動性で躲し続け、こちらのドツズライフルもモビルアーマー形態の変態運動で躲されて

いる。

「ラチガアカナイ」って、こういうことを言うんだよね……！」

いい加減に、この状況を何とかしなければジリ貧だ。正攻法でダメならば、そうでない手で攻めていくしかない。

（後に取っておきたかったけど、やっぱり出し惜しみはナシ！）

新たに手を加えて生まれ変わったハルジオンなら、それができる。

サダコとのバトルで気付けたこと、”自分らしい戦い方”を最大限に表現できる機能がガンダム作品に、とりわけ宇宙世紀シリーズに存在することに着目したのだ。

『ちよこまかと……いい加減に堕ちなさい！』

「それはごっちのセリフ……っだよ！」

相手の女子ファイターが、苛立ちを隠さずに言う。

イージスガンダムが四脚の先からビームサーベルを発生させ、きりもみ回転しながら突っ込んできた。背部のユニバーサル・ブースト・ポッドの可動性を活かし、その突撃を疑似的なバレルロールで回避する。数本かのレーンを巻き込みながら、ピンク色の槍が後方へ飛んでいく。

（実戦で使うのは初めてだけど……！）

回避されたイージスガンダムはモビルスーツ形態に変形し、ラビアンローズの黄色い壁面を蹴って折り返しターンをする。そして再びモビルアーマーになり、四脚を広げてスキュラを発射しつつ向かってきた。

それを避けながら、コンソールに映る機体アイコンを確認する。

これなら、いける！

『これでえええーっす!!』

イージスガンダムがスキュラでこちらの退路を塞ぎつつ、四脚を広げてハルジオンに襲い掛かる。鋭い触腕のような先端から黄色の粒子刃が飛び出、獲物に掴みかかった。

そして、強襲の爪に捕らえられたハルジオンの体が、上下に分かれる。

『——なっ!?!』

否、捕らえられる寸前で、”ハルジオン・フェイクが分離した”。
胴の接続点から上下に、上半身と下半身が四脚の攻撃を回避するよ
うに。

『ぶ、分離したあっ!?!』

SPコマンドとして設定した、分離機能だ。

コンソール上の機体アイコンに、「SEPARATION MODE」と表示されている。

”ハルジオン・ナッター!”

下半身のサイドアーマー(克蘭シエとガーベラ・テトラをミキシングする際、干渉するとして一度は外したものが、上へと逆向きに展開する。露出した3mmポリを隠すようにサイドアーマーが閉じられ、昆虫の吻部ぶんぶに似た形状となった。

”ハルジオン・アタッカー!”

上半身は今までと変わらず、ドツズライフルを機首にして両腕を主翼に変形させる。

機動戦士ガンダムZZに登場する「バウ」の分離可変を参考にし、さらに克蘭シエの簡易的な可変機能を活用した結果、このような形態に辿り着いたのだった。

そして”フェイク”とは、花に擬態した昆虫を意識した命名である。

『虚仮威しを…!』

捕獲に失敗したイージスガンダムが、そのまま通り過ぎていこうとする。が、その後ろをハルジオン・ナッターに追わせ、追撃を仕掛けさせた。

高機動性能を持つイージスガンダムのモビルアーマー形態と、分離したことで重量が半減したハルジオン・ナッターの速力差はほとんどない。

逃げ切れないと判断したか、イージスガンダムがモビルスーツ形態に変形し、高エネルギービームライフルの銃口をハルジオン・ナッターに向ける。

『墜ちろっ!!』

そこへ、上半身が変形したハルジオン・アタッカーを突撃させた。機首からドズライフルを撃ち込みつつ、次の行動へ移させまいと攪乱攻撃を絶え間なく仕掛けていく。自由に可動する主翼と、一方方向に集中したユニバーサル・ブースト・ポッドの出力によって、ハルジオン・ナツターの倍以上の速度を發揮する。

『こんなのおかしいよ……相手は一人だつて言うのに!』
その通り、分離したハルジオン・フェイクは一人で操縦しているのだ。

攪乱されながらも、イージスガンダムは間隙を縫ってビームライフルでハルジオン・ナツターを狙う。その射撃を回避しつつ、サイドアーマーで作られた昆虫のような吻を開いて肉薄する。

吻部の両端に仕込んだビームサーベル発生器が閃光を散らし、二本の黄色い粒子刃が飛び出した。

「ハルジオン・フェイクには、こういう使い方もあるんだからアッ!」
懐に飛び込んだハルジオン・ナツターのビームサーベルが、イージスガンダムの両腕を刺し貫く。そして、その頭上へと落下するようにハルジオン・アタッカーを飛ばし、機首からドズライフルの射撃を見舞った。

脳天から股下まで、体の中心を撃ち抜かれたイージスガンダムが、ラビアンローズに抱かれる形になって爆発する。

アタッカー ナツター
上半身と下半身が合体し、コンソール上のアイコンが「DOCKING MODE」の表示になった。緑色のモノアイを鮮やかに点灯させ、ハルジオン・フェイクは再び花の姿へと擬態する。

「ア〜イム、ヴィクトリ〜!」
そうして、ハルジオン・フェイクの左手でピースをしてみた。

.....

「さすがだぜ二人共……!」

敵機を撃墜した表示が、僅か感覚を開けて二つ表示される。ジニアとホウカが、それぞれに勝利をもぎ取った証拠だ。

「そんなじゃ、こつちも仕上げといくか！」

ラビアンローズから少し離れた宙域でブレイズザクファントムとミサイルを撃ち合っていたが、途端にそれが終わる。ブレイズウィザードに内蔵してある小型ミサイルの残弾が切れたのだろう。こちらにも、巨大なバックパック「グランサブスター02」のミサイルが1／3を切ったところだった。

互いに、与えられたダメージはそれほどない。ほとんどミサイルの撃ち合いで、隙を見てガンダムヘリクリサムに携帯させた対艦ライフルの狙撃を試みたが、元々狙撃が得意な方ではないため弾が掠っただけとなっていた。

しかし、それもこれで終わりにさせる。

(きつちり決着はつけないとな……！)

ブレイズザクファントムが、右手のビーム突撃銃を構えてバーニアを噴かした。ミサイルが尽きたのだから当然だろうが、僚機を失ったことで自暴自棄になったのかもしれない。

どう転んだとしても、自分達の敗北の可能性はほぼゼロ。このまま、特攻を仕掛けてきたブレイズザクファントムとまともに戦う必要は、”合理的に考えれば”皆無だ。このまま無駄な戦闘を避けてタイムアップを狙うのも、戦略の一つだろう。

『…』黒い悪夢”よ、勝負！』

「ッ!!」

そんな無粋な真似、できるわけがない！

一騎打ちを持ち掛けられて、それに応えないガンプラファイターがどこにいる。自分だって全力のバトルを望んでいるし、それが仲間に対しての顕示であり、相手に対しての礼儀でもある。

自分だって、”花鳥風月”の教えは未だに胸に在る。今更口に出して言える立場ではないが、ガンプラバトルとなれば話は別だ。

向かってくる白い機影に向かって、対艦ライフルの照準を合わせる。

「いいぜ、受けて立つッ!!」

一直線に飛ぶブレイズザクファントムに撃ち込むが、ブレイズウイ

ザードの出力によって難なく回避されていった。こちらの牽制に対し、相手はビーム突撃銃を文字通りに突撃しながら弾幕をバラ撒くが、無線操作で動くシールドビットRでそれを防ぐ。

機動性を犠牲にした代わりに、無線誘導できるシールドで防御力を底上げした結果が、二基のシールドビットRである。四枚に増加させたフレキシブル・スラスタ・バインダーは、超重にまで武装を積載させた（レギュレーション判定は思っていたより楽にクリアできた）機体を飛ばすための、推進力へと置き換えている。

自分に足りないもの、自分がやるべきことを考えた結果に完成させたのが、ガンダムヘリクリサムなのだ。

『ウオオツ……！』

ブレイズザクフロントムがビーム突撃銃を投げ捨て、腰のビームトマホークを握る。そしてヘリクリサムの正面に躍り出て、ビーム斧を振りかざした。

「くっ……！」

それを、咄嗟に掲げた対艦ライフルの銃身で受け止める。粒子の光斧が食い込み、切れ込みからバチバチと火花を散らした。

そして、捕らえたブレイズザクフロントムに、両肩のツインドツズキャノンと前へと倒れ込んだグラストロランチャーの砲門を集中させる。

アズマ直伝の、四門同時砲撃！

「こいつを喰らえエエエー……ッ！！！！」

一瞬、ブレイズザクフロントムのモノアイが炸裂した光を見たか。直後に、絶大な威力を伴った粒子の奔流が白い機体を包み、爆発させずに全てを光で持ち去った。

砲撃が終わり、ブレイズザクフロントムの残骸が漂う中をガンダムヘリクリサムが圧倒的な存在感で佇む。

「俺たちの……勝ちだ」

『BATTLE END！』

決着。その直後に、割れんばかりの歓声が巻き起こった。

ホウカとジニアが、数秒ほどぼかんとして立っていたが、やがて勝

利した実感が湧き上がってきたのか、二人共自分に走り寄ってきて右手を掲げてきた。

——パァーン！

小気味のいい音を響かせ、ハイタッチを交わす。

英志学園チーム『スターブロッサム』の、栄光の初戦をここに収めた。

.....

花道を下がるように中央ホールから廊下に出ると、五人が自分達を出迎えた。

「初戦通過おめでとうございます！見事なバトルでした〜！」

「さんくすキョウダ〜イ！」

アノウ・ココネが走り寄ってきて、小さな体で賛美の気持ちを溢れんばかりに振り撒く。即座に、ジニアが彼女の手を握ってその場でくるくると回った。

「お疲れ。ほとんど被弾なしの完全勝利だったな、おめでとう」

「おう、上々だつて言えるだろう」

「カトー先輩、おめでとうございます！かっこよかったです！」

「ハハ、かっこよかったか。ありがとう」

カネダ・リクヤの拳に、トモヒサが拳を重ねる。リクヤの隣に立っているミソラは小さく微笑んだ。

「キンジヨウ、まずはよくやったと讃えよう」

「素直におめでとうつて言えないのかねえ。なあ、キンジヨウ？」

アズマ・ハルトとシマ・マリコが、それぞれの表情と態度で自分を出迎えた。

対して、少し苦笑いを浮かべる。

「えつと…アズマさんにしては、褒めてくれた方だと思います」

「…いつからそんな減らず口を言えるようになった？」

アズマが太い眉を歪ませた。その隣で、マリコがくすくすと笑いを堪える。

「…そういうことは、地区予選で優勝してから言うのだな。まずは初戦を通過したに過ぎん。本当に厳しいのはこれからだというのを忘れるな?」

「はい。勿論です」

アズマは、一息を吐くといつももの優しげな表情になった。

初めてのガン普拉バトル選手権、演武大会とは性質が全く異なる舞台での勝利でつい緩んでしまった心を、アズマの言葉によつて律する。確かに気の緩みは多少なりとあったが、それ以上に、コーチからの賞賛の言葉が素直に嬉しかったのだ。

「さて…次は来週になるけど、他のチームのバトルもしつかりと観戦しておくんだね。この後も桎梏などの強豪が控えているから、休んでいる暇はないよ?」

マリコが一同に向かって言い、ジニアとトモヒサも気を引き締め直したようで口々に返事をする。

その後、アズマ達は先に観客席に言っていると残し、廊下から階段を上がっていった。自分達は自動販売機の方へ行き、それぞれに飲み物を購入する。

「ぶはー! オレンジジュースがゴゾーロップイヤーに染み渡るうゝ!」

「なんだその新種のウサギ!」

トモヒサは購入した缶コーヒーを拾い上げながら、ジニアへのツツコミを訝え渡らせた。

「ふう、ようやく一息つけたな」

「だね」

トモヒサは缶コーヒーを、自分はスポーツ飲料を飲む。

「そうだ、一応謝っておく。ぶつつけ本番でガンダムヘリクリサムを出してしまって悪かった」

「いいよーそんなこと。凄かったね、ヘリクリサム!」

「トモにいらしいって言うのかな? ガンダムサレナがあんなにでかく

なるなんて思わなかった」

「出撃した時はモビルアーマーかと思ったよ」

漆黒の超重モビルスーツ、その迫力を思い出す。

「ま、そう言ってもらえると嬉しいぜ」

トモヒサは笑いながら、飲み干した缶コーヒーをゴミ箱へ捨てる。そろそろ上に上がるか、と言って踵を返したところで、その足がぴたりと止まった。

「…？トモにい？」

見ると、トモヒサの表情が彫像のように固まっている。そしてその視線は、廊下の方——アズマ達が登っていった階段——に注がれている。

「——ササミネ、コウスケ……」

その名前を口にした途端、トモヒサは眉間に皺を寄せ、内に押し込めた憤りを必死に堪えるかのような表情を見せた。

廊下の先、階段を下りきった深紅の制服に身を包んだ男子生徒——ササミネ・コウスケが、こちらに気付いて猫背のまま近寄ってくる。

3mほどの距離を置き、彼は立ち止まった。

そして、三白眼を一層見開いて、口角を釣り上げる。

「…よお、カトー」

獣じみた、彼が使っていた茜色のモビルスーツの排熱行為を彷彿とさせる、荒々しきで。

「今度は、楽しませてくれるんだろうなア…？」

「…何か用かよ」

意識して、低い声音で問う。

猫背で立つササミネ・コウスケへ、しかしこちらは無意識に睨むような視線を送った。

対して、彼は怒っているのか笑っているのか判別のできない——極端に表現するならば、威嚇のような——表情を浮かべる。吊り上げた口角から犬歯をちらつかせ、三白眼がこちらの視線と重なる。

ふとその視線が逸れると、こちらへ歩み寄ってきた。

思わず半歩下って身構えるが、彼はポケットから小銭を取り出し、自動販売機に投入する。

そして、炭酸飲料のボタンを押した。

(…:…ふう)

思わず安堵する。

ササミネ・コウスケが、どんな用事があつて突然現れたのか。そのことを気にする余り、気分を張り詰めすぎていたようだ。

どうしたって、この男のことになると警戒してしまう。それは、単に去年の決勝戦で苦汁を飲まされたからだとか、“茜^{あか}き野獣”という異名に恐れを成したからだとか、そんな理由ではなかった。

もつと以前——ササミネ・コウスケが菱亜学園に入学する前、そして自分がミヤモト・ロウに師事を仰いだ当時より前——からの因縁が、原因なのだ。

ササミネ・コウスケは落ちてきた缶を取出口から拾い上げ、こちらへは目もくれずに踵を返して歩き去っていく。無言のままその猫背を見送るが、彼は歩みを止め、首だけで振り返った。

横目から、突き刺さるような視線。

「…待ってるぜエ、カトー」

それだけを言い残し、最後に猟奇的とも取れる凄絶な笑みを浮かべて階段を登っていった。

後に残ったのは、場を包む重苦しい空気。

ハツとして意識を周囲に戻すと、ホウカとジニアが不安そうな表情で怯えたように肩を寄せ合っていた。

「…悪い、変な空気にしちゃった」

「い、いやあ…そんなことないよ？ね、ホーカ？」

「え？ええ…つと、うん」

取り繕っているのが見え見えだ。

「…はあ、お詫びに奢ってやるから勘弁な」

「あ、ラッキー」

ジニアは途端に上機嫌になり、「じゃあねえ」と自動販売機の前で吟味し始める。沈痛な空気が払われて安心するが、胸の内では葛藤でいっぱいだった。

そう、ササミネ・コウスケに打ち勝つために、ここまでやってきたのだ。去年の地区予選で再戦を果たせたが、結局、その時だって何もできずに破れた。それどころか、シンイチとリクヤの足を引っ張ることになり、チームの敗北も招いてしまった（誰のせいでもない、と二人とも言ってくれたが）。

彼に勝ちたいが為にミヤモト・ロウに弟子入りをし、ガンプラの技術も磨いたのに、意固地になって意識した結果がそれなのだ。

今年こそは、そんな失態は犯したくない。その上、不肖にもチームリーダーなのだ。身勝手を振り撒いて二人を巻き込むことは、絶対に避けたかった。初戦通過を成し遂げたばかりでもあるし、チームの高まった士気を台無しにしてしまいかねないだろう。

（チャンスは、幾らでもある。何も、この地区予選で晴らす必要だつてない。今は、チームのために頑張るべきだよな）

無理に装ってでも、チームを引っ張っていかないといけない。それがリーダーたる者の勤めだ。

ふと、選んでいるジニアの隣に目を移すと、ホウカと視線が重なった。そして慌てた様子で、自動販売機に視線を逸らす。

恐らく、心配してくれているのだろう。問い質さずにくれる優しさが、逆に自責の念を強くさせてしまう。ちくりと、胸を小さな針

が刺した。

流派”花鳥風月”の稽古に顔を出さなくなった理由。それだって、ササミネ・コウスケに起因している。いつまでも黙ったままではいけないと思っっているが、その糸口も見つからず、今一步の勇気もない。ホウカに全てを打ち明けられるとしたら——ササミネ・コウスケに雪辱を晴らせた時。

それまでは、チーム全体のことを念頭に、戦っていこう。

「うっっん……よし、これだ!」

「散々悩んで結局オレんじジューズかよ!!」

今は、自分の成すべきことを、成そう。

.....

全日本ガン普拉バトル選手権の初日も終え、選手達や観客達が次々に会場となった県民体育館を後にしていく。

それを見送りながら、エントランスホールの大きなソファに腰掛けた。

「カンザキさん、初日第一戦目のご活躍、お見事でした」

足を組みつつ、話しかけられた方に視線を巡らせる。

「ありがとう。君も、明日の健闘ぶりは楽しみにしているので、ユヅキ」「ふふ。ご期待に添えますよう、努力します」

そう朗らかに微笑みながら、編み込まれた白髪の美しい彼女——ユヅキ・ララは、自分の正面のソファに腰を下ろした。丁寧に朽葉色のスカートを折り、膝を揃えて座る。そのたおやかな所作は、セント樫葉女子学園における優等生の鏡と言える姿だろう。

しかし、それは単なる優等生と言うだけではなかった。本人から聞いた話だが、ユヅキはセント樫葉女子学園の理事長の血縁らしい。日本に留学したのもその縁ではあるが、こうして格式高いとされるガン普拉バトルのチームに入れたのも、総身に備えたる淑やかさも、全て努力の賜物なのだ（決して彼女は自ら傲慢などしないが、交流していれば自然と分かるのだ）。

互いにガンプラバトルの実力を認め合ってから、今大会で一年になる。

「キンジョウ・ホウカさん：いえ、チーム『スターブロッサム』は、どうやら今大会の台風の目になりそうですね」

「ユツキもそう感じたか」

「ええ。ニュータイプの感応：というアレでしょうか？」

「ふ、そうだとしたら、人類の革新は展望に値するな」

冗談を言い合い、小さく笑い合う。

「それはそうと、だ。キンジョウ・ホウカのガンプラ：ガンダムラナンキュラスと言ったか、あのような姿になるとは。君から聞いた以上だ」

「私が以前交戦した時から、印象が大きく変わりました」

自分がビッグリングで手合わせした時は、GPO3ステイメンのファンネル試験機だったのを思い返す。それが、大胆に素体をガンダムAGE-FXとし、各種パーツを巧みにミキシングさせてステイメンのイメージも引き継いでいるように見えた。ガンプラのミキシングという点で、カトー・トモヒサが背後にいるのが分かるが、彼にはない持ち味がああガンプラにはある。

キンジョウ・ホウカが短期間で成長を見せているという見識に、相違はなかったようだ。

「彼女だけではない。漆黒の怪物を持ち出したカトー・トモヒサ：分離可変し、それを卓越した技量で操縦し得るジニア・ラインアリスの二名もいる」

「ハルジオンとヘリクリサム、でしたね。どちらも可愛らしい花なのに、その名を冠したガンプラの方は侮れません」

「スターブロッサム、か：言い得て妙だな」

防御面と中々遠距離戦は未知数だが、近接戦で瞬間のカウンターを撃ち込むインファイター。

大火力と重武装を備え、自律誘導可能なシールドで攻守共に隙がない後方支援型の機動弾薬庫。

高機動性能と自由な分離／可変機能、そして奔放かつ高い技量に

よって相手を翻弄する高機動アタッカー。

バランスが取れ、個々の能力も恐らく秀でているであろうこのチームは、ユヅキの言う通りに台風の目になることは必至だ。

(何と言う、面白さか)

そうさ。そうでなければ面白くない。

「あ、またその笑顔」

「ん？」

言われて、いつの間にか伏せていた目を開く。ユヅキが、何やら含んだような微笑を浮かべてこちらを見ていた。

そうして、気付く。

「いや、すまない」

「構いませんよ。むしろ、カンザキさんの好敵手ライバルを考察している時の表情は、いつまでも見ていたいくらいですから」

「からかうのはよせ、ユヅキ」

どうにも、彼女は人を困らせるのが得意だ。嫌味たらしくはなく、それが信頼を寄せられているからこそその自然体であるとは理解しているが、居心地のいいものではないのが正直なところだ。

アンドウ・サダコともこの見地は一致しており、お互いに警戒すべきことと定めている。とはいえ、常に意識などできるはずもなく、その上にあの朗らかな笑みだ。うっかりすると、今のようになる。

(…まあ、それもユヅキの強みなのだが、な)

人を困らせるのが得意。それは、裏を返せば、隙を突くのが得意とも言える。彼女のバトルスタイルにも通ずる部分であろう。

「さて、私はそろそろ皆みなの元に戻ろう。シバが、各チームの情報を纏め終えている頃合だ」

「研究熱心なチームメンバーは、頼りになりますね」

「何を言う。『天照す閃光』にも、クラオカ・オリハがいるだろう？」

「ええ、頼りにさせてもらっています」

互いに含み笑いを交わして、椅子から立ち上がる。そして挨拶を残し、それぞれの帰途に着いた。

トーナメントのマッチングから考えて、英志学園とセント榎葉女子

学園、両校のチームと干戈を交えることは叶わない。順調に勝ち残れば、我らチーム『ハウンドクロス』が準決勝で相對するのは、どちらか一方なのだ。

(いかなな、つい意識してしまう。こんなことでは、準決勝の前に足元を掬われてしまう)

かぶりを振って、欲を払い除ける。勝ち進んだ先のことを考えるより、当面の相手を打倒せねばならないのだ。この大会に情熱を注ぐのは、全てのチーム、全てのガンプライフアイター達。

愛機たるガンダムAGE-2バンガード、そのドッズソードの重みを、拳を握って思い起こす。

(……佳し)

休憩席でタブレットを素早く叩いて情報を纏めているシバ・ニーナと、その横でうつらうつらと体を前後させて座るササミネ・コウスケを視界に留めた。

このチームで優勝し、全国へ行くのだ。

この三人で、押し通ってみせる。

.....

全日本ガンプラバトル選手権、地区予選の一日目を終えて英志学園に戻ると、盛大な拍手と喝采に迎えられた。

執務で会場に行けなかったというテライ・シンイチと、会場で観戦していたアズマ用務員が逐一情報を取り合っていたらしく、それを受けたナラサキ・フウランの取り計らいによって(大袈裟すぎる)祝賀パーティーが催されたのだ。

ちなみに、アスクラ教頭が昼間に奔走して材料等を調達し、翠風寮の給仕のおばちゃん達に協力を取り付けたのだと言う。

賑やかな寮の食堂棟で、小皿を持って立っているトモヒサが話しかけてきた。

「なあ、俺たちって…優勝したんだっけ？」

「初戦通過…だね」

「これ、来週も絶対負けられねえよな？」

「うん：期待は裏切れないよね」

「重圧が凄いんだけど…!？」

小皿に盛られたパスタにフォークを突き刺しながら、トモヒサの顔色が見る見る悪くなる。

ふと視線を泳がせると、何故かこちらを見ながら意味ありげな笑みを浮かべるアサクラ教頭とナラサキ・フウランを見付け（てしまつた）。

「まさか、教頭 of 精神攻撃じゃ…!？」

「それは流石にないと…」

思いたい。

いや、信じるしかない。これは善意なのだ。

「二人ともく、全然食べてないじゃくん！巨大モツタイナイ生物が来ちゃうよく〜！」

「そんなん来たらすぐMLRS撃ち込んでやるよ」

料理を総管めせんと息巻いていたジニアが、オレンジジュースを片手に駆け寄ってきた。

「またオレンジジュース飲んでる…」

「これはベルバラだからね！」

「ツツコミが追いつかないよ、ジニー…」

こちらのツツコミ(?)を意に介さず、ジニアはグラスを煽って「プハー！」と大袈裟にしてみせた。

「ラインアリスさんの言う通りだ。教頭先生とフウランの好意は、素直に受け取っておくべきと思う」

ジニアに続き、テライ・シンイチもこちらへ歩み寄ってきた。その手にはグラスが（ガルマ・ザビのような上手持ちで）持たれ、紫色の液体が波打っている。無論、ワインではなく葡萄ジュースである。

ややげんなりしたような表情で、トモヒサが返す。

「…つつつても、これは盛大すぎやしないか」

「古い名言に、『宣伝にやりすぎということはない』というものがある。これは、そのまま祝賀パーティーにも当て嵌るとは思わないか？」

「キン○コン○対○ジ○の多^タ古部長かよ…古^コっ…」

二人が何の話をしているのか理解できず、ジニアと顔を見合わせて首を傾げた。

シンイチは、ふん…、と息を吐き、柔らかな表情で諭すように言う。「兎も角、今は喜んでいい。何、緊張することはない。ここにいる皆^{みな}も、パーティーを楽しみたいだけに過ぎないのだからな」

「あの、テライさん。このパーティーの費用って…?」

小さく拳手をし、気掛かりに感じていたことを尋ねてみた。

「ふむ、そのことか。アサクラ教頭先生の実費だそうだ」

「「ええ!」」

鈴虫の鳴き声の如く、さらりと綺麗な声音でシンイチは告げた。

「これ…全部か!?!」

「うわー…イガイとアメイジングなお金の使い方…」

「あ、有り難く食べよう…」

先程の教頭先生への疑念（とナラサキ・フウランに対しても）に内心で謝罪し、改めて片手で祈って命を糧とすることに感謝する。

小皿に盛られているパスタにフォークを刺し、くるくると巻き取って頬張った。

うん、とつても美味しい…。

.....

食堂棟の隅にある椅子に腰掛け、生徒達の喧騒から身を離す。

十分に腹は満たしたので、後は若者達へ譲るのが部外者である用務員らしい振る舞いだらう。そもそも、ここに居ること自体が特例なのだから。

腕を組み、今日の地区予選一日目のことを思う。

（悪くない初戦通過だが、やはり総じてレベルが高いと言える、か）
各チームを観戦し、その実力の高さを実感している。片田舎の地区予選と言えど、中々に侮れないようだ。

チーム『スターブロッサム』の戦績は、十分に渡り合えるものだ

素直に認めている。当初は、カトーのガンプラがギリギリで調整を終えたことで懸案していたのだが、それも杞憂に終わった。

ラインアリスもキンジョウも、申し分のない成果を見せていた。特筆すべきは、ラインアリスのハルジオン・フェイクである。高次元の完成度に仕上がっており、分離可変機能と言う、一歩間違えれば即座に敗北に繋がるようなシステムさえ、危なくなく使いこなしていたのだ。

(ふ、本当にあ奴の力量は測れんな)

ガンプラバトルのセンスは目を見張るが、今でも彼女については評価が難しい。特別、有効な粒子変容能力があるわけでもなく、ガンプラの兵装に関しても最低限のものだ。

彼女に似たスタイルで名を馳せたガンプラファイターがいることを、ふと思いつく。

二年前、ヨーロッパ・レディース・チャンピオンの栄冠を手にした古い弟子の一人、レジーナ・ディオーンである。

彼女のバトルスタイルは、コントロールスフィアをも暴れさせるほどの高速機動、そして、用途によつて使い分ける実体剣と粒子刃。この二種の要素のみ。

装備を削減し、ただ一点のみを精錬し鍛え上げ、勝ち取ったスタイル。故にこそ、他の追隨を許さない。

ラインアリスがこれと同じ：とは結論を出すには早計だが、かつてのレジーナ・ディオーンを思い返すと、似た部分があるのも事実だ。

それを、今日の試合で感じ取ることができた。

(一方で、カトーは今後どうするつもりか、見極めねばな)

論点を、カトー・トモヒサに移す。

ぶつつけ本番であるような超重のガンプラを持ち出したのは、あまり褒められたものではない。事前に情報交換も為されておらず、作戦を立案せざるを得ない状況になった場合、支障をきたす恐れも出てくるのだ。幸い、ほとんど被弾せずに勝利を勝ち取ったのだが、結果論に過ぎない。

ここは、後でカトーに指摘すべき点だろう。

(ガンダムヘリクリサム、か…)

傾注すべきは、ガンダムヘリクリサムである。こちらの主観ではあるが、後方支援だけでなく、恐らく注目を集める役目も担っているだろう。ただでさえ威圧的なガンダムサレナを、さらに巨大化させることによつて、相手チームは何らかの対策を迫られることになるのだ。絶対に無視はできない存在になるのは、間違いない。

とはいえ、あの状態を全環境下で運用できるかと言えば、それは有り得ない。総出力が如何程かは未知数（これも後で訊こう）だが、重力下では相当な粒子消費を余儀なくされる上、ただの的になる可能性すらある。それは、火を見るより明らかだろう。

推測ではあるが、装備を適宜換装できるのではないかと見る。

以前、カトーは「サレナには柔軟な武装互換性がある」と言っていた。幾つかの武装プランを用意し、ベストな組み合わせを構築しているのだろう。それらを全て積載したのが超重の機体、と言えるかもしれない（単純にロマンを追い求めて、仲間と相手を驚かせようと思っていた節はありそうだが）。

(カトーらしいと言えば、らしいな)

思わず溢れそうになった笑いを、押し殺した。

ふと顔を上げ、視線を巡らせる。カトーとラインアリス、テライ・シンイチ達と楽しげに談笑しているキンジョウ・ホウカを目に留めた。

その大人しげな姿からは、以前見せたガンダムラナンキュラスとの人機一体と言える様は、想像できない。

彼女の過去は知る由もないし、追求もしないが、古武道とガンプラバトルの双方にある”力強さ”に起因する何かがあるのだろう。

そういえば、自分がコーチを承けた時に、シマ・マリコから言われたことがあった。

曰く、「キンジョウは、体が強い方ではないんだよ。あまり扱かないでやっておくれ」と。それ以来、一つ事に真剣になりすぎる彼女を、時々諫めてやっているのだ。特に、早朝のランニングには気を使っている（そもそも扱くつもりなど毛頭ないのだが）。

今のところ、シマの言うような体の不調というのは見られない。緊張にも強い方であるらしく、それほど心配は要らないのでは、とも感じているのだが…。

ともあれ、今は彼女の自主性を尊重し、頼まれればとことん付き合ってやろうと思っている。

(弟子の…いや、子供の成長というのは、いくつになっても楽しいものだ)

息子達は、既に自立してそれぞれに家族もある。今では自宅に時々遊びに来るだけで、妻と二人暮らした。勿論、寂しくなどはないのだが、やはり教師という仕事を全うしてきた身としては、物足りないのが正直な気持ちだ。

(こういうところも、いくつになっても変わらんのだな)

やや自嘲気味に、笑みを浮かべた。

「さて…ワシも、もう少し御相伴に与ろうか」

再び立ち上がり、若人達の輪へ入る。

彼らの近くにいると、老いも忘れるようだ。

.....

鉄骨やモビルスーツの残骸など、スクラップの山に降り立つ機影が一つ。

これら大量のスクラップは掻き集められたジャンク品であり、積み重ねられたことで小規模の山脈のように連なっていた。

ここは、宇宙世紀において史上初のシリンダー型スペースコロニーとして建造された「バンチコロニー」「シヤングリラ」である。

その名前とは似つかわしくない荒れ果てたコロニーの内部を、一筋の粒子の奔流が貫いた。

「へへっ、こいつでやられちまいな！」

長射程を誇る砲身を担ぐように構える機体が、足場であるスクラップの山を踏み込む。

その機体のファイターが、項で纏めた髪を揺らしながら掠れた声で

快哉を上げた。

「おいおい、そんな足場でまともに狙えるのかよ」

攻撃の対象となつている大型のモビルスーツが、空中で回避行動を取る。コントロールスフィアを切ったファイターが、枯れたような独特の声で返した。

そして、右手に握っている大型のビームライフル（ダブルビームライフルに酷似している）を構えて狙いを付ける。

「これさえありゃ、どんなガンプラも火に焼いて食つてやる！」

二つの銃口が轟き、高出力のビームが吐き出された。

しかし、それは相手を貫くことなく、スクラップの小山を吹き飛ばしただけだった。

「そつちこそ甘いんだよ！行くぜ、クロスエックス！」

X時を描く機体——ガンダムクロスエックスが飛び上がり、ビームサーベルを引き抜いて相手へと飛びかかった。

「パワーがダンチつてこと、ツヴァイゼータで教えてやる！」

対する大型の機体——ツヴァイゼータガンダムもビームサーベルを抜き放ち、真つ向から肉薄していく。

そして、二機が切り結…

「え？」

「へ？」

…ぼうとしたが、互いの機体が突如として暴発し、逸れた機動のままスクラップの山に頭から突っ込んだ。

『BATTLE ABORTED!』

バトルが中断され、プラフスキー粒子が分解していく。ガンダムクロスエックスとツヴァイゼータガンダムは、突っ込んだ無様な格好のまま取り残された。

「…アシヤ、ガドウ、もう忘れたのか。機体の出力を抑えてやれと言つたのに…あれでは子供の遊びと同義だぞ」

バトルシステムのコンソールに立っている生徒が、呆れた様子で二人——アシヤ・シユウトとガドウ・ランへと冷ややかな視線を向ける。その生徒はやや小柄な印象を受け、整った中性的な顔立ちには性別を問

違えそうなほどに美しい。黒い学生服の上に、口元を隠すように長いマフラーを巻いているのも、特徴的である。

あまり見ていられない姿のガンブラを回収した二人は、後ろめたそうにしながらも抗議の声を（弱々しく）上げた。

「うう〜でもよう、楽しいしさ…」

「そ、そうだけ。勘弁してくれよ、せつちゃん先輩…」

瞬間、せつちゃん先輩と呼ばれた生徒——オオゾラ・ユキナリの堪忍袋の緒が切れた。

「…せつちゃん先輩って呼ぶなって言ってるだろ!!!」

この三人こそ、紗寺^{さてら}学園チーム『アンダブル』。

英志学園チーム『スターブロッサム』の、次の対戦相手である。

A c t . 1 6 『遭逢、睥睨、地区予選Ⅲ』 E N D

星の輝きを散りばめた闇の宇宙に、紅に燃える彗星の煌めきが奔る。

いや——彗星と見えた”それ”は、星ではなかった。目ぼしい加速装置も見当たらないが、細見の機体は深紅の軌跡を引き、凄まじい速度で闇を翔る。

訂正する。やはり、”紅の彗星”だ。

『貴方ほどの強者と戦えて、私は嬉しく思うッ!!』

通信から、溢れ出る感情を隠そうともしない、聴き慣れた男の声。その声に呼応するように、燃え盛る情熱そのものかと言うほど深紅を纏った細身の機体が、逆手持ちにしたバズーカを向けて撃ち出した。

それを、右のシールドライフルで弾くように受け流し、勢いのまま接近する。

既に愛機——ガンダムAGE—1フルグランサは、装甲を解いた状態だ。

「相も変わらず——」

深紅の機体は、背部のガンブレイドの柄を握りながら同じように宇宙空間の中を肉薄してきた。小細工は一切しない、純粹な力のぶつかり合いを心情とする彼の、全く手に負えないクセである。

しかし、自分も他人のことは言えない主義だった。

「——熱苦しいことだ！」

脇に引いたシールドライフルからビーム刃を発生させ、相手がガンブレイドを抜刀してくるタイミングに合わせて振り抜く。

——ギイン!!!

粒子が弾け、闇の中に凄惨華麗な輝きが咲いた。

閃光が炸裂する中を、男は尚も攻撃の手を緩めない。胸部の黄色い

ダクト部パーツが開かれ、迫り出したミサイルの弾頭が即座に発射された。

ほぼゼロ距離、常人の反応速度では回避は不可能。

「ぬッ……」

だが、自分は神速の世界を、数え切れぬほど経験してきたのだ。

シールドライフルをガード体勢に構え、真正面からミサイルを受け切る。爆炎に塗れながら、愛機を前へ押し出した。

そのままタツクルし、深紅の機体が宙を泳ぐ。その隙に、両腕を突き出してシールドライフルの迫撃を敢行。

得手とする、ダブル・フル・バースト二門同時砲撃である。

「墜とすッ……」

全くの手加減なし、確実に撃墜せんと指標を立てる。いや、そうでもしなければ、この男を打倒することなど不可能なのだ。

だが、やはり。

この男は、こちらの本気をも踏み台にする。

『燃え上がれ——』

深紅の機体は至近からの最大出力の銃撃に対し、驚くべきマニョーバで身を捻る。左腕の小さなシールドで一発をピンポイントで防ぎ、ガンブレイドの刃先でもう一発を正面から斬り裂いた。

『燃え上がれ——』

圧倒的、ひたすら圧倒的としか表現できない技巧を前に、老体が滾るのを自覚する。

そして男——”三代目メイジン・カワグチ”は、燃え盛る情熱をガンプラに乗せる。

『——燃え上がれ、ガンプラアツ!!!』

深紅の機体——「アメイジング・レッドウォーリア」が燃え上がった。

プラフスキー粒子すら震撼させて、宇宙空間を剛く、烈しく、荒々しく、通常の6倍をも超越して、燃え上がった情熱の炎が壮絶にぶつ

叩く。

システム上の機能とは思えない衝撃が、コントロールスファイアから伝わってくる。昂る闘気の許す俣にこの戦いを味わっていたいが、終局というものは無情に訪れる。

『Over the time limit. BATTLE EN D!』

バトルシステムが冷徹に機能し、プラフスキー粒子が分解して興奮が最高潮に達していた宇宙空間を消滅させた。硬質なユニットの上に、取り残される二体のガンプラ。

ふう…と息を吐き、肩を回してリラックスをする。

「燃え上がるバトルであればあるほど、己の未熟を認めざるを得ない。が…それも、私のエゴだと言うのか」

対面にいる、ゴーグル型サングラスにロングコート状のコスチュームに身を包むという、異質な風貌の三代目が見るからに悔しげに下唇を噛んだ。

「すごかったー！さすがメイジン・カワグチ！」

「もつと見てたかったなー」

「あのお爺さんも何気に凄くなかった？」

「おい、AGE—1使いの爺さんって…いやまさかな…」

「さつき地震があつた気がしたけど…気のせいだよね」

バトルを観戦していた取り巻きが、口々に感想を零している。

近くに来ていると連絡があつて待ち合わせていたのが、ここ「ビツグリング」なのだが、突然「一回、如何ですか？」と誘われたために愛機を持ち出したのだ（いや、どうせそうなるだろうと思っていたし、こちらとしても戦いたい気持ちがあつたのは正直なところだ）。

「あ、あの、サインください！」

「俺も…「いいだろう。そこへ並ぶがいい」

「さすがメイジン！受け答えも3倍早え！」

それぞれに愛機を回収すると、取り巻きが三代目へ集まる。

休憩スペースへ移動する直前、彼がこちらへ一瞬だけ首を巡らせた。サングラス越しの視線が意図するところは、「しばらく待ってい

てほしい」ということだろう。

察して、こちらは手持無沙汰となってしまう。愛機をAGEデバイス型のケースへ収納し、ビッグリングを経営している店主の元へ歩み寄った。

既に閉店間際ということもあり、来客の対応を終えているファッションモデルのような店主——フルデ・アルトが、こちらに気付いて顔を上げた。

「おや、アズマさん。決着はつきました?」

爽やか且つ深みのある声は、外見と相俟ってフレデリック・アルグレアスを彷彿とさせる。しかし、首からかけるエプロンには「燃え上がれガンブラー!」とでかでかとプリントされており、イメージを台なしにしてしまっていた。

彼に対して、肩を竦ませる。

「時間切れだ。最近はどうも、良い相手とのバトルが決着つかずで終わることが多い」

「それは残念なことですね。天の巡り合わせが悪いのか、遺恨のあるファイターから五寸釘でも打たれているのでは?」

「ワシをからかっているのかお前は」

「ハハハ、まさか。冗談ですよ」

こちらの苦笑に、朗らかに笑って返すアルト。

「それはそうと、地区予選見ましたよ。トモヒサ君達、好調の様子ですね」

「ん?ああ、『スターブロッサム』か。そうだな:まずは初戦通過を成したことで、三人の士気が上がっているところだろう。確かな手応えは感じるぞ」

「それは興味深いですね」

アルトが、眉目秀麗な顔立ちに関心を寄せたような表情を作る。

「お前とて、今後も会場に出向くのだろうか?その目で確かめるといい」
「なるほど、分かりました。そうさせていただきます」

そうして話し込んでいると、店内にいた客が次々に店を出ていく。どうやら閉店時間のようだ。

最後に、サインの書かれたガンプラケースや色紙を持った一団がアルトに挨拶をしながら店を出て行き、その後を追うように三代目が姿を現す。

こちらへ歩み寄りながら、サングラスを額に上げてオールバックにしていた髪を下ろす。

三代目メイジン・カワグチの本来の姿、27歳とは思えない未だ少年の面影を残している、ユウキ・タツヤだ。

「すみません、待たせてしまつて」

先程までの燃え上がる情熱の男は鳴りを潜め、精悍ながら優しげな表情をこちらへ向ける。

「いや、気にするな」

「いつもながら御苦労さまです」

アルトが、小さく会釈をした。

この二人の関係は、少し複雑である。

フルデ・アルトは、ガンプラ界に覇を成す名門「私立ガンプラ学園」を卒業しており、ユウキ・タツヤは、少年期にその学園の前身となつた「ガンプラ塾」に入門していた過去を持つ。

とはいえ、アルト自身は一つの問題を抱えていた。

修学過程で彼のガンプラ制作の技術は目覚ましい発展を遂げたが、ガンプラバトルだけは結果を残せずに卒業している。このことから、企業抱えのファイターや、とある愚弟と同じ優勝賞金稼ぎとはならず（なるべきではないのだが）、ガンプラショップの店長という進路を選んだのだつた。

そんな彼にとつて、“三代目メイジン・カワグチ”ことユウキ・タツヤとは、大願を成就させた大先輩と同義の存在でもある。恐らく、今でも憧憬の念を抱き続けていることだろう。

アルトが、自分とユウキ・タツヤに椅子を差し出した。

「それで、本題だが……例の企画」の話だつたな？」

「ええ、その通りです」

椅子に腰掛け、リラックスした格好で話し合う。アルトが「自分はあちらで作業していますので」と言い置き、バックヤードへ入つて

行った。

ユウキ・タツヤが語を次ぐ。

「既に、コンタクトを取っていた皆さんの協力は得ました。こちらが、そのリストになります」

真つ赤なカバーが派手なスマートフォンを取り出し、それをこちらへ渡した。受け取って画面を見ると、数人の名前と国籍が大まかに表示されていた。

その一番目に、目を留める。

「む…ロシアのオリガ・ブルーメンフェルトもか？」

「ええ、中々首を縦には振ってくれませんでした。『燃え上がるバトルを約束する』の言葉が、決定打になりましたね」

「地方公演など忙しいだろうにな…全く、ガン普拉バカという者は」
物静かな淡然としたチェリスト、オリガ・ブルーメンフェルト。彼の奏でるチェロの調べは、聴衆を一瞬で虜にする演奏だと賞される。そんな人物だが、意外な顔も持っていた。そのもう一つの顔が、ガン普拉ビルダーなのだ。

古い大会で数度対したことがあるが、奏者であった時のイメージを一変させるような大胆かつ精緻な操縦をする男だった。その上、使用するガンプラは巨大なモバイルアーマー一筋と、かつてその名を轟かせたモバイルアーマー使い、”灼熱のタツ”に勝るとも劣らない。

対したファイターは口々に「二つの楽団の演奏を聴いているようだった」と述べ、誰が言い出したのか”ワンマン・コンツェルト”の異名を与えられていた。

現在も地方公演など势力的の上、以前よりはガン普拉バトルの表舞台には姿を現さなくなっていたオリガが、賛同してくるとは意外だった。

これも、ユウキ・タツヤという男の成せる業か。

「うむ…何れも名のあるファイター達だな。レジーナはともかく、他の者と顔を合わせたことはないが、その活躍は聞いている」

ユウキ・タツヤ自身が選定したとされるファイター達は、近年のガン普拉界に何かしらの影響を及ぼした人物ばかりであった。

その中には、かつて教授したレジーナ・ディオンも含まれている。それもそのはずで、”レディ・カワグチ”に次ぐ女流ファイターとしてヨーロッパ・レディース・チャンピオンの座に登り詰めた若き才女を、この男が見逃すはずもないのだ。

「それに記載されている通り、既にお伝えしたイブキ君とフェイロン氏、そしてカリナさんもいます。空席だった序列10番目も、つい先日決定しました」

言われ、左手の人差し指で画面をスクロールし、リストを10番目に合わせた。

それと同時に、悪戯っぽい笑みをしながらユウキ・タツヤはその名を告げる。

「”裂空の墮天使”こと、オトサキ・ライカ氏です」

「……………」

思わず、言葉を失う。

偉大すぎる人物だとか、聞いたことがない名前だとか、異名が少々痛いとか、そういうった理由からではない。それは極々単純である。

頭痛のような何かを感じ、こめかみを抑えた。

「…………何故、オトサキなのだ……」

「いいじゃないですか、好きですよ私は」

やたらとにこやかに笑うユウキ・タツヤ。

…オトサキ・ライカ。その名は、死んでも忘れないことだろう。自分をあそこまで苦しめた（色々な意味で）教え子など他にいないからだ。

先程引き合いに出した愚弟こそ、彼女である。

今から丁度10年前の”とある事件”にも浅からぬ関係を持つ上、当時共に弟子だったシマ・マリコとエニワ・シロウ（菱亜学園のガンプラ部顧問）が自分達に協力する事態も引き起こしたのだ。

今となつてはいい思い出…などと、楽には片付かない。

「奔放であり、自由人であり、手が付けられない。故に魅力的とも言える」

「オトサキがそのような評価をされるとは、ビッグ・ザムが逆立ちする程

にないことだと思っていたぞ」

スマートフォンを返却しながら嘆息した。

「ジオングにも足が生えましたからね。ビグ・ザムも逆立ちくらいできますよ」

受け取りながら、よく分からない喩えでユウキ・タツヤは返す。

「まあ、いい。お前が選んだのだ、ワシに異論はない」

「そう言っただけだと思います。最初の関門、序列1番目である”殲滅のアズマ”に了解を得るのが筋だと思いましたが」

「…だから、買い被りすぎだと言っている」

まるでこちらの反応を楽しむかのように、くすくすと笑う。

そう、以前から誘われていた”例の企画”に、一昨日承諾の返事を送っていた。その企画に不可欠とされる”10人から成る集団”、その目指す理念を精査し吟味した結果、ようやく参加の踏ん切りに至ったのだ。

この企画は、少なからず日常に干渉してくる内容である。しかし、立案者である”三代目メイジン・カワグチ”とヤジマ商事の熱心なコンタクトが彼らの勤務する会社などにも持ち掛けられ、理解とサポートを取り付けていた。

無論、自分の勤務する英志学園も例に漏れず、学園長や教職員達から激励の言葉を送られたりしている。

60歳を超えて、尚大仕事とは…。我ながら、まだまだ人生に未練があるようだ。

「さて、伝えるべき事柄は以上です」

そう言っ、ユウキ・タツヤが椅子から立ち上がる。

「なんだ、それだけなのか？ わざわざこんな田舎に向向いておいて」「言っただけでしょう？ 近くに来ていたので寄っただけですよ」

ロングコートを翻し、バックヤードの方へ声を放る。

「店長、世話になったよ」

「おや？ もういいんですか？」

アルトがひよっこりと出てきた。

「うん、これで失礼するよ」

「そうですか、またいつでもいらしてください。いつか、子供たちに軽い手解きなどもよろしければ」

「その時は、是非そうさせてもらおうよ」

そして挨拶を交わし、ビッグリングを出る。自分も後に続き、涼しい夜風が体を包んだ。手狭な二輪駐車場には、夜にも関わらず鮮烈な存在感を放つ真つ赤なサイドカーが駐車しており、ユウキ・タツヤがそれに跨ってこれも真つ赤なヘルメット（レッドウォーリアのマスク部分を思わせる意匠がある）を被る。

ふと、気になる点を思い出す。

「ユウキ・タツヤよ、最後に一つ訊いてもいいか？」

「なんですか？」

「この企画、名称はまだ決まっていないのか？」

「…まだ正式に決まった名称ではないですが」

ユウキ・タツヤはそう言い、真つ赤なヘルメットの黒いバイザーを下ろす。

そして、”三代目メイジン・カワグチ”の声で告げた。

「10人の豪傑達…そう。あえて名を付けるならば、”ベストテン・ファイターズ十傑集

”

”…大層な名だな」

「若きビルドファイターの前に立ち塞がる壁。その明確な認識を与えるのに、これ以上なく相応しい名であると、私は自負する」

「そうか。ならば、お前に任せるとする」

「任せよう。では、これにて失礼する」

そう言つて三代目は、真つ赤なサイドカーのエンジンを唸らせ、鮮烈な印象とは裏腹にきちんとした安全運転で去っていった。

その走行音が消えるまで待つてから、駐車してある自分の車へと歩み寄る。特段目立ったところもない極一般的な普通車だ（車色は薄いパープルで、これは妻が選んだ色だ）。

ドアノブに手をかけ、ふと顔を上げる。峰々からの吹き降ろしである、梅雨入り直前のやや湿った夜風が、体を通り抜けた。

（若きビルドファイターの前に立ち塞がる壁、か）

奇跡の物質「プラフスキー粒子」が発見されたことでガン普拉バトルが日本で興り、国境を越えて広まり、ゲームの枠をも越えて世界的競技となった、あれから早20年となる。

まさに、光陰矢の如し。最後の仕事とばかりに教師として駆け抜けた日々は、今はもう過去。ようやく肩の荷が下りたと思っていた。だが、気づいてみれば結局、また誰かの指導者たる自分がここに、いや——英志学園にいるのだ。

（人生最後の大仕事になりそうだな…）

つまり、ガン普拉ファイターとしての集大成を求められる仕事でもある。愛機であるガンダムAGE-1を、如何にして完成形に仕上げろべきか…。

チーム『スターブロッサム』の地区予選を見守る傍ら、こちら水面下で進行しなければならない。

久しぶりに、腕が鳴るというものだ。

.....

全日本ガン普拉バトル選手権、その地区予選が終わって直後の月曜日。

土日に別けて行われた各ブロックの第一回戦が全て終了し、勝ち上がったチームは翌週の二回戦目に向け、気持ちも新たに準備を進めている。

ここ英志学園も例に漏れず、チーム『スターブロッサム』の三人も心境は同じである。

とはいえ、学生たる身分には別のイベントも同時に襲いかかっていた。

「お前ら、部室に来て早々に疲れ切った顔してんな…」

ガンプラ部の狭い部室で棚から工具類を取り出すカトー・トモヒサが、机で腕枕をしながら顔を伏せている自分達を一瞥する。

「ガンプラに一番時間をかけてたトモにいが、何で一番何ともないの…？」

「私もハルジオンに付きつきりだったのに、この差は…？キャラ的にこうなるのって、トモヒサのはずだよねえ…？」

「どう見られてんだオレは」

隣で同じ格好で伏せているのは、マゼンタ色のサイドテールを机の下に垂らす（毛先は床に触れていない）ジニア・ラインアリスである。彼女と一緒に顔だけを前に向け、自分——キンジョウ・ホウカもぼやいた。

「中間テストくらいでグロッキーになる方が分からんわ」

中間テスト。

そう、全日本ガン普拉バトル選手権のことで忙しかったために忘却の彼方へ消えていたのだが、学生たる身分に必ず襲いかかってくるイベントだ。

「何も、地区予選の初日のすぐ後じゃなくてもいいじゃんねー。結局、日曜日だって会場に行ってたんだしさー」

ジニアの言う通り、土曜日にトーナメントが組まれた自分達には日曜日という余裕があったはずなのだが、他チームの試合の様子もつぶさに観察する用事があったのだ。テスト勉強をする時間は、あまりにも少ない。

の、はずだが。トモヒサだけは余裕の様子だった。

「テストって言ったって、範囲は大したことなかっただろ？板書をちゃんと写してりゃ、簡単な問題ばっかだったぞ」

「あうう…トモヒサのキャラが崩壊するう…」

「余計なお世話だー」

ジニアはそう言うが、自分は知っている。

トモヒサの学力は、はつきり言って自分より数段は上なのだ。と言うのも、そもそも自分は英志学園に特待入学、ジニアの場合も交換留学であるのに対し、トモヒサは正攻法で、入学試験をパスしての入学なのだった（カネダ・リクヤも同様である）。

（学年が同じだったら、一緒にテスト勉強したんだけどな…）

現実是非情だった。

「まあ、そうは言っても赤点ってことはないだろ？………ないよな？」

トモヒサは、ピンバイスを手に取りながら怪訝そうな顔でこちらを見遣る。

伏せたままジニアと顔を見合わせると、互いに乾いた笑いが溢れた。

「ハア…ま、その時は纏めて面倒見てやるよ」

「カトー先生…!」

「だー…うるせえ!」

棚のケースを押し込みながら、声を上げるトモヒサ。

「賑やかだなあ…」

と、そこへ部室のドアを押し開け、カナダ・リクヤが入ってきた。

「ん…リクヤか」

「また三人でコントやってたのか?」

「また、って何だよ、またって」

「ハハハ、まあそんなことはいいんだ。キンジョウとラインアリスもいるなら話は早い」

「あん?」

そう言つて、リクヤは椅子に腰掛けてスマートフォンを取り出した。暫くしてから、画面をワイド表示にしてこちらへ向ける。

「昨日、日曜日にお前たちも見ただろ? 礼砂学園れすなの試合」

画面に映っているのは、確かに昨日見た試合と同じ映像だった。

「機動戦士ガンダム THE ORIGIN」の機体で構成されたチーム（ヴァッフ、ドム試作実験機、グフ戦術実証機）が、港湾基地の陸上から海中へ向けて武器を構えている。

そうして三機が待ち構えていると、ゆつくりと海面が盛り上がり始めた。

『今だー撃ちまくれえ!』

リーダーの声を合図に、一斉に攻撃が始まる。しかし、その声は焦っているようにも聞こえ、三機の攻撃も間断なく仕掛けているが、何処か忙せわしない。

怒涛の如く弾丸が撃ち込まれ、海面が轟音と共に爆ぜながら高く水飛沫が立ち上がった。

その直後。

——ビュウウウウオオオオ!!

水飛沫の中から一筋のビームが奔り、ドム試作実験機に直撃して爆発させた。

『な、に…!?!』

続け様、もう一射。

次は、グフ戦術実証機を狙っていた。しかし、然しものファイターも反応が遅れることはなく、サイドステップを駆使してビーム砲撃を回避する。

『くっ…！仲間の仇を討たずしてやられ——』

と、その瞬間に海面が大きく弾け、津波のように”白くて巨大な物体”が上陸してきた。それは凄まじいスピードで迫り、グフ戦術実証機を巨大なハサミで掴み上げた。

——グツシヤア!!

そして、抵抗する間も与えず、一息に圧碎。

港湾基地のコンクリート面にバラバラと破片が降り注ぎ、巨大な物体はハサミを振って残った破片を撒き散らした。

振った勢いのまま重心移動をすると、先細りした頭部の下にある顎部を左右に開き、メガ粒子砲の砲門を露出させる。

『く…くそお!!』

ヴァッフのファイターは、慌ててバーニアを点火させて逃げようとするが、真っ白な怪物からは逃れられない。

極太のメガ粒子砲が解き放たれ、ヴァッフを消し飛ばした。

白くて巨大な物体——ヴァルヴァロ・ヴァイスは、顎部を閉じてモノアイを強く点灯させる。

この試合を観戦していた人が、口々に白いモビルアーマーを見てこ言うたらしい。

”白鯨”、と。

「…ああ、確かに会場で観た通りだ」

映像が終わり、トモヒサが神妙な表情と声音で言った。

自分も、昨日の記憶が蘇ってくる。

「で、何が言いたいんだ？」

「少し、この”白鯨”…ヴァルヴァロ・ヴァイスの動きや完成度を観察してみたんだが、とあるビルダーに似ている気がしたんだ」

「とあるビルダー？」

リクヤは頷くと、画面を操作して別の動画を表示した。

それは、海外のバトルロワイヤル大会の映像である。

この動画にも、巨大なガンプラが登場していた。機体色は樹海の景色を思わせるような深緑で、脚の代わりにプロペラントタンクが下に伸びている。左右に大きく出っ張った肩部装甲も特徴的であり、その姿は巨大な昆虫のようでもあった。

かのアナベル・ガトーに、「ジオンの精神が形になった」と言わしめたモビルアーマー。

「ノイエ、ジール…」

映像を見ながら、思わず声が震える。

フィールドは宇宙空間。隕石群が密集しており、アステロイドベルトのようだ。その空間を、量産機らしきモビルスーツが10機ほど飛んでいる（ビルゴやヤクト・ドーガ、さらにローゼン・ズール、ファルシアなどもいる）。

それらモビルスーツ達は、バトルロワイヤルにも関わらず共闘の姿勢を取っていた。向いている方向は一点、深緑のノイエ・ジール。

そして、一斉に攻撃が始まった。

様々な色の光軸、ファンネルやビットが巨大なモビルアーマーを攻撃するが、それらは悉くノイエ・ジールのIフィールドの前に無力化されていった。

さらに、ノイエ・ジールが肩部装甲の下から無数のファンネルを射出する。本来、ノイエ・ジールにはない装備である。

ファンネルが、実体弾を全て撃ち落としていく。

「凄い…」

自分も遠隔武器を使用するため、映像に引き込まれた。

やがて、迎撃一辺倒だったノイエ・ジールが突如として動き出した。凄まじい勢いでアステロイドベルトの隕石を押し退け、その傍ら、次々にモビルスーツ達を撃墜していく。その内の何機かは手練れのファイターらしく、的確に回避、或いはファンネルを撃墜していた。しかし、ノイエ・ジールは頭部のモノアイを滑らせて撃ち漏らしていたローゼン・ズールとファルシアを捕捉する。両腕の有線クローアームを射出し、二機を掴んでそのまま握り潰した。

さらに、その場で回転を初め、全身の火器という火器から砲撃を開始する。

そこからは、一方的だった。

アステロイドベルトごと破壊し、無数の残骸と隕石の破片が漂うデブリ帯へとフィールドを変えてしまったのだ。

最後に巨大なモノアイカメラが点灯し、動画が終わる。

「…リクヤ、お前の言いたいことが分かったぜ」

真剣な表情で、トモヒサは顎に手を添えながら言った。

「つまり、礼砂学園はこのファイターと何らかの関係がある。若しくは、その弟子の可能性を示唆してるんだな？」

「ご明察」

大きく頷くリクヤ。

「あ、待って。私知ってるよ、このファイター。ロシアの”ワンマン・コンツェルト”だよな？」

ジニアが、思い出したように顔を跳ね上げた。

それに、意外そうな顔でリクヤが言う。

「よく知ってるな」

「ジオンの精神だもくん。このノイエ・ジール、去年、別の動画で見たことあるよ」

「モビルアーマー、か」

トモヒサは、尚も難しい表情だ。

「もし、このノイエ・ジールのファイターと何かしらの関係があるとし

たら、思わぬダークホースになり得る」

「まあ、とは言っても英志が礼砂に当たるとは準決勝まで分からないけどな。トーナメント表では反対側のブロックだし」

「いや、助かるぜ。あくまで可能性だけど、警戒するに越したことはないからな」

「そうか。少しでも力になれたなら嬉しいぜ」

リクヤは、そう言ってスマートフォンをポケットに仕舞った。

そして、突然に話題が変わる。

「あ、そうそう。妹から言われてただけけど、部活が終わったらちよつと古武道部に行ってやってくれないか、トモヒサ？」

「ん？ミソラが？…別に構わないが」

トモヒサは、鳩が豆鉄砲を食ったようにきよとんとする。

しかし、自分は咄嗟に理解できた。

(あ、ミソラさん、いよいよよ…?)

彼女のトモヒサに対する感情は、それとなく察している。いよいよ、何かしらの行動を起こすつもりだろうことは、容易に想像できた。

「ま、そんなわけで、よろしく」

妙に軽快な口調と足取りで、リクヤは部室から去っていった。

残されたこちらは、何とも言えない空気にされている。

「ジオンの精神…私も負けてられないな…!」

只一人、ジニアだけは息巻いていた。

.....

その夜。

翠風寮の自室に戻ってパジャマに着替えると、スマートフォンにメールが届いた。

表示すると、送り主はテライ・シンイチだった。以前、ナラサキ・フウランを介することに疑問を感じ、こちらから連絡先を交換しないかと持ちかけていた。

それから日が経ち、初めてのメールだ。

(何か用事かな…?)

そう思つて、内容を読む。

『夜分に済まない。』

メールを送らせてもらったのも、明日のことについて聞きたかつたからだ。

予定はあるだろうか?』

という、簡素な文面(ここはトモヒサに似ているかもしれない)だけだった。

記憶を掘つて、文を打ち込む。

『大丈夫です。』

では明日、予定を空けておきますね』

送信。

そのままじつとして待っているのも体裁が悪いので、椅子に座り、時々触っているガンダムAGE-1スパローを手にとって動かす。そして程なくして、着信音が鳴った。

『早々の返信、有難う。』

記載を忘れていたが、明日は学園の外に出ようと考えている。

そのつもりで、必要であれば服装なども準備していてくれたまえ
それでは、お休みなさい』

「……外?」

もう一度、文面を読む。

学園の外に?

二人で?

服装なども準備して?

「それ、って…」

中学生の頃、友人から聞いたことではしか内容を知らないが、簡潔に端的に纏めると、非常に合致したカタカナ三文字が浮かぶではないか？

「……………デート」

寝付くまで、少し時間がかかってしまった。

A c t . 1 8 『恋は思案の外Ⅱ』へ続く

(一体どういう風の吹き回しなんだ…?)

タタンタタン、と規則性のある音と揺れを感じる。

休日のため、火曜日の午前中にも関わらず電車を利用する人は多かった。小学生から高校生、そして老夫婦などもちらほら見かける。都会(地区予選会場のある街だ)へ遊びに行くつもりだろう。

その中であって、自分から見ても微妙な距離感があるのが分かる二人組が座っていた。

「…先輩、少し意見を聞いてもいいですか?」

「…へ? な、何だ?」

英志学園高等部二年、カトー・トモヒサ。

英志学園高等部一年、カネダ・ミソラ。

常の学生服ではなく、私服に身を包んだ二人組だった。

「今度、またガンプを買おうと思ってるんですが、何かオススメとかありますか?」

「んー、オススメか…俺の感性はあまり役に立たないしな…。自分に合ったのを選ぶといいと思うぞ。ミソラは、ストライクルージュを持ってるんだっただよな?」

「はい、この前ホウカさんにちよつと教えてもらって作ったのが」

「ホウカがねえ…。何でリクヤに教えてもらわなかったんだ?」

「え? 兄ですか? えつと…それは、ですね…」

アハハ…と、何やらはぐらかすミソラ。

こうして余人を介さず二人で会話をする機会はほとんどなかったが、礼儀正しい口調には少し驚いた(兄のリクヤに対してはキツイ印象が強かっただけに)。

何故、今こうして二人で電車に揺られているのかと言うと、昨日の部活動終了後に遡る。

リクヤから古武道部に顔を出すよう言われ、その通りに5号館の道場へ赴いた。白の胴衣に紺の袴を着ていたミソラから、「明日、ガンプ

ラシヨップに行きませんか？」と全く想定外の誘いを受けたのだ。

僅かばかり面を食らったが、どうせやることもない上に旧知の仲なので断る理由もない。どうせなら他の面子も…と提案してみたが、何故かそれは拒否された。

向かう場所は趣味人の世界だが、男女二人で出掛けるという事態は、さすがに経験のない自分でも”あのカタカナ三文字”が過る。これではまるで…

(デート、だよな…)

それを裏付けるかのように、時々車内の男どもの鋭く刺さる視線を感じた。

ミソラの私服は、スポーティなパンツルックに桃のブラウス、そしてコーディネートによく似合う茶髪のショートカットという出で立ち。隣に座っているだけなのに、妙に誇らしいほどだ。

一方自分とは言えば、二枚襟の特にデザイン性があるわけでもないシャツと普通のデニム。服装にかける金など、ありはしない。

とはいえ、こんな組み合わせのカップルというのも、いないわけではない。

(違う、違うぞ…俺たちはこれからガンプラシヨップに行くんだ…)

何故か、抗議したくなった。

「…先輩？」

「あ、ああ、何だ？」

「この、フリーダムガンダム？って言うのが気になるんですけど」

「フリーダムか。ちよつと上級者向けな機体だが、作って飾る分にはいいガンプラだ。バトルでは、追々慣れていけば問題ないだろ」

向けられたスマートフォン画面には、通販サイトの「HGCEフリーダムガンダム」の完成見本が表示されていた。

「後、塗装なんかもやってみたいなあ…なんて。ストライクルージュの色が気に入ってるので、このガンプラも近い色にできたら」

「赤いフリーダムか？…」炎トライのツバサ”を思い出すな」

「誰ですか？」

「ああ、悪い。ちよつと思ひ出したただけだ」

人呼んで、”炎トライのツバサ”。派手な赤いフリーダムガンダムを愛機とする、界限では有名なガンプラファイターだ。三年前から様々な大会で活躍し、その度に名勝負を繰り広げることで人気を集めている。

お隣の埼玉に在住らしいが、これは余談だ。

ふと、イブキ・アラタから提供された「ドツズトンファー」が、このガンプラの武装を元に作られているのを思い出す。

「とりあえず、今日は色々やってみようぜ。ビッグリングなら馴染みの人もいるから、話も沢山聞けるはずだ」

「はいー」

そんな、青春らしさを微塵も感じさせない会話をしつつ、電車に揺られながら目的地へと向かった。

.....

——トモヒサとミソラが電車に乗ってから、やや時間を置く。

「ちよつと、薄着すぎるかな...?」

キンジョウ・ホウカは翠風寮の自室から出て、再度身形を確認する。

今日は湿度も低く、さっぱりした天気という予報だったため、薄着のコーデイナーを試してみた。胸元に花のレースをあしらった群青色のノースリーブに、ゆったりした白黒のチェック柄ブルームスカート。

ここ一ヶ月近くは色々と立て込んでいたため、服を買いに行く時間が取れなかった。入学前に買っておいた私服が役に立って、内心でほっとする。

(...うん。悪くない、はず)

別に、身形に無頓着というほどでもないが、”今日のような日”に着ていく私服というものを意識したことがないのだ。

常であれば気にすることもないのだが、一緒に学園の外に出る人物が人物だけに、妙に気負ってしまう。

いい加減なところで踏ん切りを付け、寮の玄関へ歩を進めた。

その間、ダイニングルームを抜ける時に数人のクラスメイトに目撃され、「あれ？どっか行くの？」や「ちよつと気合い入ってない？」と言われたが、全てに「うん。ちよつとね」と誤魔化しつつ返した。

「まさか、カトー先輩と…!？」

「いや、違うね。あれは違う。きつと元会長だよ…!」

「信じてたのに…!」

足早にその場を過ぎ去る。

クラスメイトの勢力圏から脱し、すぐに玄関に辿り着いた。上履きから靴に履き替えて外に出ると、上がり始めた太陽の光を受けて輝く銀髪を揺らし、美しい鼻梁が目立つ端正な顔がこちらを向く。

「来たか」

そして、たった一言を発しただけなのに、映画のワンシーンのような完璧な映像となった。

思わず、一瞬呆然とする。

「……あ！お待たせして、済みません」

「いや。私も、つい今しがた来たところだ」

これほど美男子という言葉が似合う、テライ・シンイチのような人間が他にいるのだろうか。そんなことを頭の片隅で思いつつ、彼の側へ駆け寄った。

彼の私服は、意外にもシックな印象で纏められていた。脚の長さを存分に活かした黒のパンツに、白のインナーの上に着る暗めの赤いカーディガン。赤、という辺りに拘りを感じつつ、派手ではなかった。

僅か衣服に意識が向く間に、シンイチもこちらへ視線を流す。一瞬目を丸くしたかと思うと、微笑を浮かべた。

「ほう、中々可愛らしい私服だ。似合っている」

「…っ!？」

面食らったのも無理はない。

(……………はっ!?)

あまりに直球すぎる言葉に、先程のようにまた呆然としてしまった。

「あ、ああ、あの……ありがとうございます……」

我ながら、何とうぶな反応なんだろう。

今まで、近くにいた男性と言えば父親と師匠、そしてトモヒサ。何れも誉める部分があざれているため、シンイチのような“異性として”の誉め言葉をかけられたのは、産まれて初めてのことだ。

(わあああ……は、恥ずかしい……)

自分でも顔が紅潮していくのがはつきりと分かる。慌てて、気付かれまいとシンイチの前に出た。

「い、行きましようか、テライ先輩！」

「ん？ああ、そうだな。では、行こうか」

何故か自分が率先してリードしながら、その後をシンイチが歩くという、奇妙な距離感。

アーチ状に天を覆う木々の木漏れ日の中を歩きながら、ふと思い出した。

(あれ？そういえば、何処に行くんだろう……?)

まあ、それは後で聞けばいいか。

今は、あまり顔を見られたくないから。

……

さて、ようやく着いたか。

電車で一時間近くかかるこの場所にわざわざ出向かなければならないのも、地元にプラモデルショップがないせいだ。

とはいえ、通販を利用すると時間もかかる上、思っていたものと違う商品を購入してしまう場合もある。やはり、実際に店頭で吟味した方がいい。

「ああ……ねみ……」

「てゆーかよ、うちでガンプラ作りたい」

駅のホームに降り立つ自分の後ろに続き、後輩の二人も降りてきた。

何やら文句をぶつぶつ言いながら。

「はあ…。仮にも選手権の代表なんだから、もつと自覚を持って」

常のようにため息を吐きつつ、チームリーダーとして二人に喝を入れる。

「へい…ああやっぱねみ」

気の抜けた返事をしながら目尻に溜まった涙をこするのは、項で長い髪を一束に結うガドウ・ラン。ガン普拉バトルでは、最強と信じて疑わない愛機「ガンダムクロスエックス」を駆る。

「つつてもよお、わざわざ三人で買い出しに行く必要あるのかあ？」

こちらは、癖のある茶髪とやや大人じみた体格が目立つ、アシヤ・シユウト。愛機は、中距離戦を得意とする重量型の「ツヴァイゼータガンダム」。

しゃつきりせず実に頼りないが、共に戦うチームメンバーだ。

「お前達がそういう態度だから、こうして自覚を持たせるために連れてきたんだろう」

「へいへい」

「わーつてるよ、せつちゃん先輩」

「その呼び方はやめろ…!」

本当に分かっているんだか…。

自分のフルネームはオオゾラ・ユキナリのだが、名前の「雪成」をもじって「せつちゃん」らしい。甚だ不本意な渾名だ。

自分のガンプラが機動戦士ガンダム00系列で、さらにダブルオーガンダムを意識しているのは確かだが、自分まで刹那・F・セイエイに似ているとは言いがかりもいところである。

「じゃあ、行くぞ」

そうして、二人を伴ってホームから改札を抜け、小ぢんまりとした駅舎から外に出る。スマートフォンで地図を確認し、ガンプラショップ「ビッグリング」までの道程を再確認した。

「ここから近いな。歩いて行こう」

「ええ〜!タクシーにしようぜえ〜」

「今日は陽射しも強いしさ、そうしようぜ?」

「電車代は余分にあるが、無駄遣いはできないだろう?文句ばかり

言っていないで歩くぞ」

「ドケチ！」

「うるさいー！」

そんなやり取りをしながら、人の往来もまばらな歩道を歩き始めた。

ふと、この町について思いを巡らせる。

それほど活気のある所ではないのは以前から知っているが、最近では話題の絶えない町になっていた。元々、英志学園という名門校が存在することで有名ではあるが、特にガンブラ界隈では、昨年にその学園が送り出したチーム『スターブレイカーズ』が、初出場ながらに準決勝まで勝ち進んだことで話題を呼んだのだ。

そして今年も、剣道だったか空手だったかよく覚えていないが、栄えある賞を授与された一人の女子中学生(当時)が英志学園に入学し、新生したチーム『スターブロッサム』のエースとなった。

話題にならない方が不思議というものだ。

(初めてこの目で見たが、確かにエース足り得る腕を持っていたな)

先日の地区予選。”黒い悪夢”ことカトー・トモヒサのガンブラ・ガンダムヘリクリサムも目を見張ったが、新参の二人の戦いぶりも看過できないものだった。

そのチームが次の相手だと言うのだから、こちらも気を引き締めて臨まねばならない。

(…だというのに、この二人は…)

歩きながら背後でふざけ合っているチームメンバー二人からは、緊張感の欠片も感じられなかった。

「…纏め上げることができてるのか、自信がなくなりそうだ」

「ん？せつちゃん先輩何か言った？」

「いいや。というかせつちゃん先輩はやめろ」

こちらの不安など何処吹く風とばかりに、ガドウの掠れ声。

いくら悩んでも仕方がない。自分でチーム『アンダブル』のリーダーを引き受けたのだ。今更それを違えることはできない。

自分にできることを、精一杯やるだけだ。

.....

「ん？ホウカさんはもう選んだか？」

「い、いえ…まだです」

「決めかねているようなら、私が三品ほど推奨するが？」

「だ、大丈夫です。自分で選びますから…」

少し早めの、昼食。

以前、ビッグリングでレートマッチに参加した時にも利用したファ
ミリーレストランを、”三人で”訪れている。

「私は、食後に抹茶パフェを頼もうかな」

「相変わらず日本の食に拘るのだな、ツツジ」

「ふふ。君こそ、ファミレスで雑炊とは外見に似合わず質素だぞ？」

「己が味覚による確かな判断だ」

自分の真向かいの席に腰かけているのは、菱亜学園チーム『ハウ
ンドクロス』の先手大将、人呼んで”キャプテン・アゼリア”ことカン
ザキ・ツツジ。

その出で立ちは鮮烈な深紅の学生服ではなく、落ち着いたブラック
のころみシャツに下はカーキ色のスカークォ。まるで大学生かと思
間違うような、エレガントな大人の雰囲気だ。

お品書きを顔に被せるようにし、こっそり二人を盗み見る。

どういふことなのか、簡単に纏めるとこうだ。

どうやら、シンイチは昨晚のメールにカンザキ・ツツジも同伴する
旨を書いていたものと勘違いしていたようだ。そのため、電車を降り
て彼女に会うまで、そのことは一切知らなかった。曰く「粒子の中だ
けでなく、公私においても親睦を深めてほしい」とのこと。

だからと言って何か不都合があるわけでもないし、それどころかシ
ンイチと二人きりという状態が解かれ、普段のツツジの姿をこうして
垣間見ることができて良かったとすら思っている。

しかし…こうして仲の良さそうにしている姿を見ると、胸の奥
で何かが騒いだ。ツツジに対する、シンイチの学園では見たことな

いような屈託ない笑みは、どういった感情からだろう。

「あとう…」

「む、何かな?」

その長い銀髪に包まれた顔が、こちらを向く。

「前から気になっていたんですが…お二人のご関係は、どういう…?」
「ああ、済まない。まだ言っていないかったな。関係というほどのこともないが、言うなれば戦友か」

「戦友、ですか?」

「分かりにくいだろう? 言い回しがくどいからな、シンイチは。そこから先は私が話すとして、まず注文してからにしようか」

そう言って、ツツジは店員を呼んだ。慌てて自分も早々に決め、注文を取り付ける。

「実は、私は帰国子女だな。中学校までイタリアに住んでいたんだよ」

「イタリア…あ」

「ふふ、察しが良くて助かる。シンイチが英志学園へ留学する前の年だ、知り合ったのは。当時私は14歳、シンイチは15歳だ」

「すると…4年前ですよね」

「うん、そうだ」

シンイチがイタリアの留学生だったという話は、トモヒサから聞かされている。だが、ツツジも同郷とは意外だ。

帰国子女ということは、産まれは日本なのだろう。しかし、口調が二人共少し（かなりかもしれない）特殊なのは以前から気になっていた。何か関係があるのかもしれない。

ツツジは、肩に降りてきた董色のポニーテールをかき上げながら続ける。

「その時、イタリアではタツグバトルトーナメントが開催されていて、私は出場するために相棒パティを探した。そして出会ったのが、この男テライ・シンイチというわけだ」

「もう遠い昔の話のようだな。今では、良き友に巡り会えたと感じている」

シンイチが、目を伏せながら感慨深げに頷く。

「あの頃は意見が分かれ、衝突することもあったが、な？」

横目でシンイチを一瞥しながら、ツツジが悪戯っぽく笑った。それに苦笑いを浮かべ、シンイチはグラスの水を煽る。

「すると…お二人はライバルでもあり、仲間でもあった、と？」

「うん、そういうことになるな」

「なんだか…そういうのって、素敵だと思います」

ふと、口を突いて出た言葉に正面の二人がきよとん、とする。

「私、そういう風に熱くなれるようなライバルがいまいませんでしたから…トモには、ちよつと違いますし」

「古武術の方でいなかったのか？」

「はい。そもそも、一般的なスポーツとは違って、対抗する競技ではありませんし」

「なるほど。言う通りかもしれないな」

気取っているのではなく、演武大会は技の評価のみであるため、自然と対抗する意識は低い。無論、そういうこともあるだろうが、自分にはついで意識する相手は現れなかった。

「だが…今は違う。そうだろうか？」

こちらを、真つ直ぐに真摯に見詰めてくる、ツツジの鋭い視線。

「はい…はい、今は違います。ガンプラ部に入って、チームを組んで、それから出会ったファイター達はみんな強くて、本気で楽しんでいて…。だからこそ、私ももっと強くなりたい、もっとガンプラのこと、ラナンキュラスを知りたいと思いました」

「そのファイターの中に、私も含まれていると思って相違はないかな？」

尚も真つ直ぐに見詰めてくる青い相貌に、臆せず力強く視線を返す。

「勿論です」

それだけを言った。

すると、暫し目を伏せたツツジが静かに笑う。

「そうか…ふふ。あの時感じた”もの”は本物だったか…ふ、ふふ」
「えつと、あの…カンザキ、さん？」

「ああ、この女は、少しおかしくてね。気にしな…痛ッ!？」

突然跳ね上がるシンイチ。大方、ツツジの踵にでも踏まれたのだろう。

二人の意外な面を次々と知り、少し遠くに感じていた印象が、ゆっくりと溶けていくのを感じた。

(そうだよ。だって、ガンプラが好きだけの人達だもんね)

手の届かない次元にいるのではないか、自分では覆すことなど不可能なのではないか。強いビルドファイターに出会う度、そんな考えを募らせていたことをようやく自覚した。

しかし、それはもつと単純で簡単なことだったのだ。みんな同じ、何も変わらない人間。ツツジに対して、狭い見識しか持っていないかった自分を心の中で叱咤した。

ガンプラが好き。だからこそ、強くなれる。

「…ゴホン。それはそうと、午後のことだが」

居住まいを直し、咳払いをしてから切り出すシンイチ。

「ビッグリングへ赴こうと考えている」

「ほう？それは何故だ？」

「特別なことはない。ガンプラで繋がる親睦は、ガンプラで深めるのが最良と判断したまでだ」

「些か芸がないとは思わないのか…女子を二人も侍らせておいて」

「大きな世話だと、あえて言わせてもらおうか」

先程の熱くなった気持ちで忘れていたが、現実を直視すると人生の一大事を体感しているのではないだろうか(トモヒサとジニアと同じ構図であるが、ワケが違う)。

意識すると、やはり気になって仕方がない。

「ホウカさんは、それで承知してくれるか」

「は、はい。大丈夫です」

「それは良かった」

にこりと、シンイチが優しげに笑う。

「これだから、いつまで経ってもナラサキさんの気持ちには気付かないのだな…」

小声で、ツツジは呆れていた。

A c t . 1 9 『恋は思案の外Ⅲ』へ続く

Act. 19 『恋は思案の外Ⅲ』

スマートフォンを鷲掴みにし、画面を口元に向ける。日本の古い刑事ドラマで見た格好を真似てみた。

「目標が食事を終えた。」キャプテン・アゼリア」と何か意味深な会話をした模様。繰り返す、目標が食事を終えた。送れっ」

『なんだいラインアリス、その喋り方は』

通話の向こうから、シマ・マリコがツツコミを飛ばす。

「言ってみたかったんだよね〜」

『それはいいから、キンジョウはどんな様子だい?』

「ちよつと緊張してるっぽいけど、さつきよりは柔らかくなったかな?」

『そうかい。二人共妙な喋りをするけど、人柄は良いからね。それが緊張を解してくれたんだろう』

目深に被った帽子から、ちらりと眼鏡越しに見る。

窓際の席に座る三人は、まるでファッション雑誌のモデルの集まりかと思うほど画になっていた。特にホウカの真向かいに座る二人は、完璧な着こなしの上に素材も極上だ。

(いやいや、ホーカだって負けてないよ)

ふと、自分の身形を確認してみる。

髪は纏めて団子にし、大きめの帽子の中に隠した。服も目立たないように茶系にし、せめてものファッションとして短パンのオーバーオールを着ている。伊達眼鏡も完備し、完璧な変装だ。

何で尾行紛いのことをしているのかと言えば、昨晚寝る前に休日はどうするのかと、何となくメールで訊いてみたところ『実は、テライ先輩から出掛けないかと誘われてて…(絵文字割愛)』という返信が来たからだ。

(だってそんなの…気になるじゃん…!)

ついでにマリコ(勤務中)を巻き込み、こうしてバレないように後を着けているのだ。

しかし、二人きりと思いきや、まさかカンザキ・ツツジまで一緒だとは。何のつもりなのかは分からないが、どうやらテライ・シンイチは「そういうつもり」で誘ったのではないようだ。

「あつ、目標が立ち上がった！移動する模様。追跡のカヒを問う」
『可否のアクセントが逆だよ』

急いで、注文しておいたいちごパフェをかき込む。

「シーマ様、また連絡するね」

『やれやれ。止めはしないけど、過干渉は程々にするんだよ？』

「りよーかい！」

三人がレジへ向かうのを確認し、スマートフォンの通話を切ってポケットに仕舞った。

マリコの注意は重々承知している。あくまでも見守るだけだ。

（本当は、仲を取り持ってあげたいところだけど、我慢だぞ。我慢：！）

会話の内容は聞こえなかったが、ここに来たということとは、ビルダーなら行く先は一つしかない。ガンプラシヨップ「ビッグリング」に決まっている。

何とも男女が訪れる場所には相応しくないが、そこはやはりガンプラバカなのだ。

レジの精算を終え、三人が外に出た瞬間に自分も急いで精算する。

「店員さん、急ピッチで！トランザムをお願い！」

「は、はあ…？」

.....

「おおとつとつと！」

ストライクルージュが、エールストライカーの大出力によって弾丸のように飛び出す。

「敵が編隊を組んできた。出力を出しすぎるなよ、迎撃だ！」

隕石に着地させたガナーザクウォーリアの、M1500オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲をハイモックの編隊へ向けた。

「ミソラは前に出てくれ。援護は任せろ！」

「りよ、了解です！」

威勢の良い返事をするミソラ。

ミソラのストライクルージュは、寮の自室から持参してきたものだ。出来映えに関しては素組みだが、ゲート処理などは概ね良好であり、初心者としては及第点といったところだった。

一方、今自分が操縦しているガナーザクウォーリアは、塗装の試作として組み上げてビッグリングに完成見本として寄贈していたものだ。黒い三連星の高機動型ザクⅡを意識した、黒・白・紫で塗装してある。

「狙撃の練習がてらってな」

数機が重なったところに、オルトロスの砲撃を撃ち込む。3機のハイモックを的確に捉えた。

ガナーザクウォーリアのオルトロスは元から威力が高い。それに、我ながら中々の出来映えのため、高性能に仕上がっていた。その分扱いは難しい部分もあるが、上手く物にできれば頼もしい武装だ。

さらに、二機、四機と立て続けに撃墜数を稼いでいく。

「よし、ミソラの援護に…お？」

ふとガナーザクウォーリアのモノアイを滑らせると、ストライクルージュは大振りながらも、振り抜いたビームサーベルでハイモックを撃墜していた。

「中々やるじゃねえか。けどな…」

しかし、その背後に一機のハイモックが回り込む。マシンガンの銃口が、エールストライカーを狙っている。

オルトロスの砲身を振って、狙いは大雑把にそのハイモックに向けてビームを放った。

「…！後ろに!？」

「周囲にもちゃんと気を配れよ」

背後の砲声と衝撃音に気付き、ミソラはストライクルージュを爆発から回避させる。

「ありがとうございますー！」

「気にすんな。それより、残りも片付けるぞ！」

「はい！」

拙いながらも連携しつつ、やがてハイモックの編隊を全て撃墜することに成功した。

「ふう、お疲れ」

「お疲れ様です！」

ストライクルージュが足場になっている隕石へ近付き、ガナーザクウォーリアの隣に着地する。

「宇宙のフィールドは経験あるのか？」

「はい、この間アズマさんにしごかれた時に。初めは難しかったんですけどね」

照れ笑いするミソラに合わせ、ストライクルージュも後頭部を撫でる。

「はー、よくやるよなミソラも。ホウカも率先してスパルタを受けに行くもんなー」

どうして自分の周りにいる女子は、こうもストイックなのか。アズマの指導となれば、生半可な姿勢ではすぐ根を上げてしまいそうなものだというのに。

それだけ、本気で取り組んでいるということなのだろう。

一先ず、他の利用者のためにプラクティスモードを終了し、バトルシステムからは一旦離れることにした。

「それじゃ、ストライクルージュをワンランク上に仕上げてみるか？」

「あ、是非！教えてください！」

手元にストライクルージュを抱え、ミソラは嬉々とした笑顔で答えた。

間に昼食を挟みつつ、幾つかプラクティスモードを試しているのだが、ミソラは驚くほどストライクルージュを使いこなしていた。ややエールストライカーの出力に遅れている部分はあるが、それに食らいついていく熱意を感じる。

(古武術って、そんなにガンプラバトルと相性が良かったのか…?)

いや、それは考えすぎか。

もしそうなら、今頃は門下生も大勢生まれているはずだ。スポーツとガンプラバトルの相性は確かに少なからず存在するが、かなり特殊なケースである（三年前のカミキ・セカイ選手が、まさにそのケースに該当する）。

これは、ミソラ本人の才能なのかもしれない。

ホウカの場合も、バトルスタイルが上手く合致したからであって、古武術そのものの影響はそれほど大きくないと思っているのだ。

個人的な推測をしながら、作業スペースへ移動する。幸いと言うか、先客はいなかった。

作業台に着席し、スミ入れ用のペンを取り出す。

「よし、まずはスミ入れをやってみるか」

「スミ入れ、は…隙間を塗ることでしたよね」

「そうだ。デザイン上で彫り込まれているモールドを浮き立たせることで、ガンプラに立体感を与える作業だ」

練習用のジャンク品を手に取り、モールドを極細のペン先でなぞる。

「こんな風に、大雑把になぞる。後で拭き取ったりできるから、はみ出しは気にしないでいいぞ。やってみろ」

「は、はい…」

ミソラもジャンク品を持ち、ペンでなぞり始めた。少し緊張気味のように、余計な力が入っている。

「肩の力を抜けよ、気楽にやるのもコツだ」

「了解です…！」

そうは言うが、それでもまだ緊張していた。

とりあえず、1パーツ分のスミ入れを完了する。

「よし、いいだろう。スミ入れペンは、乾いても簡単にはみ出した部分を消すことができる。専用の消しペンなんかもあるが、今回はコレを使う」

作業台のケースの一つから、白い物体を取り出した。

「…？消しゴム、ですよね？」

「意外に思うか？これがまた便利なんだ。はみ出した部分を角で、こ

う…」

スミ入れをしたモールドと同じ方向にならないよう、はみ出した部分を払うように繰り返し返してこする。そうすると、余分な塗料だけが消えた。

「とまあ、こんな具合だ。試してみろ」

「分かりました、やってみます」

ミソラは頷き、実践して見せたのと同じように、消しゴムではみ出した部分を消していく。

「あ、本っ当だ！綺麗になった！」

モールドだけを残し、しっかりと塗料を消すことができた。

やはり、手先も器用なようだ。

「できると、結構楽しいですねスミ入れて！」

「こっちはめんどくさく思わないか心配だったぜ」

ミソラが、顔をこちらに向ける。

その顔が、息のかかるほど近い場所に。

作業を覗き込んでいたため、自然と身を寄せる形になっていた。

振り向いた勢いでショートカットから漂う、少し甘い香りが鼻腔をくすぐる。

そして、兄のリクヤに少し似た、活発そうなぱっちりとした大きめの両目と視線が交差した。

「……おわー！すまん！」

慌てて距離を取り、咄嗟に謝ってしまった。

時間にして、僅か数秒。

しかし、その間に思考が停止してしまい、まじまじと見詰める状態になっていたのだ。

「あ……い……いえ、大丈夫、ですよ」

改めてミソラの顔を見ると、距離を取ったにも関わらず、はつきりと赤くなっているのが分かる。

(どう見ても大丈夫じゃねえ！)

心の中で冷静にツツコミを入れる自分を呪う。

よく考えてみれば、この作業スペースに二人きりなのだ。それを意

識すると、居心地がとてつもなく悪くなってくる。

「ああ…えつと、じゃ、じゃあ、ストライクルージュのシミ入れに取りかかる、か?」

「は、は、はい。ソデスネ」

(カタコトになつてるし…)

これはいかん、このままでは作業どころではない。一旦、空気をリセットしなければ。

「おー、そうだ。さつきから我慢してたんだ。ちよつとお手洗い行つてくるわ」

全く尿意はなかったのだが、この場をリセットするにはそれしかない。

席から立ち上がり、少しだけ早足で作業スペースを出た。

扉を閉め、横にずれてから大きく深呼吸する。

自分から先に逃げるとは、何て情けない。しかも、ミソラを一人にして出ていくとは、男としてやってはいけないことではないか。

(くっそお…俺の馬鹿野郎)

もつと配慮しておくべきだった。

近頃は、女子と一緒にどころか、男一人きりという状態が続いていたため、感覚が麻痺していたのかもしれない。ホウカやジニアに接するのと変わりないスタンスだったのが、そもそも間違いないのだ。

「やべ、本当に行きたくなってきた…」

どつと溢れる疲労と共に、水に流してしまおう。

そして戻ったら、元通りにガンプラの話をするのだ。

そう願いつつ、お手洗いを目指す。

.....

ビッグリングの店内に入ると、お手洗いの方から歩いてくる一人の人物と鉢合わせした。

「え?」

「ん?」

地味な二枚襟のシャツにデニムという、飾り気のない服を着ている身長の高い男性。見慣れたその顔は、学園では硬派イケメンと評される(らしい)。

「トモにい?」

「ホウカ、何でここに…」

あ、と。そういえば、昨日トモヒサはミソラと何か約束をしていたらしいのを思い出した。

(ガンプラのことだったんだ…)

残念やら落胆するやら、複雑な気持ちになる。

「ていうか、何だよその組み合わせ…果たし合いでもしに来たのか?」

自分の後ろに並ぶ二人に、トモヒサの訝しげな視線が投げ掛けられた。

「果たし合いか…ふふ、それも一興だ」

「止めてくれたまえ。私は、単純に遊樂に来たのだからな」

ツツジは不敵に笑い、シンイチが首を振って否定する。

「地区予選の期間中に菱亜のエースを誘う度胸は、シンイチさんくらい肝が据わってないといけないな」

「買い被りだぞ」

「そうさ。これが君と二人きり、であったならばメールを斬り捨てていたところだ」

「ツツジは少し言葉が過ぎるようだな…」

シンイチが弄られている…。

三人のやり取りを見ていると、店の奥からミソラが歩いてきた。

「え、どうしたの。この大所帯…」

そして、トモヒサの隣に並ぶが、一瞬目を合わせたかと思うと二人共落ち着きがなくなる。トモヒサは咳払いし、ミソラはショートカットの襟足を触り始めた。

(…何かあったのかな?)

明らかに、何かがあった雰囲気だ。

どうしたものかと、ツツジとシンイチに救いを求めようと視線を送るが、救世主は別のところから現れた。

誰かが、自分達の脇を通り過ぎようとする。

「…んん？ちよつと待て」

「わひゃ!？」

その人物の行く手を遮るトモヒサ。

「お前…ジニアだな!？」

「うえ!?!…ち、チガウヨ!エ、エージエント888ダヨ!」

「誤魔化すのへたくソ過ぎんだろ!？」

「あああく帽子取らないでえ〜!」

トモヒサが大きめの帽子をひっぺがすと、お団子に纏められたマゼンタ色の髪が衆目に晒された。最初に声を出した時点で分かっていたが。

ジニアはばつの悪そうな顔をしながら、伊達眼鏡を外す。

「何でお前までここにいるんだよ」

「うえ?えー、いやあ…アツハハ」

「その格好、俺かホウカを尾行していたんだろ?分かり易すぎるぞ」

「ええー?けっこー完璧な変装だと思っただけだなー」

ジニアはくるりと一回転し、腰に両手を添えてびしっとポーズを決める。「あ、ちなみに尾行してたのはホーカの方ね」と付け加えたが、それは聞かなかったことにした。

しっかりと見ると、短パンのオーバーオールがとても可愛らしい。

「ジニー可愛いね!似合ってるよ」

「えへへー、でしょでしょ?日本のファッションも中々いいよね!」

「何ー?二人共楽しんじゃってさ」

「私も輪に入れてくれないか。男子どもとでは賑やかさが足りなくてな」

ジニアを中心に、女性陣が集結した。

「…:…なあ、やっぱり皆で来た方が良かったんじゃないか?」

「何の話だ、トモヒサ」

「う〜ん…分かんねえなあ女って…」

.....

それから少しの間、どのガンプラがよく動くだとか、このビルダーズパーツが中々具合が良いだとか、一堂でひとしきり語り合った。

そして、トモヒサとミソラは対人戦をやってみるのだと言って、現在対戦相手を募っているところだ。

「一応20n2で出してるけど、もし三人がいつって言われたりしたらホウカに出てもらうかもな」

「その時は、ホウカさんよろしくね」

「うん。ガンプラはここにあるので何とかかなりそうだから」

今日は、ガンダムラナンキュラスを持ってきてはいない。ガンプラを持ち歩く習慣が自分にはまた浸透していない上、地区予選に控えるために最高の状態を維持しておきたいのだ。

それはトモヒサとツツジも同じ考えだったようで、トモヒサはビツグリングに寄贈していたガナーザクウオーリア、ツツジはGサイフォスを持参してきたらしい。

隣のバトルシステムでは、ツツジとシンイチがプラクティスモード（HARD）で共闘していた。

「あれが、ガンダムAGEー1トールギス…」

平野のフィールドの空を、まるで白い流星のように貫く姿。スーパーバーニアの加速で一気にハイモックの部隊へ突入し、手持ち武装としては破格のドーバーガンの銃口が轟いた。

その一射で、ハイモックを10機ほど撃ち抜く。そのまま、ドーバーガンを振った反動で腰のビームサーベルを抜刀し、接近したハイモックを横一文字に一閃した。

「久々のガンプラバトルだ。相手がCPUと言えど、私の心も赤々と燃え滾る！」

黄金に輝く大きなアンテナの奥で、緑色の相貌が睨みを効かせる。その背後に、濃紺のモビルスーツ、Gサイフォスが降り立った。

細長い脚部はAGEー1スパローを元にしたと言われ、Gバウンサーの改修機ながらに、カラーリングとパーツの変更によって全くの

別機体に見える。

右手に握る高出力ヒートソードの刀身が、陽の光を反射してキラリと光った。

「策を弄さず、敵陣の直中に突入するとは相変わらずの男だな」

「フフ、ツツジこそ。己を柵に上げるか？」

「まさか。…蛮勇は承知の上！」

ツツジの声を合図としたかのように、純白と濃紺のモビルスーツが飛び出す。怒濤の如く迫るハイモック達を次々に撃ち抜き、斬り伏せ、飛び込んで快哉を叫んだ。

これが、熟練の世界。

(この世界に、挑戦してるんだ…)

改めて、気を引き締め直した。

隣を眺めながら挑戦者を待っていると、コンソールにサイン音が鳴る。

「お、きたきた」

「い、いよいよですね…」

「落ち着けよ、気楽に行こうぜ。ガンプラバトルは楽しんだモン勝ちだ」

挑戦者は二人らしい。これなら、自分が出る必要もなさそうだ(隣のバトルを見て、少しウズウズしていたのは正直なところだが)。

バトルシステムの音声に従い、トモヒサはガナーザクウォーリアを、ミソラはストライクルージュ(スミ入れ済み)をユニット台に置く。

『BATTLE START!』

「カトー・トモヒサ、ガナーザクウォーリア!行くぜ!」

「カ、カネダ・ミソラ!ストライクルージュ!い、行きます!」

カタパルトを滑走し、宇宙空間に飛び出す二機。

フィールドは、特にギミックは無さそうな普通の宇宙フィールドだった。

「さて、お相手さんは、と…」

トモヒサがコンソールで索敵を始める。すると、すぐに反応があつ

たようで、コンソール上のサインが明滅してアラート音が鳴った。

フィールドを注視すると、星の海から二機のモビルスーツが飛んでくるのを確認する。

一機は、両肩部から左右に伸びる航空機のようなウイングが特徴的な、細身の機体。右手には装甲板が貼り合わさったようなビームライフルが握られている。

もう一機は、僚機を一回り大きくしたような大柄の機体。一見、ガンダムAGE-3にも見えるが、両膝から突出する砲身と着膨れしたような脚部、そして両腕に装備されている二門のビームライフルが印象を変えていた。

二機とも、見覚えがある。

「あの機体…まさか…!」

トモヒサも気付いたようだ。

それは、地区予選の初日のこと。自分たちのブロックが終えた次の試合に、今日の前に現れている二機がいたのだ。

それぞれ、名前は「ガンダムクロスエックス」と「ツヴァイゼータガンダム」だったはずだ。

『気分転換に一勝負頼むぜ!』

オープンチャネルで、ガンダムクロスエックスのファイターから掠れたような声が届く。

「ちよっと待ってくれ、その機体…紗寺学園か!」

『ん?俺たちを知ってるってことは…あんたも地区予選に出場したファイター?』

トモヒサの問いかけに、今度はツヴァイゼータガンダムのファイターが応える。こちらは少しトーンが低いが、やはり声が掠れていた。

少し距離を置いて、二機が停止する。

「俺はチーム『スターブロッサム』のカトー・トモヒサだ。あんたら、チーム『アンダブル』だろ?」

『するってえと…』 黒い悪夢” か!?あの化け物を操縦してた!』

『おいおい、ちよつとやばい奴と出会しちまったんじゃ…』

トモヒサの正体を知るや、二機が戦いたように顔を見合わせる。

「先輩、紗寺学園って言うと…『スターブロッサム』が次に戦う相手ですよね?」

「ああ。まさかとは思ったがな…」

ミソラがトモヒサに問いかけた。

その瞬間、二機の態度が変わり始める。

『そのストライクルージュ、女子か…』

『そういや、” 黒い悪夢” ってイケメンらしいじゃん』

『…なるほど』

ガンダムクロスエックスが、何かを納得した様子で頷いた。すると、突然ビームライフルを構え、ツヴァイゼータガンダムも両腕のダブルビームライフルを構える。

『リア充か!!』

宇宙空間に響き渡る(システム上、音が伝わる)、二人の掠れ声。

「…:…:…:はあ?」

『よく見りや、そこにもう一人女子がいるじゃねえか!』

『確かに!しかも可愛い!』

今まで静観していた自分に、いきなり矛先が向く。

『許すまじ、” 黒い悪夢”!』

『覚悟しろー!』

捲し立てるように言い散らかした二人が、機体を押し出した。

「何だかワケわかんねえことになったが、やるしかねえ!行くぞミソラ!」

「は、はい!」

ガナーザクウォーリアは後退して隕石に着地し、ストライクルージュが前へ出た。

「無理すんなよ、相手はあれでも代表選手だ。俺が援護する!」

「了解ですー」

ストライクルージュはビームサーベルをエールストライカーから抜き放ち、粒子刃を発生させて斬りかかった。

それに対し、接敵したガンダムクロスエックスが難なく回避して見せる。

「速い!?!」

『へっ、トローシロかよ!』

そして、回避されて体勢が崩れたストライクルージュを蹴りつけた。

「きやあ!?!」

『アシャー!』

『任せな!』

クロスエックスのファイターの声に、ツヴァイゼータのファイターが即座に返す。ダブルビームライフルから、合計四発の光軸が発射された。

それがストライクルージュに当たる寸前、太い光の奔流がそれらを掻き消す。トモヒサのガンナーザクウォーリアの砲撃だ。

「俺を忘れんなよー」

『ちい!おい、あの黒いガンナーザクは頼んだぜ!』

『おうよ!』

そう声を上げ、ツヴァイゼータが発進しようとした瞬間。

——バシユウウウウ……!!

別方向から、新たな砲撃が襲いかかった。

しかし、それはガンナーザクウォーリアとストライクルージュを狙ったものではなく、それどころかツヴァイゼータガンダムの行く手を阻んでいる。

『げえ!?!ハ、このビーム……!?!』

『……やっほ』

『げえ!?!じゃない!!何やってるんだお前達!買い付けはどうした!?!』

声の主を探すと、やや離れた場所に翼を広げたようなシルエットを作り出している機体を発見した。

横に展開された翼のようなウイングに、両肩から突き出るコーン状のパーツ。そして、先程の砲撃を繰り返した大型のバスターライフル。

「…ダブルゼロガンダム。リーダーのお出ましかよ」

トモヒサが、声に焦りを滲ませて呟いた。

.....

「申し訳ない！」

続行かと思われたが、バトルは中止。背の高い男性と髪を結っている男性を率いて、癖毛が目立つ黒髪の人物が頭を下げて謝罪を示してきた。

「お前達も頭を下げろ」

「う、うん…」

「ごめんなさい…」

「よ、よしてくれよ。別に何かされたわけでもないんだし…」

トモヒサが落ち着かない様子で言うと、黒髪の男性（最初は女性のようにも見えた）は顔を上げて表情をきつくした。

「いや、はつきりと聞こえていた。リア充だのトーシロだの、相手を尊重しない態度もな」

「うゝ…」

口籠る二人。

少し視線を横の二人に流すと、男性は表情を柔らかくした。

「自己紹介がまだだったな。もう知ってることと思うが、ぼくはオオゾラ・ユキナリ。チーム『アンダブル』のリーダーを務めさせてもらっている」

「こりゃ、ご丁寧にどうも。こっちも知ってると思うが、チーム『ス

タープロツサム』のリーダー、カトー・トモヒサだ」

「ああ、よろしく。さて：お前達は自己紹介をしたのか？」

じろりと、オオゾラ・ユキナリが鋭く視線を流す。

「ガドウ・ラン！紗寺学園中等部2年です！」

「ア、アシヤ・シユウト！同じく中等部2年です！」

弾かれたように背筋を伸ばし、朗々と名乗る二人。

それに対し、ミソラと顔を見合わせて頷いた。

「私は、チーム『スタープロツサム』のキンジョウ・ホウカです」

「えーと、その同級生のカネダ・ミソラです」

「あれ？面白いやジニアの奴はどこだ？」

「そういえば…」

いつからなのか、ジニアがいなくなっていた。何処にいるのかと視線を店内に巡らせると、小走りに駆けてくるジニアを見つけた。

「え？なにになにどしたの？ケンカ？」

「こいつが『スタープロツサム』の三人目、ジニア・ラインアリスだ」

トモヒサは即座に順応し、経緯を省略する。

「よく分かんないけど、よろしく？」

頭に？マークを浮かべるジニア。

「ジニー、この人達が次の相手みたいだよ」

「え？チーム『アンダブル』？どうして？」

「話すとちよつと長くなるかな…」

色々あって、説明が難しかった。

その後、隣のバトルシステムで共闘していたツツジとシンイチまで合流し、よりややこしくなってしまう。一先ず、この場は收拾をつけるとして、チーム『アンダブル』の三人は去っていった。

そして、夕方。

ツツジとは駅で別れ、帰る電車の中でトモヒサが尋ねてくる。

「なあ、ちよつと訊いていいか？」

「何？」

「ミソラって：俺をどう思ってるか分かるか…？」

「え…気づいてないの…？」

何を利かれるのかと思えば、それは想像していなかった。

「あ、いや…やっぱりそうだよな…悪い」

何故か謝られた。

どうやら、今まで本当に気付いていなかったようだ。今日のこと
で、ようやくミソラの気持ちに勘付いたということか。

ちらりと、ジニアと話しているミソラを盗み見た。

(ミソラさん、頑張つて)

この鈍感男は、ちゃんとやわ言わないと多分気付いてくれない。

しかし、自分はそれに関わるべきではないし、必要以上に口を出す
のは迷惑だと思う。

(でも…あんまりトモにいのことは言えないかも)

トモヒサの隣に座り、スマートフォンをタップしているシンイチを
見る。相手は、恐らくナラサキ・フウランだろう。何故か直感めいた
確信を抱く。

度々、彼に感じている感情の正体。それは、未だに答えが出ていな
いのだ。

(好きって…どんな気持ちなんだろうな…)

ミソラがトモヒサに抱いている感情は、そういうことなのだろうと
理解しているつもりだ。アズマの太鼓判だってある。しかし、自分の
ことになるまるとまるで分からない。

この気持ちの、シンイチに対して抱く気持ちの正体をはっきりと理
解するには、もう少し時間が必要かもしれない。

複雑な気持ちを考えているうちに、電車の揺れで眠りに落ちてし
まった。

Act. 19 『恋は思案の外Ⅲ』 END

こんな無茶苦茶な話があるか？

オープントーナメント出場を目指してガンプラの調整を終え、いよいよエントリーという矢先のことだ。ガンプラ部の顧問が言うには、今年の全日本ガンプラバトル選手権に出場するチームのリーダーが雲隠れをし、行方不明ということだった。噂では、年上の女性と駆け落ちしたとか眉唾物な話まである。

正直、そんな事情はどうでもいい。

問題は、突如空席になったチームリーダーの任が僕に押し付けられたことだ。

当然、そんな面倒な役目は拒否した。だが、大会に出場するとして部費の嵩増しに奔走した顧問から「このままでは私の立場がない……」と泣き付かれては、然しもの良心が痛んだ。部費を活用させてもらっている身としては、無視することはできない。

良心の呵責からは逃れられず、仕方なく引き受けることにした。戦いの舞台が変わるだけだ、オープントーナメントへの出場は来年でも構わない。

やるからには本気で臨もうと気持ちを切り替え、残った二人のチームメンバーと対面したのだが……これが頭を悩ませる後輩達だった。

二人のガンプラ自体に問題はない。むしろ、完成度に関しては何レベが高いとさえ言えた。どうということなのか、作った本人達のガンプラバトルのセンスが絶望的だったのだ。高出力な武器ばかりを揃えておきながら粒子制御を怠り、運用も乱雑なもので、さらには操縦桿を限界まで押し込んで機体を暴発。拳句の果てに、自分の武器に振り回されるといふ始末だ。

これで選手権に出場しようとしていたのか？冗談ではない！

たとえヴェーダが許しても、僕が許さない！

そこからは、ストレスの連続だった。僚機の暴発を抑えるために調整を手伝い（ほとんど僕任せ）、本来はオープントーナメント用に構築

したシステムを作り直すハメにもなれば、口内炎にだってなろう。

ともかく、何とか戦えるレベルにまで引き上げることには成功した。残ってしまった悩みの種と言えば二人だが、これはもう手の施し様がない。

そして迎えた、選手権初日。幸運にも、苦戦することなく無難に勝利を得ることができた。それから一週間が経過し、いよいよ第二回戦が開催されるのだが、その相手が手強い。今大会で注目され始めているチームの一つ、英志学園の『スターブロッサム』だ。

しかし、臆することはない。

僕——オオゾラ・ユキナリと、相棒の「ダブルゼロガンダム」ならば、どんな相手でも、どんな条件でも未来を切り開いてみせる。

：チームバトルは、苦手だが。

.....

「それじゃ、私はここで先生を待っているからね。会場で会おう」

多湿でじめじめしていた平日が終わり、週末の土曜日は気持ちのいい快晴となっていた。

絶好の大会日和（舞台は屋内だが）に、会場に集う選手達の足取りも軽やかに見える。そして、各々が所持するボストンバッグや学生靴の中には自慢のガンプラが収納されているはずであり、また既にガンプラケースを手にしている者も散見する。高揚する気分を内に外に漲らせるのは、自分達も同じだ。

顧問のシマ・マリコとは駐車場で別れ、自分達は会場へ進む。

「いんや〜：日本の天気って忙しいんだねえ〜」

やや高く上がった陽射しを手で遮り、ジニア・ラインアリスは感慨深げに青空を見上げながら呟いた。

キンジョウ・ホウカはその隣を歩きつつ、彼女が去年までガンプラバトル選手権を観戦するため、日本へ来ていたことを思い出した。

「日本の梅雨は初めてなの？」

「うん、観てた選手権は夏休み中の全国大会だから、ツユっていうのは

初めて。アメイジングな体験だよ！」

「何故にク〇ス・ペ〇ラー」

オーバーアクションで人差し指を立てるジニアに、背後を歩くカトー・トモヒサの冷静なツツコミが放られた。

時期的には、群馬の地区予選大会は他県より一月ほど早い。そのため、丁度梅雨入りの季節と重なるのだ。

「この季節ってのは湿気が困りもんなんだよな。俺たちガンプラビルダーにとつちや、どんなフィールドエフェクトより厄介だぜ……」

「でも、季節にカンケーなくガンプラを安定したクオリティで仕上げるのが、一流のビルダーってことだよな！」

「…お前、いつも騒ぐだけで大したこと言わないのに、今日は珍しく良いこと言うな」

「割りとショック!?!」

広い駐車場を抜け、会場となっている県民体育館を仰ぎ見る。そして、正面玄関に吸い込まれていく人込みに自分達も混ざった。もう見慣れ始めたエントランスは、先週の土日と変わらない喧騒に支配されている。

視線を巡らすと、見知った制服姿の2チームを見つける。深紅に染まる制服の女子二人と男子一人の三人は、菱亜学園チーム『ハウンドクロス』。朽葉色の淑やかなオーラを纏う女子三人は、セント樫葉女子学園チーム『天照す閃光』だ。

この2チームは、今年の地区大会優勝候補に名を連ねる強豪として、既に各メディアで話題になっている。ちなみに、英志学園もそれなりに注目されているらしい。アノウ・ココネも号外の学園新聞を発行し、「『黒い悪夢』、再来!」「宇宙に咲く美しき」花鳥風月」「ガンプラバトルでもその個性を遺憾なく発揮!」など、当のこちらが恥ずかしくなる程の見出しを記事に踊らせていた(ウェブサイト上でも閲覧数を稼いでいるとのことだ)。

「お、見てみる。俺達が今日当たる相手がいたぞ」

ゆっくり進みながら、トモヒサが顎をくいとさせてエントランスの一角を小さく示す。釣られて見ると、丁度お手洗いの出入り口付近

に見覚えのある人物が仏頂面で立っていた。

「確か、紗寺学園の…」

「チーム『アンダブル』。そのリーダー、オオゾラ・ユキナリだな」

細身の、外に跳ねる黒い癖毛の男子だ。先日、偶然にガンブラシヨップ「ビッグリング」で出会ったばかりである。その時トモヒサとカネダ・ミソラが対した、チームメンバー二人とのバトル。そこへ介入したガンブラ「ダブルゼロガンダム」の姿は、鮮明に思い出せる。「あれ？あと二人がいないね？」

ジニアの指摘通り、腕を組んで壁に寄りかかる彼は一人のようだ。近付いてみると、こちらに気付いて顔を上げた。

「君達は…英志の」

「どうも。五日ぶり、になるか？」

「そうなる。…僕に何か用でも？」

トモヒサに続いて挨拶の言葉をかけようとしたが、オオゾラ・ユキナリの線の細い顔が怪訝げに歪む。思わず、出しかけた言葉を飲み込んでしまった。

「用つてこともないが、今日当たる相手なんだし、一言挨拶でもな。今日はよろしく頼むぜ」

「…そうか。不適切な態度を取ってしまったて、申し訳ない。そちらのお二人も、今日はよろしく」

「は、はい。よろしくお願いします」

「よろしく」

ユキナリは組んでいた腕を解き、壁に預けていた背を離して小さく会釈をする。少し近寄りが見たい印象だったが、そうではないようだ。「ところで…他の二人はどうしたんだ？」

トモヒサが訊ねた途端、ユキナリの表情が再び不機嫌そうに歪められる。そして、お手洗いの奥をちらりと見遣った。

それを見て、察する。

「あ…はい」

「全く…トイレくらい自宅で済ませておけばいいものを…」

気苦労が絶えないチームらしい。

ユキナリが嘆息すると、館内放送が響き渡った。出場選手に対し、中央ホールへ集まるよう促している。それを受け、周囲の人込みが流れ始めた。

「じゃあ俺らも行くが…」

「ああ、僕たちのことは気にしないでいい。試合で会おう」

ユキナリと別れ、中央ホールへ向かう集団の流れに倣う。去り際、ユキナリは組んだ腕を指先で叩いているのがチラリと見えた。

「大丈夫かアレ…?」

対戦相手のコンディションが万全であることを祈りつつ、中央ホールを目指した。

.....

第一ブロックの試合を今や遅しと、シマ・マリコは観戦者達と共に待ち侘びる。

「お、いたいたマリちゃん。隣、失礼するぜ」

「隣を許した覚えはないけどね…」

先週と同じ場所に座っていると、これも同じように菱亜学園のガンブラ部顧問であり、学生時代からの付き合いでもあるエニワ・シロウが隣に腰をかけた。相変わらずの白いジャージが眩しい。

「アズマ先生もどうもッス」

「ワシはついでか」

アズマの溜息混じりの言葉にへらへら笑うシロウ。

生徒達（カネダ兄妹とアノウ・ココネ）を連れてきたアズマと駐車場で合流した後、自分達大人は先に二階席に上がって席を確保している。吊り下げられる液晶大画面が最もよく見える位置だ。

「まあまあ、それよりヒョッコ共の調子はどうなんだ?うちのスーパーファイター達は最高のコンディションだぜ!」

「訊ねてもいないことをよく喋りおるわ…」

「そこは昔から変わっていないのが、安心するやら呆れるやらだね」「何だ何だ二人共。敵に情報は与えないって魂胆か?」

「そのつもりなら今すぐこの場を離れるよ」

騒がしい彼の存在に心地よさを覚えるが、確実に変わっているものを感じる。

学生の頃は、彼ともう一人の三人で、騒々しい日々を送っていたものだ。学校では毎日のようにアズマに怒られ、ガン普拉バトルに明け暮れていた。あの頃は様々なものを吸収して腕を磨いたが、現在は生徒を指導する立場。自分達の面倒を見ていたアズマの気持ちを痛感している。

変わっていないように見えて、シロウの愛弟子を自慢する姿は共感する部分があるのだ。

「チーム『スターブロッサム』は着実に力を増してきているよ。シロウの言うところのスーパードファイター…そう呼んで差支えはない」

「ハッハァー！そいつは結構なこった、期待に胸が膨らむぜ！」

愉快気に笑うシロウ。彼が変わっていない部分は、強い相手に対して前向きなところである。

彼と邂逅したのも、学校内に強いガン普拉ファイターがいると聞き、自分にバトルを持ち掛けてきたのが発端だ。彼の当時の愛機であるGエグゼスも中々の仕上がりだったのだが、自分のGP04ガールには遠く及ばなかったのを、今でも鮮やかに思い起こせる。

(懐かしいねえ…シロウ君と話していると、まるで昔に戻ったようだよ。ここにライカもいれば、もっと楽しいだろうね)

自然と、笑みが零れた。

「おっと、”宇宙の陽炎”^{かげろう}が女神のように笑ってるぜ」

「うるさいよー！」

「ツ痛え!？」

シロウの頭に拳骨を落とす。要らない部分はそのままでなくとも良い。

そんな彼だが、第一ブロックの愛弟子がバトルシステムの前に並ぶと真剣になった。

隣に座るアズマが、呟く。

「ほう…。纏う闘気が一段と苛烈になったな」

実際のガンプラとバトルを見なければ、流石にそこまでの雰囲気を感じ取ることにはできない。しかし、自分達より倍のガンプラバトル歴を持つアズマには、それが分かるのだ。

かつての師である「殲滅のアズマ」ことアズマ・ハルトの境地には、未だ至っていない。

.....

「チーム『ハウンドクロス』！ 披荆斬棘、押し通る！」

バトルフィールドに吐き出される三機のガンプラ。

システムが選択したのは、白と緑のコントラストが美しい雪渓地帯だった。降り積もった雪が溶けずに谷底を埋め、山頂まで緩やかな傾斜を生み出している。

プラフスキー粒子が再現する景色の澄み渡った青空の下、不釣り合いな色合いの機体が、氷のように硬化した万年雪の上に降着した。

コンソール上のマップを見ると、相手チームは山頂を挟んだ反対側から出撃したことが分かる。

「シバ、敵機を捕捉できるか？」

丈の低い高山植物に覆われた山岳は、左右から雪渓を挟むように聳える。本物さながらの風景を注視しながら、聡明なる司令塔——シバ・ニーナへ尋ねた。

彼女の操るデナン・ゲー・ツイーレンは出撃と共にサーチファンネルを射出し、リアルタイムで情報を収集している。フォロスクリーンを丸眼鏡のようなハイブリッド・センサーに被せ、高感度状態だ。

「プラフスキー粒子の波動を検知。これは：エイハブ・ウエーブの反応です」

「やはり鉄血の機体か：照合は？」

「最も強い反応を示すのはガンダム・フレーム：ですが、それ以外は不明。残りの二機はグレイズ・フレームに近いようです」

フォロスクリーンを収納しつつ返答するシバ。

事前に得ている情報でも、相手チームはガンプラを「機動戦士ガン

ダム 鉄血のオルフェンズ」に統一していた。今回の試合でも、変更していないようだ。

(HGUC等より情報が詳細だな。エイハブ・リアクターの設定が活かされている、ということか)

デナン・ゲー・ツイーレンのブレードアンテナとサーチファンネルには特殊な加工が施されており、通常は感知できないガンプラが発する粒子の波長から、ある程度の情報を引き出すことが可能である。それが、"エイハブ・リアクターから発するエイハブ・ウェーブ"という具体的な設定であれば、引き出せる情報もより詳細なものになるのだ(加えて、そのガンプラの完成度が高ければ高いほど、シバにとっては感知し易いメリットになる)。

と、デナン・ゲー・ツイーレンがフォロスクリーンを跳ね上げ、ハイブリッド・センサーを光らせた。

「エイハブ・ウェーブの波長が変動。三機とも動き出しました」

「仕掛けるか?」

「ええ。障害物のないフィールドですので、ツツジさんに先陣を任せます」

「承知」

「山頂付近に対し、索敵を厳にします。コウスケは残りを私と」

「おう」

「では、状況開始です」

それぞれに示し合わせると、自分はガンダムAGE-2バンガードをストライダーモードへ変形させ、青空へ飛び出す。その直後、ホログラムコンソール上のモニターに栗色のショートボブに覆われたシバの童顔が映し出された。

「先週はツツジさんの活躍が目立たず、私の不徳の致すところでした。ですから、存分にやってください」

「フフ、そんなこと、微塵も思っていないさ」

「しかし、^{オーディエンス}観衆はそれを期待しているはずですよ。私も含めて」

「身に余る栄誉だな。しかし、応えてみせる」

そう返すと、彼女の口元が緩む。

「それでこそ、私達のキャプテンです」

「…おい、敵だ」

ササミネが音声だけで報せてきた。

不愛想な声に釣られてメインモニターを注視すると同時、アラート音が響き、敵機を確認する。

バンガードのメインカメラが映す、左側の山腹。緑に覆われた山肌の向こうから飛び出してきたのは、全身が血のような赤に染まるモビルスーツだった。

「あれは、ガンダム——」

距離が縮まっていくに連れ、その全容がはつきりと視認できる。

「——アスタロト、オリジン！」

鉄血のオルフェンズに存在する、72体のモビルスーツ。

伝説の機体として語り継がれるその名は、共通のインナーフレームから総じて“ガンダム・フレーム”と呼ばれている。

その中でも、ガンダム然としていながら全身が深紅に染まる異質な機体こそ、目の前に迫る「ガンダムアスタロトオリジン」だ。

『やはり、キャプテン・アゼリア』が先行してきたな！』

オーブンチャンネルから、相手ファイターの声が届く。

『その首、貫い受ける！』

「ふっ…大きく出たものだ」

アスタロトオリジンは、両肩に備えるブレードシールドとバックパックの尾翼を展開しており、特徴の一つである飛行形態となっている。簡易的な変形とはいえ、二基のエイハブ・リアクターが生み出している出力により、飛行速度は並みのモビルスーツを凌駕していることが分かる。

それだけ、ガンプラとしての作り込みが凝っているということだ。

こちららも、よりバンガードにブーストをかけた。トップスピードを維持したまま、スフィアを捻って可変コマンドを選択する。

「だが、臨むところッ！」

接触の刹那に人型へ変形し、反転。即座に握り込んだドッズソードを居合の構えに取る。それと同時に、基部のジェネレーターから粒子

が流れ、クリアパーツで構成されるシングルブレイド由来の刀身を輝かせた。

運動エネルギーを乗せた切先を、振り抜く！

——バギイイイイン!!!

渾身の威力で抜き放ったドツズソードが、分厚い物体にぶつかった。

「——ッ!? スレッツジハンマー……!」

『これが居合かッ……!』

互いの得物が衝撃に弾かれ、機体ごと空中で揺さぶられる。

アスタロトオリジンがサイドアーマーのウエポンラックから抜いたのは、質量打撃武器であるスレッツジハンマーだった。重量も相当なものらしく、グリップを握っている右腕が大きく上へと仰け反っている。

だが、アスタロトオリジンはハンマー部に備わっているサブグリップを左手で素早く握った。

『もういつちよお!!』

それを、打ち下ろす!

「笑止!」

その一撃に対し、受けた衝撃に逆らわずバンガードを後方に宙返りさせた。スレッツジハンマーが虚空を叩く。

さらに、バインダーの細かな動作で宙返りのベクトルをずらし、錐揉みの要領で機体を再び正面へ向ける。アスタロトオリジンをやや仰ぎ見る形となり、大きく下段に構えたドツズソードを逆袈裟に斬り上げた。

『な、に……!?!』

ライトグリーン軌跡を空に描き、ドツズソードがスレッツジハンマーの先端を破断する。

『たった二撃で、スレッツジハンマーを……!?!』

初撃の際、見逃してはいなかった。

スレッジハンマーの打撃面には、ドズソードが刻み込んだ罅割れが生じていたのだ。

「我が剣が、数段上手だったようだなー！」

間隙を置かずに連撃を仕掛けようとしたところで、ある事に気が付く。

(——ツ!!)

スレッジハンマーは、”毒蛇の牙を潜める鞘でしかない”ということをと。

アスタロトオリジンは、得物を縦に引き裂いた。

『こつも早く、こいつを抜くことになるとはな！』

否、それは抜刀の動作であった。

無用となつたハンマーの残骸を放り投げ、毒蛇の牙がその姿を蒼天の下に晒す。

其の刀の名は、”γナノラミネートソード”。

モビルアーマー 勇 魚を屠るために生み出された、アスタロト竜騎の悪魔だけが持つ必殺の兵器だ。

一時、距離を取る。

「…察するに、きほう貴方の剣は我が剣に匹敵するとお見受けする」

『噂通りだな…。賞賛の言葉、痛み入るよ』

長く滞空してはいられないため、互いに万年雪の上へと降り立つ。

アスタロトオリジンは、右腕下部に備わっている粒子供給ケーブルを、γナノラミネートソードの柄頭部分に接続した。

『さ、続きといこうぜ』

その武装は、リアクターから発生するエイハブ粒子を圧縮し、ケーブルを介して刀身に”γナノラミネート反応”という特殊な構造を付与する、という設定を持つ。

原典設定では圧縮粒子が安定せず、実用化に至った武装は少ないロストテクノロジーとされているが、どうやら相手のアスタロトオリジンは、上手くガンプラバトルに落とし込んで運用できていると見えた。

(俄然、楽しみが増すというもの)

バンガードの右足を引かせ、ドッズソードを後ろに下げて脇に構える。

「悪魔の一柱、討ち取らせてもらう」

山頂から吹く風を合図としたように、互いに雪の大地を蹴り込んだ。

.....

『あいつが出オチしたせいで……!』

サーチファンネルによる索敵範囲を山頂付近に絞った結果、予測が的中していた。

まず、ガンダムAGE-2バンガードとガンダムアスタロトオリジンが接触したのと同時に、山頂に現れたモビルスーツがいた。それは、グレイズ・フレームに類すると検知していた内の一機——ゲイレールだった。

フィールドの特性として、全域を見渡せる山頂を確保することは重要な要素と言える。現に、その任を負っていたのである。ゲイレールの装備は、両肩に鉄血オプシオンセットのキャノン砲、そして背部にはロケットランチャーも装備する遠距離特化のものだった。

確かに、その作戦は基本に則った有効なもの。しかし、このデナン・ゲー・ツイーレンはわざわざ陣取り合戦をするまでもないのだ。

目となるサーチファンネルによって付近に接近する機体を確認し、後はその場に相手が現れるのを待つてから、メガ・ビーム・キャノンによる砲撃で殲滅する。策の根本から破壊するのだ。

そうして、思っていた通りにゲイレールは単機で山頂に現れた。こちらを確認させる暇も与えず、片方に出力を集中させたメガ・ビーム・キャノンの一射で撃破している(ナノラミネートアーマーのビーム耐性も懸念してはいたが、ガンプラの出来は再現するに至っていないかったようだ)。

そして今、もう一機のグレイズ・フレームと思われていた機体——レギンレイズを、クロスボーンガンダム・クローザーと二機掛かりで

追い詰めている状況だ。

『とは言っても、あんな長距離狙撃のビームでやられるなんて、思わない、か……!』

「……ちやぞちやうるせエぞ……」

『うわああ!?!』

右腕にマルチウエポンとソードを組み合わせた武装を持つレギンレイズが、クローザーのビームザンバーの一閃を危なげに回避する。しかし、クローザーは山肌を蹴り込むことで再び飛び上がり、地表へ落下していくレギンレイズに追撃を仕掛けた。

『……ッ！ナメないでッ!』

レギンレイズは巧みに空中制動をかけ、真正面からクローザーを迎え撃つ。

ビームザンバーと大型ソードがぶつかり、火花を散らした。コウスケの使うビームザンバーは「ミヤモト工房」に発注した特注品なのだが、それと正面からまともに剣戟していることに驚く。第二回戦らしい、相応のレベルの高さを感じさせる。

自分のコンソールには、サーチファンネルから送られる測定値が表示されている。先刻からキャッチし続けている、レギンレイズの粒子波長だ。クローザーとツイーレンの絶え間ない攻撃に対し、当初は安定した出力を発揮していたが、現在は動きによつて値の振れ幅が大きい。

エイハブ・リアクターが悲鳴を上げている証拠だ。

(そろそろ、決め時かな)

コンソールを叩き、コウスケへサインを送った。それに対する返事はないが、行動で示される。

クローザーは互角に戦っていたように見えたが、突如として骨十字スラスターから発するバーニア光が輝きを増し、レギンレイズを凌駕した。大型ソードの横一閃をひらりと躲すと、宙返りするようにレギンレイズの上を取る。

『え、何——』

そして、ビームザンバーで左腕を切り飛ばした。

そのまま、背中合わせにレギンレイズの背後へ降りつつ反転し、ビームザンバーを突き出す。

『——こ、んのおおつ!!』

相手ファイターは、咄嗟に残った右腕のソードを掲げて盾代わりにした。

「チツ……おらあああッ!!」

全く意に介さず、コウスケは叫び声を上げてクローザーを押し出す。レギンレイズはビームザンバーを受け止めているが、全推力を乗せて押し込んでくるクローザーに力負けしていた。

そして、雪溪の山肌に叩き付けられる。

『きやあああつ!?!』

悲鳴を上げる相手には構わず、レギンレイズをぐいぐい押し込んでいくクローザー。直後にフェイスマスクが開き、余剰熱を排出した。その余波に煽られ、高山植物の葉が散り散りに舞い上がる。

レギンレイズはその場でぐったりしたまま、動かない。背部に露出しているエイハブ・リアクターが損傷したのだろうか。

「……つまねエな……」

コウスケの興覚めたかのような、単調な呟き。

(あーあ……またそういうこと言うんだから)

だから友達ができないんだと、よく言い聞かせているつもりなのだが。

(ま、これなら私が出る幕はなさそうかな)

とはいえ、流石は『茜き野獣』。彼の働きで、こちらの手の内を見せずに勝利ができる。

本当は、総掛かりでレギンレイズを倒せる自信は十二分にあっただが、今後相対するチームへ与える情報は最小限である方がいい。傲慢と言われても反論はしないが、見ているのは目先の勝利ではない。

これが、チームを優勝へ導く策だ。

「終えだ」

クローザーがビームザンバーを逆手に持ち替え、レギンレイズの胸部へ狙いを定めた。未だ撃墜の判定がないアスタロトオリジンは、バ

ンガードと交戦中なのだろう。加勢に向かうため、ツイーレンを動かそうとした。

瞬間、

「——っ!? コウスケー!」

「あ?」

サーチファンネルが、別の波動をキャッチした。

その方向へ瞬時にツイーレンを向け、迎撃態勢を取る。

その直後、砲撃が轟いた。

『うおおおお!!正義を完遂するため、舞い戻ったぞ!!』

快哉を叫びながら、撃墜したと思っていたゲイレルがホバーユニットを唸らせて雪渓を滑走してきた。とはいえ、自分が放ったメガ・ビーム・キャノンのダメージは残ったままであり、キャノン砲が取り付けられている両肩の下には腕がなく、背部ロケットランチャーと脚部の装甲がごっそりと抉れている。

「うそ…撃墜したはず!?!」

『正義は賊などに屈しないのだ!!』

何処かで聞いたような台詞だ。

(いや、確かに撃墜判定があったはず…まさか、本当に復活したの!?)可能性としては、ゼロではない。

現実には、粒子残量が底を突いていたにも関わらず、ファイターの声に応えるように息を吹き返した事例が幾つも存在している。

一部ではオカルトだとして、システムの不備を疑う意見もあるが、プラフスキー粒子と人の感情に関する部分には未知の領域が多い。この分野の第一人者でもあるヤジマ・ニルスは、ガンプラが復活する事例に対し肯定的であると言う(愛読書の「新プラフスキー粒子論」でも真面目に触れられている)。

一瞬、それらのことを思い出しつつ、コウスケに意識を向けた。

「事態急変!コウスケ——」

「悪い、無理」

ツイーレンの丸眼鏡のようなハイブリッドセンサーを滑らせると、レギンレイズがクローザーのビームザンバーを弾き飛ばす瞬間を目

撃する。粒子加速刃が消えたザンバーが斜面を転がり落ちていく。

『ハア、ハア……。』 茜き野獣も、これまでツ!!』

レギンレイズは、片腕でソードを振ってクローザーに襲い掛かった。クロスボーン・ガンダム系列には豊富に武装が備わっていることを知っているのだろう、連撃を続けて回避以外の行動をさせまいとしている。

「仕方ない、各個撃破でいくしか……」

『余所見をするなあ!!』

ゲイレールが一直線に向かってきた。

作戦も何もない、無謀な突撃にしか見えない。だが時として、真正面のぶつかり合いが雌雄を決する場合もある。ガンプラビルダーという者はそういう気質が多いし、コウスケもツツジも、基本的にはそのスタンスを信条としている。

(…だったら)

無論、自分にだって意地がある。

一騎打ちが望みなら、それを買うのもチーム『ハウンドクロス』の流儀だ。

(撃ち砕くまで)

コントロールスフィアを操作する。

デナン・ゲー・ツイーレンの背部に接続されている二門のメガ・ビーム・キャノンが、重々しい金属音を立てながら両脇から砲身を伸ばした。脚部から突出するアンカーが万年雪に食い込み、機体を固定する。

砲身が唸り始めた。

「そんなにこれを食べたいのなら、存分にどうぞ」

エネルギー充填率、30%。

『二度も当たるものか！こちらが撃破するのが先だ!』

エネルギー充填率、60%。

「それは無理でしょう。だって——」

エネルギー充填率、90%。

「——本気のヤツ、撃ちますから」

その現象に、思い当たる節がある。

それは、ツツジが、対ガンダムラナンキュラス用に温存しておきたい”と言っていたシステムだ。

「…バンガードが、アレを使ったの…?」

A c t . 2 1 『涓滴岩を穿つⅡ』へ続く

Act. 21 『涓滴岩を穿つⅡ』

——炎システム。

バトルで蓄積したガンプラの駆動熱をプラフスキー粒子を媒介として放熱し、関節強度を飛躍的に上昇させることで、通常では耐え切れない超高速運動を是とする特殊システムの名称である。

これを世界で初めて実装したのは、日本在住の現教師ビルダーである。非常に扱いが難しい上に発動時間が長くて一分程度、さらに使用後のダメージも大きく、相応の操縦技術と関節強度の向上が求められる。しかし、このシステムを応用した派生型も誕生するほど、彼がガンプラ界に与えた影響は小さくなかった。

「ハア…ハア…、…ッ！」

カンザキ・ツツジも、それに魅せられたビルダーの一人である。

今、コンソールのモニターに映っているのは、山肌が大きく抉れ、その傷跡周辺の積雪が溶けて水蒸気になって揺らめいている映像だ。

そして、抉れて地面が剥き出しになった山肌に、血のように赤いモビルスーツ——ガンダムアスタロトオリジンが半身を削ぎ取られた無惨な姿で横たわっている。熱せられた蠟のように、傷口が内側のガンダムフレームごと溶解していた。

自身の——ガンダムAGE—2バンガードの——攻撃による、惨状であった。

『一撃——やられ——何をした…!?』

ノイズが混じりながら、アスタロトオリジンのファイターが絞り出すような声で呻く。

振り抜いたままの状態だったドッズソードを胸に寄せるが、瞬間、刀身に微細な亀裂が走るのを見た。

そして、一挙に碎け散る。

「…ッ！」

否、分かっていた。

不完全な状態のまま、“これ”を発動させればどうなるのか。

ノウハウ自体は所持していたが、実用に足る程の練度には未だに到達できずにいる。それ故に、本来のシステムを改造し、自分に馴染む形へと再構成をしている只中であった。

（好敵手との決着までに完成させ、それまで秘匿しておこうと考えていた…）

甘かった。

無論、油断していたのでも、相手を侮っていたのでもない。奥の手を見せなければならなかった程に、強者つわものだったということだ。

こちらの放った一撃により、アスタロトオリジンのγナノラミネートソードは粉々に砕け、破片が周囲に散らばっている。

コンソール画面に表示されている各関節のダメージに一瞥をくれ、改めて眼前のモニターに集中した。

AGE―2バンガードを、山腹の亀裂へ降着させる。

『けー！動いてくれアス―オリジン！』

ノイズ混じりの声に連動するように、顔半分が削ぎ取られたアスタロトオリジンが、首をこちらへ向けて仰ぎ見た。

刀身を失い、基部のジェネレータのみとなったドツズソードを躊躇いなく棄てる。右肩のバインダー裏に仕込んだビームサーベルの柄を分離させ、落下するそれを開いた右手で掴み取った。

「斯か様な決着は、些かか不本意だが」

アスタロトオリジンをアイパッチ状のカメラ越しに見下ろし、逆手に握った柄から出力を抑えたビームダガーを発生させる。

剥き出しになった並列する二基のエイハブ・リアクターの内、右側のドラム部へとビームダガーの鋒を向けた（人体で喩えると心臓の部分である）。

「御免」

そして、一息に突き立てる。

ガンダムアスタロトオリジンは小刻みに痙攣した後、静かにその場で沈黙した。山腹に刻まれた亀裂の中で、単なるプラスチック樹脂の塊に成り果てる。

『BATTLE END！』

バトルシステムの電子音声が騒がしく聞こえるほど、全日本ガンブラバトル選手権の地区予選会場は妙な静けさに包まれていた。

『勝者、菱亜学園チーム『ハウンドクロス』!』

ウグイス嬢のアナウンスが響き渡ったことで、次第に会場のざわめきが蘇る。

バトルシステム上の愛機を手に取り、状態を確認しようと脚部に触れた瞬間、先程のドッズソードと同じように各関節部に亀裂が走った。

「…すまない、バンガード…」

ダメージレベルが例えBであっても、被ダメージではなく自発的な損傷となれば、バトル終了後もガンプラに影響が残ることは免れないのだ。

バンガードの四肢は胴体との接合部こそ生きてはいるが、可動部の損傷が補修レベルの加工では再起できないと一目で分かる。

「ツツジさん、さっきの爆発音はやっぱり…」

近寄ってきたシバ・ニーナが自分の手元を覗き込み、ハッと声を漏らした。

「バンガードの関節が…!」

「見ての通りだ、シバ。あれを発動した影響…それがこの損傷だ」

シバとササミネの両名には、事前に特殊システムの搭載を告知している。そのため、バトル中に何が起こったのか彼女は理解できているのだろう。

「これについては後日沙汰するが、試合後の挨拶は抜かりのないようにな」

こちらを心配しているようなシバを置き、相手チームへと近付き握手を交わす。ガンダムアスタロトオリジンを操っていたリーダーは釈然としない態度だったが、礼節はしっかりと返した。

その後、会話も少なく中央ホールを後にして廊下を歩く。前を行く二人は相割らずの仲の良さ（一方的にシバが話しかけているだけに見える）だが、今の自分はそれに混ざる気にはなれなかった。

想定外の強者との会敵、未完のシステムの発動、剣の腕。そして、遠

くを見てばかりで、目の前に迫る脅威への心構えの欠如。
己の未熟を、痛感する。

その結果が、愛機をなまくらへと落としてしまった。

(今一度、自分を鍛え直さねばな…)

深呼吸して気持ちを入れ替え、新しい空気を心身に取り込む。

やるべき課題は、山積みだ。

.....

「…あの剣閃、まさかとは思うが」

「…間違いあらへん、あれやな」

四基のバトルシステムが並ぶ中央ホールの上階、その観客席に座る二人は、先程起こった現象について思索していた。

「運用形態こそ違えど、その根幹は炎システムで相違ないだろう」

「ワイは一発で分かったでえ。ナマで見たことあるさかいな」

「何れのルートで入手したのかは分からないが、あのシステムに手を加えるとは」

「とは言ーても、使いこなせてないっちゅーか、そもそもまだ完成してへんのやろな。」キャプテン・アゼリアもヘタこくんやな」

「……」

顎鬚を蓄えた男——アズマ・ハルトは、口を噤んだ。

思索しているが、議論しているのではない。

この男に向けて言っているのでもない。

そもそも、この男は何故ここにいる。

「——ってエー！そろそろ誰かツツコメやあ!!!」

隣の男は立ち上がり、一同に向けて叫んだ。

「座れ。うるさいぞ」

「へい」

男——イブキ・アラタは素直に従って腰を下ろす。

今日は、妙に大所帯での観戦となっていた。

自分とイブキの座る席から一段下には、右から英志学園ガンプラ部

顧問シマ・マリコ、菱亜学園同部顧問エニワ・シロウ、プラモデル造形専門店「ミヤモト工房」店主ミヤモト・ロウ、そしてガンプラショップ「ビッグリング」店主フルデ・アルトといった、肩書もすっかりとある四名が並んで座っている。

ミヤモトとフルデが言うには、どうせ観戦するのなら英志にゆかりのある面子に合流した方がいい、ということらしい。

それに対して文句はないが、当たり前前の顔をしてイブキもここにいるのは何故だ。

「まあまあ、ええやないか。先週、たまたま二人に遭遇して意気投合したんや。今はこつちの方で仕事もろてるし、なーんも問題あらへんで？」

「ならばせめて、ワシに一言連絡を入れてからにしる…」

「サプライズや〜ん」

この男のマイペースには慣れない。

「ところで先生、炎システムと言うと、“ゼロ炎のユウセイ”が実装したシステムのことですね？」

シマがこちらを見、訊ねてきた。

「うむ。あれを発動させる一瞬、関節部から赤熱した粒子が溢れるのを確認した。似たエフェクト効果を持つナイトロが存在するが、その色が証左だ。炎システムは運動性を上げるものだが、彼女の場合、駆動熱を全て一撃に転用させているのかもしれない」

「ほんの一瞬でよう見えんかったけど、剣を赤熱したプラフスキー粒子で包んで、見た目で言えばライザーソードみたいな感じにしよったわ」

「あの剣にはジェネレーターが搭載されているらしいからな。そうだな、エニワよ？」

声をかけると、シマの隣に座る白いジャージ姿のエニワ・シロウは、溜息を吐きながら振り向いた。

「ハア…ライバル校に手の内を明かすと思いませんか？」

「いいからさっさと吐きな。もう皆知ってることだよ」

「はーいはい」

シマの催促を受け、エニワは渋々応じる。

「ドッズソードはシングルブレイドそのものの切れ味だけじゃなく、基部に備えたジェネレーターによってGNソードと同様の効果を持つてるんだ。どうやらあいつ、それを応用してあの技を繰り出したんだろうな」

「当人から聞いてはいないのか？」

「いや？さっき初めて知りました」

両手を上げ、肩を竦めてみせるエニワ。

やはり、未完成のシステムのような。炎システムをそのまま使わなかった理由は容易に想像できる。強力なシステムとして広く知られるようになった昨今だが、それを実用しているファイターはほとんどいないのが現状である。中には、独自に解釈してFFシステムと名付けて運用しているファイターがいるが、多くの場合は使いこなせない理由で断念する。

つまり、カンザキ・ツツジは自分の手に合うよう再構成しているのだろう。

「しかし、あの破壊力…ガンプラへの影響も大きいはずだ」

「自分のモンに振り回されちゃあ、世話ないで」

「まあ、ツツジの奴も久し振りのライバル登場なんだ、躍起になってるんだろう。確かに、逸り過ぎなところは否めないけどな」

ミヤモト・ロウが口を挟む。

彼とは、以前に「ビッグリング」でフルデと一緒にいる時に顔を合わせたことがある。『殲滅のアズマ』の名を知っており、その時は握手を求められたものだ。

フルデが隣のミヤモトに話を振る。

「また手伝ってほしい、なんて言われるんじゃないですか？」

「だろうなあ…。それは構わないんだが、遅くまでいられると困るんだよ…色々とき」

「ほお？間違いを起す可能性がある、と言いたいのかな？」

「そんなことしませんよシマ先生！女子学生が遅くまで男性の家にいるのはダメだ、つてことですよー！」

「ハハ、似たようなものじゃないか」
変な言い争いが下段の席で起こるが、自分は口を出さないでおいた。

.....

『GUNPLA BATTLE. Combat mode, start up』

電子音声が景気よく声を発し、大会用の巨大なヘックスユニットが起動する。

『Mode damage level, set to "B".
Please, set your Gpbase』
手順に従い、自分のGPベースをユニットへ接続させる。

『Beginning, PLAVSKY PARTICLE dispersion』

バトルシステムの前に立つ自分達の眼前に、空の色を映したような輝く粒子が立ち昇る。

『Field 3, "FOREST"』

ランダムで選択されたフィールドが、場に満ちたプラフスキー粒子によって形成されていく。

続いて、周囲をホログラムコンソールが覆い、眼前に二つのコントロールスフィアが現れた。

『Please, set your GUNPLA』

装備類の取り付けを済ませておいた愛機を、GPベースが接続されているユニットに設置させる。粒子が足元から浸透していき、愛機の相貌が鋭く輝いた。

ホログラムでカタパルトデッキが再現され、出撃の準備が整う。

『BATTLE START!』

そして、試合開始の合図が響き渡った。

「キンジョウ・ホウカ、ガンダムランタンキュラス！」

「ジニア・ラインアリス、ハルジオン・フェイク！」

「カトー・トモヒサ、ガンダムヘリクリサム！」

二人の宣言を聞き、自分に任せられた出撃の台詞を声に出す。

「チーム『スターブロッサム』！百花斉放、吹き荒らします！」

カタパルトが滑走し、ガンプラをバトルフィールドに射出した。

コンソールの画面に映し出されたのは、丘陵のない広がった森林地帯だ。

三機は即座に出撃地点から最寄りの木陰に身を潜めた。

「おい、聞こえるか？」

コンソールにトモヒサの顔が表示される。

「うん」

「感度りよーこー」

続けて応答したジニアも映し出された。

「今回は重力下で、かつ森林地帯だ。身を隠すには十分な場所がある。まずは相手の出方を伺う」

「ねーねー、ヘリクリサム大丈夫？木の上によきつて、グラストロランチャーが出てたりしない？」

心底心配げな表情で、ジニアが口を挟む。

「そんなこと心配すんな。大丈夫だ、今回はグランサプースター01だからな」

「01って？」

確か、ガンダムヘリクリサムのバックパックは「グランサプースター02」という名前だったはずだ。記憶の相違かと思い、疑問を投げける。

「02はフル装備状態、01は重力下に合わせた軽装状態のことだ」

「さっすが、拘るね！」

「当たり前だろ？そんなことより、試合に集中するぞ。各自索敵を厳にして、一旦散開する。二人はまだ攻撃に出ないで、まずは俺が相手を引き付ける。その隙を狙ってくれ」

「うん、やってみる」

「おーらい、まっかせて！」

ジニアの言葉を最後に、それぞれ動き出す。

いつも通りの、大胆な作戦を立てるトモヒサ。ガンダムヘリクリサムは、その制圧力で一気に決め切る短期決戦型だが、同時に、脅威と相手に印象付けることで僚機への注意を逸らす役割もある、と言っていた。

開けた場所であれば短期決戦に臨むが、今回のようなフィールドの場合ならそれが可能なのだ。

(装甲は厚くしてあるけど、ダメージは覚悟の上で言ってた)

スペアパーツは潤沢だから大丈夫だと言っていたが、やはり壊されていく姿はあまり見たくはないものだ。

「相手は…」

木々の間を静かに進みながら、ランキンユラスの強化されたアンテナで索敵を行う。未だ確認はできず、トモヒサも動いてはいない。もうしばらく粘る必要があるようだ。

しっかりとドツブトンファアの柄を握り、いつでも対応できるように気を引き締める。森林地帯は人工物が全く無く、フィールドの作品世界はどれなんだろうと、索敵する傍らで思った。

と、その瞬間。

「——っ！」

反応があった。

一際大きな巨木に背を預け、そつと覗き込む。

見れば、森の中に広大な湖があった。こちらから見て対岸に、モビルスーツが一機横切って行くのを目に留める。

両肩から左右に伸びるウイングと、特徴的なビームライフルを持つ機体だ。それは、ついこの間「ビッグリング」で見たガンプラだった。

「えっと、名前は…ガンダム…」

クロス…だったような、エックス…だったような…。

気付かれないように覗き込んでみると、モビルスーツが着地する。そして、周囲をキョロキョロしたかと思うと、突然両腕を振り回した。

まさか、気付かれた？

「……………」

いや、そうではなさそうだ。

何をしているのか分からないが、共有マップに敵機的位置をマークで報せた。

すると、もう一つマークが点る。ジニアも敵機を確認したらしい。

「いよいよ、戦闘が始まるのだ。」

身構えると、上の方で轟音が響いた。

「ヘリクリサムが動いた……」

音の方向——フィールドで唯一高さのある小山の辺りに、漆黒の機体が飛んでいた。グラストロランチャーの砲撃が、ジニアの点したマークの地点へ一直線に飛んでいくのを見る。

意識を見付けたモビルスーツに移すと、既に飛び上がっており、狙い通りにガンダムヘリクリサムの方角へ向かう。

「よし、隙を見て私も出よう」

巨木から飛び出し、その後を追うため湖の上を横切ろうとした。

しかし——

——ビュゴオオオオオオオ!!!

”足元”から当然、ビーム攻撃の光が迸った。

咄嗟に回避し、周囲に水飛沫が降り注ぐ。

「湖の、中から!?!」

ドツズトンファアの刃を展開し、砲撃を仕掛けた主を確認しようとする目を凝らした。

「ふう、さすがにこれでは落ちないか……」

ゆっくりと上がってきたモビルスーツは、背中に広がる大きなウィングを広げ、右手に握る二丁が合体したビーム兵器（バスターライフルだったはずだ）を横に振る。

「どうやらこちらを誘い出し、隙を見て撃墜しようという魂胆のようだが、そうはさせない。君達の位置は、ぼくの方が先に把握していたのでな」

右目を覆うクリアグリーンバイザーが輝く。

「…チーム『アンダブル』がリーダー、オオゾラ・ユキナリ。そして、愛機のダブルゼロガンダム」

そして、ビームライフルの銃口をこちらへ向けた。

「未来を、切り開く」

A c t . 2 2 『涓滴岩を穿つⅢ』へ続く

Act. 22 『涓滴岩を穿つⅢ』

カトー・トモヒサは、自分の役割を全うする。

マップに点されたマーカールを確認し、機体を上空へ浮上させた。ジニアが示した方角へ、ガンダムAGE―1フルグランサと同じマウントポジションに変更したグラストロランチャーから、砲撃を開始する。

「さあ、暴れてやるか」

着弾点が大きく爆ぜ、密集している樹冠が爆風に煽られる。

そして数秒とかわからず、木の葉が舞う中から一機のモビルスーツが現れた。

ミキシングモデルと分かる巨大な砲身を担ぎ、胸部、脚部を追加アーマーが覆う重装甲の姿。とりわけ目立つ額と胸に存在する砲門は、ガンダム好きなら一目で分かる高出力兵装「ハイメガキャノン」だ。

ZZガンダムによく似ているが、しかしZZガンダムに非ず。

「ツヴァイゼータガンダムって奴か！」

そう、何故ならば。

素体に使われているガンプラは、どう見てもガンダムAGE―3ノーマルだからである。

『随分、派手な攻撃かましてくれんじやないの！』

掠れたガラガラ声オープンチャンネルから響いた。

その声は忘れもしない。一度聴いたら忘れない特徴的な声は、この間の「ビッグリング」での一件を鮮明に思い出させた。

ツヴァイゼータガンダムは上空に飛び上がり、ガンダムヘリクリサムと向かい合う。

「よお、五日ぶりだな」

『黒い試作2号機の改造ガンプラ…本物を見るのは初めてだぜ』

「有名みたいで光栄なことだ」

掠れた声の主――アシャ・シュウトは、ツヴァイゼータガンダムの

巨大な砲身——ハイパーメガカノンの砲口をこちらへ向けた。

『けど、俺のツヴァイゼータも侮ってもらっちゃ困るね!』

快哉と共に、グラストロランチャーに匹敵する程の膨大なビームを吐き出す。

ヘリクリサムを回避させつつ、バインダー上部のツインドツズキヤノンで牽制射撃を行うが、ツヴァイゼータは外見に似合わない素早い運動を見せた。

そのまま互いに森林の中へ着地し、マップで位置を確認する。

やや離れた場所で、ハルジオン・フェイクが表示された。その傍にホウカがマーカーを付けた機体がいるため、交戦しているのだろう。しかし、予定ならば炙り出された三機目とガンダムラナンキュラスも表示されるはずだが、未だに音沙汰はない。

「どうしたってんだ…ツ!?!」

意識を僅か逸らしていたところに、ロックオンの警報が鳴り響く。

その直後には、ハイパーメガカノンのものであろう砲撃が、木々を巻き込んで襲い掛かってきた。

『隠れてないで出てきな!』 黒い悪夢“さん!』

「ちっ…!」

舌打ちしつつ、フレキシブル・スラスター・バインダーからバーニアを噴射させて機体を横滑りさせる。粒子の塊が先程まで立っていた場所を飲み込むのを見送り、グラストロランチャーを両腰から伸ばした。

「望み通り、出てきてやったぜ!」

おおよその位置に狙いを付け、ヘリクリサムの足で地面を削りながら砲撃を撃ち込む。

相手の砲撃が止まない内に撃ち込んだのだ、直撃させる自信はあった。

が、

「——上かッ!!」

天を仰いだ時には、既にツヴァイゼータガンダムがビームサーベルを振り被って急降下してきていた。

反射的にビームサーベルを選択し、左サイドアーマーからサーベルの柄を突出させる。それを右手で引き抜き、真正面から受け止めた。

『おりゃあああー！』

『なんのおっ!!』

ピンクとライトグリーンのビーム刃が、鮮やかに閃光を散らして弾ける。

続け様に、ツインドツズキャノンの銃口を眼前のツヴァイゼータへ向けた。

『うわっ、危ね!』

ツヴァイゼータは後方へ飛び退き、ツインドツズキャノンの射撃を避ける。放った穿孔する粒子が大木を貫通し、その向こう側の丘にある大きな一枚岩をも撃ち砕いた。

『ひやく、なんて貫通力なんでしょ…』

「あんたから仕掛けたんだ、余所見すんなよ!」

息をつかせる暇を与えず、再びバインダーの推力に任せて近接戦闘に持ち込む。ライトグリーンとピンクのビーム刃が切り結び、群生する樹木の間で重装甲の機体が一進一退を繰り返した。

『ジリ貧かよ…!』

アシヤ・シユウトは吐き捨てると、ツヴァイゼータガンダムを飛び上がらせる。

「場所を変えようってか」

上空からの砲撃に注意しながら、ガンダムヘリクリサムを追従させた。

重力下に合わせたグランサブスター01は上部ユニットが取り外され、そこへシールドビットR（張り合わせていたのを分割して2枚に減らしている）を接続アームで介してマウントしている。グラストロランチャー自体の推進力で積載分を賄えるため、重力下での機能性はベストな状態なのだ。

（まあ、あまり長く飛んでいられないから、さっさとこいつを片付け―
―）

密集する樹幹を突き抜けて森林の空に出た瞬間、別方向からのロツ

クオンをアラートが報せた。

「別方向からッ!？」

咄嗟に機体を翻すが、物理的な衝撃がヘリクリサムを襲う。

幸い、直撃は免れており、左のバインダー上部をビームが掠っていた。攻撃の主を確認しようと、ヘリクリサムの鋭いツインアイを巡らせる。

「今度はガンダムクロスエックスか」

その姿をはつきりと確認した。

如何にもミキシングビルドと見て取れる、独特の機体バランスを持つガンプラである。しかし、名前が示す通りならばガンダムX、或いはガンダムDXを意識しているはずだが、最大の特徴であるサテライトシステムに相当するパーツはなかった。

「トモヒサ、大丈夫!？」

そこへ、ハルジオン・フェイクが現れる。

コンソールのモニターにジニアの顔が表示され、心配そうな視線をこちらへ向けていた。

「大丈夫だ。それより、一旦退くぞ」

ハルジオン・フェイクを連れ、再度森林の中へ身を隠す。そのまま移動しつつ、状況を確認し合う。

「そつちはどうなつてた?」

「ごめん、クロスエックスの隙を狙おうとしたんだけど、こつちの位置は全部バレてたみたいだよ」

「チツ、やつぱりかよ…道理でホウカともう一機、ダブルゼロガンダムの姿が見えねえわけだ」

「そんなに索敵能力が上手そうなチームに見えなかったのにね」

「いや、そうでもねえな。ダブルゼロガンダムのウイング、ありやクラビカルアンテナの塊だぜ」

記憶に焼き付いている姿を思い浮かべる。

一見、ダブルオーライザーとウイングガンダムゼロを意識した趣味的なデザインに見えるが、複雑なパーツ構成をしているのは理由があるはずだ。羽のような部分をクラビカルアンテナに近いものと考え

れば、相手の動きにも納得がいく。

リーダーのオオゾラ・ユキナリは、中々のやり手らしい。

「さて、こっから気張っていこうぜ。奴さん達、使ってる装備がどれも高出力だから粒子切れを狙える」

「攪乱するなら任せてよー」

「期待してるぜ」

そうしていると、ロックオン警報が鳴り響いた。

「そら来た。じゃあな」

「うん！」

差し出したヘリクリサムの拳に、一回り小さいハルジオン・フェイクの拳がぶつかる。

そして別れ、降り注ぐビームを避けつつ次の行動へ移った。

「ホウカも、頼んだぜ」

ダブルゼロガンダムと交戦しているはずの幼馴染のエースへ、届くことはないエールを送る。

.....

ダブルゼロガンダムと湖で会敵した後、川を下りつつGNバスターライフルの攻撃を掻い潜っていた。

バトルフィールドは森林地帯であるが、中心部は落ち窪んだ渓谷になっており、そこへ湖から繋がる川が直瀑となって落下しているのだった。

そして、今は霧に煙る滝壺けぶを挟んで互いに対峙している。

『どうしたんだ？反撃してこないようだが、まさかその両手の武器と背面のものは飾りではないだろう？』

ダブルゼロガンダムのファイター、オオゾラ・ユキナリの声が届く。そうだ、今まで回避行動をするだけに留まり、反撃は一切していない。フラワリング・フィールドは元より、Pファンネルはおるかドゥズトンファーさえも刃を伸ばしているだけだ。

その理由は、この状況にあった。

どんな方法かは分からないが、こちらが相手を補足する前に位置情報は把握されていたようだ。その上ダブルゼロガンダム自体は索敵にかかわらず、湖で待ち伏せをしていた。分断しようとしていたのは明らかだ。

それならばと、相手の狙い通りにした。一対一に持ち込まれるのは願ったりでもあるため、与える情報も最小限に留めてここまで誘導したつもりだ。

無言のまま、ガンダムランキユラスを構えさせる。

『寡黙なのか？しかし、考えていることは分かる。作戦に乗った風を装い、ぼくをここまで誘導した…そうだろうか？』

「…！」

『分かっていたさ、それが狙いだからな。そもそも、今のところ二人の救援に向かうつもりはない』

そこまで言うと、ダブルゼロガンダムがGN系列の機体特有の飛行音を発して浮き上がった。二丁のGNバスターライフルを張り合わせ、背部のウイングを展開する。

『ここで君を倒してから、そうするよ』

「…その言葉、返させていただきます」

ランキユラスのフラワリング・ジェネレータを開き、同じように浮き上がる。

『ようやく喋ってくれたか。真面目なものいいが、バトルは楽しむべきだと思うぞ』

「いいえ。真面目に楽しんでいるだけです」

『なるほど、全くだ』

言葉に笑みを乗せつつ、オオゾラ・ユキナリの纏う雰囲気を変化した。

『では、真面目に…楽しもう！』

滝霧を破り、ダブルゼロガンダムが両肩のツインドライヴから粒子の尾を引き、驀進する。

ランキユラスに半身を取らせ、剣のように持ったGNバスターライフル（GNバスターソードモードとも呼ぶべきか）をドツズトン

フアーの刃で打ち返した。

『…っ!!』

通信から吐息が漏れるのを耳にしつつ、カウンターを打ち込む！

水飛沫をドツズトンフアーで弾きながら、刃を突き構えにダブルゼロの胸部を狙った。

だが、それは目標を貫くことなく、霧を裂く。ダブルゼロガンダムは驚異的なスピードで機体を移動させ、ラナンキュラスの上を取っていた。

一瞬の内に優位を取られ、GNバスターソードが振り降ろされる。

——ガキイン!!

反射的なガードが間に合い、ドツズトンフアーの薄い刃で受け止めた。

「やります、ね…!」

『そちらこそ、鋭いカウンターにしなやかなガンプラの動作…』

実体剣同士の鏝迫り合いが、ギヤリギヤリと音を鳴らす。

『賞賛に値する!』

ダブルゼロガンダムが、装甲の厚い膝で蹴り上げてきた。ラナンキュラスを後退させ、一撃をやり過ぎしながらコントロールスフィアを滑らせる。

(地区予選で、初めて使うよ!)

背部のフラワリング・ジェネレータの中心部にマウントされる花卉が、解き放たれた。

「Pファンネル、お願い!」

四基のPファンネルが曲芸飛行のように飛び、ラナンキュラスの前へ整列する。

そして、一斉に鋭いビームを発射した。

『やはりCファンネルの改造か!』

オオゾラ・ユキナリは読み通りとばかりに、ダブルゼロガンダムを小刻みな空中機動で回避する。流石の操縦テクニクを見せ付けら

れるが、当たらなければ次の手を打つまでだ。

与える指示は、プラスキーパワーゲート。

放射状に並び直したPファンネル同士の間には、正方形の膜が形成される。両腕のドツズトンファアを突き出し、射撃をゲートに潜らせた。

穿孔するビームが、纏うエネルギーを細く、鋭く、貫き通す槍のように瞬時に磨き上げられる。撃ち出された高圧縮の射撃が、ダブルゼロガンダムに直撃した。

「あれはっ…!?!」

否、直撃してはいなかった。

ダブルゼロガンダムの眼前で、圧縮されたドツズのエネルギーが渦を描いて拡散されているのだ。

美しくも思える光景の向こうに、機体が煌めく緑の球体に包まれているのを見る。

ビームが切れると、同時に緑に光る球体も消滅した。

『まさか、パワーゲートにドツズライフルを通すとは。GNフィールドが無ければ、危なかったかもしれない』

Iフィールド・バリアと比肩する、堅牢な防御領域を誇るGNフィールド。主にGN系列と呼ばれるガンプラ（GNドライヴを搭載したガンプラ、及びそれに不具合なく適合したガンプラを指す）が持つ、粒子変容効果を応用した能力である。

ガンダムラナンキュラスの持つフラワリング・フィールドは、Iフィールド・バリアよりもこちらに近いものだ。異なる点は、防御領域をそのまま攻撃に転用できる点にある。

『あまり多用したくはないのだが…君がぼくにこれを使わせたんだ。認めよう』

「…何を、でしょうか」

Pファンネルを帰投させ、次の攻撃に警戒する。

『無論、君が好敵手足り得るファイターだということさ』

オオゾラ・ユキナリは、焦った様子も興奮した様子も見せず、ひたすらに冷静であった。

そして、ダブルゼロガンダムツインドライヴから、一際輝く粒子が散り始める。

それは、GN系列の機体が出力を上げた証拠。

『故に、全力で君を駆逐する』

流れ落ちる瀑布を背に、霧と粒子に包まれるダブルゼロガンダムの相貌が、強く光った。

.....

激甚なる威力を持った光軸が、木々を根こそぎ吹き飛ばす。

絶えず繰り返される高出力砲撃の応酬により、プラフスキー粒子によつて再現された森林地帯は、一年戦争末期の東南アジアもかくやという様相を呈していた。

ただし、これを引き起こしたのは、後の時代を駆け抜けたモビルスーツを再現したガンプラである。

「出鱈目に撃ちまくりやがって…ジニア、そつちは？」

「クロスエックスは何とか抑えてるよ！」

ツヴァイゼータガンダムは、ひたすらにガンダムヘリクリサムを狙い続けている。それ故、こちらも応対せざるを得ず、ツインドッズキャノンとグラストロランチャーはフル回転だ。

（あつちも粒子切れを狙ってんのか？にしても、消費が荒つぽすぎるぜ）

一方、ガンダムクロスエックスは、ハルジオン・フェイクの不規則な機動に翻弄されているのか、先程から当てずっぽうな方角へビームライフルをばら撒いている。まるで、下手な鉄砲も数撃ちや当たる、と言わんばかりだ（当たっていないが）。

「そろそろ攻勢に出た方が良いな。もう満足にビームをばら撒けないはずだ」

「りょーかいー！」

ジニアの気持ちのいい返事を聞き、ヘリクリサムのフレキシブル・スラストター・バインダーを展開して森の中から飛び出した。

『やっとやる気になってくれたかよ!』

同じく飛び出してきたツヴァイゼータが、両腕のダブルビームライフルを発射する。即座にシールドビットRを射出した。

「ああ、勝たせてもらうぞ!」

『言ってくれるじゃないの! ツヴァイゼータで片付けてやる!』

連続で発射される二連射のビームをシールドビットRのオートガードで防ぎ、ツインドツズキャノンから銃身を分離させ、両手持ちにする。直接的なダメージを狙わない牽制射撃で、ツヴァイゼータを後方へ押し遣る。

『お、おい! こっち来るなよ!』

『お前が移動しろよ!』

『む、無理だつて! あの赤いのがこっち来てんだよ!』

『こっちだつて黒い奴が来てる!』

……ん?

「仲間割れ…か?」

オープンチャンネルを伝って、アシヤ・シユウトとガドウ・ランの口論がうるさく響く。二人とも特徴的な掠れ声で、重なりと何を言っているのか分からない。

こちらはクローズチャンネルを使用し、ジニアに繋ぐ。

「よく分かんねえけどチャンネルだ。一気に畳みかける!」

「喧嘩する程仲が良い、つて言うんだよね、あれって」

「知るか! やるぞ!」

呑気なジニアに発破をかけ、グラストロランチャーを突き出す。

『後でこの続きはケリつけてやるからな!』

『あーもー、分かったよ!』

二人はそう言葉を交わすと、クロスエックスはウイングバインダー裏の武器(モンテローのビームジャベリンに似ている)を手に取り、ツヴァイゼータはこちらへ体を真正面に向けた。

そして、額と胸部にある砲口が輝く。

「なっ…まだそんなエネルギーが!？」

『ハイメガキャノンだ!!』

咄嗟に、グラストロランチャーの出力を最大に引き上げる。

(やるしかねえ！)

そして、互いに二門同時、ハイメガキャノンとグラストロランチャーが膨大な粒子を吐き出した。

『いけえええー！！！』

『食らえええー！！！』

それぞれの世界観において、当代最強と謳われた兵器がぶつかり合う。

完全に拮抗したエネルギーが炸裂し、巨大な爆発を巻き起こした。爆風が樹冠を撫で、折れた木々や木の葉が滅茶苦茶に吹き飛ぶ。シルドビットRによってダメージは受けなかったものの、ヘリクリサムがパワーダウンを起こした。そのまま更地となった地面へ降着し、状態を確認する。

「さすがに最大出力は厳しかったか、少し休ませねえと」

視線を上げると、ツヴァイゼータの体が煙を上げているのを見た。爆風の余波に機体表面が焼かれたらしく、バーナーで焙られたように黒ずんでいる。

『くそっ！動け！動けっつてんだよ俺のツヴァイゼータ！』

ツヴァイゼータガンダムはぎこちない動作で四肢を動かすが、直後に装甲内部が爆裂を起こし、そのまま落下を始めてしまった。

絶好の攻撃のチャンスを、あいつは逃さない。

「つーかまーえー」

アタッカーとナッターに分離したハルジオン・フェイクが、落下するツヴァイゼータガンダムへ全速力で突進してきたのだ(何かダメージを受けたクロスエックスが、森へ落下していくのを視界の端で見る)。

「——たっ!!」

『ぐええっつ!?!』

アタッカーの機首からドツズライフルが発射され、焼けていなければ堅牢だったはずの胸部(偶然なのか狙撃したのか、ハイメガキャノンの砲口)を貫通する。一秒ほど遅れ、ナッターの吻部から発生する

ビームサーベルが装甲で覆われた腰部の隙間を捕らえた。器用に回転(獲物を食い千切るワニのような)を始めて、滅茶苦茶に切り刻む。ちよつと引いた。

「グレミーさん大勝利！希望の未来へレディー・ゴー！」

『なんだよその決め台詞はあぁー！！！』

色々な意味で残念な最期を遂げたツヴァイゼータガンダムが、派手に爆発する。

(…分離機能がバウを参考にしているから、つてか…)

ややこしいことこの上ないオマーージュである。

「…ふう。ともかく、これであと二機だ。俺たちはクロスエックスを…」

と、気持ちを切り替えたところで、見上げた先に一つの機影が上昇していくのを見た。

『ガドウ！始めるぞ！』

オーブンチャンネルに、中性的な少年のような声が混ざる。声の主はオオゾラ・ユキナリであり、つまり、上昇していく機影はダブルゼロガンダムだ。

瞬間的に、ホウカの無事を案じる。

『つしやあ!!せつちゃん先輩、待ってました!』

しかし、ラナンキュラスの元へ向かう余裕はなさそうだ。

『来い、サテライトビルドファルコン!!』

ガドウ・ランが叫ぶと、地表から何かが一直線に飛び出す。

「えっ、支援機!?!いつの間に!」

ジニアの素っ頓狂な声は、直後のガドウ・ランの声に掻き消される。

『合体だツ!!』

呼び声に応えた(のかどうか分からないが)のは、メガライダーに似た白いブースターだった。それが飛び上がったガンダムクロスエックスの背に合体し、華奢だった機体に厚い装甲を与える。そして、右肩から長い砲身が伸び、ブースターにあるウイング状のパーツが開いた。

「…道理でサテライトシステムが無かったわけだぜ。合体限定なんて

な」

それは紛うこと無き、サテライトキャノンの発射シークエンスであった。しかし、バトルフィールドは真昼間であり、月が出ている様子は無い。

サテライトキャノンはフリだけか？と、少し安心していた矢先である。一定の高度で止まったダブルゼロガンダムは白昼の空で翼を広げ、輝く胸部から一筋の光線を下へ伸ばしていく。それが、ガンダムクロスエックスの胸部へ届いた。

「じ、冗談だろ!? ガンプラが照射すんのか!?!」

マイクロウェーブをガンンプラが照射するなど、聞いたこともない。そもそも、そんなエネルギーを持てる方が有り得ない話であり、本当にただの冗談である可能性の方が何倍も高い。

しかし、もし本当に可能だとすれば、それは心形流や、あの二代目メイジン・カワグチに――

『マイクロウェーブ…来、来……来いよオ!!』

『バカ! これはガイドレーザーだ!』

変な遣り取りが聞こえる。

「ガイドレーザーだよねアレ!?!」

「言ってる場合じゃねえ!…くそっ! まだパワーダウンしてやがる!」

ガンダムヘリクリサムは未だに動けず、使えるのはツインドッツキャノンとシールドビットRだけだ。

その瞬間、何かが脳で閃いた。

咄嗟にシールドビットRを前面へ展開させ、ある指示を下す。シールド裏が開き、長い筒と短い筒を取り出した。

「何とかしてみる!」

ドッキングしたハルジオン・フェイクが、じつとして動かないクロスエックスへ一直線に向かう。

『させるかよ! サテライトビット!』

しかし、クロスエックスの背部から細かな物体が無数に射出され、ハルジオン・フェイクを迎撃した。確かに、サテライトキャノンはそ

の絶大な威力を撃ち出すまでに、時間を要する。そのため、時間稼ぎのために何かしらの策を用意するビルダーも多いのだ。

『ダブルゼロシステム』、解放!』

オオゾラ・ユキナリが何かを宣言すると、X字に展開されているリフレクターが黄金色に輝き始める。マイクロウェーブが照射された証だ。

『マイクロウェーブ…来たっ!』

定番の台詞を、ガドウ・ランはご本人かと聞き間違えるような声で言った。

「何も考えずに走れ、ジニア!」

「で、でも!」

「俺はいいから、こっから離れろ!」

一瞬だけ躊躇ったハルジオン・フェイクは、可変してその場を離れていった。

(頼むぜ、ヘリクリサム…特大の花を咲かせてやろうじゃねえか)

ジニアがサテライトビットに迎撃されていた間、ヘリクリサムに”あの武器”を構えさせていたのだ。このガンプラがGPO2を基にしている最大の利点、そして、ガンダム史上手持ちにする中で最強と言われる、禁断の兵器。

アトミックバズーカ。

準備が整ったところで、クロスエックスも遂に受信し切ったようだ。

『覚悟しやがれ! サテライトキャノン、いっけえええええー!』

「負けるか! アトミックバズーカを食らいやがれえッ!!」

同時。

片や、外部からのエネルギー受信で可能となる超長射程砲撃、サテライトキャノン。

片や、条約で禁止され、星の屑作戦に用いられた戦術核兵器、アトミックバズーカ。

ぶつかってはいけない兵器が、真つ向正面から激突した。

.....

まるで白昼夢を見ているかのような、白一色に染まる視界。突然赤く輝いたダブルゼロガンダムに蹴飛ばされ、滝壺へ没したらナンキュラスを何とか脱出させ、追い縋った空で見た景色だ。

「――綺麗」

そんなことを、口走ってしまった。

下の方で轟音が響き、ややあつて余波が押し寄せてくる。

ガンダムヘリクリサムが――トモヒサが――アトミックバズーカを使った証拠だ。しかし、それと同時にガンダムクロスエックスがコロニーレーザーのような極太の砲撃を行ったのも目にしており、それらがあつたのだらう。

発動させたフラワリング・フィールドで身を守り、余波が消えるのと同時に解除する（フラワリング・フィールドを隠し通すためだ）。仲間の様子を確認しようと、コンソールに目を移した、その刹那。

GNドライブの音が上空から聞こえた。

「――ッ！」

反射的に天を仰ぐが、音の正体、即ちダブルゼロガンダムを確認できない。眩い太陽光のためだ。

剣か、砲か。それを判断する前に、別種の音が轟いた。後者だった。

しかし、それと分かる前に体が反応しており、回避よりも防御を優先する。

砲撃が届くが、眼前を粒子の塊が弾け飛んでいった。

「耐えて、ガンダムッ……！」

再び発動したフラワリング・フィールドが、GNバスターライフルの砲撃を正面から受け止める。

やがて砲撃は終わると、今度は音が降ってきた。

ドズトンファアを振り、一撃を弾き返す。

『どうやって防いだ?!』

オオゾラ・ユキナリが、先の戦闘では見せなかった気迫を伴って攻撃してくる。

『GNフィールドか!? Iフィールドか!? それとも、エイハブ・リアクターか!』

「くっ! 重い!」

『答えるッ!!』

一撃一撃が、重くなっていた。GNバスターソードを両手で持ち、力任せに何度も叩き付けてくる。

こういう攻撃の対処は、嫌と教授を受けてきた。

振り降ろされた一撃をドツズトンファーで受け止め、刃を返して横へと逸らす。生んだ間隙へ、すかさず片方から突きを繰り出した。

『——がつ!』

ギリギリのところ、ダブルゼロガンダムは致命傷を免れる。

持ち前の機動性で避けたが、突き出したドツズトンファーは左腕と奥のウイングバインダーを貫いた。

「これはっ…?」

爆発したウイングバインダーが、煙と共にセルリアンブルーの輝きを散らしている。

そう、この色は見間違うはずもなく、プラフスキー粒子そのものだ。本来ならば、例えばガンプラが大破したところで炎や煙が再現されるだけであり、粒子が姿を見せることはないのだ。だが、それが見えるということとは——

『思い返せば、君は何かしらの格闘技の使い手だったな!』

一つの結論が浮かびそうになったところに、ダブルゼロガンダムは残った右腕でGNバスターソードを真横から叩き付けてきた。

全身のスラスターの補助と重心移動で、空中で回避する。そのまま、ドツズトンファーのライフルによるカウンターを撃ち込んだ。

『くっ! ……まだ、答えを聞いていないぞ!』

「……どれでも、ありません」

『…なんだと?』

射撃を回避したダブルゼロガンダムは、こちらが放った言葉を聞い

て動きが止まる。

『では、何だと言う？ 思い当たる節がないではないが、有り得ない』

「フラワリング・フィールドです」

最早、隠し通すことはできなかつた。

「私とラナンキュラスとで掴んだ、粒子の力です」

『ガンプラと共に掴む…』

彼は言葉を噛み締めるように静かに言うと、ダブルゼロガンダムのツインドライヴが大きく唸り始める。

『…なるほど。聞くところに寄れば、君はガンプラバトルの経験は浅いらしいようだが、短期間ながらそれほどまでとは。相応の才覚を持っているというわけだ』

やがて噴き出るGN粒子は、その色を真紅へ変えていく。

通常スペックを三倍に引き上げる、GNドライヴの持つ特殊機能。

トランザムである。

『ぼくは、ある理由でダブルオーガンダムそのものを使うことを止めた。そして、別のアプローチでGN機を再現しようと努力してきたんだ。それは、何物にも代え難い尊い経験だ』

「…素晴らしいガンプラだと思います」

『その通り、素晴らしいガンプラだと自負する。だが、君はまるで、粒子に選ばれたと言わんばかりだ。それではあまりに…己を惨めに感じる』

「そんなこと——」

『謙遜は要らないよ。これはぼくの問題だ。故に…』

ゆつくりと始まったトランザムが、突如活性化する。

『君を駆逐し、己を証明してみせる』

刹那、空気が爆発するように振動した。

そう感じたと思うと、次なる衝撃がラナンキュラスを襲う。

「ぐうっ!？」

赤い閃光のような何かに攻撃された。ダメージを受けた腰部に、横一文字の斬撃の跡が刻まれている。

(速過ぎる…！目で追えない！)

防御が叶わないとなれば、この場を離脱するしかない。出来る全速力で急降下を始めた。

しかし、赤い閃光が瞬時に距離を詰めてくる。

咄嗟に、Pファンネルを選択した。

「行ってー！」

一直線にダブルゼロガンダムへ飛び、迎撃を敢行する。

しかし、素早い剣速によって悉く弾き飛ばされてしまった。

（くっ、まだー！）

感覚が研ぎ澄まされ、あの時感じた薫風を想起する。

自然と、“それ”ができると思った。

「——Pファンネル！」

今、思考がプラフスキー粒子を伝播する。

コントロールスファイアによる操作ではないが、弾き飛ばされた花卉達が指示に応じ、ダブルゼロガンダムの背後へ向かっていった。

『速い…!?!』

ダブルゼロガンダムはラナンキュラスを追うのを止め、Pファンネルの迎撃に傾注する。GNバスターライフルを二丁に分割し、狙撃を行った。

しかし、花卉は小刻みに避け、まるでアニメのような活き活きと動きを見せる。

“思考通りに動いている”のだ。

『ああ、有り得ない…この動きはまるで、シアクアンタの——』

一瞬の動揺、その隙を見逃さない。

「そこっ！」

花卉達の動きに合わせるように、ドッズトンファーを振る。

完全にダブルゼロガンダムの周囲を捕らえたPファンネルが、ウィングバインダーを切り刻み、足を断ち、GNバスターライフルを破壊した。

『がアッ——!』

攻撃の手を奪われたダブルゼロガンダムが、落下してくる。

その直下で、ドッズトンファーを張り合わせて左手に持った。空い

た右手を掌底突きの際にし、上へと飛び出す。

「これが私の——本気ですっ!! プラフスキーインパクト!!」

掌に輝くセルリアンブルーの風を、突き上げ——

『せつちゃん先輩ッ!!』

——た瞬間、何かが目の前に滑り込んできた。

滑り込んできた何か——ガンダムクロスエックスは、こちらに背を向けながらダブルゼロガンダムを抱える。

『ガドウッ?!』

青く輝く風が凄絶な威力を持った衝撃波となり、ガンダムクロスエックスの体を駆け上がっていく。その瘦身が、衝撃波によって細かく罅割れていき、爆散した。

その中から、ダブルゼロガンダムが爆煙を裂いて落下するが、

『Over the time limit. BATTLE EN D!』

電子音声がバトルの終了を告げたことで、試合が決着する。

『勝者、英志学園チーム『スターブロッサム』!』

ウグイス嬢のアナウンスが響き渡り、会場が沸き上がった。

ガンダムランキュラスを回収すると、真っ先に相手チームの元へ駆け寄る。

「あのっ……!」

声をかけようとしたが、思わず押し黙った。

「俺達、せつちゃん先輩がいてくれたから、この場所に立ててるんだぜ!?!」

「そうさ、俺のハイパーメガカノンもガドウのサテライトビルドファルコンも、せつちゃん先輩が手伝ってくれたから完成したんだ!」

「えっと、だからさ……先輩がやられると、見たくなかったし、やられたっていう事実を大会に残したくなかったし、さ……」

アシヤ・シユウトとガドウ・ランが、オオゾラ・ユキナリに何かを伝えているのだ。

すると、オオゾラ・ユキナリが笑い始めた。

「ははは、滑稽にも程があるぞ…はは…」

「えっと、ごめんなさい…」

「いや、違うよ。そうじゃないんだ」

彼は自分の頬を叩くと、二人へ向き直った。

「ぼくは一体、何を憤っていたのか…。実は、このチームを任されたのに対して納得していなかったんだ」

「えっ?」

「本当はオープントーナメントに出場する予定で、ダブルゼロガンダムもそのために調整していた。だが、あの事情から地区予選に出場せざるを得なくなったことで、内心はムカついてたんだ」

二人は、彼の言葉を聞いてやや怯えた様子で、微妙に後ずさりしている。

「でも、ガドウ。お前がぼくを助けようとしてくれたこと、素直に嬉しい。アシヤも、そんな風に思ってくれていたとは微塵も分からなかった。不甲斐ないリーダーですまなかったな」

「せ、せつちゃんせんぱく…い!」

突然泣き始めた二人は、オオゾラ・ユキナリの懐に飛び込んだ。

「…せつちゃんじゃあないけどな…」

ふと、彼がこちらを向く。

「ああ、変なところを見せてしまったな」

「い、いえ。むしろ覗き見している気がして、こちらこそ…」

「君に対しても、非礼を詫びさせてくれ。みつともない吐露も聞かせてしまったし」

二人をどかした彼は、本当に申し訳なさそうに頭を下げた。

「頭を上げてください、どうしたらいいのか、私…」

「君は、才能だけで強くなったのではないと、今ならはつきりと分かる。ガンダムランキュラス…その完成度は君だけじゃない、友人達の協力と、君自身の努力が作り上げたもの。違うかな?」

的確に指摘され、素直に頷く。

「うん。そして、ぼくは感じたよ。ガンプラを自分に合わせるのでは

なく、君がガンプラに歩み寄った。結果なのだよね。その逆も然りだ」

「私が、ガンプラに…？」

「ある人の言葉を借りれば、プラフスキー粒子はよく見ている。粒子は、人とガンプラを繋げ、心を相手に伝える力がある。これはファンタジーでもオカルトでもない、事実だ」

「分かる気がします」

「そうだろうな、あのファンネルの動きは思考制御…それこそ、君とガンプラが互いに歩み寄り、手にした力だ」

「そんなことまで、分かっているんですね」

「何、無駄に知識だけ集めてしまっただけさ」

あの数秒の出来事で、Pファンネルの動きを見ていたのか。

ふと、気になったことを訊ねてみる。

「一つ、いいですか？気になったことがあるんですが」

「何だ？」

「ウイングを斬ったときに、青い粒子が飛び散ったのですが…あれは、エネルギー供給のためにフィールドの粒子を集めていたように思っただんです」

「ほう、聡いな。ほぼその通りだ。過去には、フィールドを作る粒子を自在に操ったと言う伝説が存在するが、その真似事だよ」

真似事でそんなことができちゃうのは、もしかしなくても凄い技術である。

「涓滴岩を穿つ」か…ぼくも、愛機とそうなれるよう頑張りたいと思う。今度是一对一でバトルをしたい、受けてくれるだろうか？」

そう言って、彼は握手を求めてきた。

その手を握り返し、精一杯の自信を込めた表情で返答する。

「ええ、喜んで」

握手を解き、会釈をしてからトモヒサとジニアの元へ戻る。

「あ、せっちゃん先輩羨ましい」

「俺もあんな子と手え握ってみてえなあ…」

去り際に何かが聞こえたが、直後の悲鳴で分からなかった。

「よお、何を話してきたんだ？」

戻ると、トモヒサが迎えてくれる。

「またバトルしようってこととか」

「お、また一人ライバルが出来たって感じか？」

「それは…それより、二人はどうなったの？」

「ああ、俺はぶっちゃけアトミックバズーカ撃ったら本当に動けなくなっちゃって、そのまま粒子切れ」

「私はね、余波からは逃げただけで、最後に突っ込んでいったクロスエックスを追いかけてたら試合しゅーりょー」

ジニアは、海外ドラマなどで見るようなオーバーアクションで肩をすくめて見せた。

そして、他のファイターからの拍手などを受けつつ中央ホールを後にした。

.....

「フラワリング・フィールドにプラスキーインパクト、そしてファンネルの思考制御、ですか」

「あら、どうしましたの？もしかして、貴女ともあろう方が怖気づいてますの？」

「ふふ、まさか。その逆です」

中央ホールを見下ろす観客席で、バトルシステムを後にする英志学園の三人を見る。

「イクス・ルシファーを強化した甲斐があつた、と言っておきます」

「“イクス・ルシファー・オーキッド”…そう名を改めたのでしたわね？」

「希しくも、花の名前を冠することになるとは、私自身も驚いています」

「…オーキッド…胡蝶蘭、ですよね…」

隣で身を縮こまらせながら、「機械仕掛けの魔女」が言う。

応えるように、一説から抜粋し、詠うように紡ぎ出す。

「——俄然として覚むれば、即ち^{きよきよぜん}々然として周なり——」

「目が覚めれば、驚いたことに荘周であった」

” 緋ノ神巫 ” が訳を続ける。

「夢で見た蝶である自分も、今の自分も、例え今が夢だとしても、形は変われど本質は同じ自分自身である。それを、ガン普拉に込めました」

” 荘巖の剣士 ” こと私——ユヅキ・ララは、ライバルとの再戦に胸を高鳴らせる。

「さあ、私達の出番は午後ですわよ。あの方たちを見るより、まずは目の前の相手を倒すことが大事ですわ」

美しき” 緋ノ神巫 ”——アンドウ・サダコが私達を炊き付ける。

「…はい、全部…ぶっ壊し尽くしましょう…ふへ…」

” 機械仕掛けの魔女 ”——クラオカ・オリハが、不気味に笑った。

セント榎葉女子学園チーム『天照す閃光』、今日もバトルフィールドの遍くを照らし出す。

Act. 22 『涓滴岩を穿つⅢ』END

教え子を持つ、というのは、思っていた以上に難題だった。

ひたすらに古武術に打ち込んできた自分にとって、誰かに教えを授けるのは未知の領域。その上、預かった二人の子は、7歳の虚弱体質の女の子と、8歳の体格のいい男の子だ。

全く性質の違う二人を監督するのは、並大抵のことではなかった。親になった友人や、二人のご両親と相談をしながら接し方を学び、子供の身の丈に合った鍛錬や体作りの方法を、手探りで組み上げた。

そうして、ようやく師としてそれなりの体裁を整えた時、もつと分かり易く、そして楽しく子供に心得を伝える方法はないかと模索した。そして、趣味の一つだったガン普拉バトルを鍛錬に組み込もうと、閃いたのだった。

特に男の子の方は、元々ガンプラを作るのもバトルをするのも好きで、教えたことの全てを直ぐ様実践して吸収していった。

しかし、本当に驚いたのは、女の子の方だ。

元来が虚弱体質故に日々の鍛錬で教えられることは限られており、ご両親や専属の医師と決めた制限の中では限度があった。しかし、鍛錬の中に組み込んだガン普拉バトル（彼女はHGアデルを好んで使用した）で教えたところ、目に見える形で成長していったのだ。現実ではかかっていた制限がないためか、プラフスキー粒子の中で思う存分動き回る彼女の表情は、普段は見せないような晴れやかなものだった。

やがて、二人の実力差はほとんど無くなり、ガン普拉バトルでは女の子が男の子を打ち負かすことも増えていった。

そんな日々を二年間ほど過ごした時、変化が起こった。

男の子が、ある日を境にして道場に足を運ばなくなったのだ。

原因は何なのかを、ご両親に聞いたところ、本人はそのことを口に出したがりなかつたそうだ。「師匠のせいじゃない」、それだけははっきりと言っていたらしい。

そして、女の子の方にも変化が起きていた。

それは、少しずつではあるが体が丈夫になってきたこと、性格も以前と比して見違えるように明るくなったことなどあるが、それ以上に奇妙な現象が起こっていた。

彼女の操るアデルが技を繰り返すと、稀にこちらのガンプラが何かに押されたような圧を感じたことである。

例えるならば、“風”のような。

思えば、時々山に登ってはピクニックのようなことをしている時も、彼女は風を浴びながら晴れやかな表情をする。それは、プラフスキー粒子の中で生き活きとする姿と重なって見えた。だからと言って、ガンプラバトルを関連付けるのは空想的過ぎるとは思うのだが、不思議とそう思わずにはいられなかった。

やがて日々は過ぎ、彼女が中学三年生に進級した頃。昔の伝^{つて}手を頼り、古武道演武大会に出場してみないかと持ち掛けた。快く承諾した彼女は、初の大舞台で存分に演武を披露し、優勝という栄冠を手にしたのだ。

そして、それは名門校・私立英志学園が注目することとなり、彼女はそこへ進学することを決意した。

教え子が我が手を離れていくのは、幾何かの寂寥の念を感じたが、中学生になっても小さな背中を押すことで彼女——キンジヨウ・ホウカの門出を祝福した。

天高く馬肥ゆる、去年の秋のことである。

.....

見慣れていたはずの、病室の真っ白な天井。

しかし、それはもう小さい頃に卒業した景色であって、8年は見ていなかっただろう。

何故、今頃になってここに寝ているのか。

…自分の体に対して、呆れる。

「目が覚めたか」

聞き慣れた声に顔を向けると、トモヒサがベッドの隣の椅子に座っていた。

「…トモにい」

「良かった、顔色は良さそうだな」

心から安堵したように、その顔が優し気に綻ぶ。

「何処も何ともないか?」

「うん。ちよつと怠い感じはあるけど」

腕を伸ばしてみたり、布団の中で足を動かしてみる。大きな違和感を感じないが、微妙に力が抜けているように感じた。

するとトモヒサの優しい表情に、ふと影が落ちる。

「…もう大丈夫だと楽観しすぎてた。俺がちゃんとお前を見ていれば、無理させることもなかったはずだ」

「そんな…トモにいが悪いんじゃないよ」

「いや、チームのリーダーとして、ガンプラ部の部長として…お前の幼馴染としても情けねえよ。責任はある」

「…でも、もう大丈夫だから」

そう言つて、体を起こそうとする。

それを、トモヒサが肩を抑えてベッドへ体を沈めさせた。

「まだ寝てるって、点滴もしてんだから無理すんな。ジニアとアズマさんが、下に飲み物取りに行ってるから」

「…うん」

言われるがまま、再び真っ白な天井を見上げる。

ベッド横の机にある電子時計を見ると、水曜日の午後17時を表示していた。

(四時間くらい、寝てたのかな…)

最後の記憶は、ガンダムラナンキュラスでNPCのハイモックをPファンネルで狙っていた光景。先週の土曜日の地区予選でのPファンネルの思考制御、その実践のために行っていたテスト戦である。

あれから何度も挑戦してみたものの、Pファンネルを自由に動かすどころか、やればやるほど感覚が鈍っていく。トモヒサやジニア、カネダ・リクヤにもテストに協力してもらったのだが、結果は変わらない

かった。次第に躍起になり、今日は昼食を摂らずにバトルシステムの
あるログキャビンへと走ったのだ。

それがいけなかったのだろうか…。

「…トモに、私どうなったの?」

「ああ、やつぱ覚えてないか。お前が昼に食堂にいなかったからもし
やって思ってた向かったら、バトルシステムを起動させたまま倒れてた
んだ。その後アズマさんを電話で呼んで、意識がないから救急車を呼
ぼうってことになった」

「…やつぱり、迷惑かけちゃったんだね」

「あのな、俺達は迷惑だなんて微塵も思ってたねえ。それくらい、分かる
だろ?」

「…うん。ありがと、トモに」

トモヒサの目を真っ直ぐに見てそう言うと、そつぽを向かれた。

「正面切って言うなよ…恥ずかしいだろ」

「そうかな?」

「そうだ。それに、俺だけに言っただろうすんだよ。ジニアなんか血相
変えて喚いて、救急車と一緒に乗り込んだんだぞ?」

想像してみると、その様子がありありと浮かぶ。

「アズマさんは流石元教師って感じで、ずっと冷静に対処してたしな」

そちらも、何となく想像に難くない。

「そうだ、ラナンキュラスは?」

「ん?大丈夫だ、ちゃんとケースに回収しておいた」

「そう…良かった」

「この状況でガンプラの心配かよ…ある意味、ガンプラバカだな」

「それ、褒めてるの?」

「ガンプラバカは褒め言葉だ」

何故か得意げな表情をするトモヒサ。

話していると、病室のドアが開かれてジニアとアズマがそれぞれに
紙コップを持って入ってきた。ジニアは一瞬呆けたような顔をする
と、見る見る表情が崩れていく。

「ホ~~~~~~~~カ~~~~~~~~!!」

たつたつたつと走ってきて（机に紙コップを置いてから）、寝ている自分に抱き着いてきた。

「もう目を覚まさないかと思つたよ〜〜〜!」

「ご、ごめんねジニー。もう大丈夫だから」

抱き着いた腹部に顔を埋めながら、声にならない声を発するジニア。

その後ろからアズマが歩み寄り、ジニアを引き?がした。

「その辺にしておけ、まだ安静にしておいた方が良く。それに、相部屋だから静かにな」

「はい…:グスツ」

鼻頭を真つ赤にして涙ぐむジニアは、大人しくアズマに従い椅子に座り込む。

アズマが、握っている紙コップを差し出してきた。

「紅茶は飲めたか?」

「はい。頂きます」

紙コップを受け取り、一口だけ啜る。

「体の調子はどうだ?頭痛がしたり、目眩や吐き気などはないか?」

「何処も、何ともありません」

「そうか、大事ないようで何よりだ。医師が言うには、ちよつとした過労だそうだ」

「そう、ですか…」

いつの間に、そこまで自分を追い詰めていたのだろう。いつも通りの日々を送っていたし、ガン普拉バトルも疲労が溜まるほどではなかったはずだ。

俯いて握る紙コップの中の紅茶を眺めていると、アズマが柔和な声をかける。

「根を詰めるな。進学して寮生活になり、身の周りの環境が変わったせいもあるだろう。無理のない範囲で、できることをやればいい。今後は、しっかりと昼食を摂った上で、適度な練習を行うべきだ」

「はい…」

「…とは言え、ワシも配慮が欠けていた。コーチとしてセーブする部

分を見極められず、真っ直ぐなお前の意欲に駆られ…いや、これは言い訳だ。ともかく、済まなかった」

「いえ、そんな…アズマさんが謝ることでは」

「そうはいかん。ワシにも責任がある」

「でも、アズマさんのお陰でここまで…」

「はいストップだぜ」

突然、トモヒサが間に手刀を刺し込んでくる。

「ただだけ頑固なんですか、アズマさん。ホウカも」

「う…」

思わず縮こまり、アズマも珍しくトモヒサの言葉に圧されていた。

その後、医師から退院の許可が下り、アズマの車で英志学園へ帰ることになった。

学園に到着したのは、夜19時を回った頃。ジニアとトモヒサは先に寮へ戻り、アズマと一緒にシマ・マリコが待つ職員室へ向かった。

「キンジョウ、本当に大丈夫かい？」

袖を通さない赤いジャージを羽織る、社会科教師兼ガンプラ部顧問のシマ・マリコが、初めて見る表情で自分の右手を両手で包み込む。

少し面を食らうが、その優しさにやや沈んでいた心がすつと軽くなった。

「もう大丈夫です。ご心配をおかけしました」

「いいんだよ、それは。本当に心配したんだよ？カトーはこの世の終わりみたいな顔をするし、ラインアリスはぴーぴー泣き喚くし」

「そう、だったんですか」

ジニアはともかく、トモヒサまでそんな様子だったとは、病室での態度とはまるで違うことに少し驚いた。

「先生も、冷静な対応と送迎、ありがとうございました」

「気にするな、当たり前のことだ」

アズマに対して、頭を下げるマリコ。

「さて、キンジョウ。今日は早めに休んで、また明日元気な顔を見せておくれ」

「…その、明日のことなんですけど」

こちらの返事に、きよとんとして顔を見合わせるアズマとマリコ。決断するまでに時間を要したが、そうしなければつきりしないと思つた。今の自分に不足しているものを明確にするために、必要なことだと。

「明日、〃花鳥風月〃の師匠の下を訪ねさせてください」

今一度、自分を振り返るためにも。

巣立ちした、古巣へと。

.....

——同時刻、プラモデル造形店『ミヤモト工房』

「おい、ツツジ」

「……」

店内の奥、赤い暖簾で仕切られた作業スペースに、背中合わせで座っている男女二人。

店仕舞いを負え、一時間ほどヤスリやクラフトカッターなどの工具の音だけを鳴らして黙々と作業をしていたが、気付けば時計の針が19時を回っていることに気付いた。

後ろで作業しているカンザキ・ツツジに声をかけたが、応答がない。

「ツツジー?」

「……」

またも無反応。

仕方なくプラモデル用ドリルを作業台に置き、椅子だけを回して深紅の制服の上を使い古されたエプロンを重ね着している肩を突いた。

「——ああ、ミヤモトさん。何か?」

ようやく気付き、耳からイヤホンを外しながら菫色のポニーテールを揺らし、こちらに振り向くツツジ。

「道理で反応がないと思つたら、作業BGM聴いてたのか?」

「これがないと集中できなくてね」

「そーいや、お前はそのタイプだったな。曲は?」

「ふふ、自作プレイリストだ」

妙に誇ったような表情をしながら、スカートのポケットから取り出したスマートフォン画面を見せてきた。

再生中の曲は、「ガンダムAGE2 運命の先へ」。ちらりと他の曲目に視線を移すと、「モビルスーツ戦々激戦の果て」や「STRIKE 出撃」と納得の名曲揃いである。

どの曲も士気が高まりそうなものばかりなのが、カンザキ・ツツジらしい。

「…って、そうじゃなくて、もう七時回ったぞ。電車に間に合わなくなる」

「む…もうそんな時間か」

スマートフォンを返すと、画面の電子時計を見た。

そうして5秒ほど沈黙すると、何かを思いついたように頷く。

「よし、なら今日は終電で帰ることにするよ」

「はあ!？」

何を言い出すのかと思えば…。

「お前、何言ってるんだ？その終電は23時だぞ？」

「ん？知っているさ、その時間に帰ろうと…」

「そうじゃなくってだなあ！」

わざわざ説明しないと理解してくれそうにない。

この間も、危うく泊まり込みになりそうな時間まで作業していた。ここは専門店だが、同時に自分の自宅でもある。つまり、独身の男の家にはうら若き女子高生が遅くまでいる上に、夜道を一人で歩かせことになるのだ。

無論、間違いを起こす可能性など、コーラサワーが戦死する可能性くらいない。そうではなく、その癖を付けさせるのを防ぎ、真つ当な道を年長者として示さなければならぬ。

しかし、それを伝えるのが気恥ずかしいのも事実だった。

「…一人で夜道を歩かせるわけにはいかない、って言ってるんだよ」

「なんだ、そんなことか」

「そんなことって、俺がどれだけ——」

「心配してくれて嬉しいよ、ミヤモトさん」

視線を合わせて堂々と言つてのける。

真つ直ぐなのか、鈍感なのか、それともそのどちらもか。

彼女のファンは、本人は知らないだろうがかなり多い。去年の全国大会出場で一気に名が広まったことで、ファイターとしてもビルダーとしても、高い評価を集めているのだ。

身近で見てきた自分に言わせれば、相応の評価だと思っている。

彼女のような人間は珍しい。女性ビルドファイターというだけでなく、ひたむきに強さを追い求め、剣術の腕前も相当なものだと聞いているし(見たことはない)、他人に対しても礼節を弁えている。まさに完璧超人とでも言えそうな姿に、惚れ込む人が多いのは当然だ。

しかし、常に残身を絶やさないような姿とは裏腹に、今のようなふとした笑みは、正直かなり危ない。

(…全く、これだからつい甘くなりそうになる)

本人は、その危ない武器には一切頓着していないようだが。

「うーん、しかし…これを仕上げて、早々に慣熟訓練したいのだが」

「ガンダムAGE―2バンガードの改修、か…」

ツツジが顎に手を添え、作業机の上に置かれた愛機へと青眼から視線を注ぐ。

先の地区予選での戦闘の際に、自ら発動した技の影響で両腕と両脚の関節、そして愛剣であるドッズソードを失ったのだった。

バンガードを鍛え直すため、Gサイフオスの手足を流用し、関節の補強やデイトール追加を施してサフまで終えている。現在は、それらを一旦取り付けた姿で在る。

新たに取り掛かったのが、ドッズソードの復活と新武装の追加だ。

「三回戦目まで、今日を入れて四日しかない。だからこそ、バンガードの強化改修を完了し、一日でも長く…」

「はあ…全く、お前って奴は本当にどうしようもないガン普拉バカだな」

溜息を吐きながら、顧客であり友人でもある彼女を誇らしくも呆れる。

それに対し、やはり不敵に笑むツツジ。

「ふふ…賞賛の言葉と受け取っておくよ」

「俺の負けだよ、ツツジ。今日はキリのいいところまで付き合っただけ」
「悪いね、ミヤモトさん」

「ただしだ！遅くに外は歩かせねえぞ。アルトに連絡して、車出してもらおうようにすつから」

そう言い放って、スマートフォンで『ビッグリング』の店主フルデアルトに約束を取り付けた。

恥ずかしながら、車を買うほどの余裕はない。

「世話をかける。そうだな、私なりに感謝の意を表明させてもらうよ」
「ん？何だ何だ？」

何をするのかと訝しんでいると、ツツジは袖を捲って作った力瘤に手を添えた。

その瞬間、背筋を冷たい何かが駆け抜ける。

「私が夕食の準備をしよう」

「——ツ!!?!」

一瞬、目眩がしたような。

直後に記憶がフラッシュバックし、阻止限界点を突破したコロニーが残っている時のバスク・オムの顔が、何故かちらついていた。

「——ダ、ダメだ！それだけは!!」

菱亜学園チーム『ハウンドクロス』が先手大将、“キャプテン・アゼリア”ことカンザキ・ツツジの、唯一と言っていい欠点。

料理である。

「…？食材がないのか？」

「いや、それはある。あるが…とにかくダメなんだ！」

「はて…然らば何故だ？」

肘を抱き、顎に人差し指を添えて本気で分からないように首を傾げる。

「…ああ〜そう！お前は客人だから、俺が作るべきだ！いや作らせてくれ！」

「それは、まあ理解できるが…私の立場…」

「はいはいお客様は座っててください！おっと、こんなところにガンダムTHE ORIGINのブルーレイがある！見ながらゆったりくつろいでてくれ！」

「??？」

ツツジを立ち上がらせ、背中を押して居間へと導いて座らせた。

怪訝そうな顔は無視し、素早く台所へ移動して聞こえないように大きく深呼吸する。

(危ねえ…ツツジの料理はアレだからな…)

何とか阻止限界点を死守し切った。脳内のバスク・オムがいい笑顔になる。

ともかく、これで一安心である。夕食を何にするかを考えつつ、冷蔵庫を開けてみた。賞味期限が近い卵、鶏肉、野菜室には玉葱がある。そうだ、親子丼に――

「ごめんください」

「お、この声は…」

と、店とは逆の裏口から、さつきも電話越しに聞いた声が響いた。こちらが返事するより早く、フルデ・アルトが上がってくる。

「あ、丁度良かったですね。今から作るんですか？」

外出する時よりラフな格好のアルトが、台所へやってきた。

「おう、どうした？」

「どうしたって…どうせ夕食の準備もできていないだろうと思って来たんですよ。ツツジさんは…」

「居間に待機させた」

「そのようですね」

そう言って苦笑いするアルト。

彼も、一緒にツツジの料理の洗礼を浴びた仲間であり、事情は知っているのだ。

「さ、後はぼくがやりますよ」

「あ、でも…」

「いいですから、さあ」

彼は料理の腕もいい。自分が作っては時間もかかるし味も保証で

きないので、渋々ここは任せることにした。

居間へ向かうと、ツツジは座布団に姿勢正しく正座しており、再生が始まった「機動戦士ガンダムTHE ORIGIN III 暁の蜂起」を見ている。

「フルデさんが来たようだが、夕食は任せていいのか？」

「……」

何だか、妙に疲れた。

Act. 24 『灯台下暗しII』へ続く

Act. 24 『灯台下暗しⅡ』

凜とした、道場の清閑な空気。

その中で、膝に両手を添え、正座のまま彫像のように佇む。暫しの間の後、深く一礼をしてから目の前の床に置かれた日本刀を手を取った。それを袴の帯へ挿し、一度立ち上がる。膝立ちでしゃがみ直し、左手は刀の鯉口を握る。

そのままの姿勢で、一呼吸。

「——ッ！」

息を吐き出すと同時に右足で体を立たせつつ、上半身全体を使った動作で上段へと抜刀した。連動し、刀の柄を両手で握り込んで斬り下ろす。

「やアッ!!」

放った裂帛の音が、道場に木霊した。

右足を後ろへ伸ばし、腰を落とす。鞘を引き出して、腰の位置で真横に刀を静かに納めていった。

再び膝立ちにしゃがみ、呼吸が整ったところで真横に抜刀する。最小限の動作で抜いた刀を声と共に振り降ろし、腰は落とさずに刀を正眼に構える。次に握ったまま刀身の反りを右肩へ添え、柄頭を正面に向ける構えを取った。

摺り足で進み、刀を上段から振り下ろす。再び反りを右肩に添え、上半身と手首を捻って刀を突き出し、上段へ斬り上げた。

「はアッ!!」

正眼に構え直し、後退して腰を落とす。右足を伸ばして納刀し、正座。帯から刀を抜き、床に静かに置いた。

そして、礼。

「すう——」

丹田呼吸法で、全身に酸素を行き渡らせる。

顔を上げ、演武を見ていた人物と視線を合わせた。その人物は、線の細い顔立ちながら、胴着と袴を着た居住まいに余裕と貫録がある。

その姿は、門下に入った頃から毎日のように目にしてきたものだ。数か月ぶりに相対して演武を披露し、ようやく古巣へ戻ってきたという感慨が湧いてくる。

真剣な表情で自分と視線を合わせていたが、ふっと表情筋が弛緩してゆったりとした笑みを浮かべた。

「お見事。学園でも修練を怠らず、その技を磨いていることがよく分かったよ」

「ありがとうございます」

上座の先を見上げると、大きい額が飾られているのを見る。

卓越した筆字で書かれている言葉は、”花鳥風月”。

そして、眼前の男性こそ、流派”花鳥風月”の最後の継承者。

名を、キオ・エイジ。

「ホウカさんの活躍は聞いているよ。忙しくて大会は見に行けなかったけど、英志学園のサイトで学園新聞も読ませてもらった」

「恐縮です」

「ふふ、それにいい友達もできたみたいだし」

「あ…はい、お陰様で…」

学園のことをちゃんと見ていてくれたことで、嬉しく思いつつも気恥ずかしくなる。

キオ・エイジは、道場の端に正座をしている人物へ体ごと向けて声をかけた。

「学園でホウカさんを指導してくださっているようで、重ねてありがとうございます」

「いや、礼には及ばん。年寄りの道楽のようなものだ」

「ご謙遜を、お噂はかねがね伺っておりますよ。第5回世界大会で姿を消した”殲滅のアズマ”…その人なのでしょう？」

問われた人物——アズマ・ハルトは、少し黙ってから答える。

「…昔の話だ。今は教師を退職し、英志で用務員をやっている」

「ガン普拉バトルの方は、まだ？」

「止められる訳がない。そうでなければ、ここには居らん」

「然りです」

両者とも薄く笑みを浮かべる。

現在の時刻は、午前9時を回ったところ。昨晚、シマ・マリコに師匠を訪ねると頼み込み、その同伴としてアズマが車で送迎することになったのだ（交通の便が悪い上に、電車を乗り継いで行くと費用が嵩むからでもある）。

キオ・エイジは自分に向き直り、さらに続けた。

「さて、ホウカさん。昨晚の話によれば、指導してほしいらしいけど…どういった理由からかな？」

「…先日の選手権で得た感覚を、取り戻すためです」

「それは、ぼくが指導しなければならぬことかい？」

「はい。初心に戻って、もう一度自分を見直したいです」

本心からの言葉で答える。原因も答えも見つからない以上、漫然とガンプラを動かすだけでは駄目だと思ったからだ。原点に立ち返れば、見えないものが見えるはずである。

キオ・エイジは数秒目を閉じていたが、やがて言葉を続けた。

「分かった。せっかくここまで来たんだし、やるだけやってみよう」

「ありがとうございます、宜しくお願いします」

「さあ、となれば…外に出ようか」

そう言って、立ち上がる。自分も刀を拾ってから立つ。

「外に？稽古を付けるのではないのか？」

アズマが疑問を投げかけてきた。それは真つ当な反応である。

道場から出ようとしていたキオ・エイジが、立ち止まって振り返った。

「一緒にやってみますか？気持ちが良いですよ」

それだけを言い残し、道場を後にする。

しかし、尚もアズマは釈然としない表情のままだ。

「キンジョウ、彼は何を始めるつもりなのだ？」

「えーっと…上手く表現できないんですけど、自然学習みたいな…」

「何？」

「とにかく、行ってみれば分かりますよ」

自分が習い始めた頃、形の練習などよりも先に行ったのが”それ”

だ。この二か月間で、様々なガン普拉バトルの局面において想起したものの根源たる”花鳥風月”の教え。これ無くして、自分の原点に立ち返ることはできない。

アズマを連れ、キオ・エイジの後に続いた。

.....

晴れ渡った青空を、窓の向こうに見る。

板書をノートに書き写していたが、イマイチ集中ができなかった。梅雨入りしたばかりだが、今日は爽快な気分に合わせてくれそうな陽気である。

しかし、それでも胸の内は重かった。

(今頃ホウカは、師匠のどこか…)

今朝、ホウカは7時半ぐらいにアズマの車で出発している。英志学園から地元までは一時間程かかるため、既に到着して今頃は稽古をしているのだろうか。

気分が晴れないのはホウカの体調のこともあるが、師匠のことを考えると少し胸が痛む。

(今更そんなこと考えたってどうしようもないのは、分かってるつもりだ)

それでも、後ろ髪を引かれる思いがあるのは否定できないのだ。

師匠に理由も告げずに鍛錬から身を引いたのは、今思えばなんて失礼なことをしたんだと、小学生だった当時の自分を殴ってやりたくなくなる。

それでも、あの頃に師匠とホウカとで見た、この広がる青空と同じ景色は心に残っているのだ。それだけは、例え技のほとんどを忘れてしまったとしても、今も消えることはない。

様々な感情が複雑に絡まりながら、ぼーっと窓の外を見ていると、

「――痛っ」

脳天を何かが叩いた。

窓から目を離し、見上げる。机の前に立っていたのは、赤いカー

デイガンを羽織ったシマ・マリコであり、シャツの袖を捲った右手には丸めた日本史の教科書が握られていた。

その表情は、普段のマリコというより、完全にシーマ・ガラハウのそれであった。

「黒い悪夢」さん、空の世界からやつとお戻りかい」

「うわ、シーマ様っぽい台詞」

「ぶつよ」

「シーマ様っぽさに拍車がかかる！ってか手遅れですよねそれ!？」

ソフトとは言え、ぶつた後でそう言われても…。

マリコは握った日本史を広げて腕を下ろすと、溜め息を一つ吐いて呆れたような困ったような表情を向けてきた。

「授業に戻るよ」

そう言つて、教壇へと歩き去って行く。周囲からクスクスと笑い声が聞こえたが、それは無視する。

マリコの表情が言おうとしていたことは分かった。あんたが心配してどうにかなる訳でもないだろう、と…そんな所だろう。

(言われなくたって…)

分かっているつもりだ。

しかし、頭では理解していてもどうにもならないことだっただけであるのだ。

諦めて板書を写そうとすると、終業のチャイムが鳴り響いた。

「それじゃ、ここまでをしつかり写して明日までに頭に叩き込んでおくんだね。軽いテストをするよ」

クラスが一齐に非難の声を上げた。マリコは意に介さず、書類を纏めて素早い足取りで教室を去って行く。

(今から写すのも面倒だな、リクヤにノート見せてもらおうか)

板書はすぐに消されるだろう、すっぱりと諦めてノートを閉じた。

「ふっ…ぐあぁ〜」

「なんだ、寝不足か？」

「あー…いつもと同じだ」

リラックスして大きく伸びをすると、前の席に座っているカネダ・

リクヤが椅子に肘をかけて話しかけてくる。

「リクヤ、後でノート見せろ」

「学年でも5本の指に入る秀才であらせられるカトー・トモヒサ様ともあるう者が俺のようなミジンコのノートを借りるのか？」

「てんめえ、ぶつぞ」

「冗談だよお、ははは」

こっちの気も知らないで、この幼馴染は勝手なことを言う。そもそも、リクヤも学年の成績は必ず10位内にはいるくせに、いけしやあしやあと言えたものだ。

と、冷めた視線を送っていると、リクヤの顔が真面目なものに変わる。

「キンジョウのことだろ」

「うぎゃ!？」

「何処から声出した」

いきなり核心を突いてくるリクヤ。

「はあ…バレバレだったの。昨日キンジョウが倒れて、そして今日は帰郷してるらしいじゃないか。お前が授業を上空だった理由なんて、クラスの皆気付いてるぞ?」

指摘され、咄嗟に教室を見渡した。視線が合った同級生が悉く視線を逸らしていき、その後には笑い声が聞こえてくる。

「文句あんのかお前らあ!」

ないです、と緩い返事が纏めてきた。

「その気持ちはよく分かるぜ。キンジョウを知る皆が皆心配してたんだから、一番近くにいるお前の心労は察するよ」

「…んだよ、なんか道化みてえじゃねえか」

「アレハンドロ・コーナーよりはマシだろ」

「金ピカにメッキ塗装してやろうか?」

日本史の教科書を丸めて、リクヤの頭をぐりぐり押す。

「やーめーろーよー」

「反応が気持ち悪いな…そんなにバレバレなら隠さねえよ。そうさ、俺はホウカが心配で仕方ねえ。今すぐ学園を抜け出して師匠のここ

ろに行きたいくらいだ」

「そんなにか…」

教科書を机に仕舞い、次の授業の準備を始める。

「けどな、そうしてやりたい反面、昔やった俺の失態が後を引いて師匠に会いたくないとも思ってたんだよ。…矛盾してるんだよ、今の気持ちは」

親友のふざけたような態度に心を解かされ、つい素直に本心を語ってしまった。

「そうかい。俺にはしてやれることはないけど、キンジョウなら大丈夫だと思う。あの根性と負けん気にはいつも驚かされてるんだからな。楽観的と言うなら好きに言えよ」

「…いや、お前の言うとお前だ。ありがとうな」

先程は心の中で非難したが、こちらの心情を察してわざと冗談めかしていたのだろう。持つべきものは気心の知れた友…などとありきたりな表現はしたくないが、心の底から感謝した。

「いいってことよ…つと、お前に来客じゃないか？」

リクヤは、教室の出入り口を指差す。

首をその方向へ向けると、意外すぎる人物がそこにいるのを見た。その人物は「失礼するよ」と断りを入れてから教室へ踏み入り、恰幅のいい中年太りの体を揺らしてこちらへ歩み寄ってきた。

アサクラ・ミツオミ教頭である。

「教頭？何か用ですか？」

「オホン、カトー君。放課後は部室へ行くのだろうか？」

「は？勿論そのつもりですが…？」

両腕を後ろで組み、妙に畏まっているように見える。

アサクラ教頭とは、先のガンダムランキユスが行った稼働実証プログラム“百鬼夜行”の一件で打ち解けており、現在は情報交換などを取り合って、よきガンプラ部のサポーターに回ってくれている。

そんなこともあって警戒はしていないが、怪訝には思う。

「今日はホウカ君が諸事情で学園にいないと聞いた。そこでなんだが、私が練習の相手を務めるといっなのはどうだね？」

「それは、ありがたい話です。丁度、今日はジニアも放課後は用事があ
るらしいんで」

事実、練習内容がマンネリ化していると感じていたところである。
普段相手にしないファイターと戦うことで、新たな刺激を得られるか
もしれない。

好意的な返事をする、アサクラの顔がパアツと明るくなった。

「そうかそうか！ならば決定だな！放課後、私も一仕事終えたらガン
ブラ部へ赴くでしょう！宜しく頼むよカトー君！」

「はあ、こちらこそ」

アサクラは嬉々とした様子で握手を求めてきた。中年のおじさん
と触れ合う趣味はないが、快く握手を返す。

アサクラ教頭は「では失礼する。勉強に励みたまえ！」と言い残し、
あからさまに上機嫌な足取りで教室を去って行った。

「何だあれ…？」

「さあ…でもよかったじゃないか。二人共いない穴を埋めてくれるな
んて、教頭もいいところあるよなあ」

「今日は久々にむさい部室になりそうだ」

「テライさんも呼ぶか？」

「そこまでしなくていい」

やがて、次の科目である現代文の教師が教室へ入ってきて、チャイ
ムが鳴り響いた。

心を入れ替え、今度は授業に集中する。ホウカへの心配は払拭し
切ったわけではないが、何とかなる、大丈夫だと、気持ちはポジテイ
ブになっていた。

(師匠、ホウカのことをよろしくお願いします)

自分も、いつまでもこのままでいるつもりなんてない。

目前に迫る菱亜学園との試合、そして”茜き野獣”ササミネ・コウ
スケとの因縁を終わらせて、その後で師匠の元を訪ねようと決心し
た。そのために現在のコンディションを高め、週末のセント楡葉女子
学園との試合も勝利を収めるのだ。

もう一度、窓の外に広がる蒼天を眺望する。

「セルリアンブルーか…」

プラフスキー粒子によく似た色の空は、胸の内に爽やかな風を吹き込むようだった。

.....

青々とした草木の匂いが、気持ちよく鼻孔をくすぐる。梅雨の湿った空気を吹き飛ばす陽の光を、植物は精一杯に伸ばした葉で受け止めている。

道場を出た後、裏庭から続く細い山道を歩いていた。到着した際に車窓から見たのだが、流派“花鳥風月”の道場は小高い山の麓に立地しているのだ。そのため、修行の場としてこの山道が開かれたのだと推測できるが、前に行くキオ・エイジとキンジョウ・ホウカは歩みを止めずに上へ上へと進んでいる（山道とは言ったが獣道同然であり、勾配も緩やかで登るほどの感覚はない）。

（まあ、黙って後を着いていくしかあるまい）

一言も発さないまま、やがて一行は山の頂上に出た。

「んー…、今日が快晴で本当に良かったよ」

キオ・エイジは両腕を上げ、大きく伸びをする。

「すうー…はあ」

ホウカも、深呼吸して爽やかな空気を心身に取り込んでいるようだ。

自分も二人に倣い、青空を見上げながら深呼吸をする。

「このように全身で風を感じるの、いつ以来か…」

家族と山へバーベキューなどのレクリエーションへ行ったことは何度かあるが、今のような自然体験は意識したことがなかった。

（風…?）

ふと、何かの歯車がぶつかるような気がしたが、直後に霧散する。

それが何なのか気になったが、エイジがこちらを向いたので意識をそちらへ傾けた。

「ではホウカさん、座禅を」

「はい」

そう言われたホウカは、まるで設えられたような大きな岩の上にはやがんで座禅を組む。一切の迷い無く背筋を伸ばして顎を引く姿は、何度も繰り返し返してきたが故に体が覚えているのだろう。

「アズマさんもどうぞ。やってみてください」

次にエイジは、自分にも座禅を促してきた。

奇妙な行動を見せられているのだ、体験できるのなら頼みたいほどである。ホウカの隣へ腰を下ろし、見よう見真似で座禅を組んだ。エイジは、自分達より数メートル離れた場所で、一段高い岩の上で座禅を組む。

「開始の合図はありません。私語を慎むことも強制はしないので、思うままに感じてください」

「う、うむ…」

そして、沈黙。

言葉が消えると、様々な音が聞こえてくる。葉擦れの音、鳥の囀り、町からは車の音。そして、視覚では空の青、草木の新緑、座禅を組んでいる足元に咲く小さな花の色さえ、意識せずとも鮮やかに感じた。どのくらい感じるままに身を任せていたか、やがてエイジが口を開く。

「——^{おの}自ずから然り。あるがままに身を任せ、作為せず道を往く。即ち、無為自然」

一言一句が、はつきりと聞こえた。

「天地は、自ら何かを為そうとはしない無為である。しかし、無為でありながら、その働きはこの世の全てを動かし、影響している」

「風が世界を巡り、命を育み、雲は雨を降らし、陽は大地を照らす。自ずから然り、即ち在るがままに委ね、生きること」

ホウカが、言葉を継ぐ。

二人の言葉の意味を、深く考えず、直観的に理解した。

「在りのまま、在るがままこそか…」

「そうです。それこそが、流派”花鳥風月”の教えの極致です」

この分野に明るくはないが、変わった流派だと思った。極致は道場

にはなく、自然の、当たり前の中にごそあると言う。

「さあ、このくらいにして戻ろうか」

エイジが岩から降りた。ホウカも続いて立ち上がり、自分もそれに倣う。

にこやかな笑みで、エイジは訊ねてきた。

「如何でしたか？」

「中々に貴重な体験をさせてもらった。感謝する」

「いえ、礼などいいですよ。晴れた日は毎日やってることですから」

何の銜いもなく、そうエイジは言う。

欠かすことなく、これを日常の中で当たり前に行っているからこそ
の態度であろう。ホウカもきつと毎日のように行っていただろうし、
現在の場合毎朝のランニングがそれに当たるのだ。

「戻ったら昼食の準備をします。お二人への歓迎の意を込めて、庭で
栽培してる野菜を使ってもてなしましょう」

「あ、そこまで気を…」

ホウカと台詞が重なってしまった。互いに咳込んで誤魔化そうと
すると、エイジが朗らかに笑う。

「あっはっは…いや、すみません。あんまり似ているもので、まるで
祖父とその孫のように見えたのでつい」

「師匠〜！」

膨れっ面になるホウカ。

「まあまあ、とにかく戻りましょう。それと、昼食の後はバトルシステ
ムを使います」

「ん？ああ、そうか。個人用のものを持っているらしいな」

「ええ、友人の伝手で譲っていただいたものです」

個人用にバトルシステムを所持しているとは、どのような交友関係
なのか。ホウカが言うには、自分が門下生になった時には既にあつた
らしく、エイジ自身もガンプラを趣味にしているらしい。

小高い山を下り、道場に着いた頃には時計は午前10時半を指して
いた。

(ガンプラバトルでの鍛錬か…何をしようとしている?)

ホウカの悩みがそれで晴れるのか疑問を抱くが、何か考えがあつての提案なのだろう。無論、ホウカはこれを想定してガンダムラナンキユスを持参してきている。

コーチとして、しっかりと刮目させてもらおう。

A c t . 2 5 『灯台下暗しⅢ』へ続く

Act. 25 『灯台下暗しⅢ』

キオ・エイジから振る舞われた昼食の後、道場のすぐ傍にある離れ家を訪れる。

そこは、昔から瞑想の場や門弟との相談所など、時には茶会などに活用していたと聞かされている。小学生当時、師匠であるエイジに相談を持ちかけたこともあり、たった数カ月間ぶりでも郷愁に似た気分を感じた。

「ホウカさんが進学してから、ここも御無沙汰だね。一応、掃除だけはしているんだけど」

エイジは、十畳のスペースの中心を占拠するように設置されているバトルシステムの前に立ち、コンソールを叩きながら話す。

先進テクノロジーであるバトルシステムが二基構成で設置されており、畳の香りが馨しい和室の中にこれでもかと言うほどの異彩を放ちながら鎮座している。しかし、この光景こそが自分のガンプラバトルの原点であるため、今でこそ違和感を覚えるが、同時に安心感も去来した。

「鍛練の一貫とはいえ、バトルシステムの個人所有は些か高価に過ぎるのではないか？」

物珍しそうに飾られている花瓶や掛軸を眺めつつ、アズマが口を開く。

「ああ、いえ。これは、ホビーショップを経営している友人の計らいで譲ってもらったものです。もう、10年くらい前になるかと思いません」

「ふむ、なるほどな。第7回世界大会の年か」

エイジの返答に、得心したように腕を組んで頷くアズマ。

しかし、自分には今一ピンと来ない。

「どういうことですか？」

「何、単純な話だ。あの世界大会がもたらした影響は知っているだろう？ プラモデル業界はその恩恵により経済的に潤い、各地のホビー

ショップを大きく育てることになった。その時分にバトルシステムを最新のものに取り換える店舗も増え、その時に廃棄されるはずだったものがこの筐体…と、こんなところだろう」

「その通りです。さすが、ガンプラバトルの歴史に御詳しい」「これって、そういうことだったんですね」

思い返せば、この道場にバトルシステムがあることを不思議に感じたことはなかった。自分が初めてガンプラバトルを行ったのはここにある筐体であり、むしろこちらの方が馴染み深いのだ。

やがてエイジによる操作が終わり、ヘックスユニットが起動を始める。

『GUNPLA BATTLE. Combat mode, startup』

「さて、久し振りのガンプラバトルだ。腕が鈍ってなければいいけど」エイジは対面に立ち、小さくはにかみながら肩を回した。

『Modedamage level, set to "C". Please, set your Gpbase』

いつも通り、指示に従い自身のGPベースを設置する。

『Biggining, "PLAVSKY PARTIICUL" despersal』

筐体から青く輝く粒子が噴き上がり、バトルフィールドを形成した。

『Firld 3. FOREST』

「では、始めようか。いつも通りにやってみて」

「よろしくお願ひします」

互いに一例を交わした。

予め設定されていたフィールドが、眼前の筐体に広がっていく。澄んだ空の青を水面に映す湖に、その周囲を針葉樹林が囲む湖畔が鍛錬の場となった。

『Please, set your GUNPLA』

懐かしい古巣で、あの頃はこの手に無かった愛機を立たせる。それが、粒子の浸透を受けて命の光を青い相貌に点した。

『BATTLE START!』

「キンジョウ・ホウカ、ガンダムランンキュラス：行きます！」

ガンプラがカタパルトを滑走し、架空の青空の下に飛び出した。

背部のフラワリング・ジェネレータを展開し、プラフスキークラフトを発現させる。ガンプラバトルであるため、常に倣って行動を始めた。まずは先制手を打つため、眼下の湖へは降下せずに上空から索敵を行おうとする。

が、直後に風切りのような音に気付き、反射的にその方向——頭上を仰ぐ。

「ッ！」

しかし、降り注ぐ陽光に視界を遮られ、モニターから目を逸らしてしまった。

瞬間、一閃。

咄嗟にランンキュラスを回避させ、眼前を鈍い銀色の閃きが過ぎ去る。

(刀っ：!?)

経験から、その正体を刀だと直感した。大きく後退し、攻撃の主をはっきりと視認する。

一振りの刀を両手で握り横薙ぎに払ったそのガンプラは、細くも力強く引き締まった体躯を純白の装甲で覆う、剣士か騎士か。

『昔見たアニメの戦法くらいでは、小手先にもならないね』

その姿は、外見から分かる広く確保された可動域から、機動性の高さを窺わせる。それと同時に防御の薄さも見えるが、生半可な攻撃では届かないと即座に理解できた。

それと言うのも、背面に一見して分かる大型のブースターが備えられているからだ。

『改めて名乗らせてもらおうよ。流派“花鳥風月”が師範、キオ・エイジと——』

陽光を反射する湖面の照り返しに、白青のガンプラが煌めく。そして、左のブースターに備え付けられた鞘から、もう一振りの刀を抜いた。『——称して、風月アストレイ。我が愛刀“瑠璃雛菊”の剣閃を見切

る腕前、確かに刮目した』

そして、一対の刀——” 瑠璃雛菊” を胸の位置へ、両の腕で掲げた。バトルの前と変わらない穏やかな口調だが、今のエイジの言葉からは恐怖感こそないが真剣さと威圧感が滲んでいる。

底無しに優しかった師匠は、ここにはいない。

「…初めて見ました、そのガンプラ」

『見せる機会がなかったただだよ。それに、トモヒサ君に関して言えば、要らぬ先入観を与えるかもしれないからね』

これまで長い時間をこの道場で過ごしてきたが、エイジのガンプラ——風月アストレイは記憶にない。見たことがあるのは、鍛錬で使用したアデルくらいなものである。本当にガンプラが趣味なのかすら疑わしいくらい、他で触っている姿を見たことがないのだ。

加えて、今相対している彼の姿も、感じたことのない気迫に満ちていた。

「…先程の攻撃は、本気で墜としにきたように感じました」

『おや、そのつもりだったけど?』

エイジは、にべもなく言う。

『不満だったかい? ホウカさんの本気を引き出し易いと思ったからね』

風月アストレイに取らせた構えは解かず、残身を保ち続けて言葉を繋いでいく。

『さあ、始めよう。せっかくのガンプラバトルなんだから』

言葉は静謐に、しかし内に秘めたる闘志は粒子に満たされる空間を伝播する。同じバトルシステム上での対面であるはずだが、過去に見てきたそれとは全く異質のものだ。今のエイジは優しい師ではなく、一人のガンプラファイターとして相対している。

(師匠なりの考えがあつてのはず…、だったら)

自分も、一人のガンプラファイターとして向き合おう。

ドッズトンファアの刃を伸ばし、ガンダムラナンキュラスに臨戦態勢を取らせる。

『腹を括ったようだね。では』

と言葉を残した直後、風月アストレイが真正面から一直線に突進してきた。予想外の攻勢に驚き、反応が遅れる。

一瞬で距離が詰まり、左の”瑠璃雛菊”が降り抜かれた。

——ギイン!!

反射的にドツズトンフアーで防ぐが、左の脇下に押し込まれていたもう一振の”瑠璃雛菊”が襲い掛かる。突き出された刀身は顔面を狙った。

「くっ……」

首を逸らし、その一閃を寸で回避する。刃先が頬を掠め、プラスチックの表面が僅かに抉れた。常なら絶好のカウンターの機会であるが、ドツズトンフアーで受ける動作を読んだような矢継ぎ早の剣戟により、それも叶わない。

根本的な反応速度が、圧倒的に違うのだ。

その一瞬の思案の内にも、次なる攻撃が襲い来る。

『ふっ……』

通信越しに鋭い吐息が聞こえるのと同様、今度は風月アストレイが目の前で宙返りをした。そして、大振りな動きで踵が落ちてくる。回避など間に合うはずもなく、咄嗟に掲げた両腕でそれを受けた。

「ぐうっ!!」

真下に蹴飛ばされ、そのまま湖面に叩き付けられる。水中に没しつつ、慌てて前後感覚を取り戻そうともがく。上を確認し見上げると、影が落ちて来るのを見た。

「行つて、Pファンネル!」

背部から一斉に射出された花卉が直上へ向かい、湖面を突き破って空へ出る。

(あの時の感覚を、もう一度……)

コントロールスフィアを強く握り込み、心を研ぎ澄ます。アサクラ教頭とのバトルにおいて胸に吹き込んだ風、そしてチーム『アンドブル』のリーダーであるオオゾラ・ユキナリとの決着で手にしたファンネルの思考制御。それらを思い出しながら、ガンダムランキヤラスの視界越しに風月アストレイの影を見た。

「——どうしてっ…！」

しかし、何も感じない。

『どうしたんだい！ファンネルは投擲武器じゃないよ！』

ギギンと、飛ばしたPファンネルが弾き飛ばされる音が水中を伝って届いた。手元で指示を送っていないため、ただ向かっていっただけのPファンネルに抵抗の術はない。

(…とにかく、迎撃しないと…！)

尚も落ちてくる影に向かって、機体を浮上させる。水飛沫を上げ、水中から脱すると同時にドツズトンファーを突き出した。

再び刃がかち合うが、これも事も無げにいなされてしまう。

「やっぱり、二天一流…!？」

片方の刀で防ぎ、もう片方で攻め入る。こちらと似ているようだが、待ち構えず積極的に仕掛けてくる点は正反対だった。初撃の後に見せた両刀を胸の位置に掲げる構えからも、これらは二天一流によく似ている。

数回打ち合った後、鏢迫り合いに持ち込まれた。

『よく覚えているね。数回映像で見せたただけだったと思うけど？』

風月アストレイの原典機由来の鋭い碧眼が、火花を散らす刀越しから突き刺すような視線を送る。

「師匠が教えてくれたことは…ツ！全部覚えてます！」

『それは結構』

穏やかな口調で言うや、大型ブースターを跳ね上げて推進方向を前に、鏢迫り合いのまま加速を始めた。プラススキークラフトの出力を軽々と超え、湖の上を突っ切っていく。二機のモビルスーツが高速で移動する衝撃に、湖面で波濤が弾けた。

「ぐっ…行っ…！」

Pファンネルに指示を送り、背部から射出する。瞬時に風月アストレイの背後を捉えるが、突如鏢迫り合いが解かれ、神速の回し蹴りでランキュラスを蹴り飛ばした。射撃が始まると同時に”瑠璃雛菊”を交差させる。

蹴られた勢いを殺せず吹き飛ぶ最中、風月アストレイが交差させた

刀身から、青い光が放出されるのを見た。その光はビームバリアのように機体の前面を覆い、Pファンネルの射撃を全て受け切る。

何とか体勢を直し、十数メートルの地面を爪先で削りつつも湖岸に着地した。

「ふう……今の光は……」

呼吸を整え、湖へと視線を向ける。

帰投していくPファンネルを追おうとはせず、風月アストレイは”

瑠璃雛菊”の光を放つ刀身を一瞥してからこちらへ向き直った。

『……プラフスキー粒子の特性を知り、それを技術として応用するのは容易ではない。相応の努力と研究、そして経験が積み重なって、初めて可能となる』

キオ・エイジは静かに語りながら、風月アストレイを湖面へゆつくりと降下させる。

機体の爪先が沈むと思いきや、まるで地面に足をつけるかのように湖面に足裏が着水した。そして背部の大型ブースターが止まり、機体を浮上させるエネルギーは無くなる。しかし、風月アストレイが沈むことはなかった。

”水の上に立った”のだ。

『加えて、解釈一つでプラフスキー粒子は如何様にも変化する。バリアを張ることも、炎を生み出すことも、分身を作ることさえも不可能ではない』

「水の上に立つことも、ですか」

『そう。ガンダムラナンキュラスの能力も、その解釈によって起こり得たものでは？』

「……だと、思います。みんなの協力があつて、できたことです」

いつの間に、こちらの情報を知り得ていたのか。全て理解しているかのように、キオ・エイジは核心を突いてくる。恐らく、今日指導を頼んだ理由も把握しているのだろう。

そして、彼の言うことは正しいと思う。しかし、ガンダムラナンキュラスに備わる能力の全ては自分一人では決して実現できなかった。部員のみinnで作り上げたのだ。

『だけど、それを扱うのはその機体のファイターであるホウカさんだ。あなたが信じる限りガンプラは応え、あらゆることを可能足らしめてくれるだろう』

「——っ！ですが、きつきの通り、Pファンネルの思考制御は……！」
反論に対し、キオ・エイジは無言のまま再び“瑠璃雛菊”を構える。
『……分からないか』

ドン、と。空気が爆ぜるような音がしたと思っただ直後、湖の上に立っていた風月アストレイが眼前に迫っていた。完全に反応が遅れてしまい、咄嗟に掲げたドズトンファーに刀の一閃が直撃してしまう。両手からドズトンファーが離れ、背後の針葉樹林の中へと消えていった。

そして、風月アストレイの両腕に埋め込まれている青いレンズが輝き、連動して発光した刀身から衝撃波が解き放たれた。

「あああッ!!」

一身に受けてしまい、木々を押し倒しながら吹き飛ばされる。数十メートルは飛ばされた先で巨岩に激突した。

「あ……ぐ、き、機体は……!?!」

慌ててコンソールを見て、ダメージの程度を確認する。本体の方は軽度のダメージで済んだようだが、背部のフラワリング・ジェネレータが深刻な損傷を受け警告が表示されていた。

そして、ハツとしてモニターに視線を移すと、風月アストレイが歩いてくるのを見た。

『今の攻撃を、対処できないような“あなた方”ではないはず。ファンネルの思考制御の如何を問う前に、何故動きが鈍いのか、よく考えてみて』

「……っ」

思わず、奥歯を噛み締める。師匠の言葉を聞き、理不尽だと思っただからだ。

何故、今ガンダムランキュラスを上手く扱えないのか、その原因を知るためにここに来たはずである。しかし、師匠はただ問いながら仕掛けてくるだけで、解決の糸口すら教えてくれない。

岩を支えにして起き上がりながら、言葉を返す。

「分かりません……。分からなくて、でも何とかしなきゃって思っただけ……無我夢中でやりました。まだ上を目指せるって、こんなものじゃないって……でも」

一瞬だけ、次に出る言葉を躊躇った。

「ラナンキュラスは……何も答えてくれません」

『それが、本心かい？』

「——ッ……はい！」

そうだ、強くなりたいと思うのは本心だ。地区予選で手にした思考制御をまともに使えれば、今よりもっとできることが増える。もつと先を目指すことができる。あの頃みたいな、境遇を悲観して己を否定し続けていた過去を消すためにも……

(あの頃……?)

ズキリと、胸の奥が疼いた。

あの頃、師匠は何て言ってくれたっけ。

あの頃、自分に対してどう向き合っていたっけ。

思い出そうとするが、ずっしりと重い鉛のような何かがつつかえて、その先が霞んでしまう。

かぶりを振って、無視する。

「だから、ラナンキュラスをもっと上手く使えれば——」

『……上手く使う、か。問おう。ガンプラは道具かい？』

キオ・エイジが、悲し気に言った。

『今のホウカさんは、まるで……寄る辺もなく、何も信じていなかったあの時のようだ』

「それ、は……」

その言葉に、記憶が呼び起こされる。

無意識の内に目を逸らし、自ら蓋をしていた記憶。

思い出したくない自分があるが、しかし、忘れてはいけない自分。

コントロールスフィアから手を放し、己の愚かしさとここで学んだことに対する非礼に、胸の疼きが増す。

「私、は——」

.....

幼い頃は、何に対してもネガティブだった。

担当医の診断では虚弱体質らしく、過度な運動は控えるようにと言われていた。しかし、当時の自分は加減が出来ず、気付いたら病室の天井を見ていたことも一度や二度ではない。

外で遊ぶことが自由にならないため、積極的に自宅に友達を招いたりもしたが、通院のために長くは遊べない。やがては頻度も少なくなり、消極的になってしまった。

趣味と呼べるものさえ、友達付き合いが無い自分にとっては、手付けたところで無意味だと思ったのだ。

どうして私は、他人と違うのだろう。

どうして私には、何もないんだろう。

そうして卑屈になり、引きこもりがちになってしまった。

そんな幼少期が過ぎ、小学校に進学した頃、突然両親が古武術の稽古に出るよう勧めてきた。

気紛れで、見てみるだけ見ようと思っていると道場へ足を運ぶと、優しそうな大人の男性と背の高い男の子が迎えてくれた。乗り気ではなかったはずだが、妙な居心地の良さを感じて稽古を始めることにしたのだ。

始めこそ見学で終わることが多かったが、大人の男性——師匠と男の子の動きを見様見真似でやってみると驚きの声が上がリ、自分を褒めてくれた。それが何故だかとても嬉しく感じ、久し振りに頑張ってみようと思ったのだ。日々の鍛錬だけでなく、道場の裏手から歩いて行ける小高い山から見た景色など、それまで霞がかっていた視界が一気に掻き消え、知らなかつた広い世界を見た。

『限界なんてない。絶対できない、なんてこともない。在りのままを受け入れて、自分に嘘をつかないで。そして、ホウカさんの行く道を曇らせるものがあつたなら、どこまでも逆らつて手を伸ばし続けて。』
”花鳥風月”の教えがホウカさんの胸の中にある限り、どこまでだつ

て行けるはずだから』

山の頂上で師匠が語りかけてくれた言葉に、とても励まされた。やがて稽古の範囲も広がり、その一環としてガン普拉を使うことになった。

自分にはどうということなのか分からなかったが、ガン普拉バトルという遊び（師匠と男の子は競技だと言っていた）を利用して、身体に影響がない場所でもっと難しい稽古ができるようにしてくれたのだ。師匠の気遣いへの感謝と期待（言葉には出していないが）に応えるためにも、産まれて初めてガン普拉バトルの世界へ足を踏み出した。そうして始まったガン普拉バトルの中で、今まで感じたことのない沢山のもので得ることができた。

限界なんてない。

絶対できないことなんてない。

稽古の中で教えてもらった”花鳥風月”の教え、それは”在りのままを受け入れる”こと。境遇に悲観的になっていた以前の自分では、到達できない世界がここに——道場に、そしてガン普拉バトルに——あった。

そして——

.....

『一人で、戦っていると思うかい？』
「え……？」

突然の問い掛けに、僅か戸惑う。

一人とは、どういう意味なのだろうか。地区予選は三人編成のチーム戦である以上、一人であるはずがない。

だとすれば、その問いの意味は。

視線の先、ホログラムコンソールの向こう側にいる愛機。コントロールスフィアから手を放してしまったが故に、地面に膝をついてし

まっつている愛機。今、ここで一人ではないとすれば、答えは一つだけだ。

(……ごめん。ごめんね)

今、ようやく分かった。

側にあつた愛機を無視し、自分の腕だけを見て、機体を上手く使うことしか考えていなかった。信じ続ける限り、ガンプラは応えてくれることを身をもって分かっていたはずなのに。

「…私はずっと、ラナンキュラス達と一緒に戦ってきたんだ」

人と違うこと、何もできない自分に悲観的になつていた幼い頃。その頃に戻りたくないと躍起になり、一人で足掻いていた。オオゾラ・ユキナリがかけてくれた言葉を歪曲して捉え、真理に自分から蓋をしていた。

これでは、まるであの頃と同じだ。

何でもできるようになつたと思いがり、流派“花鳥風月”の教訓を”理解したつもり”でしかなかったのだ。過去は消せないし、それから目を背けてはいけない。

——在りのままを受け入れて、自分に嘘をつかないで——

そして、師匠の気持ちがあつた。

Pファンネルを思考制御できないことは、問題ではない。自分と向き合い、答えを自分で引き出さなければ意味がないのだ。

今の自分の素直な気持ち、それはいつだって胸の中にある。

答えに、迷いはない。

師匠は何も言わず、風月アストレイも力強く屹立しているだけ。

コントロールスフィアを握り込み、今まで以上に力を込めて、もう決して離さないよう、強く、強く。

「師匠、申し訳ありません。そして、有難うございます」

『答えは、出たようだね』

「はい」

すう、と空気を吸い、深く吐き出す。全身に酸素を行き渡らせ、心を静謐に、生まれ変わるような気持ちで向き合う。

「一人じゃありません。いつだって、ラナンキュラスと共に戦いまし

た。勿論、共にいた仲間も同じです」

心に、爽やかな風が吹き込んだ。

それを強く感じ、続ける。

「私は、ガンプラが好きです。ガンプラバトルも大好きです。それを忘れて、応えてくれないなんて…思い上がりもいいところですよ。向き合います。これが本心です」

さらにきつく、ぎゅつとコントロールスフィアを握った。

「だから…もう一度行こう、ランキユラス」

瞬間、ガンダムランキユラスの相貌が強く輝く。膝をついていた体を起こし、己の存在を誇示するように力強く立ち上がる。

大地を踏み締め、風月アストレイと今一度相對する。

「仕切り直させてください、師匠」

『構わないよ。やるからには、僕も本気でやらせてもらう』

「はい、本気をお願いします」

『分かった』

言うや、風月アストレイはバックパックの鞘から二振を抜刀し、”

二天一流”の構えを取る。

対し、脚部に備えたサーベルラックからビームサーベルを取り出し、右手で握った。

そして、双方疾駆。

——ギギイイイン!!

瞬時に距離は縮まり、刀とビームサーベルが剣戟し合う。

今の自分の持てる全てを、ぶつけた。

『いいね！迷いを断ち、曇りの無い素晴らしい攻撃だ！』

「ありがとうございます！ですが！」

風月アストレイから一旦離れ、スフィアを滑らせる。

「Pファンネル！」

背部から一斉に射出された花卉が、滑らかな軌道を描いて飛んでいく。

ごく自然に、思うままにその動きをイメージした。Pファンネルは生きているかのように飛び回り、風月アストレイへ不規則な射撃と斬撃を繰り返す。

できる、できないじゃない。

ただ信じて委ね、在りのままに成す。

結局、元の鞘に戻っただけなのだ。

『思考で動くファンネル…なるほど、厄介だ』

キオ・エイジは狼狽えた風もなくPファンネルの攻撃を弾き、避けていく。

しかし、それでよかった。

後退したまま森へ入り、コンソール画面を注視する。マーカーが報せるのは、弾き飛ばされていたドツズトンファーだった。地面に落ちているのを見付け、拾い上げて空へと飛び上がる。

空へ上がったランキュラスへPファンネルが寄り添うように戻る中、風月アストレイが弾丸のように向かってきた。ドツズトンファーで受け止め、”瑠璃雛菊”を弾き返す。同時にドツズトンファーも弾かれてしまうが、その間隙へPファンネルを突進させた。

『おおおッ!?!』

だが、風月アストレイはもう一振から衝撃波を放ち、Pファンネルとランキュラスもろともを吹き飛ばす。

「ぐうッ!?!」

吹き飛ばされながらも、三基のPファンネルを突撃させた。風月アストレイの周囲を不規則な軌道で高速で飛び回り、狙いを定めさせない。

体勢を直す間に、残った一基のPファンネルを呼び寄せる。

「来てッ!!」

瞬く間に飛来したPファンネルが、掲げた右の手甲に接続された。背部のジェネレータによって増幅された粒子がPファンネルを通過して迸り、ドツズトンファー内の粒子と共振する。

その蒼い輝きは刃となり、ランキュラスの身の丈を超える。ライザーソードを髣髴とさせるそれは、一本の柱のように天を突いた。

直感、思い付き。

ただそれでしかないが、自分たちならば！

「プラフスキーパワーソード!!!」

『何とっ!?』

限界まで圧縮された粒子が輝き、長大な剣となったドツズトンフアーを振り降ろす！

「いけえええー！ー！ー！ー！！！」

空気を切り裂き、膨大な質量を持った光剣が風月アストレイにぶつかり、そのまま湖に叩き付ける。深い青に染まる湖が爆発し、水柱が噴き上がる。パワーソードは消滅し、飛ばしていたPファンネル三基もエネルギーが切れ、全てを背に帰投した。

だが、直後に湖面から凄まじい勢いで風月アストレイが飛び出す。明らかに今までの倍は速度が出ているだろうか。それに加えて青く全身が輝いており、流星の如く光が尾を引いている。

そのままランキュラスに激突し、ドツズトンフアーと”瑠璃雛菊”の鏢迫り合いになった。プラフスキークラフトを全開にし、押し負けまいとこちらも押し返していく。目の前に来て初めて、プラフスキーパワーソードのダメージで装甲が罅割れているのを見た。

『本当に僕に本気を引き出させるとはね！最高だよ!!』

「私も、負けませんっ!!」

『はっははは!!楽しいねえ!!』

お互い、笑っていた。

少しの間だけだけど、ガンプラバトルの真髄までも忘れていたようだ。

思いつきり楽しむこと。それこそがガンプラバトルの本懐なのだ。

『だけど…勝たせてもらいますよー!』

「なッ!?!」

突如”瑠璃雛菊”が輝き、衝撃波が放たれる。そのまま追撃し、目で追えないかのような剣速で切りかかった。数回打ち合ったが、ついにはドツズトンフアーの刃が砕けてしまう。

「トンフアーが…!」

「絶好の機会を逃さず、瑠璃雛菊」が脇へ引かれ、鋭い切先がラナンキユラスの胸部を狙った。

そして、繰り出されるのは真つ直ぐな刺突！

「ッ!!」

その突き出された刀身を、

『な——』

得物を手放した左手で、掴む！

捕らえた風月アストレイを手繰り寄せ、柔と剛による連携をもって渾身の一撃を狙った。

掌底に開いた右手に込めるのは、青き風。

「プラフスキーンパクトツツ!!!」

突き出した掌底が、腹部を叩く。衝撃波が放たれ、風月アストレイの胸を突き抜けていった。

全身の装甲を粉碎し、突き抜けた衝撃波が背部のバックパックを襲い、爆発させる。

風月アストレイは一切の抵抗もなく、深い青を湛える湖へと没していった。

.....

「いやー、負けた負けた!」

バトルシステムをシャットダウンし道場へ戻ると、キオ・エイジは開口一番そう声を上げ、床へ大の字になった。

「こんな気持ちいいガンプラバトルは久し振りだ!ありがとう、ホウカさん」

大の字になつたまま、こちらへ顔を向けて笑う。

床に正座し、改めて述べた。

「感謝をするのは私です。本当にありがとうございます」

「まあ、お互いに得るものがあつたということだね」

キオ・エイジは起き上がり、胡坐をかいいて白いガンプラケースの表面を優しく撫でる。

「こいつも、久し振りに本気を出せて満足だつたと思う」

心なしか、ケースを見る目が優しく感じた。

そこへ、アズマ・ハルトが腕組をして黙つたままやってくる。

「中々に見応えのあるバトルだつた。ワシからも礼をさせてほしい。感謝する」

「礼を言われるほどのものは見せてませんが、受け取っておきます」

その後、道場と離れ家を三人で掃除し、英志学園へ帰ることになつた。

道場の門前での別れ際、アズマが切り出す。

「一つ、訊ねてもいいか」

「はい、何でしょう？」

「二振の刀を持ち、謎の技術で衝撃波を放つ道場破り紛いのアストレイ使い…昔、ワシも相手をしたことのある謎のガンプラファイターがいた」

突然、衝撃の話始めたアズマを二度見してしまった。

「ほう、それは興味深いですね」

「とぼけるな、正体は貴方だろうか？あの時分、この県内のガンプラシヨップに頻繁に出没する人物として有名だつたことを、知らぬとは言わせん。フードを目深に被り、その顔を覚えていた者もついで出なかつた」

「仮に僕だとして、それで？」

「何も。ただ、何故素性を隠し、道場破り紛いのことをしていたのか気になつただけだ」

隣で黙つて聞いていたが、全て初耳だ。

キオ・エイジへと視線を向けるが、特別何かを含んでいるような雰

困気でもない。

「ふむ、色々と事情がおりだったのでしょうか。僕には推し量れませんがね」

そして、ニコツと笑って見せた。

アズマはふう、と息を吐き、それきりこの話題を始めようとしなかった。

「では、我々は帰るとする。昼食は美味しかったぞ、世話になった」「失礼します」

「うん。またいつでも…というわけにはいかないけど、今度はトモヒサ君や…ラインアリスさんだったかな？みんなも連れてくるといいよ」

「はい、そうさせていただきます」

「最後に饞別として、言葉を贈るよ」

キオ・エイジは数秒目を閉じてから、始めた。

「ホウカさんは、僕を超えた。古い世代は淘汰され、新世代へとバトンは受け継がれていくんだ。あなたはそれを成し遂げた。そのバトンを継ぎ、次に繋げていくことだろうけど、それはまだ先の話。今を全力で生きて、楽しんでほしい」

「…はい！」

送られる言葉に感極まり、涙腺が熱くなる。

「地区予選も、観戦させてもらうよ。実を言うと、チーム『スターブロッサム』の活躍は全部見てて、ホウカさんの悩みというのも全部分かっていたっていうオチなんだよね」

たはは、と笑って後頭部をかく姿に涙が引つ込んだ。そして、釣られて笑ってしまった。

やっぱり、底無しに優しい師匠だった。

.....

今、自分の腕の中には紙袋に入ったジャパニーズフードがある。

パン生地の上に甘いビスケット生地を乗せて焼いたパンであり、独

自に誕生した丸い形状から「サンライズ」とも呼ばれる。表面に数本の筋や格子状の模様があしらわれ、マスクメロンに似ているものが主流だ。

そう、メロンパンである。

「ずっと食べたいて思ってたんだくふへへ」

思わず表情筋が弛緩してしまう。

今日は演劇部が顧問の出張で自由となり、チャンスは今しかないと思っただのだ。ガンプラ部には申し訳ないけど、午後のこの時間帯にしか販売しないという拘りの一品なのだ。勿論、自分だけじゃなく帰ってきたハウカのためにもう一個買ってある（尚、トモヒサの分はない）。

噂のパン屋は都会に近い町にあるのだが、幸いなことに電車で行き帰りできる距離だった。現在、帰るため駅までの道を歩いているが、歩きながら食べたい衝動をギリギリの理性で保っている。

その道すがら、ふとある場所で足が止まった。

「まだ時間はあるし、優勝祈願でもしとこうかな」

神社があつたのだ。

それほど高くない階段を上って大きな赤い不思議な形をした門（以後鳥居）を潜り、樹木の囲まれる厳かな雰囲気のある場所（以後境内）へと足を踏み入れる。意外としつかりとした如何にもジャパソっぽい造りの建物（以後本殿）を臨むと、自然と背筋が伸びた。

「ひゃー、初めてジンジャって来てみたけど、ゴリヤクありそうな気がする」

また一つジャパニーズ初体験が増えた。

境内を進み、上がガンダムの特ダクトみたいになっている大きな木箱（以後賽銭箱）の前に立つ。

「えーっと、確かコインをここに入れて、上から垂れてるでつかい紐（以後鈴緒）を揺らせばいいんだよね」

アメリカにいた頃に見た日本を紹介する番組を思い出し、実践してみた。

一旦紙袋を足元に置き、メロンパンの御釣りのできた五十円玉を賽

銭箱に落とし、鈴緒を揺らしてエキセントリックな音を鳴らす。そして両手をリズムカルに四回叩いた。

「地区予選を優勝して全国に行けますよーに！」

思いを込めて大声で言った方がいい気がした。

うん、完璧だ。

満足して帰ろうとすると、本殿の端から誰かが現れて走ってくるのを目撃した。トップスは真っ白なのに、長いスカートのような着物は目の冴えるような赤というファッションは、日本版のシャーマン「巫女」というものだったはずだ。

そして、それを着ている人物に見覚えがあった。

「あれえ!? サダコじゃーん!!」

走ってきたと思ったら、名前を呼んだ途端マンガのようにこける。その人物は弾いたバネのようなキレを見せて体勢を直すと、開口一番。

「ツツコミが追い付きませんわ!! ラインアリスさん!!!」

期待通りの反応だった。

A c t . 2 5 『灯台下暗しⅢ』 E N D

ガンプラ編

Gunpla. 01 【ハルジオン】

【AGX-04C ハルジオン】

・武装：ドツズライフル×1

腕部ビームバルカン／ビームサーベル×2

110mm機関砲×2

・特殊：可変機構

：ユニバーサルブーストポッド

①フロントビュー

②リアビュー

全くの無塗装です。お目汚しすみません。

機体コンセプトは「近似成型色と、グリプス戦役へ繋がる可能性を持ったガーベラ・テトラの再現」というもの。ホウカの使うガンダムランキユラスに近い発想で、スパ○ボやGジ○ネ的な技術的クロスオーバー要素も入ってたりします。

克蘭シエから受け継いだ白い部分、ガーベラ・テトラ改っぽい感じもありません？

特殊な加工は一切してなく、本当にジニアがぱつと思いついたような組み合わせになりました。

強いて言えばバックパックの基部で、可変時に襟が埋まる機構を廃して（テトラの頭部が大きいのでそもそも埋まらない）内部に余ったポリを少し切り欠いて仕込んでます。そこにHGCボールデンアームアームズのジョイントを接続し、根元からグリグリ動くブーストポッドの出来上がりというわけです。お手軽。

使う機会はなさそうですが、ガーベラ・テトラの腕がそのままブー
ストポッドに使われているので、一応110mm機関砲を備えていま
す。背後を取られた時の牽制に使いそうかも？

③ 武器披露

テトラのあのポーズ

克蘭シエの腕には元々サーベルが差し込める凹モールドがある
ので、そこにガーベラ・テトラらしく黄色いビームサーベル（レッド
ウオーリアのもの）を差し込みました。

以前はシールドも装備していたんですが、なんだか収まりが悪いし
ジニアっぽくはないなあということでオミットしました。可変時に
邪魔になりますし…。

④ 可変

まあなんと簡単な変形なのでしょう。克蘭シエのデザインの良
さを再確認しました。

このままツツジさんのバンガードよろしくスイカバー特攻しても
威力ありそう。

⑤ 比較

ジェノアス・カスタムと比較。脚が長いモデル体型（ジニア似）な
ので頭一つ高いです。

この細い胴がサレナのビームバズーカで消し飛んだかと思うと：
ごめんよハルジオン…。

ちなみにクランシエはジャンク化寸前だったものをミキシングさせているので、胴がなんだか曲がついていたり肩関節が緩かったりします。いずれ直してあげたいですね。

⑥ ジニア・ラインアリス

最後にビルド&ファイターを。

自分語りになりますが、創作物に必ず一人はこういう元気娘が出てくるんですよ…。もしかしなくてもリリ〇ルな〇はに登場するレ
〇イ・ザ・ス〇ツシャールの影響です。

A c t . 0 5 の登場ガンプラコーナーでも書きましたが、名前の由来は貧乏草とも呼ばれる「春紫苑」です。この花は要注意外来植物に指定され、生態系を脅かすと危険視されているのですが、これも偽装されてシーマ艦隊に譲渡されたガンダムという設定と通じる部分があると思います。

雪解けの後に訪れる「ジオンの春」を謳う、理想の名前になったと思います。

RE:Gunpla. 01 【ハルジオン・フェイク】

【AGX-04C ハルジオン・フェイク】

・武装：ドッズライフル×1

ビームサーベル×2

・特殊：ユニバーサル・ブースト・ポッド

分離／可変機能

【ハルジオン・アタッカー】

・武装：ビツズライフル×1

【ハルジオン・ナッター】

・武装：内蔵ビームサーベル×2

①フロントビュー

②リアビュー

劇中通り、外見に大きな変更はありません。

最初にミキシングした際、克蘭シエのサイドアーマーがガーベラ・ネトラの太腿にがつり干渉したので外していたのですが…今回の下半身を分離させた時の見た目と、ビームサーベルを内蔵するのに活用できました。その結果太腿側をかなり削ることになりましたが、中々いいシルエツトになったと思います。

全体の塗装は、成型色そのままにツヤ消し処理です。ピンク部分のすみ入れにリアルタッチマーカーレッド、ホワイト部分にリアルタッチマーカーオレンジで全体に統一感を出しています。脚部のバーニア類はガンダムマーカーホワイトで塗装しました。

③バストアップ

頭部にもホワイトのアクセントを加えてみました。動力パイプの根元と両サイドです。

最近プレバンから出たHGUCガーベラ・テトラ ロールアウトVerの顔を使ってもいいかと思いましたが、ツインアイタイプはハルジオンには合わないと思ひまして。だって”ジオン”ですもの。

④セパレーションモード

バウの分離可変を参考にした「ハルジオン・アタッカー」と「ハルジオン・ナッター」です。

アタッカーのイメージは昆虫のスズメガ。ナッターはスズメガの幼虫のような：空飛ぶ幼虫って何だw サイドアーマーで作った吻部はストレートにモスラをイメージしました。

⑤ハルジオン・ナッターのビームサーベル

ナッターに攻撃力が皆無なのはさすがにまずいだろうと、思い切つてシナンジュのビームサーベルを使用しました。位置的にドツキングモードでも使えそうではありますが、それよりも手首サーベルの方が勝手がいいのでナッター限定でしょうね。

難しいことは考えずに奔放に戦う。これこそジニアの持ち味であり強みだと思います。

ところで、もう既知のことと思いますが、公式の方であのカルロス・カイザーの娘プリンセスが「克蘭シエ★アスタ」を相棒にするなど：まさかの素体被りですw

AGE系の、それに克蘭シエなら公式と被ることもないだろうなんてタカを括っていたら意外な方面で攻められました。フクダ動物園：恐るべし。

というわけで、バンダイさん克蘭シエ・カスタムの再販お願いしますね？

Gunpla. 02 【ガンダムサレナ】

【RX-78GP02B ガンダムサレナ】

・武装：アトミック・バズーカorビーム・バズーカ×1

ビームサーベル×2

60mmバルカン×2

ラジエーターシールド×1

多連装ロケットシステム×6（適宜換装）

ツインドッズキャノン×2

・特殊：フレキシブル・スラスタ―・バインダー

①フロントビュー

②リアビュー

第5話のアズマとのタッグで持ち出した武装パターンで。
素敵です。かつこいい。

このビーム・バズーカ、劇中ではフォールディングバズーカのように折り畳み式にトモヒサが改造しているのを友人ができるだけ再現してくれまして。ジョイントパーツを上手く組み合わせて、マウント状態で飾れるようになっているみたいです。

そして左右非対称のMLRSコンテナ、いいです…。

この黒い塗装は友人のマイカラーで、仲間との対比がすごく映えます。

③ビーム・バズーカ展開

『——ギョオオオオオオオ!!』

彼方で炸裂した光が、怒濤の奔流となり飛来する。

極太の粒子の塊が小さな岩塊を吹き飛ばし、雲海を突き破って襲いかかった。』

最早言葉を弄すまい…。

④ ツインドツズキヤノン装備でフロントビュー

⑤ リアビュー

対「天照す閃光」の際に引つ提げたツインドツズキヤノンの四枚羽です。

見て分かる通り、使用しているのは「AGガンダムAGE―2ダブルバレット」です。

もしかしたらこれで何とかなるのではないかと、友人が考え抜いた結果、HGBCボールデンアームアームズのボールジョイントが上手いこと接続。さらに棚ぼたで、バインダーの上部に装甲の干渉を逃がすために内蔵されている3mmポリを発見、ご覧の形態になりました。

思いつきでやってみた形態ですが、格闘戦と砲撃を難なくこなせるので書き手としてかなり好きな武装パターンですね。

ちなみにAGなので、ビームサーベルは出せません…。

⑥ 遊んでみる

対グリモア・マギテックの時の両手持ち&ツインドツズキヤノン。やりすぎました。

⑦ アトミック・バズーカ

まだ9話現在で使用シーンはありませんが、今年のチーム「スターブレイカーズ」の時のイメージで。

今後使うのかどうか、是非ご期待ください。

⑧カトー・トモヒサ

この期に立ち絵をブラッシュアップしました。

以前はネクタイがホウカ達と同じ色でしたが、学年が一個上なので違うはずだろうと赤くしました。

ちなみに、トモヒサはキャラクターデザインの間では何故かスキンヘッドで、こいつ学生じゃないだろうって外見でしたw イマイチ男性キャラの髪型とかイメージし難くて：しかもガトーっぽくオールバックにしたらコレジャナイ、アドウ・サガみたい、などと不始末ぶり。

現在のデザインに落ち着けて、本当によかったです：（ガンダムビルドファイターズヤクザが始まるどころでした）。

さて、これを打っている現在は9話を投稿したばかりです。

2話の冒頭で登場したクロスボーンガンダム・クローザーも、いよいよそのファイターが出てきました。

黒百合の花言葉である「呪い」とは、彼らにどんな結果を齎すのでしょうか。

サレナ、ご期待ください（マグロのノリで）。

RE:Gunpla. 02 【ガンダムヘリクリサム】

【RX-78GP02H ガンダムヘリクリサム】

- ・武装：対艦ライフル×1
- ビームサーベル×2
- グラストロ・ランチャー×1
- ツインドツズキャノン×2
- 対艦ミサイル×4
- ビーム・キャノン×2
- ミサイルコンテナ×2
- シールドビットR×2
- ダブル・アトミック・バズーカ
- ・特殊：フレキシブル・スラスター・バインダー×4

①フロントビュー

②サイドビュー

③リアビュー

大型のガンプラなので三面写真にて。

まさに漆黒の超重機体！ただでさえ迫力のあるガンダムサレナにここまで武装を積載すれば、そりゃあ誰だって「スコード！」って言ういたくもなります（言いません）。

ガンダムヘリクリサムを完成させるに当たって一番の難題だったのが、二つのシールドビットRでした。

これをどう持って出撃したのか：最初は下駄履きでいいかとも相談していたのですが、カタパルトに固定できないという根本的な問

題。そこで、じゃあくつつけてみたらどうか、と。

しかし、言うは易しです。実際に改造するとなるとそれはそれは悩みました…。最終的に下されたのが、ピンバイスで穴を空けて下のバインダー上部にある3mmポリに接続すればいいのでは!?!という結論でした。

果たして、これは成功したと言えるでしょう。やや不安定ですが、そこは「トモにいただたら強固に接続アームを調整してるはず」ということで:w

ちなみに、ランディングギアは思いつきで提案してみたものです。おかげで自立が可能になりました(いや、これもかなり不安定ですが、そもそも重力下で運用しないフル装備なのだから…)。

④バストアップ

この面構え、本当にいいですね。怖い。

塗装に関しては割と前の完成になるので、現在のところ少々塗膜剥げもありますが、何卒ご了承ください。

⑤シールドビットR

自律誘導のできる、巨大な浮遊する盾(パワーワード感)。

本体はほとんど武装の制御や機体制動にかかりつきりなので、防衛面を補填するためにトモヒサが考案した装備。予め構築されたプログラムで制御されているので、操作工程は最小限です。手動操作も可能ですが、恐らくはフル装備状態のヘリクリサムでは不可能でしょう…。

そして気になっている方もいるでしょうが、このシールドは二枚張り合わせの合計四枚のシールドです。これは、ダブル・アトミック・バズーカ運用の際にバズーカの砲身と基部の両方を格納するための

措置です。サレナの肩に隙間などないので、友人曰くこうする他な
かったようです。

⑥フルバースト

前代未聞！アトミック・バズーカ二門&グラストロ・ランチャーの
同時展開！ミサイルポロリもあるよ！

⑦推進系

デンドロビウムやアサルトパックさながらの迫力ある後ろ姿。
バックパックとなっている「グランサブスター02」は、それ単
体でもかなりの推進力を誇ります。シルヴァ・バレットのブースターが
中々効果的で好きです。
これももう六枚羽だよな…。

⑧フルバースト煽り

でかああああい!!説明不要!!

Gunpla. 03 【ガンダムラナンキュラス】

【RFX―AGE03R ガンダムラナンキュラス】

・武装：ドッズライフル×1

ビームサーベル×2

Pファンネル×4

・特殊：テールバインダー

フラワリングジェネレータ（Iフィールド・バリア／プラフスキークラフト）

①フロントビュー

②リアビュー

トモヒサが改造した通り、ガンダムAGE―FXにHGUCステイメンの腕とテールバインダーを移植してあります。

このバインダーの移植が難産でして：ステイメンは古い規格のポリ受けボールジョイント（初期HGの手首に使われるポリ）になっており、互換性に富んでいるHGAGEの3mmポリを持ってしても、お手軽とはいきませんでした。

これはもう削るしかない！と、ステイメンの腰のボールジョイントを切り離して3mm経に合うようにデザインナイフと紙ヤスリでスリスリ：そしてたまたま持っていたジョイントパーツをAGE―FXの腰に取り付け、その穴に（少し無理やり）差し込んでこうなりました。

ちなみにこの時点は、まだ本編には一切取り掛かっていない時期です。

リアビューで主張しまくっている二つについては後ほど。

③バストアップ

影と逆光の反射でめっちゃ怖：イケメンに撮れました！

本編でも何度か表現していたりしますが、ご覧の通り顔はAGE—FXですね。これは規格が丸つきり違うので加工は覚悟していましたw

既にお気づきの方もいらっしゃると思いますが、本体の青はブルーバイオレットで塗装してあります。たったこれだけでも、AGE—FXのイメージからは結構離れることに成功している気がします。

④ プラフスキークラフト

フラワリングジェネレータを展開し、機体下の粒子帯に反発して浮遊することができる特殊機能。

このガンダムラナンキュラスを考案する際に真っ先に浮かんだのが、花卉型ウイングユニットでした。ガンダム開発計画の系譜を汲むならば、デンドロビウムやトライアルプランにあったIフィールド技術を更に集約して一体に収める、というコンセプトの元に生まれたのです。

図らずもプラフスキークラフト発動状態がEガンダムのシルエツトに近くなりました。比にならないくらい小さめですけどね。

使用したのはジャンク化していたゼダスの翼。マツトホワイトをこれでもかと塗り重ねました…。

⑤ Pファンネル

このガンプラの最大の特徴にして最大の武器とも言える遠隔兵器。

当初、ラナンキュラスはステイメンを素体にするつもりでしたが、あまりにも古いキットのため大改造しなければならず、どうしようか

と悩んでいました。

そんな時目に入ったのが買ったばかりのAGE-1FX。

元々ファンネルを装備させるつもりだったので、白い機体である点でも見事に合致して今のランキユラスに至ります。

それにしてもこのスタンド、プレイバリュー多すぎである。

⑥遊んでみる

ヴェイガン絶対ころ…”殲滅のアズマ”とのバトルイメージ！
最高です…。

⑦比較

我が家のジェノアス・カスタムくんと。

…驚きの白さ。

⑧キンジョウ・ホウカ

最後にファイターです。

さあ、ホウカちゃんは今後ガンダムランキユラスにどう向き合っていくのか、是非その辺もお楽しみいただければと思います。

少しだけ予告ですが、ランキユラスの姿は変わっていきます。

本編に登場でき次第このページに追加しますので、そちらの方もどうぞよろしなに。

RE:Gunpla. 03 【ガンダムラナンキュラス改】

【RFX―AGE03R ガンダムラナンキュラス改】

・武装：ドツズトンファア（ドツズライフル／ブレード）×2

ビームサーベル×2

Pファンネル×4

・特殊：フラワリングフィールド（プラフスキークラフト／プラフスキーインパクト）

①フロントビュー

②リアビュー

ミキシングの印象が強かった以前から、あえてパーツを統一しました。

本来フォールディングアームというのは、デンドロビウムから分離してしまえば不要の長物となつてしまいます。とはいえ、工夫次第では有効なものになりますし、実際にホウカにも使わせていました。

しかし、関節の可動域や強度問題など整備性にも影響がでること。そこで、基本に立ち返り、代替が利くAGE系の腕なら全てをクリアできるところに着目しました。ちなみに、アズマから渡された修復パーツというのは肩と腰です。腰はトランジエントガンダムから拝借しましたが、他人の空似です。きつと。

バックパックも大きくアレンジし、ジョイントと余ったAGE―FXの肩を使ってジェネレーター／ファンネルラック／スラストの機能を一気に集約させました。ちよつとだけ重心が背中にいっちょやいましたが、関節がしっかりしているので傾く心配はありません。

塗装は青い部分を全てブルーバイオレットに、つや消しのトップコートを噴いています。

③バストアップ

安心安全の強面。

そういえば、チーム『スターブロッサム』の三機つてどれも顔つきが険しいような…？

そして目立つのが、一本増えた長いアンテナ。これはAGE-FXの後頭部にあるアンテナで、削って形状変更しています。ステイメンの小さな二本のアンテナの間に設置しました。

Pファンネルのより正確な使役、そしてプラフスキー粒子を変容させるフラワリングフィールドの説得力で二役も買っています。

試しに余っているマーキングシールを貼ってみました。中々いい感じだと思います。

④ドツズトンファア

新武装「ドツズトンファア」です。

ファイダトンファアをそのまま使い、ブレードは羽のような形のタイルに絞りました。

一応、ビームサーベル機能はそのまま残してありますが、どちらかと言うと強度面に重きを置いたため出力はランキンキュラス本体が持っているビームサーベルよりは劣るか。心形流なら何とでもやってのけそうですが、それはそれ。

⑤遊んでみる

ZガンダムOPのスーパーガンダムみたいな例の光&”百鬼夜行”でのバクト戦。

本当に関節が優秀で、大開脚して重心を落としたポーズでもしつかりと立っていられます。さらに現フォーマツトであるトランジェントガンダムの股関節なので、安定感に+α。

⑥ プラフスキーインパクト

「あれは凄まじい威力だったぞ…。私のドライセンに一撃で大ダメージを与えるとは恐れ入った。若い者の可能性とやらは、中年の心にも火を灯すのだな」

Gunpla. 04 【ガンダムAGE-2 バンガード】

【AGE-2V ガンダムAGE-2 バンガード】

・武装：ドッズソード（ドッズガン×2）×1

ビームダガー／サーベル×2

内蔵ビームバルカン×2

仕込みビームサーベル×2

・特殊：ストライダーモード

フラッシュユアイ

①フロントビュー

②リアビュー

本体に手を加えず、配色だけ変更しました。

元より、ダークハウンドは魔改造されたガンダムとして完成されていますので、ここは手を加えずにファイターで見せるガンプラとして設定しています。

赤部分は、一度グレーのサフを吹いてからイタリアンレッドを噴きつけています。塗装をしていない部分はツヤ消しのコーティング。赤と黒は、ガンダムサレナも近いカラーリングを用いているので、あちらが漆の光沢ならばこちらは落ち着いたマットな印象にしようと思っただけです。

襟に干渉して左頬のツヤ消しがちよつと削れてしまったのはナイショです…。

③バストアップ

赤黒いですねー。腰はAGE-2ノーマルと同じ赤配色で、結構気に入っています。

隻眼に見えるサイトレンズはガンダムマーカメタブルーで、爪楊枝で塗料を搦ってちよいちよいと塗りました。撮影に失敗してますが、反射するとキラキラ光つてとてもカンザキ・ツツジって感じです。

ちなみに、両腕と両脚（手首と足首を除き）はGエグゼス ジャックエッジのものなのですが、これは近接戦闘時の強度を手軽に獲得するための措置です。同時に、クロスボーン・ガンダムX1パッチワーク的な継ぎ接ぎをビシディアンも行ったら、という設定にも基づいています。遊んでたらダークハウンドの膝関節が壊れちゃったからなんて口が裂け

④ドッズソード

ミヤモト工場の若き店主、ミヤモト・ロウによるハンドメイド品。刀身の見目は完全にGNソード改ですが、これはシングルブレードであり、重量のある刀身をあえてふんだんに用いることで遠心を活かした斬撃を可能にするものです（アセムがもしXラウンダーを発現したらこういう可能性もあるかも？）。

ソード基部にジェネレーターを内蔵しており、そこから高濃度圧縮されたプラフスキー粒子をクリアパーツである刀身に流して切断力を高めます。とは言っても、斬撃を飛ばすほどの芸当はできません。

⑤ストライダーモード

鋸と化したストライダーモードです。最強のスイカバーアタックができます。

よくこれホウカちゃん対処できたな…。

⑥遊んでみる

必殺居合のポーズをさせたかったのですが、塗膜が削れるのが怖いので…。

ちなみにバインダーからアンカーショットを撤去（これが好きな人ごめんなさい）し、ジョイントを挟んでビームサーベルを裏側に装備しています。これは前にも展開でき、ビームガンとしても機能する設定。

⑦ 比較

ジェノアス・カスタ：ウルフ隊長オオオオオオ!!!。
すみません取り乱しました。

⑧ カンザキ・ツツジ

最後にビルドファイターを。

デザインは、前髪をアセムっぽく、菱亜の制服もキャプテン・アツシユのパイロットスーツとヘルメットのライトグリーンをイメージして彩食しています。

まさか性転換するなんて…。

今のところライバルチームの描写は少ないですが、今後沢山描けていければと思っています。

ひとまず、現時点でのバンガードの紹介でした。

これもまた今後手が加わるので、お楽しみに…。

Gunpla. 05 【カバカーリー・ヒノハカマ】

【VGM M | Git 01 緋 カバカーリー・ヒノハカマ】

・武装：緋ノ三叉くフォトン・トライデント×1

袖部ビーム・バリア発生装置×2

・特殊：プラフスキーホバー

①フロントビュー

②リアビュー

真っ黒なカバカーリーが驚きの大変貌です。

的確にパーツが流用されていて、見事にクンタラの巫女が完成しますよね。手軽に塗装できるガンダムマーカー様々です：（お前が作ったんじゃないだろ）。

両脚は大胆にHGガンダムAGE-3フォートレスに交換されています。こちらが発注した袴っぽい脚を上手く解釈していただきました。

また、両手首が巫女の袖のようになっており、ビーム・バリアを展開します。

③バストアップ

見ると分かりますが、両肩にビルドバーニングから流用されたクリアーツが移植されています。アンドウが実際にビルドバーニングガンダムのフレーム構造を研究し、元からカバカーリーにあったフォ

トン・バッテリーの設定を組み合わせて独自解釈による粒子制御能力を獲得した設定です。

これに際し、Gポータントのようにアンテナを強化するためのバイザーを装着。あえて額ではなくバイザーなのは、マスク大佐を意識した意匠でもあるのです。

④ 緋ノ三叉くフオトン・トライデント

この機体が持つ唯一の武器。それがこの三叉戟です。

使用しているのは、H G I B O ガンダムバルバトスのメイスとビルドバーニングの炎エフェクトパーツ。本来は噴出する炎を再現したパーツですが、劇中では実際に”炎を象ったクリア刃”としています。ヒノハカマ本体が有する粒子制御能力+緋ノ三叉によってプラフスキー粒子を斬撃として飛ばし、中々近距離までを間合いとします。彼女は、これさえあれば他に武器は不要なのです。

⑤ 遊んでみる

ジニアもびつくりの”空飛ぶ斬撃”。

前述の作り込み&説得力があつてこそその攻撃です。

神楽のような舞で翻弄させながら重心を活用した攻撃で攻める姿は、巫女のような印象を相手に与えます。

⑥ 比較

ザクと比較。実にシンプルです。

⑦アンドウ・サダコ

いつものようにビルドファイター。

キャラデザとしては、アニメ前半の長髪だったマニィ・アンバサダを元にしています。とはいえそのままというわけにもいかないの、やや吊り目にしつつガンプラに対応して赤、髪飾りをアクセントに、頬にかかるぱつっんの角度を変えたりジニアみたく横ハネを加えています。

制服は…まあほとんどセントフラワー学園ですw

校章デザインは、キャピタル・テリトリイの施設「ビクローバー」を上から見たイチヨウの形を参考にしました。葉っぱは檜の葉です（檜葉とイチヨウとはこれ如何に）。

さて、本編ではいよいよ地区予選大会が始まります。

新キャラ&新ガンプラも登場しますのでご期待ください！

Gunpla. 06 【イクス・ルシファー】

【VGM | Gf10Ex イクス・ルシファー】

・武装：イクスソード×1

イクスシールド×1

スピン・ファンネル×2

・特殊：???

①フロントビュー

②リアビュー

お美しや、イクス・ルシファー。

自分のイメージしていたデザインよりも、さらに美化して立体化してくれました。

本来は、LBXルシファーとのミキシングの予定で登場させていた（正直、立体化はほぼ諦めてました）が、如何せん件のキットはどこも売ってない上、ネットの取引価格がMGより高いという現実に突き当たってしまいました…。

そこで友人が考えたのが「手に入らないなら作ればいいじゃない」という逆転の発想。

何も、LBXルシファーをミキシングしなくても長いガンダムの歴史を活用すれば限界な…なんて…ない！のです！

本編で”袖付き”と表現した部分は、パテでの造形とガンダムメーカーゴールド（超便利）によるもの。程よい塩梅で装飾されていてとても綺麗です。

③イクスソード

頑強なる剣。

えーと：柄の部分は何でできているのか忘れてしまいましたw
ここもパテで整形しつつガンダムマーカークーゴールド(超便利)です。
クリアサーベルは、Gルシファアのスカートファンネルに使用するエ
フェクトを削り出してサーベル状に加工してあります。つよそう(つ
よい)。

④イクスシールド

頑強なる盾。

元はLBXルシファアの盾をイメージしていましたが、”袖付き
”っぽいこととヘルメスの薔薇の設計図的にも説得力のあるサザ
ビー(BB戦士だったかな?)のシールドで代用しています。むしろ
こっちの方がいいと思いますね。

そしてやはり金塗装はガンダムマーカークーゴールド(超絶便利)。
接続は、ルシファアの手首装甲にあるピンバイスで空けた3mm穴
です。

⑤スピン・ファンネル

ざっくり雑エフェクトで。

八つ裂き光r：高速回転するクリア刃で物理攻撃をする遠隔武器
です。八つ裂き光r

これも、元はLBXルシファアのビーム翼ですが、一番難産だった
ようで：。カバーリー・ヒノハカマで余剰パーツになったビーム
チャクラムにエフェクトパーツ(出自は忘れました)を接着し、さら
にメガライドランチャーのランディングギアを被せ、そこに切り出し
たランナーを介してGルシファアの二軸共通穴に接続しています。

ちなみに、LBXルシファアの設定では謎技術で浮遊しています
が、イクス・ルシファアはしっかりと物理的に接続しています。

⑥比較

アデルとの比較です。

こうして見ると、Gルシファアは主にスカートファンネル分の幅増しで大型に見えるだけであって、割と普通のサイズだということが再確認できます。

対戦したガンダムラナンキュラスはやや大きいくらいでしょうか。こいつを盾に空いた穴に突き刺したドツズライフルごと持ち上げるパワーは一体どこから…？（そこまで考えてない）

⑦ ユヅキ・ララ

いつものようにビルドファイター。

当初はライヤと同じ褐色白髪にしようかと考えていましたが、やはりそのままではあまりにも芸がないので。

髪型も編み込みは片方のみ、逆側はアクセサリ（ルシファアの顔っぱい）でデコレートしてみました。ちよつとごちゃごちゃしすぎかな…？すぐ変な形のヘアピンを付けたがるのがぼくの悪い癖（杉下顔）。

サダ：アンドウさんが割とむっちりしてしまったので、ユヅキはスレンダーがいいと思いつながら描いたんですが、どうでしょう？

Gunpla. 07 【ツヴァイゼータガンダム】

【MSZ-AGE-3ZZ ツヴァイゼータガンダム】

・武装：ハイパーメガカノン×1

ダブルビームライフル×2

メガビームキャノン（腰部）×2

レールガン（膝部）×2

ハイメガキャノン×2

①フロントビュー

②リアビュー

ZZっぽいけどZZガンダムではない、あくまでツヴァイゼータ（ZZ）ガンダム！

チーム『アンダブル』の特徴は、違うガンプラを原典機に似せて作られているところ。このツヴァイゼータもZZに限りなく似せているのがお分かりかと思えます。

そもそも何で原典機を使わないのか：その理由は一応ありますので、今後のお話にご注目ください。

背面の構成もコアファイターが上下逆さになっているなど、シルエットが大きく変わっています。脚部と膝レールガン、腰部メガビームキャノンはガンダムヴァーチェからの流用です。大型機に大型機のパーツという辺りも、ZZに似せる要素として一役買っています。

③バストアップ

お顔にズームイン。

元のAGE-3の顔を加工してZZっぽい面構えに。額のハイメ
ガが凄い主張してます。

ちなみに、胸部装甲はネオジム磁石での接続になってまして、取り
外すこともできるようです。

④フルバースト

重装機体と言えればフルバーストは欠かせないですね！

大胆なパーツ割りになっているのがはつきりと分かります。こう
して全体を見ると、どちらかと言うとフルアーマーZZガンダムなん
ですね。

ハイパーメガカノン、Zガンダムのハイパーメガランチャーとガ
ンダムAGE-3ノーマルのシグマスライフルが合体しているも
のです。この字面だけで戦艦一隻くらいは沈めそうな迫力がありま
す。

⑤比較

グレイズと比較。

やはりガンダムAGE-3が素体になっているだけあって、大柄で
す。

ビルダーのアシャ・シュウト君は、ジユドー・アーシタの名前を弄つ
てこうなりました。外見はジユドーより子供っぽく（でも声はそのま
ま）、ガドウ・ラン君と中二らしい騒がしさでリーダーのオオゾラ・ユ
キナリ君を困らせてます。

大分しよーもない理由（『涓滴岩を穿つI』アバン参照）で結成され
たチームですが、そんな彼らと『スターブロッサム』の三人は試合を

開始しました。早速、ダブルゼロガンダムが不穏な空気を振り撒いています。果たしてどうなることやら：（筆者も分かりません）。
今後楽しんでもらえるよう、精進して参ります！

Gunpla. 08 【ガンダムクロスエックス】

【GX-YM03-CX ガンダムクロスエックス】

・武装：ビームライフル（モニターロ／ガンダムX）×2

腰部グレネード×6

ビームジャベリン×2

・ドッキングモード

サテライトキャノン×1

胸部メガビーム砲×1

サテライトビット（プラットホーム）×2

①フロントビュー

②リアビュー

DXっぽいけどガンダムDXではない、あくまでガンダムクロスエックス（CX）！

この機体も原典機を別方面から作るコンセプトで、ツヴァイゼータ以上にミキシングの塊になっています。素体状態は意外なほどにスリムで、武装も二種のビームライフルにモニターロのビームジャベリン、本編では使わなかったグレネードという仕様です。

③バストアップ

頭部はガンダムX魔王から拝借し、アンテナはウイングガンムゼロ炎からコンバートしています。肩回りがスカスカしてますが、合体時に埋まるので妥協点なんだと思います。

胴体は腰まで丸ごとモニター口を使用し、独特の体型になっていますね。ガイドレーザー受信部も上手く解釈されていて面白いです。

④サテライトビルドフルコン

サテライトキャノンを発射するために不可欠となる追加アーマー兼支援機。

出撃時には合体されており、本編ではその後分離して森に隠したということになってます。メガライドランチャーを素体にし、そこへビルダーパーツのファンネルとX魔王のリフレクター及びキャノンをコンバート。これ単体ではサテライトキャノンは撃てませんが、機首からメガビーム砲が使用できるので扱えさえすればかなりの戦力になると思います（ガドウ・ランにそんな能力があるかどうかはさておき）。

⑤ドッキング形態フロントビュー

⑥ドッキング形態リアビュー

Gフルコンを意識した合体形態。

複雑なパーツ構成を上手く配置し、全体のシルエットが大きく変わっていてカッコいいです。この形態になると可動域が制限される代わりに、遠近距離の攻撃が可能になります。

本当はもつと活躍させたかったんですが、別の機会に任せようと思います。

⑦ 比較

グレイズと比較。これまた意外にも小型です。

⑧ ツヴァイゼータガンダム&ガンダムクロスエックス

ビルダーY氏による二作の競演です！

ガドウちゃんとアシヤくんはもつと登場させてあげたいですね…今後の展開に力を入れたいと思います。